
『普通の者』と『異能力者』の境界線

山地二両

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『普通の者』と『異能力者』の境界線

【Nコード】

N8513R

【作者名】

山地二両

【あらすじ】

ある日、隕石が地球に衝突した。

その隕石によつて人類は新たな力を手に入れた。

そして世界は^{アブノーマル}異能力者と^{ノーマル}普通の者という力を持つ者と持たざる者に分かれてしまう。

そんなある日、一部の異能力者は気づいてしまう、己が持つ力が、己が欲望を満たすことのできる力であるということ。

異能力者たちは動き出す、自らの欲望を満たすために。

そんな者達を捕まえるため、ある機関が造られる。

その名は異能力者対策部隊、通称『ボーダーライン』
彼らは戦う、己が大切な何かを守るために。
そんな世界に、ある変わった少年が一人。

プロローグ 始まりの終わり

ここはある事件のせいで廃墟と化した場所^{ゴーストタウン}、普通の人間ならば、まず寄りうとはしない場所。そのおかげでここはもっぱら不良共のたまり場となっている。

ゴーストタウンを包む暗くじつとりとした空気、そんな空気を切り裂くように走る一人の男がいた。男の見た目は優しいが、勤労学生といったところだろうか。いたって普通の何処にでもいそうな男で、この場所の空気には少しばかりか不釣り合いな感じもする。

男は懸命に走っていた。口から出る液体を拭きもせず、脚が疲れ棒のようになっていても、どんなに肺が破れるような激痛にミマワレテいても男は走っていた。

男は、次で一体何度目になるのかも分からない言葉をまた叫ぶ。

「助けてくれ！」

男の叫びは暗い夜に吸い込まれるかのように空しく響いた。

男はついに走るのを止めてしまった、正確に言えば止めたのではない、これ以上はもう限界だったのだ。

足は震え背中に壁という名の杖が無ければ立てもしない、息は乱れ言葉を発する事すら難しかった、息を吸えば吸うほど肺の奥から鉄臭い血の味がした。

「なんで……なんで誰も……何処にもいな……いんだ」

男は呟く、この呟きもまた夜の闇に消えていく。

男は壁に背を預けるのを止め歩き出そうとする、なぜなら先ほどの叫びを《あの女》に聞かれていたら今ここにいる場所がばれてしまうかもしれないのだから……

しかし、足はまったく動かない、それどころか壁を背中から外し

た男は立つこともできずに座り込んでしまった。

動け 動け 動け 動け 動け 動け

いくら願ったところで足はまったく動かない、いまの男の中には恐怖と絶望しかなかった。何故？ 一体どうしてこんなことになったのか、男自身よく分からなかった。

ただ分かっていることは『あの女』が先ほどまで自分と共に遊んでいた友人の首と胴体を二つに分けたと言っただけだった。

コロンコロンとまるでボールの様に転がっていく友人の首、残された胴体から噴出す血しぶき、そしてそれを見ながら笑う『あの女』は言った。

「あなたもこうなりたくなかったら、私から逃げて見せて」

あの気味の悪い笑みを思い出すだけで胃から熱い物がこみ上げてくる。

とりあえずここで少し休んでまたすぐに走れば、あの女から逃げる事ができる、大丈夫あんなに走ったのだから、そう簡単に絶対に追いつけるはずが……

「なんだ……逃げるのはもう止めるの？ 私はまだ全然遊び足りないんだけど」

男の顔から血の気が引く。

男は声のした方へ恐る恐る振り返る。

そこには、頬に深い傷跡のある女が立っていた。しかし、その頬の傷を除けば、ベージュのブーツカットパンツを穿き、白いブラウスにベージュのジャケットという、普段そこらにいるOLとなんら替わり映えの無い格好の女だ。

「なんでって顔してる？ だってあなた、ずっと同じところ、グルグル・グルグル走ってるんだもん、追いつくのは当然でしょ。と言っても私が、そうなるようにいくつか道を塞いだんだけど」

女の顔を見た途端、男の顔はみるみる白くなっていく。

それもそのはず、そこに立っている女は、男にとってまともに立っていられなくなり肺が破れるような激痛にみまわられていても走る

のを止められないほどのレベルで会いたくない『あの女』なのだから。

その女の格好……確かにそこらにいるOLと変わらない格好だが……女が着ているブラウスとジャケットには所々に服の模様とは思えない、黒ずんだ赤いシミが付いており、ただでさえ不気味な女の周りの空気をよりいっそう不気味にさせていた。

「ゲヴォ」

男は今までためていた物をすべて吐き出すかのように胃の中身をブチ撒いた。

男を襲うのは先ほどまでとは比べ物にならないほどの『恐怖』自分ではどうすることもできないほどの『恐怖』を男は今感じていた。「汚いなーそんなもの吐く暇があったら、早く逃げなよ」

女は男に歩み寄りながら話を続ける。

「じゃないと……私」

女は歩みを続ける。

まるで自分の探し続けたおもちゃをようやく見つけたような。

そんなひどく楽しげな笑みを見せながら。

「あなたのこと」

女は笑う。

「殺しちゃうよ」

男は言葉を失う、今まで味わったのとは程遠い『恐怖』を深く味わいながら、生まれてきてから先ほどまでしていた息の仕方も忘れてしまうほどに。

「本当に逃げないんだ？　じゃあしょうがない、もう鬼ごっこも飽きてきちゃったし、早く二つになって死んでもらうわ」

それはとてつもなく簡単な言葉だった。まるで子供が小さなアリを踏むような、自分の腕についた蚊をたたいて潰すようなそんな簡単な言葉だった。

男は少しでも逃げようとする。だが足が思うように動かず立つことができない。

男は体力的にも精神的にも限界だった。

そんな光景を楽しそうに見ていた女は右手の平を天に掲げるように上げた。すると女の右手の平に赤く光る物が集まっていき形を成してゆく、そしてピンポン球より少しばかりか大きな赤い球体ができあがった。すると今度はその赤い球体が横に回転し始める。遠心力によつてか、赤い球体は瞬またたく間に薄く平らになつていき、それに伴い中心に丸い穴が開いてゆく、最終的には横から見ると紙一枚と変わらないほど薄いものが出来上がった。

男の目線から見ると分かり辛いが、上から見ると多分それは綺麗な円を描いているのだろうか、シユルルルと高速で回転する音が響いている。その音に快樂でも見出しているのだろうか、女はなんとも気持ちのよさそうな声で話し始める。

「ねえ……あなたは人を切りたいと思つたことはある？ 私は小さな時からいつも『思つてた！ 感じてた！』でも人をきれいに切るのつて難しいの……だから、わたしは人間以外の物を切り裂いてずっと我慢してたの。そしたら『あの方』がこんな便利なおもちゃをくれた……私はこのおもちゃのことを『血塗れの円盤』て呼んでるんだけどね、コレ本当になんでも切れるの、人間の手や脚はもちろん、あなたの……頸でも！」

女が何を言っているのか、今の男には半分も分からなかつたし分かりたいとも思わない。しかし、今この女が右手の上に浮いている薄い円形の何かと、この女の薄ら笑いを見る限り、自分が先ほどの友人と同じ姿になるのを想像できてしまつていた。

「じゃあーバイバイ、私の『血塗れの円盤』でその頸きれいに切り落としてあげる」

ブンツ！ と言う不穏な音とともに女は赤く血の色のように禍々しい円盤を男に放つ。それは一寸の狂いも無く男の首もとに向かつていく。

男は死ぬ。女はそう思っていたし、男自身も自分は死ぬのだと覚悟し目を閉じていた。

だが結果は違った。男は死ななかつたし傷一つ負う事は無かつた。何故？

答えは簡単。女が投げつけた物が男に当たらなかつたというだけのこと。

男が目を開けるとそこには黒い服を身に纏った人物が立っていた。その人物は黒く青い線の入っている仮面を被っており顔は確認することができないが、体のラインからして女性であるという事がわかる。

「何？ あなた……」

女は自分の頬の傷を撫でながら、冷静な言葉だが、明らかにイラついているのが分かる口調でそつと言った。

「せつかく人が楽しんでたのに、急に出てきてブチ壊してくれるなんて……」

それもそのはずだ、いまココで起きている行為は普通の人間から見ればただの殺人行為だ、だが彼女は違う。小学生がTVゲームをやるように、中学生が友人達と他愛も無い会話を楽しむように、『あの女』にとつてはこれが遊びなのだから。

「てめえ……生きて帰れると思うなよ！」

女は瞬時に『血塗れの円盤』を生成し仮面の女に向けて放つ。

がしかし、女が放った物はまるで見えない何かに弾かれたように地面に叩きつけられ砕け散る。

女はいま目の前で起きていることが信じられないといった顔をしている。

女を無視するように仮面の女が男の方へと振り向き、一步また一步、と近づいて来る。

男はどうしていいか分からず、「ああ」と、声に出せない声を出す。仮面の女は男の前でしゃがみこみ、ゆっくりとした声で話し始める。

「見たところ外傷はなさそうですが、意識ははっきりしていますか」仮面の女のいきなりの問いに一瞬理解することが出来なかつたが、

何秒かのラグの後ようやく言葉を理解した男は小さく首をたてに振る。

それを見た仮面の女は男の前から立ち上がり、自分の『血塗れの円盤』を二度も砕かれ愕然としている女の方へ向き、話し始める。

「どうも、異能力者特別対策部隊……ボードーラインの者です。今回、異能力者による斬殺事件での捜査で逮捕命令が出たのでこちらに伺わせていただきました。あなたの名前は坂下真理子でよろしいですか？」

淡々と話す仮面の女、そして女が話すにつれ、坂下真理子と呼ばれた女は自分の頬の傷を爪でガリガリと削り始める、その行為は次第に強くなっていき、遂に頬から血が垂れはじめる。すると女は動くのを止め、狂ったように口を開く。

「タ……たいホ？ 私のことを逮捕するの？ せつかくあの方から与えてもらったのに！ 私のチカラ

ダレがわたすか！」

坂下と呼ばれた女はそう叫ぶと、赤いボールを空中に何十個も作り出し全てが一斉に回転し始めた。ギヤリギヤリと耳が痛くなるような不快な音が辺りに響き渡る。

そしてその全てが一枚のときと同じように、紙のように薄く中心に穴の開いた『血塗れの円盤』へと形を変えていく。

「私の作り出せる『血塗れの円盤』はなんにも一枚だけじゃねえーんだよ！ とつとつと、ぐちゃぐちゃのバラバラになって死んじまえ！」

坂下はそのすべてを仮面の女に向かい放つ。

それはバラバラの起動を描きながら、仮面の女を襲う。

ブオツ！ 男の前を何かを通った。先程は解らなかったが今回ははつきりと感じた。

坂下の作った多数の『血塗れの円盤』がガラスの割れるような音とともにすべて空中で砕け散る。

「無駄だ。あなた程度の腕では、その『不良品』をいくら放ったところで私には届かない。私はこの後、用事があるので早めに降参し

すると、不意にすうつと風がやわらかくなったかと思うと、そのまま綺麗に風が止んでしまった。

男はゆっくりと目を開ける。

すると、砂煙が上がるまで坂下が立っていた場所に、仮面の女が何事もなかったかのように立っていた。仮面の女の足元には坂下が倒れている。

坂下は呼吸をしているものの全く動く様子がない、どうやら気絶しているようだ。

すると仮面の女が男の方へと歩いて来る。

男は幾ばくかの緊張と恐怖を残しながら自分のほうへと歩いてくる仮面の女を見つめる。

そして男の目の前まで歩いてきた仮面の女はこう告げる。

「いま一度確認しますが、何処か怪我をしている箇所はありますか」
先程とは違い仮面の女の声はどこか温かみがあり、男は自分の中にあつた緊張と恐怖が溶けていくような気がした。ゆっくりと呼吸を整えた男は、はつきりと言う。

「どこにも怪我はしてないです。あなたのおかげで助かりました」

「そうですかでも一応、救急車を呼びますので……失礼」

仮面の女はそう言うのと右耳に手を当て話し始める。

「隊長、聞こえますか、隊長？」

どうやら仮面の女は右耳にインカムののような物を付けているらしい。

『聞こえてるよー、ハ・ル・カちゃん』

インカムの奥から渋いながらも陽気な感じの男の声が聞こえた。

「その気持ち悪い呼び方はやめてください」

『はは……ゴメン、ゴメン』

「目標を確保しました。私は目標をそちらに持っていくので、後ろにいる被害男性に外傷は見当たらないものの、万が一のために救急車をお願いします」

『ハルカちゃんってば随分冷たいのね、どーせなら病院まで運んで

つてあげれば良いのに』

「なら隊長、被害男性も一緒にそちらに連れて帰ることになるので、一般人を本部に連れて行くことへの責任は隊長が取ってください」

「じよ……冗談だよ冗談。そんな冷たい声で言わないですよ」

「失礼ですが、全く面白くありません」

『ごめんね許して、おじさんが救急車を呼んでおくから』

「お願いします」

軽く会釈をし、右耳から手を離れた仮面の女は男の方に振り返り話し始める。

「私は、この女を運ばなければいけないので、あなたはここから動かないでじつとしていて下さい。もうじき救急車が来ますので」

男は疑問に思ったことを話し始める。

「あなたは一体何者なんですか？」

「先程、私が坂下に言ったことをお聞きになったと思いますが、私は政府直属の特殊部隊。通称『ボードーライン』の者です」

「ボードーライン？」

男は今までに聞いたことのない言語を口にするかのように、呟いた。

「なにぶん極秘の部隊なので詳しい事までは話せません」

ウ〜ウ〜ウ〜！ 遠くから救急車のサイレンが聞こる、どうやらだんだんとこちらに近づいて来るようだ。

「救急車が来たようなので私は失礼します。坂下真理子が塞いでいた道は全部壊しといたので救急隊員の方が来ないということはありません」

サイレンの音と仮面の女の話しで、助かったと安堵したためか、緊張の糸が完璧に切れ、先程までの疲れがドツとで、意識が朦朧としてくる。だが男にはどうしても倒れる前に、一つだけ覚えたいことがあった。

「あ……あなたの名前を……教えて……くれませんか？」

「私の名前ですか？」

「はい」

男は頷く、その頷きを見た仮面の女は少し困ったように言った。

「先程も話したとおり、極秘の部隊なので本名を明かすことはできません……………がボーダーラインでの通称は『烈風の破壊者』……………

『ブラスト』と言います」

静かな口調でそれだけ言うと。ブオツ！ 強い風が吹き仮面の女と、地面に倒れ気絶していた坂下は一瞬にして消えてしまった。

「大丈夫ですか！」

入れ替わるように救急隊員が男のほうに向かってくる。

「ブラスト……………か」

男はその言葉を口にするると静かに意識を失った。

|||||

時は今から二四年前に遡る。

ある所に**忒本**と呼ばれる王制の国があった。

忒本は大国に囲まれた小国ながらも、善き王に恵まれ平和な国であつた。

そう……………『あれ』が来るまでは。

それは突如空から飛来した。

それは忒本の住宅街のど真ん中に巨大な穴を開けた。

それは何の変哲も無い大きさ二メートルほどの『**石ころ**』のはずだつた……………

その『石ころ』を調査するため科学者が大勢やってきた。

科学者達が慎重に調査した結果『石ころ』は地球上には存在しな

い物質だということが解った。

調査から一ヶ月ほど経った日、ある科学者の息子が『石ころ』に手を触れた。

そのとき、突然『石ころ』が砕け散り煙のように消えてしまう事件が起きる。

残ったのは砕け散ったときに科学者の息子の胸に埋まった破片のみ、だが不思議なことにその破片もいつの間にか消えてしまった。

『石ころ』は完全に消えてしまったと思われた。

だが『石ころ』が残した物は確かにあった。

それは『未知の力』。

『石ころ』が砕け散ったその日から、忒本国内でおかしな現象が起きる。

自分の体から火が出せるようになる。自分の行きたいところにワープできる。自分が負った傷が数秒で完治する。など、これらのおかしな現象は人だけに留まらず動物や命を持たぬ物までが到底ありえぬ現象を巻き起こした。そして、その現象は忒本ほどではないながらも、世界中でも巻き起こる事となった。忒本政府はすぐに原因の究明に係った。すると『力』を持った者達はすべてある日を境に『力』に目覚めた事が解った。そう、その日こそあの『石ころ』が砕け散った日であり、忒本政府がその事に気づくまでそう時間は掛からなかった。

しかし、この『力』自体、命に係わる物ではないし、何より普通とは違う『特別な力』が手に入ると言うことで、この『力』を得た者達は喜びこそすれ、悲しむ者は少なかった。

だがこの『特別な力』を悪用する者たちが出てきた。

あるものは金を あるものは権力を あるものは自分の快樂のため

この『特別な力』を持つもの達は次第に、力を持たぬ『普通の者』^{ノーマル}から『異能力者』^{アブノーマル}と、忌み嫌われるようになっていった。

『異能力者』が現れ始めてから五年、この事態を重く見た忒本政府と世界諸国は、『力』を持つ者の数が圧倒的に多い忒本を筆頭とした、対『異能力者』用特殊部隊を設立。その名は『異能力者対策部隊』^{アブノーマル} 通称『ボーダーライン』^{ボーダーライン}

『異能力者対策部隊』の活躍は目覚しく、『異能力者』が起こす事件は日に日に減少していった。しかし一部の『異能力者』達はその事を嬉しく思わず、彼らの不満は日に日に膨れ上がり、『異能力者対策部隊』設立から数年たったある時、ついに爆発する。

一部の『異能力者』達が自分達こそがこの世界に君臨する。新たな人類だとして、テロ集団『リパース』^{リパース}を結成。自分達の世界に邪魔な『普通の者』と『異能力者』を次々と殺していった。

各地でテロ行為を続ける『創生の人類』を忒本政府と世界諸国は『普通の者』、『異能力者』を超えた人類すべての敵と判断、『異能力者対策部隊』に掃討命令を下した。

『異能力者対策部隊』と『創生の人類』との戦いは激化の一途をたどり、遂に『死の日』^{エンドデイ}と呼ばれる世界最悪の人災が巻き起こり、この事件で世界人口の半分近くが消滅してしまう事となった。

そんな絶望的な戦いも、ある人物の命がけの作戦で終わりを迎えた。

からくも『創生の人類』に勝利した『異能力者対策部隊』しかしその被害はけつして少なくはなく。この戦いよって多くの人間が死に絶え、いくつもの土地が地図から姿を消すこととなった。

戦いは終わった。

それから一年、世界は確実に戦いの傷を癒し治している。

しかし、相変わらず『異能力者』^{アブノーマル}による事件は絶えることは無かった。

物語は今、ここから始まる。

ブローグ 始まりの終わり（後書き）

感想、手厳しい批評、何でも良いので、何かお言葉頂けたら幸いです。

第一話 転校生

面倒くさい。

とてつもなく面倒くさい。

朝倉大和は疲れていた。この果てしなく続くのではないかと思うほど、長く続く坂道に。道沿いには桜の木が植えてあり今の季節、緑色の葉が生い茂っている、その木の下は太陽の光が木漏れ日となりキラキラと光り輝いてとても綺麗だった……が今の朝倉大和にとっては、その美しい情景を楽しみながら歩くなど、到底できることではなかった。

横には同じ制服を着ている学生が楽しそうにおしゃべりしながら歩いている、彼らの足取りは大和よりもよっぽど軽やかで楽しげだ。そんな学生達を恨めしげに見ている、同じく学生の大和は考える。(やはり駅を二つ間違えて降りちまったのは問題だったか？ でも気づいたときには改札出ちまっただし、俺の財布の中は今日の気温のようにポカポカ陽気などでは断じてないのだからしかたなかった……よな……)

そんなことを考えながら歩いて行くと永遠に続くかと思われていた坂道にもようやく終わりの時が来たようだ。坂を上り切り少し歩くと、目の前にかなり厳つい門が現れた、壁には『戦国高校』と、これまた厳つい名前の表札が張られていた。

「ようやく着いたか……」

大和はこれまでの道のりを思い返し、これからはしっかりと降りる駅を確認しようと心に強く誓った。

しかし問題はここから、この『戦国高校』名前こそふざけた高校だが、ここら一体にある高校とは次元が違うほど広い土地で有名な高校で、その大きさは大学のキャンパスにも引けを取らないとか取

るとか……とにかく普通の高校なんかより、よっぽど大きい高校なのだ。

だがそんな中、家に送られてきたプリントは酷く小さい不鮮明きわまりない地図で、何処のことを指しているのかわからないが、地図の右側の方に赤く印が付いており、「ココにあるのが、職員室」と書いてある。

「んなもん分かるわけ無いだろ……」

大和はこのプリントを家に送りつけてきた自分の担任だと名乗る電話の主を思い出しながら、ため息交じりに不平をこぼす。と言っても、そこで全てその者のせいにして、職員室に行くことを投げ出してしまふほど、大和も子供ではない。

(プリントが使えないなら誰かに案内して貰わないといけないよな。さて一体誰にしようかねー)

あたりをキョロキョロと見回し、なるべく職員室まで一緒に案内してくれる心優しいそうな人物を探す。すると

「お前もしかして今日転校して来る朝倉大和か？」

急に名前を呼ばれたので内心ドキリとしながら、自分の名前を呼んできた人物の方へと首を向ける。

「やっぱりそうだったか！」

するとそこには、ガハハハとまるで居酒屋にいるおっさんの様な笑い方をしている女性が立っていた。

女性は黒く長い髪を後ろで束ねポニーテールにし赤色のジャージを羽織っており、見るからに熱血体育会系といった感じの女性で、このおっさんのような笑い方とまったくもって色気の無いジャージ姿を除きさえすれば、どこかの本の表紙を飾っているモデルと言ってもまったく支障のない女性だ。

あまりの急な出来事に大和が呆気にとられていると。

「あ！ そっか、お前は私のこと分らないか」

良く分らないがこのみょーに親近感がありまくるこの人は一体誰なのか、大和が少し考えているとすぐに答えがわかった。

「私の名前は高橋香たかはし かおりお前の担任だ、電話で一回話したよな」

このまったくわかるわけの無いプリントを送ってきた女性はこの人か……なんとなくこのプリントの事も納得してしまった。

「まあここで会えたんだし、一緒に職員室まで行くか、転校生君ウキウキと楽しそうに話す、担任の香。

これは大和にとってはなんとも嬉しいお知らせだった。

なぜなら、「この先迷います」と看板に書かれているようなだっつ広い学校ダンジョンの中にある職員室に、案内人たかはし かおりが現れたのである。そんなの『ありがとうございます』の一言に尽きるではないか。

「お願いします」

大和はお辞儀をしながら。迷わずに職員室に行ける美人で飲み屋のおっさんの様で親近感ありまくるこの担任に、付いて行く事に決めた。

|||||

「ねえー今日転校生が来るんでしょ？　どんな人だと思う？」

「転校生かー」

「今日来るのは、男かな？　それとも女かな？」

「可愛い子がいいな」

「かっこいいと嬉しいよね！」

二年D組の教室では、今日来ると言われている転校生の話題で持ちきりだった。

「情報によると今日来る転校生は女で顔はいまいちらしいぜ」

「えー私は男だって聞いたけど？」

「僕は男のような女が来るって聞いたけど？」

教室内では根も葉もない噂が蔓延していた。

それもそのはず、新しく進級したクラスにもだいたい慣れ親しい友達もできてきた六月、ちょうど行事なんて言えるのは七月にある期末テストのみ、そんな生徒達にとって転校生が来るなんて事は暇つぶしにはもってこいの行事であった。

「たかしー」

一人の女子がイスに座っている男子に話しかけた。

「なんだよ？ 朱音^{あかね}」

「あんたはさー今日来る転校生どんなだと良い？」

「そりゃもちろん美人でスタイルが良くてかわいくて、俺に毎日お弁当を作ってきてくれるチョコーかわいい子が来れば、万々歳だな」

鼻の穴を膨らませながらいたって真面目に言うこの少年に、話しかけた少女は呆れながらも話を続ける。

「はぁー……あなたにだけは絶対、彼女はできそくに無いわね」

「なんだと……この、ブサイク朱音！」

「……なんですって……このアホ馬鹿キモ男！」

「うるせー貧乳馬鹿女」

「黙れ！ シスコン男」

「シスコンで何が悪い！」

二人のしょうも無い口げんかが始まった、

この二人の口げんかで教室中が二人を中心に動いていった。

野次を飛ばす者、仲裁に入ろうとする者、見ているだけの者、拳の果てには口げんかの結果で賭けをしようとする者まで現れる始末。教室中の騒がしさは増すばかりであった。

|||||

二年D組の教室を目指し大和やまととその担任である高橋香たかはしあかりは階段を上っていた。

「大丈夫か朝倉 緊張してないか？」

自分の一歩前を歩いている担任が話しかけてくる。

「大丈夫です。もうこの感じはなれになれてるんで」

「そうか、まあかなり転校をくりかえしてるみたいだしな」

「ははは……親戚中たらい回しにされてますからね」

「ずいぶん明るく話すんだな」

「そりゃそうです。辛い事を暗く話したらもつと辛くなる。だってら明るく話したほうが得つてもんじゃないですか!？」

「あははは! お前おもしろいな! 私でよかつたらいつでも相談に乗るからな」

「そうですね。もし何かあったら先生に相談しますよ」

「おう! いつでも受け付けてるぞ!」

そうこうしているうちに二人は二年D組の教室近くまで歩いてきていた。

「ん? いつもどおり教室が騒がしいな、朝倉あさくら、教室内を静かにするからそこで呼ばれるまで待つてろ」

香の言葉の一部分が気になった大和だが、分かりましたと答える。それを聞いた香は、いつもどおりにうるさい教室を静かにするため、ガラガラとドアを開き教室の中に入った。

香が教室に入ると、大半の生徒達は教室の中心に円を作るように集まっていた。

どうしてそのような集まり方をしているのかは置いて、どうやら騒ぎの原因はあの円の中心にあるらしい。香はまずこの騒ぎを静かにしようと声を張る。

「おはよう皆の衆! おまえらいくら楽しい楽しい学校だからと言って、ちょっとうるさ過ぎやしないか!」

香がそう言うと、その声に生徒達は一斉に反応し、担任がいつの

間にか教室に入ってきていると知り、騒ぎがかなり静まった。そこで香は追込みを掛ける。

「はいはい、おまえら何でそんな教室の中心に集まっているのか知らないけど、ホームルームの時間だつとと席に着け」

その一声で、ゾロゾロとめんどくさそうな足ぶりながらも生徒達は席に着き始める。しかし、そんな中でも席に着かない生徒が二人。「ばーか、あーほ、胸なしおーんな」

「くず、ぼけ、タコなす、脳無しへたれ」

やっぱり騒ぎの原因はこの二人だったかと香は思いながら、しょうもない言い争いを続けている二人に香は言う。

「お前らくだらないけんかはそのぐらいにしておかないと、二人ともあとで罰ゲームを受けてもらうぞ」

「このアホが悪いんです香先生」

「いや、こいつが悪いんだぜ香ちゃん」

二人はそれぞれ、相手に擦り付け合いを始める。

「どっちだつていいから、二人ともつとと席に着け！ それとも二人は、そんなにトイレ掃除が好きなのかな？」

「ッ！」

二人は急に大人しくなり、まだ不満はあるが渋々といった感じで席に着く。

「ん 聞き分けの良い生徒達で助かる」

香はとても嬉しげな笑顔で生徒達を見回しながら口を開く。

「えー みんなも知っていると思うがこのたび、我らがクラスに新しい仲間が一人増えることになった」

教室中が騒ぎ出す。

「はいはい、静かに！ まあー、お前等なら特に心配はないと思うけど、みんな色々よろしく頼むぞ。じゃあ入って良いぞ。朝倉」

外で待っていた大和はようやく自分の名前が呼ばれたので、ドアを開き、何故だか妙に熱気のある教室へと足を踏み入れた。

「ねえー少しカツコ良くない？」 「そうだね。ちよつと嬉しいかも」

「チツ男かよつまんねー」「何でかしんねーけど、女子の反応がそこそ良いのが気に入くわねー」

ヒソヒソと近くにいる生徒同士で本人にはギリギリ聞き取れない内緒話が繰り広げられ、教室に入ってきた転校生に対する第一評価が構築こつちくされていた。

「静かに！ 転校生がこれから話すから。朝倉、自己紹介しろ」
大和はとくに考えもせず自己紹介を始める。

「どうも家庭の事情で今回、清川高校からこの学校へと転校して来た、朝倉大和って言います。これからよろしくお願いします」

パチパチと何処かまだらのある拍手、まったくといって良いほど情報のない自己紹介が終わった後、担任が口を開く。

「はい自己紹介も終わったし本当はみんなから朝倉に質問してもらって。その後、みんなにも自己紹介してもらいたい所なのだが！

ココまで来るのに、かなり時間喰っちゃったので、とつと朝のホームルームを終わらすから。ホームルーム終わった後、各自で朝倉に自己紹介してくれ」

「なにそんなに急いでんの？ 香ちゃん」

クラスの真ん中あたりに座っている生徒が口を聞いた。

「次の時間、今日休まれた鈴木先生の代わりに私が授業をしなくちゃならないんだよ本当に勘弁してほしんだけどな」

香は長々とため息交じりで愚痴り始めた。

その間、大和は（えーつとこの間俺は何をしてれば）と自分の立ち位置に困っていた。

そんな大和の事を全く気に掛けていない様子で愚痴り続ける香だったが、ようやく、大和がずっと立ち続けていたことに気が付き、香はあわてて愚痴を止めた。

「いやーだから本当に大変……あ！ すまん朝倉すっかり忘れてた……あはは」

少しバツが悪そうに香は謝る。

「えーつと、朝倉の席はつと

お！ あまみや 天宮の隣が空いて

るからそこで良いな」

と、香は窓際後ろから二番目の誰も座っていない席を指差した。その瞬間。

「チツ！」

何人かの男子達から舌打ちをされた気がしたのだが、大和は気の所為だと考え直した。

「何してんだよ朝倉、早く座ってくれ、じゃないと私は完璧に次の授業に遅刻してしまうじゃあないか」

「はあ、すいません」

香先生が話した内容に何故か釈然としない感じがするが……大和は指定された席に歩き始めた。途中「よろしく」と声を掛けてくれた生徒には軽い会釈で返す。

何歩か歩き指定された席にまで来た大和は今日ココに来るまでに相当酷使してしまった自分の足を見て、良く頑張ったと褒め称えながら自分の席に腰を下ろす。

それからなんとなく、自分の隣に座る天宮あまみやと言う人がどんな人なのか一なんて思い、隣の席に眼をやった。

大和は息を呑んだ。

何故ならそこには、まるで人形のように整った顔立ち、スラリと伸びた細い手足、そして絹糸のように綺麗な黒く長い髪の毛、とてつもない超絶美人が座っていたからである。

この情景に大和は先程の自分に対する憎しみ（したうち）の理由を即座に理解した。

（ちよつと綺麗な子の隣になったぐらいでそんなに怖いオーラ出さなくても……）

そんな事を考えながら大和は隣に座る超絶美人に挨拶をする。しかしそれは特別な意味を持たない、ただ転校を繰り返してきた少年が早くクラスに馴染むための行動の一つでしかないのだが。

「えーっと、どうも、これからよろしく」

大和は愛想笑い交じりの挨拶をした。

「……」
聞こえなかったのかと思い大和はもう一度挨拶をする。

「これからよろしく」

「……」
無視。完璧なる無視。静寂の中、香先生の出席を取る声だけが空しく響く。

何処からか男子達の「ざまあー」と言う悪意ある声が聞こえた気がした。

（無視って！ 何故？ これは結構傷付くなー……）

大和が半笑いで少しばかり傷心していると。

「ドンマイ」

前の席から小さな声で慰めの言葉が聞こえてきた。

若干嬉しくなった大和は救いの言葉をくれた御方へと顔を向けた。

そこには、栗色の髪を赤いリボンで可愛く結んでいるどう頑張っ
て見ても高校生には見えない（ものすごく頑張っ
て見て中学生、普通に見たら赤いランドセルを背負っている所しか想像できない）少女がこちらに向かってにっこりとスマイルを作っ
て座っていた。

「えーつと？……どうもありがとう」

大和はこの不思議生物の登場に、少し混乱しながらも先程の慰めの礼を言った。

「いやいや、ゼーんぜん気にしないほうが良いよ。天宮さんは基本誰とも話さないから。だってもうこのクラスになってから二ヶ月経つけど、まともに誰かと会話してるところ、なんてまだ見たことないし」と隣に座る美人さんに聞こえない程度の声で返してきた。

「ふうん」

大和も同じ声のトーンで返す。

「あれあれ？ 朝倉君は天宮さんに興味ないの？」

「興味？ どうして」

「んー、もしかして朝倉君って特殊な趣味の方？」

「先程から言ってる意味がまったく分からんのだが……」

大和が目まぐるしく変わる話のスピードについていけず頭を捻っている、ふいに目の前にいる不思議生物が何かを閃いたかのよう
に顔を明るくして話し始める。

「あ！ 自己紹介が遅れちゃったね、つぼみの名前は大塚おおつかつぼみ。
三月二四日生まれの牡羊座で血液型はB型、好きな物はあんこ！つ
ぼみの事は『つぼみ』って気軽に読んでね。ヨロシク！」

（自己紹介もいいが先程の特殊な趣味とはどういうことなのか説明
をしてもらいたい）

「おい大塚ー、転校生に自己紹介するのはとてもいいことだと先生
も思うが、せめてホームルーム終わってからにしろ」

どうやら自己紹介の声が大きすぎて香先生かおりの所まで届いていたよ
うだ。

「ごめんなさい」

満面の笑みで答えるつぼみに香先生かおりは、うんうんと頷きながらま
た出席を取り始める。

なんだかおかしい!? そう感じる大和は間違っているのだろう
か。

「和田ー……渡辺ー……よしよし、これで終わりだな、相変わらず
我がクラスは出席率がよろしくて結構、結構 やばっ！ こっ
ちやいられない。じゃあこれで朝のホームルームを終わるぞ。起
立。礼！」

香先生はこれだけ言うतすごいスピードで教室を出て行った。よ
つぼど時間が無かったようだ。

「よし！ さっそくだけど朝倉君ー！」

つぼみがグルンと勢いよく椅子ごと回り体を向けてくる、その眼
は楽しくてしょうがないおもちゃを見つけた小さな子供のように（
実際に小さな子供に見えるのだが）ランランと光っていた。大和は
その眼に気圧され体を少し仰け反らせながら聞く。

「な……何？」

「少し質問して良い？」

「ど……どうぞ」

「でもでもその前に朝倉君ってすごく呼びにくいから、何かあだ名考えていい？」

「どんなあだ名にしようかな……んー？」

とうとう一人で話を進め始めた。

「そうだなー………！ 思いついた。大和っち、うん！ 『大和っち』我ながら天晴れなネーミングセンスだね、ねえー大和っちって呼んで良いでしょー？」

不自然すぎるほど絶妙な上目遣いで、自分のあだ名を押し通そうとしてくるつぼみに対し大和は、（何故名前の後ろに「っち」をつける？ だったら普通に「大和」と名前を呼んだほうが楽なのでは？）と思うのだが、名前の呼び方程度で文句を言うのもおかしいので首を縦に振ることにする。

「ありがとー大和っち大好き！」

満面の笑みでこっち大和を見つめるつぼみ。その笑みを見る大和は思っ。

（この子は^{じほみ}どうにも少しおかしい）

「じゃあ次はいよいよ質問タイムに入りたいと思います、うーん何からにしようかなー」

「お前って『普通の者』なの？ それとも『^{アブノーマル}異能力者』？」

ふいに、まったく別の所から質問の声が上がった。するとつぼみは拗ねた様に頬を膨らませながら後ろに振り返りブーブーと文句を言い出した。

「誰？ 今言ったの！？ その質問はあとでつぼみが聞こうとしたのにー」

すると一人の少年が大和とつぼみの方に歩いてきた。

「わりいわりい、お前があんまり考えてるから、つい口をはさんじまった」

「考えてるのがわかるなら黙っててよ！」

つぼみはご機嫌斜めですといわんばかりの顔だ。そんなつぼみを

他所に、少年は大和の方へ話しかけてきた。

「よ！ 転校生、俺の名前は松岡孝まつおかたかしつーんだ、これからよろしく頼むぜ」

と言いながら松岡と名乗る青年は手を差し出してきた。

大和はその手を握り返しながら「よろしく」と言葉を交わす。

「おう！ よろしくな大和。で、さつき質問した異能力者が普通の者なのかなんだけど」

「俺は……普通の者だよ」

「そうか異能力者じゃねーのか」

残念そうに言う松岡が気になり大和は言う。

「なんだ異能力者が良かったのか？」

「いや、別にそう言う訳じゃないんだけど、異能力者ってなんだかカッコいいじゃん、それに便利だし。無いよりはあったほうが良いみたいな気がしないか？」

「悪いな。期待に副えなくて」

「いや私は別に良いよ。大和っち異能力者とか関係なしによりよっぽど面白そうだし」

さつきまで横で、『ぶんスカ』と怒っていたつぼみが、怒るのに疲れたのか話に加わってきた。

「それにさまつまつ、異能力者ならもうこのクラスにたくさんいるでしょ」

「そうだけど。やっぱり異能力者が、いる事に損はないだろ！」

よほど異能力者が好きなのか、松岡は大きな声で叫びだす。

「いちいち異能力者が異能力者はって毎日毎日ほんつとにうるさいわね、馬鹿じゃあるまいし、少しは黙るってことできないの」

一人の少女がこちらに近づきながら、松岡に対し随分と攻撃的な口調で話しかける。

「何だと朱音！ 喧嘩売ってんのか！！」

「悪いけど私、あんたごときに喧嘩売るほど暇じゃないから」

それだけ言うと少女は浩介の横を通り過ぎ、大和の前に来て口を

開く。

「朝倉君だったよね。私の名前は古林朱音、一応風紀委員やってるから、もしこの馬鹿に何か嫌な事されたらいつでも言ってる。私がぶっ飛ばしてあげるから」いかにもスポーツ系美人といった感じのする栗色のリボンを頭に結んでいる赤髪の少女は、松岡の方に指を向けながら言い放った。

「なんで俺オンリーなんだよ！」

「うるさい黙れシスコン」

「妹が好きで何が悪い！」

「サイテー開き直った」

「はん！ その小さい胸じゃ確かにサイテーだろうさ」

「なんですって！ もう一度言ってみなさい」

「胸がちいせーってんだよ」

わーわーと口喧嘩をし始める二人、あまりの展開の速さに大和は呆然としていた。

そんな大和につばみは「大丈夫、大丈夫、この二人いつもこんな調子だから」と半ば呆れ気味で説明する。

大和は言う。

「これが痴話げんかと言うやつか」

「違う！ 誰がこんな奴と」

二人ともまったく同じタイミングで一字一句違わぬ事を言い、教室中の生徒達がドツと笑った。

当の本人達はまったく面白く無さそうだが。

程なくして教室に国語科の先生が入ってくる、教室には先ほどの事でまだ笑っている生徒達が居たが、授業は始まった。

第二話 食堂での他愛もない会話

キーンコーンカーンコーン

学校のチャイムが鳴る、午前中の授業が終わりようやく昼食タイムだ。

大和は死んでいた……とにかく死んでいた。

朝の重労働（自分のせい）で身体が疲れたところに、授業・授業・授業（当たり前）である。疲れないほうが無理だというものだ。

「大和っち、大和っち」

ふいに前の席に座る不思議生物が話しかけてきた。

「何だ、大塚」

「つばみ！」

「ああ、ゴメンゴメン、でいったい何の用だ？」

「食堂にご飯食べに行こう！」

お腹のすいている今、何とも嬉しい提案なのだが……

「あー悪いな、今日、俺さ弁当なんだよね」

「そおなのかあ……あ！ でもでも食堂で一緒にご飯食べるのはできるよね！」

私、今とつても良い事思いつきました、とでも言わんばかりのキラ光る期待たつぷりの顔を近づけてくるつばみに大和も、娘にせがまれた父親のような気分になる。

「そうだな、じゃあ食堂にいきますか」

「イエーイ」

ガッツポーズしながら嬉しそうに笑うつばみを見て大和もつい笑みがこぼれる。

「食堂に行くのか？ なら俺も行くぜ」

不意に松岡が出てきて会話に参加し始めた。

「えー」

つぼみは露骨に嫌そうな声を出す。

「何だよ！ その反応は幾らなんでもおかしいだろ」

「可笑しくないよ、まつまつが来ると面倒くさいんだもん」

「誰がめんどくさいだ！ ふざけんじゃねーぞ」

かなりの剣幕で怒鳴る松岡に対し。

「ひっ、こ……こわい」

つぼみは目に涙を浮かべ逃げるように大和の後ろに隠れる。

「おいつぼみ逃げてんじゃねーぞ」

大和はそんな光景をまるで風景を眺めるように見ていたのだが、ある事に気が付き一人の少年を救う為、口を開く。

「おい松岡その辺で止めといた方が良さと思うぞ」

「大和は黙ってな、今この空間は俺がつぼみをどうやっていたぶるかの一択いったくのみだ」

「そうか松岡……骨は拾つといてやるからな、安心して成仏しろよ」
「ん？ 一体どーゆうこウガ！」

瞬間、ものすごい音とともに松岡の顔が床と接触事故を起こす。

その威力すさまじく松岡はピクリとも動かない。

「あかちゃーん！」

つぼみは大和の後ろからパツと出て救世主に抱きつく。

「おーよしよし、大丈夫だった？ 私のつぼみー」

パツと見、仲良し二人の微笑ましい風景なのだが、後ろに転がっている死体がものすごく気になる。

「あ……あれ大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、この程度じゃすぐに起きてくるから。それにもし万が一このままだとしても私のつぼみに対して、いたぶるだなんてなめたこと言つたコイツが悪いんだし」

松岡の後頭部にかかと落とし放つた古林は、何とも満足気につぼみを抱き寄せながら腕をパキパキと鳴らし笑顔で答える。大和の背筋にヒヤリと冷たい液体が流れた。

途端、先程まで生きていた配させられていなかった松岡が、ものすごい勢いで起き上がった。

「いてえだろーが何しやがんだ。暴力女！」

「うるさいわねー何ならもう一発食らわしてあげようか？」

「上等だやってみろ」

本当に日常茶飯事なんだなと思いつつも、大和は自分のお腹が減っていることを思いだした。

「んじゃ、つぼみ俺達は先に食堂に行つてようか」

「はい」

大和がイスから立ち上がった時、ガラガラ！ 勢いよく教室のドアが開く音がした。不意の大きな音で教室に居た生徒達が一斉に静まり返る。

誰が来たのかと目をやると。おーほっほっほっほっ、と口元に右手を当て今のご時世では考えられない笑い方をしている女子が立っている。良く見てみると取り巻きが何かだろうか？ 後ろに三人ほど女子を連れている。そしてひとしきりお嬢さま笑いを終えた女子が一言。

「どうもごきげんよう皆さん」

教室中の空気が凍った。

「何しに来たのかしら伊集院さん」

「そうだけ、わざわざどんな用事でここにきやがった」

何故だかわからないが、先ほどまで言い争いをしていたはずの二人が、息をピッタリと合わせて野次を飛ばし始めた。

古林は抱いていたつぼみを大和の方へと歩かせる。

古林、松岡、両名ともにキバを剥き出しにし、臨戦態勢に入っているようだ。

「別にあなた達にはありませんのですが、何やらこのクラスに新しい転入生が来たと言うウワサを耳にしましたので、あなた方のよくな頭の中が年中お祭りクラスに転入してしまった。可哀相なお方を笑いに着ましたのよ」

「誰の頭が年中お祭りクラスだ。どちらかといえばお前らのクラスの方がまともじゃない奴ばかりじゃねーか」

松岡は半ば呆れたように言った。

「自覚が無いだなんて本当に低脳な人達ですわね。それにまともじゃないと言うのは当然。あなた達のクラスと違い、我がS組には、伝統、格式ともに超一流である由緒正しき伊集院家の総領娘。そう！つまりこのわたくし伊集院真奈を筆頭とし、様々な分野で優秀な人達が揃っていますのよ。あなた達と同じ『まとも』であるはずがありませんわ。特にテストで万年後ろから十番目以内にしか入ってないようなバカ猿と私たちとは天と地ほどの差がありますわ」

思い切り見下した笑顔を見せながら、伊集院真奈と名乗る人物は優越に浸りながらおーほほほと、またもや口元に手を当てて笑い始めた。

「うぐっ」

松岡は今の一言が相当傷付いたのか胸に手を当て息も絶え絶えで苦しそうだ。

「そんなに気にするなら真面目に勉強すれば良いのに」

古林の一言が松岡に止めを刺したのか、松岡は倒れて動かなくなつた。

「だれ？」

大和は松岡が倒れて、若干うれしそうにしているつぼみに聞いた。「えーつとね、彼女は伊集院さんって言って。いつも私たちのクラスに来て、私たちの悪口ばかり言って、あかちゃん達とバトルになるんだよ」

「伊集院ってもしかしてあの伊集院？」

「そう。いま急成長中の伊集院コーポレーション代表取締役の一人娘だよ」

「へえ。あの伊集院家の一人娘ねえ」

大和とつぼみが話している間に。

「確かに貴方のいるS組は優秀かもしれない。でも、いかに優秀な

人達がいるクラスと言っても、一般常識の備わっていない人がたくさんいるようじゃあ如何かと思うけど」

古林が負けじと嫌味の応酬をしていた。

「一般常識といえ、あなた達のクラスほうが備わっていないのはなくて？」

「どうゆうこと？」

「だってそうでしょう。入学早々教師を殴り、その一件で孤立してしまつた方を不憫に思い、話し掛けてくれた優しい女子生徒に対し、五月蠅いと一蹴し泣かせた何とも酷い方がいらつしやるクラスじゃあないですか。ねえ天宮さん？」

「……………」

不意に名前の出た本人は何とも涼しげな表情で本を読みながらスルーした。

「まただんまりですか、良いですわね、天宮さんは学校理事の孫と言っただけで何をなさつても許されるのですから」

「伊集院さん、幾らなんでもそれは言いすぎよ」

「あら古林さんあなた天宮さんの肩をお持ちになるの？ それはそれは、ずいぶんお優しいのですこと、ですが天宮さんのせいで、今もなお学校に来られない先生がいらつしやることをお忘れなく」

「くっ……………」

「あらどうしました？ 古林さん、もしかして何も言い返せなくて伊集院の言葉に対し何も言い返せない古林。その様子を伊集院の後ろに立っている取り巻き達もニヤニヤと笑っていた。

教室中が重い雰囲気にも包まれる。

しかしそんな空気の中、何故だかその空気とはそぐわない男が一人。

「フツッぶぶぶもうだめ我慢できない！ あはっはっはっは、ヒーあっはっはっはあっはっはっはっは」

大和が腹を抱えながら笑い始めた。

あまりにも突然の事で教室中が呆気に取られた。

だがそんな人達をお構いなしに、大和の笑いは一向に醒める様子が無い。

「ダメマジでやばいお腹が痛い、ヒーヒーむりはーあっはっはっはっは、マジでたすけてっぼみ助けてぶぶくっくあーっはっはっははっはは」

「大和っち落ち着いて。深呼吸だよ、深呼吸」

「ぶぶあっははっはし……………深呼吸ぶぶ」

「ハイ。吸ってー」

「すー」

「吐いてー」

「はー」

「吸ってー」

「すー」

「吐いてー」

「はー」

何回か繰り返すと、大和の息もだいぶ落ち着いてきた。

「ありがとうっぼみ。ぶぶっ助かった」

「どういたしまして」

息が整ってきたとはいえ、まだ小さくだが笑っている大和。

「あなた一体、何がそんなに可笑しいの」

ずっと笑い続ける大和に伊集院は少し不機嫌そうに聞いた。

「いやー、伊集院さん、アンタものすごく暇なんだなーと思って」

「なっ！ そ……………そんなことはありませんわ、わたくしはとっても忙しいんですの、貴方がた程度の相手にしている暇などありませんの」

「そうかねー、わざわざ廊下の一番はしっこのクラスに押しかけてきて、何をするかと思えば、脳内お祭りクラスに嫌味を言いに来るだけとは……………ぶぶぶくっくくあっはっは伊集院家のお嬢様ともあるう人があっはぶぶはっはーっはち、ち……………ちっちえーあははっははーだめだやっぱり笑っちゃうぶぶっぶはあっはははは」

「な……なんですって〜！」

ブチッ！ 何か切れる音がした。その音が伊集院の堪忍袋が切れた音だと分かるのにそう時間は掛からなかった。

スッ、伊集院が右手を教壇の机に向けた、すると突然、ガタガタと言つ音とともに机が空中に浮き出した。

「はあはあ。ん？ ちょっと待つて何だかものすごくいやな予感がするんですけど……」

笑い続けていた大和も目の前で起こる異常な現象にいやな予感しかしなかった。

「この伊集院を馬鹿にしたこと、万死に値しますわ！」

伊集院はかざしていた手をまるで大和にボールを投げるかのようには振った。

その瞬間、浮いていた机が大和に襲い掛かった。

「さあ無様な姿を皆にさらしなさい」

口元にニヤリと笑みを浮かべる伊集院。

「ギャー——————！！！」

大和の叫びも空しく机は猛スピードで確実に大和に激突しようとして飛んでくる。

その時、強烈な風が吹いた。

その風は教室の開いた窓から侵入し教室中の机の上に置いてある大半のプリントを吹き飛ばす、中には机の上に置いてあった弁当がひっくり返り、床にぶちまけられた二色弁当をみて愕然としているかわいそうな生徒もいる。

それほどまで威力のあった風は大和に向かい飛んでいる机の軌道を僅かに逸らした。

「あ」

伊集院が何とも情けない声を出した。それもそのはず、風により僅かに軌道が逸れた机は、大和の頭ギリギリ横を掠め窓から外の世界へと飛ばたいて行った。

今この現場でピンチに陥っているのは、伊集院のほうである。

「まずいですよ恵里さん。机が……早く先生にばれない内に元に戻しておかないと、面倒な事になっちゃいますよ」

焦る伊集院の取り巻きA。

「そ……そんなこと分かっていますわ」

そう言つと伊集院はそくさと早歩きで行つてしまった。

「まっってください伊集院さくん」

早歩きで行つてしまった伊集院を、追いかける取り巻きABC。

伊集院たちがいなくなる。

教室はウソのように静まり返る。

「よくやつたぞ大和！」

いつの間にか復活していた松岡が叫んだ。

松岡の叫びを合図として、クラス中から歓声が沸き起こる。「すげーぞ」「最高に気持ち良い」「ありがとう朝倉」「あいつらのあの焦った面めつちやくちやおもしろかった」「今までのことを考えたらいい気味よ」など様々な歓声が沸きあがった。

「凄いよ大和っち！」

つぼみも大和の後ろにいながら大はしゃぎだ。しかし当の本人はといえば、ぼーっと何かを考えているようでまったく反応が無い。

(今のは……)何か考えてる大和にふと声が聞こえる。

「朝倉君！ 大丈夫！？」

ハッ、と我に返ると、心配そうな顔のつぼみと古林が自分の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫！？ 大和っち、もしかしてさっきの机が当たつてた！？」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫。少し考え事してただけだから」

「そう、よかった。朝倉君呼んでも全然反応無いし、心配したよ」

「ははは、ゴメンゴメン」

「まあなんにせよ、大丈夫なんだからよかったじゃねえーか。それにしてもさすが大和だぜ俺が見込んだ男だけのことはあるぜ」

「なにそれ。あんたずいぶん鼻高々で胸張ってるけど、あんたがしたことなんて床を泣き寝入り床にしたらだけじゃない」

「なんだとてめえ」

本日、何度目か分からない（痴話）喧嘩し始める例の二人。

「つぼみ食堂だったな、早く案内してくれ」

「わかった」

あの二人は無視して置いて行こう、心に決めた大和とつぼみだった。

|||||

ここは食堂。横に長い大きな白いテーブルがずらりといくつにも並んでおり生徒達がグループごとに座り昼食を取っている。中には窓際においてあるカウンター席に座り一人で食べている生徒もチラホラというが。

「うわっ！ まぶしすぎるだろ」

大和はとつぜん目に入って来た眩しさに、目を細めながら言う。

食堂全体が白で統一されているせいか、窓から差し込む太陽の光に反射し、ただでさえ電灯の数が多く、明るい食堂をさらに明るくさせていた。

「そうだねこの食堂は少し明るすぎるよね」

券売機の行列に並ぶつぼみは嬉しそうに話す。

大和はというと、弁当持参なので券売機に並ぶ必要は無く、他の生徒の邪魔にならないよう、行列から一步脇に出てつぼみの横に立った。

「それにしてもこの学校の食堂はずいぶん平和だな」

「え、なんで？」

「いや、俺が今までいた学校じゃあ券売機前＝戦場ってのが当たり

前で、食券を買うのに我先につて集い合つて揉みくちやになつた記憶が多々あるし、酷いときにはそれが原因で怪我する生徒や、喧嘩する生徒が出る始末だったのに、戦国高校の生徒達は券売機の前にしっかりと一列で綺麗に並んで、じぶんの番がくるのを待つてるだろ。今までいろんな高校に転校を繰り返してきた大和だが、こんな状況は初めてであり、はつきりと言うと何だか気持ち悪い、食堂だけ空間が違うような気さえしてくる。

「それにはね理由があつてね」と、何故だか小声で話し始めるつばみ。

その時、「おーい、お前ら〜!!」食堂の扉の前からこちらに向かって手を振りながら走ってくる少年が一人。少年は大和たちに近づき話し始める。

「ひでえよお前ら、朱音はともかく俺まで置いていくなんて」

「あかちゃんだけだったら置いていかなかつただけだなあ」

「なんだとお前! もう一回言つてみる」

「今日は何食べようかなあ」

つばみの顔はニコニコと健やかな笑顔である。

「俺のこと無視してんじゃねえ!!」

松岡はキシャー! と言う謎の擬音とともに脳天直撃地獄チヨツプを繰り出そうとつばみに飛び掛かる。

バゴーン! ものすごい音がした。

「う……う……」

松岡はうめき声を上げながら崩れ落ちた。

カランカランと、金属製の音が響き渡る。

「フ、フライパン!?!」

大和は松岡にクリーンヒットした物体に目を向け言った。

「うるせーぞてめえら、券売機の前でさわぐんじゃねえ!!」

途端、食堂に怒号が響き渡る。

大和が見慣れてしまった死体を無視して、怒号の元に目をやると。

「な……何あれ」

大和は驚愕した。

そこには、無精ひげを生やし、今時の頑固中年親父を体現したかのようなオヤジが、見るからに怒りの感情を剥き出しにしてこちらを睨みつけている。

どうやらあのオヤジがフライパンを投げつけたようだ。

だが大和が驚愕した理由は其処ではない。

「あ……あのオヤジ格好からしてこの食堂の料理人なんだろうけど、あいつ料理作りながらタバコ吸ってやがる！」

大和の放った一言に、ギロリ、と怒髪天才オヤジの眼が大和を捉える。

「何か言ったかクソ坊主」

低く、しかしながら余りにも迫力のあるドスの利いた声で話すオヤジ。その右手には床に転がっているのと同ほぼ同じ大きさのフライパンが握られており、『投げるぜ！ブン投げるぜ！』と言う声が何処からとも無く聞こえてくるようだ。

「い、いや別に何にも言っていないです……」

隣に倒れる死体の様にはなりたくないの、全力で首を横に振る大和。

「何にも言ってねえってことはねえんじゃないか？ あああん」

(こえー……！)

大和がオヤジの気に押され、しどろもどろになっていると。

「ごめんなさい源内さん！」

つぼみが大和の前に立ち謝罪とともに頭を下げ始めた。

「あああん！」

(もういいつぼみ、頭を上げてくれ。なんか傍から見ると自分がものすごく悪い事をして。拳句、自分では謝れないので人を使って謝らせてるような空気になってるから。オヤジも明らか不機嫌な声だしてるから！)

そんな大和の思いも届かず、つぼみは頭を下げたまま話を続ける。「大和っちは今日この学校に転入したばかりで、この学校のこと右

も左も分からないの、だから、だから大和つちのこと許してあげて。お願い源内さん!!」

（やばい。これ以上は俺だけじゃなく、つぼみまで一緒にフライパン顔面サンドの刑に処せられてしまう。こうなったら俺も一緒に頭を下げるしか）

「よし分かった。許そう」

「はあああああああ!?!」

壮絶な肩透かしを喰らい、変な声を上げてしまう大和。そんな大和の事を無視して話を続けるつぼみ。

「ホント!? ありがとう源内さん!!」

「まったく今度からは気をつけるよ、坊主」

「いやいや、おかしいだろ何であんなに怒ってたのに、もうクールダウンしてんだよ。というか逆に上機嫌になってるし、どう考えてもおかしいだろ!?!」

あまりの驚きに、考えてる事がそのまま口から漏れている大和。

「その疑問、俺がお答えしよう!!」

「お前……悪魔とでも契約してんのか?」

こちらの驚きには大和も慣れてきているようだ。

松岡は大和に小声で話しはじめる。

「あいつはな、重度のロリコンなんだ」

「おい、簡単に悪魔と契約の突っ込みをスルーすんじゃない?」
「は?」

何故だろう。へんな単語を聞いた気がする。

「ごめん、もう一回言って」

「ん? だから源内のオヤジはロリコンなんだよ。ロ・リ・コ・ン!!」

あまりの唐突さに大和の頭の中は二秒ほど空白になるが、懸命に整理して話す。

「まじかそれ?」

「まじ、まじ。だいたい券売機前をこんなに綺麗に整列させ始めた

のも、俺らが一年のときにつぼみが券売機前の列に巻き込まれて怪我してからだしな。まあ、つぼみ本人にはバレてねえけどこの学校の生徒ならほとんどの奴が知ってる情報だぜ」

「なるほど、だからつぼみを襲おうとしたお前には、口頭での注意だけじゃなく実力行使の凶器フライパンが飛んできたよ」

「いや、源内のオヤジは口頭注意なんかしたことないな、いつも実力行使だ」

「……なんであのオヤジ解雇されないんだよ」

「いやあのオヤジ、料理の腕がものすごく良くてな、一度辞めさせられそうになつただけで生徒達が署名運動を起こして帳消しになつたって話もある」

「良いんだか、悪いんだかまったくわからねえ」

そんな事を大和と松岡が話していると、券売機よこの食券交換力ウンターでロリコンオヤジから料理の載ったトレーを食券と交換し嬉しそうにつぼみがトテトテと歩いてくる。

「大和っち、あそこの席、空いてるみたいだから行こ」

「何で俺のことはいつも無視するわけ？」

松岡がつぼみに対し抗議する。

「別に無視してるわけじゃないよ。ただまつまは、まだ食券買ってないよね。早く並ばないと大変だと思っただけ」

つぼみの話で松岡の元気が一瞬で無くなる。それもそのはず、大和もつぼみの言葉で気づいたのだが券売機前の行列がとんでもない事になっている。

「まずい！ 早く並ばねえと！！」

松岡は急いで行列の最後尾めがけて走っていった。

「何処の人気ラーメン屋だよ……」

大和はポツリと呟きながら、つぼみとともに先程つぼみが見つけた空白のテーブルまで歩いて行き腰掛けた。

すると、大和と対面に座つたつぼみが、先程食券で買ってきた坦々麵をすすりながら楽しそうに話す。

「ずるずるー、ごくん。源内さんの作る料理ってすごくおいしいんだよ」

「その話は松岡から聞いたけど、だからってこの行列はすごすぎないか？」

「そんな事ないよ。ふーふー、ずるるるるるー、はふはふ、ごくん。源内さんの料理の腕がすごすぎて、某有名グルメ雑誌に食堂が乗ったぐらいなんだよ。だから皆お弁当や購買部で買わないで食堂を使っちゃうんだよ」

「あー。この間なんか他校の生徒が勝手に入って食堂を利用してちよつとした騒ぎになっちゃったしね」

唐突につぼみでは無い声が間に入ってきた。

その声につぼみは箸を止め振り返る。

「あ！ あかちゃんお帰りー、委員会どうだった」

「どうもこうもないわ。また伊集院の奴が突っ掛かってきて。本当にめんどくさい！」

古林が心底疲れたように話しながら、つぼみの隣へと腰掛ける。

「しょうがないよ、S組の人は総じてプライドが高いからねー。あ

！ あかちゃんに頼まれてた、牛丼買つといたよ」

「ホント！ ありがとーつぼみ！！」

つぼみが渡した牛丼で先程までの疲れは何処へやら、古林は箸を手に取り、勢いよく食べはじめた。後ろのほうから、「ずりー！！」と言う松岡の声が聞こえる気がするが大和は聞こえない振りをしてながら、少し気になったことを聞く。

「あのさ、天宮ってどんな奴？」

「おやおやー、さっきまで全然興味ないって言ったのに、急にどうしたのかなあ？」

ニヤニヤと水を得た魚のようになるつぼみ。

「いや断固つぼみが考えてる感じじゃないから」

「ふ〜ん」

大和の言葉はまるでスルーされたかのようにつぼみの顔からニヤ

ニヤが消える事はない、そんなつぼみに古林が口を開く。

「つぼみそんなふうと言ったらダメ、天宮さんは超絶美少女なんだから男子が興味を持つのは当然に決まってるでしょ、だからそんな言い方したら朝倉君がかわいそうでしょ」

「いやちよつとまで古林、全然フオーローになってないから。別に天宮が美少女とかそう言うことじゃなくてだな……伊集院が言ってる、天宮のせいで先生が学校に来れなくなったただの何だのって。それがただ単に気になっただけだよ」

「えーそうなんだあ、つまんないの」

つぼみは心底残念そうに坦々麵をすすする。

「つまんないって……じゃあどうだったら、つぼみは楽しかったんだよ？」

「ん〜とねー」

「あ、やつぱりいい。面倒くさくなりそうだし」

「なんで？ いっぱいあつたのにケチー」

つぼみは先手を打たれて悔しそうに机を叩く。

そんなつぼみを無視して大和は古林のほうへと顔を向ける。すると古林はつぼみの頭を撫でながら話し始めた。

「天宮さんは容姿端麗、成績優秀、尚且つ運動神経もばつぐんで生方の評価も高い、まさに超絶完璧人間って感じ。だけど完璧すぎるのと彼女自身あんまり人付き合いをしないから女子からはものすごく僻みを買ってるね、反対に男子からはものすごいモテモテで新学期に入ってから彼女に告白した人の数は優に二〇人を超えてるって話だし」

「いや別にその情報いらないだろ、と言うかその統計は誰が取った」
「あ、でも安心して朝倉君、天宮さんに彼氏はいないし、好きな男子も特にいないって話だから」

「いやだから安心するも何もその情報は一切いらないし、だいたい人付き合いをしないっていつてたのに、その人の個人情報調べてる奴は誰なんだ」

大和は呆れたように頭を手で押さえて話を続ける。

「俺の知りたいのはそんな男子の告白数だとか、彼氏がいるかいな
いかじゃなくて伊集院がいつてた話を知りたいんだよ」

それを聞いた古林は少しつまんなそうな顔をする。

「天宮さんの話なら伊集院の奴が言ってたまんまで、入学した当日
に担任の教師を殴り飛ばして、その事件以降、孤立した天宮さんを
可哀相に思った、ある女子生徒が天宮さんに話しかけたら、その女
子生徒のこと泣かしちゃったって事件が一年の時にあったって話」
「先生の方は学校に来なくなっちゃって。泣かされた人は実梨さん
て言うんだけど、その事件の後も天宮さんの事を心配してて、その
人柄が皆に評価されて、いまはこの学校の生徒会長をしてるんだけ
どね」

つぼみが古林の話に補足情報を付け足した。

「ふーんそうなのか」

「あれあれ？ 何でせっかく教えてあげたのにそんな反応なの！？」
つぼみは不満そうに大和を睨む。

「な、なんだつてえ。こいつはびっくりだー」

「そんな棒読みじゃ騙されないよ。何させっかく教えたのにー」
つぼみは頬を膨らませて、怒ってますよアピールをし始めた。
そんなつぼみを見た大和はお辞儀をしながら言う。

「悪かったよ、つぼみ。わざわざ教えていただいてありがとうございます
います」

大和がそう言うにつぼみは怒り顔をすぐに笑顔に変えた。

「うむ。そなたの謝罪に免じて、今回は不問にいたそう」

「急に位が替わったな」

大和のその言葉とともに三人は声を上げて笑った。

ひとしきり笑った後、古林が大和に尋ねた。

「ねえ、朝倉君。朝倉君はお昼食べなくて良いの？」

古林の質問に大和は改めて気づく。

「わ、わすれてた」

よく見てみるとつぼみの坦々麵はもちろんのこと、何時食べたの
か分からないが古林の牛丼も綺麗さっぱりなくなっていた。

大和はかばんの中からゴソゴソと今日持ってきた弁当箱を取り出
す。

弁当箱は綺麗な緑色の包みに入っており、結びをとくと中から全
体の黒にところどころ金色の細工が美しく施してある、高そうな箱
が出てきた。

「朝倉君のお弁当箱、随分高そうだね」

古林の言葉に大和は笑いながら返す。

「そうなんだよ、弁当箱探したけどろくなのがなくてさ、春奈ちゃ
んに聞いたらこれが一番ましだつて言われたんで詰めてきたんだけ
ど、正直この弁当箱も十分、仰々しすぎだと俺も思う」

大和はそう言いながら弁当箱のふたを開ける。

「おいしそう!!」

女子二人が息をピッタリ合わせて食いついた。

「いや、別にたいしたことないと思うんだけど」

「そんな事ないよすっごくおいしそうだよ。このお弁当、朝倉君が
じぶんで作ったの?」

「一応自分で作ったんだけど、この高級弁当箱には死ぬほど合わな
いな」

「そんな事ないよ。この竹の子ご飯やほうれん草のおひたしにきん
ぴらごぼう。どれもすっごくおいしそうだよ」

「そいつは、ありがとう」

大和は少し恥ずかしそうに古林に礼を言った。

三人は食堂で楽しく談笑しなかなか充実したお昼休みを過ごし午
後の授業へと鋭気を養っていった。

余談だが、松岡がお昼にありつけたのは大和が弁当を食べきった
ずっと後、お昼休み終了五分前であった。もちろんグルメ雑誌に載
るほどおいしい料理を味わって食べる事など出来るはずがない。

第三話 虐められてた少年と虐められない少年

疲れた。

とてつもなく疲れた。

大和は疲れていた。

やっぱり初めての学校に行くことは総じて疲れると大和は痛感していた。

大和は今、学校から帰路に付いていた。

バレー部に入らないかと勧誘してくる古林と、ゲーセンに遊びに行こうと誘ってくる松岡に、無理やり学校案内をしようとするつぼみ達から大和は逃げてきた。

バレー部と言うか部活は一通り見ておきたかったし、ゲーセンで楽しく遊びたいとも思ったし、学校見学も正直してみたかった。

だが今日は何故だかどれもする気が起きなかった。なので、すべの誘いに「明日やるから」と返事をだけ残して逃げてきた。

「はぁー、ホントに今日は疲れたな」
歩きながら、ポツリと一言。

戦国高校から駅まで歩いて十五分程度なのだが、今日の大和にとってその程度は異様に長い気がした。

「なにしてんだよ、早くやってみるよ弱虫が」

不意に子供の声が聞こえた。

大和は何気なく声のした方へと目をやるとそこには公園があり、その公園の中心でランドセルを背負った小学生、五丁六人が一人を円になって囲んで何かしている。

始めのうちは小学生が何か遊んでいるのだろうと思い、大和は歩きながらぼーっと眺めていたのだが。

バキッ！ 円で囲んでいる子供のうち一人が円の中心に座る子供

を殴り始めた。

「ほら！ 早くやれ弱虫」

その行動に続くように回りにいた子供達も一斉に殴り始める。

「どーせできないくせに、女にカツコつけるためにうそついたらんだろ！」

「やめてよ！ やめてよ！」

殴られている子供は体を小さく丸め、必死に叫んでいる。

「止めてほしかったら早くやってみろよ！」

「うぐっゲホッ 今日……ゴホゴホッ今日は調子が悪くて」

咳き込みながらも男の子は何かを訴える。

「うそついてんじゃねーよ！」

叫びながら訴えを拒否するように、始めに殴ったリーダー格の子供が腹に蹴りを突き刺す。

「うぐっ」

蹴られた男の子は口から唾液を垂らし、苦しそうな表情で蹴られた部分を抱え込む。

だが、そんな状況でもまだ満足した様子ではない、いじめっ子達。

「あー。本当にうざいなこいつ」

「分かる分かる。嘘ついてまで女にカツコつけるとかマジでむかつくし」

「コレはもうちょっと懲らしめないといけないね」

「お前ら、ちようどいい棒拾ってきたぞ、コレでうそつきを処刑してやるうぜ」

いじめっ子の一人が野球バットほどの太さがある木の棒を持ってきた。

「ナイスだぜ、コレで嘘つきを処刑できる」

笑いながらもおぞましい単語を放つ子供達、子供ならではの残酷性がそこにはあった。

「や…… やめてよ、僕うそなんかついてないよ」

殴られていた男の子は顔面蒼白でブルブルと震えている。

「ふざけんうそつき」

「うそつきは処刑だ」

「リーダーやっちゃってください」

「処刑！ 処刑！ 処刑！」

手拍子で処刑と連呼する子供達、その中でリーダーと呼ばれた子供が先程の野球バットほどの太さの木の棒を持ち、それを倒れながら震える子に向かい振りかぶる。

「やめて……やめて。誰か助けて」

助けを求める男の子の声空しく、棒は男の子の頭めがけて振られた。

男の子は目をつむり、頭を守るように腕で抱え込む。

がっ！ 棒が何かに当たる音がした。目を瞑る男の子は自分の何処に棒が当たったのか分からなかった。だが不思議と何処も痛くない、男の子は恐る恐る目を開ける。

目の前には棒を振りかぶり自分のことを今にも殴ろうとしているいじめっ子が立っていた。だがいじめっ子の持つ棒はいくら振ろうとしても全く動いていない。

棒を持つ、いじめっ子が一番不思議そうな顔をしている。

しかし殴られそうになっていた男の子はその理由がすぐに分かった。そしてその理由のおかげで少しばかり涙が出そうになる。

「おい、ガキンちよ共、弱いものいじめだなんて、んなことするもんじゃねえよ」

高校生ぐらいだろうか制服を着た男の人が、いじめっ子の振りかぶっている棒を右手でつかんでいる。いじめっ子もようやく棒が動かない理由に気づいたようで、棒から手を離す。いじめっ子達は瞬時に力では敵わないと思いき撃する。

「なんだよお前！ 俺たちの遊びじゃましてんじゃねーよー！」

「そうだよ。高校生が俺らの遊びにはいつてくんなよ！」

「そうだ、そうだ」

いじめっ子達は口々に自分達の遊びを邪魔した男に文句を言う。

「遊び？ お前ら本気でそう思ってたのか？」

途端、男の顔つきが変わる。

その気迫に押されたのか、いじめっ子達は大人しくなる。

だがリーダー格の子供だけは、まだ余裕そうにしゃべり続ける。

「そう思ってるよ。何か文句あんのかよ。小学生のじゃまをするキモ高校生さん。あんたとつと消えてくんないはつきり言っただけだよ」

男の迫力に押された他のいじめっ子達は、リーダーの発言で男が切れて手を出してくるんじゃないかと肝を冷やし、耳元で発言する。

「ねえリーダーそんなこと言っただ大丈夫なのあの高校生が切れたら俺らじゃぜってー勝てないよ」

「大丈夫だよ俺には奥の手があるからよ」

リーダーと呼ばれた子供はうつすらと笑みを浮かべながら言った。そして男に言葉をさらに続ける。

「あのさあんた、黒金高校で知ってるでしょ、あの超極悪高校のこと。俺の兄ちゃんその頭なんだぜ、超怖いんだぜお前なんかすくにぶっ殺されちまうんだぜ」

いじめっ子のリーダーがそう言うと、他のいじめっ子達が騒ぎ始める。

「すっげー、あの黒金高校の頭！？」

「さすがリーダー超すげーぜ」

その言葉を聞き鼻高々のリーダーの子はさらに言葉を続ける

「わかつたらとつと消えてくれよな」

おおお！！ といじめっ子達から感嘆の声が聞こえる。

だが男は焦る様子もなく口を開く

「んー。とりあえず話は一通り聞いたけど、最後に俺から言っただけ？ その遊びを止める気はない？」

「うるせーなとつと消えねーと、お前も兄ちゃんに頼んでコイツと同じように処刑しちまうぞー！！」

「そっか、口で言っても解らないならしょうがない」

男はいじめっ子のリーダーに近づく。

「な……なにすんだよ、兄ちゃんに言っちまうぞお前なんか余裕で潰しちまうんだぞ」

必死に脅すが、男はその脅しで引く様子も無く一歩また一歩と近づき。

ゴンー！ 男のゲンコツが頭に直撃する。

「いつてえー！」

いじめっ子のリーダーは頭を抑え、ジンジンとくる痛みにもがき苦しんでいる。

その状況を見た他のいじめっ子達は驚き硬直している。そんないじめっ子達をスルーして男は先程までふくろにされていた子供に手を伸ばす。

「大丈夫かお前」

「ぐすつ。大丈夫です。ありがとうございます」

出された手を掴み何とか立った、子供は目に涙をためながら礼を言った。

「お前ふざけんなよ、なにすんだよ」

まだ痛そうに頭をさすりながらいじめっ子のリーダーが半泣きで起き上がった。

「なにすんだよって、ゲンコツだよゲンコツ。言ってもわかんない子には『鉄拳制裁しましょう』て法律にあるだろ」

「んな法律ねーよ、お前ふざけんなよ俺の兄ちゃんにぜってー言うてやるからな」

「ごめん。俺引っ越してきたばかりだから、そんななんとか高校なんて言われてもさっぱり分からん」

「な……！？」

愕然とするいじめっ子達、唯一勝てるはずの脅しが全く効かない。小学生が高校生に力で勝てるはずもなく、脅しが効かなければどう考えてもいじめっ子達に勝ち目はなくなってしまった。

さらに男は話を続ける。

「確かに高校は分からんけど俺にも分かることがある、それはお前らがいま悪いことをしているということ、次に俺にはお前らの脅しが効かないこと、そして最後はお前らがふくろにしていた子に謝るまでゲンコツし続けられる暇な時間があるということだ」

ニヤリとまるで悪魔のような顔で笑う男にいじめっ子達は全員恐怖した。

|||||

「ごめんなさい」

「俺にじゃねーだろ、コイツに謝れ」

「ごめんなさい」

大和はいじめっ子全員に一発ずつゲンコツをかまし、ふくろにしていた子に対して頭を下げさしていた。

「よし、今日はコレぐらいで勘弁してやる。だがもしまたお前らが今日のようなことをまたしていたら、そのときは今日よりもっと恐ろしい目にあわせてやるからな」

大和がよほど恐ろしかったのだろう、ほとんどのいじめっ子達は首をブンブンと、勢いよくたてに振った。

「じゃあ、帰っていいぞ」

大和がそう言うといじめっ子達は一目散に公園から消えていった。残ったのは虐められていた子と大和のみ。

「本当にありがとうお兄さん」

いじめられていた少年が大和にお礼を言ってきた。

「どういたしまして」

「僕、お礼できるもの何も持ってない……です」

「そんなお礼とかなんて気にすんなって、俺がただ単に見てらんなかっただけだしな」

大和がそういうと男の子の顔が少しだけ明るくなった。

「ところでおまえ、名前は？」

「な……名前は、木原良太」

「木原良太か……いい名前だな。俺はな、大和って言うんだ」

「大和さん？」

「そ、大和。ところで良太、一つきいていいか？」

大和の顔が少しだけ真剣になる。

「な……何を？」

良太は少しだけ怖がりながらきいた。

「そうビクビクすんな、別に変なことを聞くわけじゃない。なあ良太、お前なんでさっきの奴らにいじめられてたんだ？」

「そ、それは……」

良太の顔が険しくなる。

「別に言いたくないなら言わなくてもいいぞ」

「そんなことはない……けど大和さんは、僕の話聞いてもウソだつて言わないですか？」

「うーん、話を聞いてみないことには何とも言えないな、とりあえず話してみな」

「はい。僕は小学校の力別教室で『普通の者』組なんだけど」

「力別教室？ ……ああ！ 俺の時にはなかったけど、今の小学校は、ほとんどそうなんだっけ」

最近では、『異能力』の扱いが小学生程度の年齢ではまだ完璧ではないことがほとんどのため、児童の安全を考え異能力者と普通の者との教室を分けすべての授業を別々に受けさせる力別教室なる授業法を取り入れる小学校が増えていらい。

しかしながら力別教室自体が、児童差別だとして問題視する意見もあるそうだ。

まあ大和から言わせれば、（そんな事する暇があるならもつと別
のことに力でも入れてる）と思うのだが。

「で？ その『普通の者』組で何か問題でもあったのか？」

「問題があったのは僕の方で。昨日、家でカレーライスを食べた
時にスプーンを持って遊んでたら、スプーンが先っぽからグニヤッ
て曲がったのだ。始めは僕も驚いたけど、慣れてくると曲げるのが
楽しくて家にあるのを全部曲げちゃって、そのせいで後でお母さん
にすごく怒られちゃったけど」

良太の話しに大和は矛盾を感じ聞いてみる。

「ん？ だつて良太お前普通の者の組なんたら、異能力者ってこと
隠してたのか？」

「ちがうんだ。僕も今まで『異能力』なんて無かったのに昨日の夜
いきなり使えるようになったんだ。それで嬉しくて給食の時間にそ
の話をしたらたけし君が怒って、力が目覚めるかどうかは生まれて
から五歳ぐらいまでで、十歳の僕に力が目覚めるわけ無いって」

「それで？」

「僕もむかついて、ちょうど給食の時間だったから見せてやるって
言つて、スプーンを曲げようとしたんだけど、なんでか昨日はでき
たのに今日は全然できなくて」

「なるほどね、それでうそつき呼ばわりされていじめられていたと」

「うん……」

良太は頷いた後、目に涙をためながら大和に言う。

「本当にスプーンを曲げたのに……だれも信じてくれないんだ。

大和さんだつて信じてくれないよね」

「え、別に信じるけど」

「え……！？」

「いやいや、なに驚いてんだよ。昨日はできたんだろ？ だつたら

お前は『異能力』に目覚めたんだよ」

当然といった顔で話す大和に、良太は尋ねる。

「うそだつて、疑わないの？」

「俺は人を見る目だけは確かなんでな、お前がうそを付く奴かどうかなんで、すぐに分かるんだよ」

「目覚める歳を五歳も過ぎてるのに？」

「確かに『異能力』が目覚めるのは生まれてきてから五歳程度までって言われているけどな。ごく稀にだが、歳を取ってからある日とつぜん力が目覚める事があるってのも言われてるんだよ」

「今日はスプーンを曲げられなかったのに？」

「さっきお前が言ってたる力別教室って。小学生じゃまだまだ能力を制御できない奴らばかりだからな、しかも良太、お前にいたっては昨日『異能力』が目覚めたばかりだ、うまく制御できないのは当然なんだよ」

「じゃあほんとに信じてくれるの！」

「お前くどいな、信じてほしくないのか？」

「ううん！」

良太はぶるぶると勢いよく首を横に振る。

「ありがとう大和さん。大和さんのおかげで自信を持てたよ」

「そいつは良かったな」

「うん。後は『異能力』をうまく使えるように練習するだけだけど……？」

良太は大和の方を見る

「ん？俺は『普通の者』だからあんまりあてにはならないぞ」

「でも大和さん『異能力』についても詳しくそうだし、お願いします僕の練習に付き合ってください」

「別にそこまで詳しくはないんだけど、まあ良太がそれでいいなら練習につきあってやるよ」

「ありがとう大和さん！」

「もういい。良太お前、今日だけで何回お礼を言う気だ。お礼なんぞ言われなくても、練習は付き合ってる。ただ今日はもう遅いから明日この公園に四時ごろに来い」

「はい！じゃあ大和さんまた明日！」

良太はそう言うのと走って公園から出て行った。

「あー疲れた」

大和は公園のベンチに腰掛けた。

「足パンパンだよまったく、本当に俺ってばお人好しだなー。はあ

……今頃は家で休んでたはずなんだけどなー」

そんな事を思いながらぼーっとしていた大和。

ふと気づき時計を見ると、時計の針はもう六時を回っていた。

辺りは少々暗くなり公園にある電灯がぼつぼつと訪れる闇を恐れるように点き始める。

「やべ……今から家に帰るとなると、九時ぐらいになるか。はあ……」

二度目のため息を吐きながらも、大和は気をとりなおし、駅に向かうためベンチから立ち上がろうとした。その時

「ん！？」

「まじすか！」「殺るの久しぶりじゃないですか」「そしたらその女があばれてよ」「まじばねえっす！」「唐沢さんかっこいい！」

「あの女の顔最高にウケたし」

見るからに馬鹿くさい（大和目線）男女がゾロゾロと公園に入ってくる。

「唐沢さんあいつじゃないですか！？」

その中の一人が大和を見て、なにやらその集まりのボスっぽい奴に耳打ちした。

するとそのボスっぽい奴は自分の携帯を取り出し大和と携帯の画面を交互に見て。笑みを浮かべながら言う。

「くくくく、当たりだ」

すると周りにいた奴らも一斉に笑い始め口々に言う。

「唐沢さんあいつが今日のターゲットですか？」「あはははかわいそー」「あいつマジついてねー」「結構いい男なのに顔、判別不能になっちゃうなんてねー」

疲れている家に早く帰りたい。

よって大和は馬鹿共（大和目線）を無視してとつと駅に向かうことにした。

「ちよつと待てよ」

ボケ共（大和目線）の中の一人に後ろから肩を掴まれた。

「なんかよ　！」

バキッ！　後ろを振り向いた大和の頬に衝撃が走った。

「　ッ！」

衝撃で後ろに下がる大和、どうやら頬を殴られたらしい。

「いきなりなにすんだお前ら、急にパンチなんかしたら危ないだろーが！」

まるで何にも食らってないように大和は叫ぶ。

「ヒュー、カツコイイね、アンタ。鉄のパンチ食らっても余裕で立つてられるなんてよ」

ボスツぽい奴は下品な笑みを浮かべながら拍手する。

そんな男に大和は口元に笑みを浮かべながら返す。

「鉄だかクズだかしらないが、この程度のへぼパンチ、たとえ百発食らったとしても。効きやしねえよ」

「何だとてもえコラ！」

先程大和の頬に自分の拳を当てた鉄と呼ばれる男は激怒して大和に殴りかかる。

「よつと」

その攻撃を大和は軽く受け流し足を掛ける。

すると大和に殴りかかった男は体勢を崩し、頭から地面に突っ込んでいく。

「ぐぼっ！」

「大丈夫かクズ君、なんなら手を貸そうか？」

無様にこけた男に大和は顔に笑みを浮かべながら手を差し出す。

そんな光景を見たアホ共（大和目線）は一斉に笑い始める。

「だっせーな鉄」「あはははチョーつけるんですけど」「まじ笑える」「最高にだっせ」

「写メとれ、写メ」「自分から地面に突っ込んだよマジであほ」

仲間にもでも笑われた男はプルプルと震えだし怒りを露にする。

「誰がクズだ！ 殺す！」

その言葉とともに怒りに任せて大和を殴ろうとした、そのとき。

「鉄やめろ」

ボスつばい男が声を出す。

その声を聞いた途端、大和に殴りかかるうとした男はビクリッと
して動きを止める。

「で……でも唐沢さん」

どうやらボスつばい男の名は唐沢と言うらしい。

「いいからやめろってーの、それとも俺の言うことが聞こえないの
か？」

唐沢が低い声でそう言うと、鉄と呼ばれた男はすぐさま出そうと
していた拳をしまい、唐沢たちのほうへと歩いていく。すると唐沢
が自分の携帯を取り出し大和に見せてきた。

「こいつはお前であってるか」

大和が出された携帯の画面を見るとそこには自分が写っていた。

「なに？ あんたらストーカー？」

「なわけねえーだ　！」

ドカツ！ 大和のボケにつつこんだ鉄と呼ばれる男が唐沢に腹を
蹴られた。

「ごほっ！」

不意に腹を蹴られ、男は地面に屈みこみ腹を抑える。

「お前マジでしゃべんな、話しがすすまねえんだよ」

「す………すみません唐沢さん」

蹴られた奴は腹を抑えながら必死に謝っている。

他の奴らはそんな状況を見ながら大笑いしている。

「つたくよお、次勝手にしゃしゃったら、お前殺すからな。つと悪
いなお兄さん、この画像はアンタで合ってるってことで良いか？」

唐沢はまたもや携帯を、大和に見せてくる。

「確かに俺だな。俺になんか用なの」

「くくつくくくやっぱりアンタだったか、アンタさこの公園で子供の頭を殴つたる」

唐沢は何とも楽しげなそれでいて、怒りの感情を見せる。

それを聞いた大和は何かを思い出したように、口元に笑みを浮かべながら言う。

「なるほど、おまえあの悪がきの兄貴か。うんとか高校の頭をやつてるんだっけか」

「黒金高校の唐沢っつーんだ、覚えときな」

「で？ 俺にどうして欲しい訳？」

「悪いがこんな俺でも弟は可愛くてな、そんな弟がいきなり来た高校生に殴られたんだ、その高校生の腕の骨を一本や二本へし折らねえと気が済まないわけだ」

すると唐沢の取り巻き共も参加する。

「素っ裸にして写真とって町のそこらじゅう歩かせようぜ」「俺の靴なめさせるか」「お前の靴なんかより、そこら辺に落ちてる犬の糞食わせようぜ」

全てが狂った話だが唐沢達はずいぶんと楽しそうな顔をしている。

「あつはつははははははは」突然、大和が腹を抱えて笑い始めた。その状況にクソ共（大和目線）は啞然としている。

「何こいつ恐怖のあまり頭逝っちゃった？」「気持ちわりい」「薬やつてんじゃね？」

すると大和は笑うのを止め。

「まったく男五人、女二人そろって、でてくること何もかもが全部あつたま悪いな」

唐沢たちの笑みが消えた。

「おまえ本気で死にてえのか？」

「死ぬ？ なんで？」

目の前にいる大和のあまりの余裕さに唐沢達はイラつきを覚え始める。

「ふざけてんじゃねーぞてめえ!!」

「いやいや、俺はいつも大真面目だって」

大和の余裕さに唐沢達はイラつき始める。

「殺れ」

唐沢は大和の方にあごを動かす。

するとそれを見た唐沢の取り巻き二人が、大和に殴り掛かった。

「ほい」

ふざけた掛け声とともに、大和は自分の顔を狙った一人目の男の拳を、ヒュルリとしゃがんで避け、その間かんに左手に砂を掴む、そして空いている右手で

「お腹痛そうだなクス君」

一撃を鳩尾に叩き込んだ。

「ぐあっ!」

一人目の男はドシンと言う音を立てながら地面へと倒れこむ。

そしてわざとスキとして作っておいた背後から、近づいてくる馬うま鹿たろめがけて

「ほらよ」

左手に持っていた砂を顔に投げつける。

「くそっ!」

そして砂が目に入り動きの止まった男の顔に大和は渾身の蹴りをかました。

「がはっ!」

蹴りを喰らった二人目の男は後ろに二?ほどぶっ飛んだ。

「まったく……今日は疲れてんだから勘弁してくれよ」

男二人を倒しながら全く息切れもすることなく。面倒くさそうに頭をポリポリと掻く少年に雑魚共（大和目線）は慌てはじめる。

「なんだよこいつ」「ありえねーよ」「浮き足立つ能無し共（大和目線）

「落ち着きやがれお前等!」

突然、唐沢が叫ぶ。その声にビクリとなりながらも、安心したの

か笑い始める唐沢の取り巻き連中。

「お前らは本当に使えねえな結局俺が出張るんじゃねえか」
そう言つと唐沢は手にボールを持つように広げ始める。

ボツ！ 唐沢の手に火が付きはじめた。それを見た取り巻きは歓喜する。

「さすが唐沢さん異能力者の中でも上位の異能力者」 唐沢さん
素敵 「唐沢さんの『異能力』は天下一」

取り巻き達の歓喜とともに唐沢の手に灯る火は次第に大きくなつていく。

「お……おい、あんたその火をどうするつもりだ？」

「どうするつて？ クソ生意気な野郎にぶつけてそいつを消し炭にしてやんだよ！！」

大和が少し焦っているように感じたのか、唐沢は楽しそうに笑いながら手に灯る火を更に大きくさせてゆく。

「消し炭つて！？ お前そんな事したら確実に捕まんぞ」

「いいんだよ、一人ぐらい殺したほうがハクが付くつてもんだ」

唐沢は怒りで我を見失っていた。そして、そのハイなテンションが取り巻き達にも感染していく。

「消し炭。消し炭。消し炭。消し炭。消し炭」

声を合わせ、まるでキャンプファイヤーをしているように楽しそうな唐沢たち。

「ちよつと待ってくれ！」

声のしたほうを見ると大和が先程、腹にパンチを決めて倒した男の意識が戻つたらしく、今の状況を必死に整理し言葉を放つ。

「唐沢さんちよつと待ってくれ。今から俺どくから、そんなでかい炎、確実に俺にも当たつちまいますから ！」

「……無理だわ」

「え？」

「いやなんかお前もうざいし、一緒に死んじまえ」

「何いつてんすか唐沢さん！？ ほら皆も止めてくれ」

男は他の仲間達に懇願する。しかし他の仲間達も「別に死んでもいいんじゃない」「あ、お前いなくても別にいいわ」「唐沢さん早く投げてよ」男の頼みを聞き入れてくれる様子は微塵も感じさせない。「いやだ！ 死にたくねえよ！！」

死の恐怖で男は叫ぶ。ポン、男の肩に手が乗った。「お前ちよつとだまれ」

大和は涼しげに男の叫びを制止すると唐沢達に向かい口を開く。「お前らちよつと狂いすぎなんじゃないか仲間まで一緒に燃やすとか、ちよつとばかりいき過ぎだぞ、まあ人を燃やすって時点で十分いき過ぎだけど」

「うるせえなもうすぐ焼け死ぬ奴はだまってる」

唐沢は手の火を今にも大和たちに放とうとする。

そんな状況でも大和は怯えることなく話す。

「あのねお前ら、その火は確実に人を殺す火だ……そいつを放てば人は死ぬ、分かってんだよな？」

「んなことは分かってるっつーの！」

「ならもう一つ分かるな？ そいつを放てば、お前らは俺に殺されても、文句は何一つ言えねえんだぞ」

「何が言いてえんだか、さっぱわかんねえっつの」

「分かった。最後の忠告だ唐沢、それでもって後ろの取り巻き共、もしその火をお前らが放てば、俺はお前らを完膚なきまでに叩き潰す。それだけは足りない脳味噌に刻んでおけ」

余裕の表情で語る大和。

「俺を潰すだとお！ テメエだけはぜつてえ殺す！！」

唐沢は遂に纏っていた火を大和たちに放った。

「いやだ！ やめてくれ！」

向かってくる大きな火。先程まで唐沢の仲間だった男は力いっぱい叫ぶ。

そんな叫びを聞きながら唐沢達は放った火を楽しそうに見つめる。「助けてくれ！ たすけて……」

恐怖のあまり男は途絶えてしまう。

ブワツ！ 火は猛然と大和達の方へと向かいそして襲う。と思っ
た。

パン！ 乾いた破裂音がした。まるで風船が割れたような音だっ
た。

「へっ??」

唐沢達が一斉に間拔けな声を出す、それもそのはず、先程まであ
った大きな火が一瞬で消えてしまったのだから。

そしてその中に悠々と立つ人影が一つ。

「さてお前ら。覚悟は出来てるんだよな」

第四話 転校二日目、食堂での他愛も無い会話2

六月上旬、雨ばかりの季節に、二日続いての晴れマーク、人々の気持ちも晴れやかに、道行く人の足取りも軽やか。

そんな中、手をブラブラさせながらタラタラと歩く人影が一つ。疲れた。いや、まったくもって疲れた。

大和は学校に向かう道中で早くもだらけていた。

「まだ転校二日目だというのに何故かすごく疲れる」

(疲れがまったくとれてねえ!) 何のために昨日は早く帰ったのか分からなくなってくる大和。

そんな大和の腰をトントンと誰かが叩いた。

「ん?」

『分からない』と言った感情を込め、声を出した大和だったが、肩や背中では無く腰を叩くと言う点ですぐに答えは導き出せた。

大和は後ろを振り向かず言う。

「おはよう。つぼみ」

「アレアレ? 一体全体どうして何で分かったの?」

声とともに大和の横からひょっこりつつぼみが顔を出した。

「その質問には答えなくても分かりそうなものだが……」

「え!? 分からない。教えて、なんでなんで?」

「いや、やつぱりいい。答えるつつぼみが怒りそうだから」

「そう言われると、ものすごく気になるんだけど。ねえ怒らないから言ってみて! 言ってみて!」

「ん……」

ああは言っているが、事実を話せば必ずつぼみは怒るだろう。

(つぼみが怒れば色々面倒くさい事になりそうだ) 昨日の疲労残る大和としては、それだけは避けたい事柄である。

「ねえ怒らないから！ 絶対怒らないから！」

袖をぐいぐいと引つ張つてくるつぼみに、大和が何か良い誤魔化しはないものかと頭を捻っている。

「お前の背がすつごく小さいからすぐに判つたんだよ」

「だれ！」

小さいというキーワードにすぐさま反応したつぼみはグリーンと勢いよく首をまわす。

「よ！ 大和と小さいつぼみおはよう」

そこには手を上に挙げながら大和とつぼみに挨拶する松岡の姿があつた。

「おはよう、松岡」

「おはよ じゃなくてまつまつ！ 小さいから判つたつて、どうゆうこと!？」

つぼみはすぐさま先程の回答の意味を要請する。

「だからなつぼみ、普通うしろからそいつを呼ぶんだつたらこうやつて肩とか背中を叩くもんだ」

そう言いながら松岡は大和の背中と肩を叩いて実践してゆく。

「なのにお前が叩いたのは大和の腰の部分だ、そんなとこ触るのはゲイか背のちいせえガキ位しかいねえ、だから大和は後ろにいたのがお前だつて判つたんだよ」

「お前いま、一部の人に殺されてもおかしくない発言をしたぞ」

大和は松岡の勝手な差別発言に釘を刺す。

「そつだよ、背が小さいのはしょうがないことなんだから、殺されても文句は言えないよ」

「いやそつちじゃない」

「……？」

不思議そうな顔をするつぼみ。

「いや何でもない」

大和は説明するのも面倒くさかつたので話をとぎる。

「……？ あ！ それよりもまつまつ。とつても大事なことから

いっとくけど、私の背は小さくなんかないよ」

「いやいや、お前は小さいって、どう考えても小さい」

「そんな事ないよね、大和っち」

「ああ。人の価値観は色々違うから、一概には何とも言えないしな」

急に降り掛かってきた火の粉を何とか言葉を濁して避ける大和。

何故そんな策を取ったかという。坂道の脇に立ってあるミラーに、後ろから走ってくるある人物の影が見えたからなのだが。

「ほら！ 大和っちだってこう言ってるし」

「いやいや。大和は優しいから濁してやってんの、どう考えてもお前はちいせえってーのこのチービー!!」

「じゃ……じゃあ、どれぐらい背が大きければチビじゃないの？あかちゃん位あればいいの!？」

「朱音？ ああ確かにあいつは女子でも大きいほうだけどそれでも大和や俺に比べればまだまだ全然小さいしな、まあどっちにしろお前は一生、小さいままだろうけど」

松岡は大笑いしながらつぼみを虐めている。するとその時、

「何が小さいままなの？」

「!!!」

松岡が突然の天敵の声に身構える。

「で？ 何が小さいの孝^{たかし}」

古林の様子を見る限りどうやら小さいの意味を勘違いしてるようだ。

「いや違うんだぞ朱音、お前は何か勘違いしてるぞ」

「私がどう勘違いしてるの？」

古林の周りをドス黒いオーラが包み込む。

「いやだからあの小さいって言うのは……」

「あのねあかちゃん、まつまつがね私とあかちゃんのは、男よりも小さいって」

目に涙をためながら訴えるつぼみ。

「ほう。男より小さい、ねえ」

古林のオーラが更に黒さを増してゆく。

「ちよ、ちよっと待て朱音！ つぼみてめえ」

「問答無用！！」

古林が松岡を惨殺してゆく、辺りには工事現場のような音が響き渡る。

音が止むとそこには、松岡だった物だけが残った。

「さあいこ。つぼみ、朝倉君」

古林の後を付いてゆく二人。

「おいつぼみ。いくらなんでもさっきのは酷くないか、お前わざと古林が間違うように言っただろ」

「そんな事無いよ、私はちゃんと説明したよ。ただ少し省いただけで」

その少し省いた結果が坂道に散る肉塊を生んだ訳なのだが。

「だけどな」

「それにね大和っち。背の小さいことはしょうがない事なんだから、そのことをバカにする人は殺されても文句は言えないんだよ」

それは、それは綺麗な笑顔で語るつぼみに対し、脳内禁止ワードの頂点に『小さい』を真っ先に組み込む大和だった。

|||||

授業をして、授業をして、

学校に来てまだ二日、まあ今までの学校とそんなに大差のない生活をしている大和。

「へえ、大和っちは王都の外から来たんだ」

今日も大和は弁当なのだがつぼみ達に誘われ食堂に来ている。

「生まれたときはこっちに住んでただけど、テロ事件でこっちに居られなくなつてな」

「そうなんだ。ねえ朝倉君、王都の外つてどんな感じなの!？」

古林が興味津々と言つた感じで聞いてくる。

先程から大和たちの話している王都とは、『王制』である式本の国王が住む首都の事である。しかしながら今の王都は、国王の住まう式本の首都というだけではなく、別の目的がある。

「王都の外と王都はかなり違うぞ、まず科学力が違うな。王都の外じゃ一家に一台、家事ロボットなんていないし、自動販売機が勝手に動き回つたりもしない、それに電車がどっかの遊園地のアトラクションみたいになんか絶対になつてない!」

「そ……そうなんだ」

大和の最後の言葉に込められた謎の威圧感に古林は少し気圧された。

「……? というか古林は王都から外に出た事ないのか?」

「私もそうだし、つぼみも王都から出られないんだよね」

「出られないつてなんで?」

「私とつぼみが異能力者だから」

「そうか、異能力者なのか。じゃあしょうがないな……ん?」

式本では、ある異能力者達が起こしたテロ事件によって異能力者すべてを憎み襲う者達が現れ始めた。その為、政府は異能力者を守るといふ名目で式本中の異能力者を王都の中で保護する事になったのである。(まあ実際は保護というよりかは、式本にとって力になり。また、害にもなる者達を管理するためなのだ)

その為、王都の周りにはとてつもなく大きな塀が立ち並び、入るには専用の飛行船を使わなければ入れず。また、異能力者は余程の理由が無い限り王都から出る事はできないとされている。

「ちよつと待て! 古林とつぼみつて異能力者なの!？」

「あれ? 大和っちに、まだ言つてなかつたっけ?」

「ぜんぜん聞いてないぞ、そうか二人とも異能力者だったのか。で、二人はどんな能力を持つてんの？」

「チツチツチツ。大和、お前は何も分かっちゃいねえ。こいつ等の能力なんてあってもなくても同じ、まったく意味のねえ能力なんだか　フゴツ！」

古林のパンチが松岡の顔にメリ込む。

「確かにそうかもしれないけど、アンタに言われるとむっっしょうに腹が立つ！」

「松岡……お前いきなり出てきて殴られようとするとか……もしかして殴られるのが好きなのか？」

「んなわけねえだろ！　誰がこんな貧乳ブスに殴られて喜ぶか！！

……………あ

松岡は自分の失言に気が付いたようだが、時すでに遅し。

振り上げられた古林のかかとはまっすぐに松岡の頭上に降り注ぐ。

「松岡^{アイツ}つてさ、一日に五回は古林から攻撃を受けないと死んじやうのかね」

「いやたぶん、十回以上じゃないかな」

二日目にしてこの状況に慣れてしまった大和は、周りからの恐怖の視線に『俺らは、関係ないですよ』オーラを出しつつ、つぼみと会話を続ける。

「でさ、つぼみはどんな能力を持つてんの？」

「わたし？　わたしの能力はね。これ！」

そう言っつてつぼみを取り出したのは、綺麗な立方体で点模様が付いている、

「サイコロ？」

「そう、サイコロ！」

つぼみはそう言いながら手に持ったサイコロを机にポイツと放り投げる。

コロココロン、

机に放り投げられたサイコロは転がってゆく。

「――！」

つぼみが突然、サイコロに命令しているように声を出した。するとサイコロは、その命令を聞き入れたように赤い点を上に向けピタリと止まった。

「どうということだ？」

大和が頭を捻ると、つぼみは何故か少し威張り顔をする。

「私の能力はね、確率を操る能力なんだ！」

「確率を操る能力！？ それってものすごく便利だろ」

「うん。大和っちが思ってるほどたいした能力じゃないよ。普通に使うにも色んな制約が尽いちやうし、サイコロ程度だったらいけど、もっと確率が低いのかなんかはまず当たらないんだ。だからお正月に家族でやるようなボードゲームのルーレットさえ、思い通りの数字にすることは出来ないしね」

つぼみは申し訳なさそうに話した。

「そんなバツが悪そうに話さなくてもいいだろ、俺はつぼみの異能力が欲しくて今こーやって一緒に飯食ってるわけじゃないしな」

大和の言葉を聞いたつぼみは申し訳なさそうな顔を笑顔に変え、

「んふふー、そうだね。ありがと大和っち」

上機嫌に笑うつぼみは、嬉しそうにテーブルの上に置いてあるラUNCHに手を付け始める。

「お前……もしかして源内のオヤジと同じ系統なのか？」

「黙れドM」

何時の間にか、松岡が大和の隣に座っていた。

「つぼみはそう簡単には渡さないよ朝倉君」

古林はつぼみの隣に座り。スープを飲んでいるつぼみの頭を撫でながら、空いているもう片方の手を大和の前に出しストップをかける。

「古林まで、なに言ってんだか」

「だってよ。ちょっと俺らが目を離れた隙に、この辺の空気がピンク色になってた気がしたんだがねえ」

と言いながら。松岡は古林と先程までの喧嘩など無かったかのよう
うにニタニタと不愉快な笑みを大和に向けてくる。

「お前らの眼、腐ってるだろ？ まったく、んな分けねえっつーの、
なあつぼみ」

「え？ 何が!？」

つぼみは先程の大和の言葉で元気を取り戻しもぐもぐとランチに
付いているパンを頬張っている。

もちろん話など聞いちゃいない。

「そうだ！ みんな知ってる!？」

今までの話をすべてブツた切ってくるつぼみ。

だが、大和としても今の話の流れは嫌なので、つぼみのブツた切
りに乗ることにした。

「知ってるって、何をだ？」

「いやいや、そんな事よりもだな……」

「なになに、つぼみ！」

松岡は先程の流れに戻そうとしたが、古林はつぼみの話に簡単に
乗りがえる。

まあ、つぼみがそれほど大切と言う事なのだろうか。

あれ？ 古林の方が怪しくないか？ と思うのだがせつかく話が
変わったのにまた蒸し返す必要は無いと思い、口には出さない大和
である。

「あのね、黒金高校のリーダーの人が喧嘩で負けちゃったらしいよ
「なんだと!！」

松岡がものすごい勢いでつぼみの話に食いつく。

「その話、本当なんだろうなつぼみ!」

「本当だよ。ちゃんとした情報だからこうしてみんなに教えてるん
じゃないかあ」

「まじでか！ 黒金高校の頭トクつて言えば、灼熱地獄の唐沢だぞ!」

松岡は息を荒げながら言う。

「なにそれ？ 用は不良が喧嘩で負けたってことでしょ」

そんな松岡を見た古林は若干ひきながら冷静に話す。

「ばか！ お前そんなもんじゃねえんだって、灼熱地獄の唐沢って言えばこころ辺の不良共を束ねてるボスだぞ！」

「あのよお、松岡。さつきから気になるんだけど、唐沢ってのは人の名前だとして、その灼熱地獄ってなんだよ」

「大和お前そんなのもしらねえのかよ、灼熱地獄ってのは唐沢の通り名だよ通り名」

松岡は更に息を荒げながら語りまくる。

「それでな唐沢って奴は異能力者アブノーマルでな、その能力ってのが火を自由自在に使える能力なんだよ、唐沢はその能力を使って高校一年ながらに不良共の巣窟である黒金高校の頭になったんだ。そして、黒金高校だけじゃなくその周辺の不良共をも、纏め上げたまあこの辺の不良共の頂点に立つ奴だそんな奴がやられたんだぞ！ きつと唐沢をやった奴はもっとすげえ異能力ちからを持ってんだろうな！」

「ああ……そう」

大和も松岡の興奮状態にひいている。

「ホントにまつまつは、異能力者のことになると目の色が変わるね」
つぼみは何とも残念そうに呟く。

「いいじゃねえか別に目の色変えたって。こんな世の中に異能力者という大きな刺激があるんだからよ」

松岡はなんとも幸せそうに力説する。

「異能力者って言えばあの連続切り裂き魔ジル・ザ・リップパーってまだ捕まってないよね」

古林が松岡の力説を無視して話を変える。

「うん、まだ捕まって無いみたいだね」

古林に合わせてつぼみも話を別の方向へと切り替えた。

「なんだ連続切り裂き魔って？ 随分物々しい名前だな」

大和は会話の中で聞きなれない単語があったので古林に聞いてみた。

「そっか朝倉君は王都こうちに来たばかりだから知らないか、いま連続切

り裂き魔って言う連続殺人犯がこの近辺に出没しててね、もう六人が被害にあってるの」

「マジか。しかも近辺って、それは大丈夫なのか」

「その辺は大丈夫、この近辺と言ったって襲われた人達はみんな深夜に廃墟ゴーストタウンの近くでフラついてた人達ばつからしいから」

「廃墟？ また怖そうな単語が出てきたな」

「そっか廃墟のことも分かるはずないか、え〜っと廃墟って言うのはね」と古林が説明しようとする。

「おいお前ら！」

松岡が息を荒げながら会話に割り込んできた。

「なあに？」

自分の話が欠き消されたためか、古林の口調に怒りというアクセントが混ざっているのが解る。

「そんな話し切られたからってイラついてる場合じゃねえよ。コレ見てみる」

珍しく怒り状態の古林を怖がらない松岡は指をさす。

大和が隣に座る松岡の指の先を辿っていくとそこには、空中に浮いている状態で映像だけが映し出されていた。

よく見ると浮いている映像の下の机に切れ目があり、そこから映像を立体で映し出しているようだ。

このテレビの映像だけが浮いている技術、王都では当たり前のことなのだが、つい最近に王都にきたばかりの田舎者やまこからすれば、腰を抜かすほど『未来の道具』といった感じで、もう王都に来てから何度か見ているものの、ついはいしゃぎたくなってしまう。

「えっと、このニュースがどうしたの？」

そんな未来の道具が当たり前前の王都出身者こほやこは映像の内容なかみを気にしている。

「いいから聞いてみるって」

松岡はそういうと浮いている映像にタッチし始める。

すると松岡のタッチした所から色々な項目が出てきた。本体も机

の中に収納されているしリモコンも無いのにどうやってチャンネル等を変えるのかと思いきや、どうやら直接映像にタッチして変えるらしい。

（おー、未来！）大和が新たな未来を発見し、家に帰ったらリモコンでなく映像に触れてやってみよう、なんて考えていると。

「あつたあつた、拡散モードっ」と

プツンツ、大和の耳に変な音が鳴り響いた後、うつすらと声が聞こえてきた。

そこでようやくすっかりと映像の内容を見る大和。

どうやら病院の前でマイクを持ったリポーターらしき人が話をしている。

『……今日未明、王都西地区で起きていた連続切り裂き殺害事件の犯人が逮捕されたとの情報が我々の元に届きました。この情報を提供してくれた少年は犯人が逮捕された現場に立ち合わせていたとことで、いま我々はその少年が入院している病院前にいます』

「……！！」

リポーターの話を聞くや否や古林とつぼみの顔つきが変わった。

一方、大和は、先程までまったく知らなかった連続切り裂き魔の事なのであまり興味なさそうだ。

『少年は連続切り裂き魔に襲われているところを警察に保護されその後、事件による怪我のため救急車によってこの病院に運ばれたとのことですが、目立った外傷も無く現在は意識もしっかりとしているとのことです。後ほど少年が我々の取材に応じてくれるとのことなので詳しいお話しはその時にお聞きしたいと思います』

リポーターが話し終わると、そのままニュース番組は終わってしまったようで、番組名を出した後、『最新歴史博物館オープン』と、コマーシャルへと切り替わってしまった。

「あーすごいわねー」

「ほんとだすごい」

とてつもない棒読みでニュースの感想を語るつぼみと古林。

「何だお前らそのただだ下がりのテンション！ あの連続切り裂き魔ジル・ザ・リップパーが捕まっただぞすごい大ニュースだろーが」

古林達の冷め切った空気に対して納得がいかないと、松岡は講義する。

「いや確かにさっきのニュースが本当だったなら私達ももうちよつとは盛り上がったわよ、だけど『嘘か真』よ」ファイファイファイ

がっかりしたようにため息をつきながら古林はやる気のなさそうに空中に浮く映像に触れてテレビの電源を切る。

「『嘘か真』ってなんだ？」

そんなに興味が無かったのでほとんど話を聞いていなかった大和だが聞きなれない言葉にはかなり敏感のようで、古林と同様、残念そうな顔をしているつぼみに聞きなれない言葉が何を指すのか聞いてみた。

「えつと『嘘か真』って言うのは、今やってたニュース番組のことでね、この番組のニュースってまったく信憑性が無いものばかりなんだよ。王都の地下にドラゴンが住んでるだとか、武本政府が世界諸国の政府と共同で秘密特殊部隊を作ったとか、異能力者の異能ちか力が効かない人間がいるとかね」

つぼみはオーバーに首を振りながらやれやれと話す。だがそのわりには随分と色んなゴシップネタが、すらすらと出て来たことを大和はあえてつっこまなかった。

「半分半分なんて番組名だけど、確率にしたら一%でも本当の事を言ってたらマシな方で、ニュース番組というよりは、お昼の暇な主婦達に送るゴシップバラエティ番組って感じかな」

「つぼみの話を聞いた大和は少し考えながら口を開く。
「……じゃあさっきやってた連続切り裂き魔の逮捕ってニュースも嘘の可能性が高いつてことなのかな？」

「嘘の可能性というか間違いないく嘘でしょうね」

大和の答えに古林はピシヤリと答える。そして呆れたように大きく息を吐きながら話を続ける。

「こんなクソ番組のニュースなんか信じたって、まったく良いことなんて無いわ。時間の無駄よ、時間の無駄」

（世の中には色んなテレビ番組があるもんだ）と大和が少しばかり感心していると、一人だけ明らかに文句を言いたげな男が一人。

「おいおい随分な言い草だなお前ら、たかが信憑性が無いってだけなのによお」

「その信憑性が無いってだけでもう十分だめなのよ」

古林の言葉にうんうんとつぼみも頷く。

「はぁー、お前らはまったく分かってねえ、分かってねえよ。いいかお前ら異能力者がこの世に現れてからもう二〇何年になるけど、その前までは異能力者なんてもんはおとぎ話にしか出てこなっかつたもんだ」

松岡は鼻息荒く、目に見て分かるほど興奮して立ち上がった。

「それが今やどうだ！ この世界には普通じゃ考えられないような異能力が当たり前のようになりふれてるじゃないか！」

松岡の演説は続いていく

「つまり！ 俺が言いたいのはこの世にはまだまだ不思議なことが溢れているってことだ。分かるかお前ら！！」

恐ろしく目の色を輝かせながらまるでどこぞの教主様のように語る松岡に対し食堂中の視線がものすごく痛い大和達。

「あ、大和うち今日は放課後に学校見学するよね」

つぼみが松岡の話を流す。

「その後はバレー部の見学していくよね」

古林も流す。

「あ！……悪いけど今日も放課後に用事ができちまって、無理そうだわ」

大和も当然ながら……。

「お前ら俺のことを無視すんな」

松岡の悲痛な叫び

「えー、今日も無理なら明日とあさっては土日で休みだから、月曜

日になっちゃうよ」

「ホントにわりい、月曜日はちゃんと空けとくから許してくれ」
頭を下げながら大和は申し訳なさそうに言った。

「ぶーぶー」

「ちよつとお前ら本当に」

「つぼみ、無理いったらダメだよ、朝倉君も引越してきたばかりで大変なんだしさ」

引越とは関係なく、学校案内の約束などすっかり忘れていて、別に約束をしてしまった。なんて口が裂けてもいえない朝倉大和。

「俺のこと無視すんなって。本当にお願います、許して、もう目の色変えて話したりしませんから。願います！」

こうして昼休みは過ぎてゆく。

第五話 懇願します（おねがいます）

「こうかな？」

「もうちょっと力を抜いたほうがいいんじゃないか？」

「どう？」

「そうそうリラックスした状態から一気にいく感じじゃないのか」

「すーはーすーはーふー」

張り詰める緊張感。

日は赤く落ちかけている、どこかでクラスがカーカーと日が落ちるのを悲しんで泣いている気がするのは考えすぎだろうか。

そんな中、小学生と高校生がなにやら公園で何かしている。

高校生はベンチに座りながら、小学生になにか指示を出している。小学生のほうは高校生に言われた事をうんうんと頷きながら手に持っている何かに力を込める。

「曲がれー!!」

手に持っているのはスプーンのようなようだ。

「んぐ！ うぐぐー!!」

スプーンはピクリとも動いていない。

「はぁ、はぁ。ぜんぜん動かない、やっぱり僕には力なんて無いのかな大和さん」

「うーん……まあ、別に今日までに出来ないといけないわけじゃないし、あんまり気にしないほうがいいぞ良太」

（とは言ってみたものの、やっぱり異能力者のアブノーマル異能力のちからの使い方についてはさっぱり分からん。こんな事なら、つぼみか古林に事情を話して手伝ってもらったほうが良かったか）

と、大和が考え事をしていると。

「ん？」

目の前に立つ少年がボーっとしている事に気が付いた。

「おい良太どうした？」

「え！」

大和の言葉で我に返った良太は頭を下げ始める。

「ごめんなさいボーっとして」

「いや別にそんな事で謝らなくてもいいんだけど、どうした急に？」

「いやあそこの女の人……」

良太は公園の外にある道路の方へと指をさす。

「？」

大和は良太の指さす方へ目を向ける

（別におかしなところはないんだが………ん？ アレってもしかすると）

大和の目線の先には、黒き絹糸のような髪をきらめかせ、スラリと伸びた手足にまるで人形のように綺麗な顔立ち。ながらも弱さを感じさせないまっすぐ凛とした瞳。

そんな美少女が歩いていていた。

「綺麗だなあの人……」

「そうだなー」

嫌な思い出がある少女のことなので、気のないセリフを吐く大和。

「な……なんで大和さんそんなに興味ないの？」

「そんなことないぜ」

「明らかに興味ない！」

大和の興味のなさを不思議に思った良太は考える。すると、大和の着ている制服と綺麗な女の人の着ている制服が似ている事に気が付いた。

「大和さんの服とあの綺麗な人の着ている服が似てるけど、もしかして同じ学校の人？」

「よく分かったな良太。そうなんだよあの人、俺の高校じゃあ結構有名らしくてな色々事件をおこして……！」

大和は頭の上に豆電球が閃いたような顔をした。

「どうしたの大和さん？」

「いいこと思いついた!!!」

そう言うと大和は走り出した。

良太はそんな大和を唾然とした表情で見送った。

|| || || || || || || || || ||

大和は公園を飛び出し美少女の目の前に出る。

「え〜っと、天宮……さんだよな」

「……………」

ジロリ、天宮と呼ばれた美少女は大和を訝しげに見つめる。

そんな吸い込まれそうな瞳に晒されている大和は少々怖気づく。

「あのおですね、俺の名前は朝倉大和と言いましてですね、昨日さくじつに
転校してきました、あなたの隣に座っているんですけど知ってます
か？」

少々どころではなく完全に怖気づき、わけのわからない敬語？

を使う大和に対し、

「……………知っている」

天宮は表情一つ変えずに言葉をポツリと呟く。

「おお！ 知ってるなら話が早い、実は折り入って頼みたい事がある
んだけど」

実際、（あんなに無視されたのだから自分のことを知らないと言
われたらどうしよう）と内心ドキドキしていた大和だが知っている
との言葉に安心し、大和の言葉には妙な敬語がなくなった。

「……………」

大和の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、天宮は無言
のままスタスタと歩き始め、大和の横を通りすぎてしまう。

「ちよっ！ ちよっと待ってくれ!!!」

とっさに大和は自分の横を通り過ぎて行ってしまった、天宮の肩
を掴む。

「話だけでも聞いてく……れ？」

視界が回ったかと思つた直後、大和の背中に衝撃が襲う。

「ぶッ！！」

大和が、自分は投げられたのだと気がついたのは背中への衝撃が痛みに変わり始めたときだった。

「な……何すんだアンタ！ 肩を掴んだ位でブン投げることはないだろ」

ズキズキする自分の腰をさすりながら、大和はいきなりの背負い投げに抗議する。

その抗議も空しく天宮はスタスタと何事もなかったかのごとく歩いてゆく。

「また無視か！ 少しは話を聞いてくれって」

天宮の歩みが止まる事はない。

「お前の異能力者としての知識を、貸して欲しいんだよ！」

大和は頭を下げる。

「頼む！ 礼なら可能な限りするから」

ピタリ、天宮が歩みを止め、大和の方へと振り返る。

「きみ、いま何て言った」

「はい？」

先程まで完全に大和を無視していた天宮からの突然の問いに、大和は驚きながらもチャンスとばかりに問いに答える。

「どんな事ができるかは分からないけど、しっかりと礼はさせて貰います」

「その前」

天宮の言っている事がさっぱり分からない大和だが、せつかく止まってくれた天宮チャンスを無下には絶対にしたくないので必死に思い出す。

「……天宮さんだよな？」

「そんなところまで戻らなくていい『礼なら可能な限りする』のやつ前だ」

「え？ お前の異能力者としての知識を貸して欲しい、だったっけ

？」

大和のその言葉を聞いた途端、天宮の顔つきが変わる。

「きみはなぜ、私を異能力者だと思った」

「なんでと言われても……昨日、俺が伊集院を怒らせて机を投げつけられたとき風を使って助けてくれただろ」

「……！！」

天宮の驚きかたに大和は一抹の不安を感じ、聞いてみる。

「もしかして、異能力者だっていうのを内緒にしたのか？」

「……」

大和の言葉で考え込んだ天宮は静かに、殺気のある声で一言告げる。

「……なぜ、あの風を吹かせたのが私だと分かった」

「そ……その質問には答えてもいいが、なんで！ そんな物騒な気配を垂れ流しているのか説明を求む」

天宮の周りの空気が冷たく恐ろしいものになっている

かなりとんでもない地雷を踏んでしまったと、話しかけたことを後悔し始めている大和に天宮はゆっくりとした平淡な声で話しかける。

「別に物騒な気配など垂れ流してなどいない、ただ事と場合によっては、きみを始末しなくてはいけなくなるだけだ」

「し　始末だって！」

少し風でぶっ飛ばされるのかな、ほどにしか思っていなかった大和は自分の予想をはるかに超える天宮の回答により、大和は抗議の声をだす。

「ちょ　ちょっと待て天宮、いや天宮さん。何であんたが異能力者だと知っただけで俺が始末されなきゃいけないんだ。いくらなんでも納得がいかないぞ！」

「問答無用」

ブワッ！！　今までまったく吹いてもいなかった風が、まるで大和と天宮を包む用に吹き荒れる。

この現象は間違はなく天宮が巻き起こしているということは明白ならばと大和は声を大にして天宮に説得を試みる。

「ま　待てつて、事と場合によるんだろ、なら俺が始末されない場合を示せよ！　俺のことを始末するんだとしたらそれからだろ！」

天宮は少し考えた後、

「……………それもそうだ」

風が止まった。先程までの荒れ具合がウソのように。

大和は胸を撫で下ろす、そして同時に（この子ちよつと抜けてる気がする）なんて思っていた。

「フー、とりあえずは風を止めてくれてありがとう。で、俺は何をすれば始末されずに済むんだ」

どんな無理難題を言われるかと大和が緊張して言うと、

「私が異能力者だということ絶対を絶対に他者に漏らすな」

「え、そんなことだけでいいのか？」

あまりに簡単な事なので大和は他に何かあるのではと怪しむ。

「そんなことではない！　これはとても重要なことだ！！」

「そ……………そうですか」

突然の天宮の剣幕に押されたじろぐ大和だがよく考えてみると先程の天宮の言葉を守れないことが分かる。

「あー！」

突然の叫びに天宮は不思議そうに大和を見つめている。

「えつと天宮ものすごく悪いんだが、天宮が異能力者だって言うことを一人にだけ話していいか？」

「……………」

（あ、この沈黙はやばい）

大和の予想は見事的中する。

ブワツ！　先程と同様に風が吹き荒れる。さっきと違う所と言えばその風が天宮の前で大きな玉となって収束しているという所か。

（こっちはまずい）大和の焦りもピークに達す。

「天宮まずいったん落ち着いてくれ、ちゃんとした訳があるんだよ」
大和は事情を説明し天宮に懇願した。

公園にいる子供に力の使い方を教えて欲しいということ、その為にその子供だけには天宮が異能力者と伝えたいということ。

その答えは、

「無理だ」

(ですよねー)

きっぱりと告げた天宮は更に淡々と話を続ける。

「だいたい私が異能力者だということを誰にも知られたく無いのに、それを知らせ尚且つ何の必要も義理もない子供に力の使い方を教えるなんて、ありえない」

(まったくその通りだと思います)

なんとなく、ではなく確実に大和側に非がありまくる。

だが大和もそんな事で「はい分かりました」と、簡単に引き下がるわけにもいかない。

「頼む天宮！」

「無理だ」

「そこを何とか」

「いやだ」

「お願いします」

「だから無理だといってるだろう」

大和のあまりのしつこさに天宮に少しだけだがイラつきが見える。
「もういい私は帰らせてもらう、君も私じゃない違う人を探した方が早い」

そう言うつと天宮は振り返り駅の方へと歩いていく。

グイッ、袖を誰かが引つ張ってくる。

いちいち振り返らなくても分かる事だ、天宮はそのまま歩いていくとする。

「わー歩いてかないでくれ、頼む少しだけでいい良太にヒントだけでもいいか」

ドンッ！

鈍い音とともに大和の腹部に衝撃が走る、その衝撃凄まじく大和はそのまま吹き飛ばされ壁に衝突した。

「グッ！」

壁にぶつかった大和は崩れ落ちる。

「悪いけど、君と話していると日が暮れそうだから、まあ急ぎとというわけじゃないけれど私にだって用事があるので」

天宮は振り向きもせずはその言葉を残して歩いていこうとする。
グイツ、何者かが天宮の袖を引いた。

「な！」

天宮は驚きを隠せず後ろを振り向いた。

するとそこには、お腹の辺りを押さえたまま、顔を痛みに引きつらせている少年が立っていた。

「いたたた、頼む天宮……急ぎじゃないなら良太にちょっとだけでいいから……力の使い方を教えてやってくれないか」

「……」

ポンッ、天宮が何も喋らず大和のお腹を軽く叩く。

「………は！ いてえー！、何すんだ、この鬼！ 悪魔！」

大和は叩かれたお腹を押さえ屈みながら天宮の顔見て叫ぶ。

そんな大和を見て、天宮は不思議そうに聞く。

「きみは私の攻撃をどうやって避けた、確かに当たった感触はしたんだが」

「当たってるって、ものすごく痛いつて」

「そんな安い演技を、信じるという方が無理な話した」

「や……安い演技。いくらなんでもそんな言い方をしなくても」

大和はすくりと立ち上がった。先程までの引きつった顔と違い、まったく痛みを感じさせない立ち上がり方だ。

「いいから、どうやって君は私の攻撃を避けたんだ」

「安い演技か……練習しようかな……」

体のダメージはそんなになさそうだが、心に重大なダメージを受

けたらしい。

「安いえん

は！ あぶないあぶない、え〜つと何だっけ？」

「どうやって私の攻撃を避けたのかという話だ」

「ああ、あれはただ単に衝撃をずらして分散させただけ、まあちよつぴりは痛いけど少なくとも直撃するよりは全然マシ、だからこうしてぴんぴんしてるというわけだ」

「確かに原理は分かるが、そんなこと一介の高校生が出来るはずがない」

「まあこう見えてもかなり喧嘩とかしてきてるからな」

「それもウソだ、たかが高校生の喧嘩程度でそんな動きが出来るようになるはずが無い、それこそ何処かで特別な訓練を受けたりしない限りは……」

「特別な訓練で……ってそんな事を話してるんじゃないでな。天宮まじで頼む、あの公園にいる子供に力の使い方を教えてあげてくれ！」

大和は本日何度目かの分からないほどした頭を下げる行為をもう一度行う。

天宮はそんな大和を見て一言

「きみは何故あの子供のためにそこまでする、先程の話ではまだあの子とあって一日しか経ってないのだから？ わざわざ痛い思いをしてまで手を貸す理由が判らないのだが」

「う〜ん……そんなたいそうな理由なんてないな。ただ体が勝手に動いちゃうんだよね」

大和は笑いながら言う。

「体が勝手に動く……」

「そう、つまりはそういうことだ」

何処かおちやらけている様でその目はいたって真剣な大和、そんな大和を見た天宮は、

「……ふふっははははははは」

笑い始めた。

「ふふふつ、か……体が勝手にふふつ、動くなんて、そんなこと言う人が、ほ……他にもいるなんて」

お腹を抱えながら大笑いし始めた天宮を（何故？）といった表情で見つめる大和。

ひとしきり笑い終わると天宮は大和のことを凜とした瞳で見ると

「ふふつ、きみは随分と変わっているな。いいだろうきみの頼み、聞くでしょう」

「本当か！！ いやー助かる、そうと決まれば早速、良太に教えてやってくれ」

大和は天宮を公園へと案内する。

公園の奥では良太が必死にスプーンを曲げようとしていた。が大和に気づいた直後、いや正確に言えば大和の隣に天宮がいることに気づいた直後にカツチコチに緊張し始めたのがよく分かった。

そんな良太のところへと向かう途中天宮が大和に質問する。

「ところで、きのう教室で風を吹かせて君を助けた人物がなぜ私だと分かったんだ」

大和は遠くで緊張している良太を見て、人選ミスったか？ なんて思いながら、天宮の質問に答える。

「んー、カンかな」

|||||

日もすっかり落ち暗くなつた夜道を歩く男女が一つ。

「ほんとに助かった、やっぱりアブノーマル異能力者はアブノーマル異能力者が教えるに限るな」

点々と明かりの灯る電灯の下を通り、駅まで歩いてゆく男女、王

都でも割と田舎のほうの西地区だが大通りを歩いてゆけば電灯のいらぬほど明るい、だがなぜかこの男女は大通り裏の暗い道を歩いていた。

「そうだろうか、あまり助けになつたような気は一切しないのだが」少年は納得したような笑みを浮かべているが、少女の方はなんとなく納得のいかない顔をしているのがわかる。

「そんなことはないだろ。実際に天宮が力の使い方を教えてあげたおかげで、良太のやつ十回に一回はスプーンを曲げられるようになったしな」

「その程度ではまったく意味がない気がするのだが」

「いやいや、ゼロじゃないとわかつただけで意味はあつただろ。良太も自分に力があるってわかつて嬉しそつだつたし、意味はちゃんとあつた……助かつたよ」

「そうか……」

少しだけ照れくさそうに嬉しそつに微笑む天宮。

その横顔に不覚にもドキリとしてしまった大和は、必死に頭の中にある煩惱を振り払い、あまり天宮の横顔を意識をしないよう視線を上げながら話す。

「それよりも天宮、いいのか明日も練習に付き合うなんて良太と約束しちまつて、明日は休日だぞ」

「別に大丈夫だ、明日は特に用事は入っていないしな」

天宮のそんな話を聞いているうちに大和は疑問に思ったことを口にした。

「なあ天宮一つ聞いてもいいか」

「なにか？」

「こうして話してみて思ったんだが何で天宮は学校でだと、誰とも話そつとしないんだ」

「……」

嫌な沈黙、六月だというのに夜の風がサラリと冷たくなされる。

「悪いな嫌なこと聞いちまつて」

「別にきみが謝ることじゃない。ただあの少年の練習は明日には終わる、そしたらきみ達は、もう二度と私に近づくな」

「は？」

「そういうことだから……な」

それだけ言うと彼女は後ろを向き、駅とは反対方向へと歩いていく、

「ん？ ドコ行くんだ？」

「用事があるといっただろう」

大和は天宮の方へと振り返るが、天宮は大和を見向きもせず歩いて行き、ただでさえ薄暗い裏道の更に奥の道へと天宮は姿を消してしまった。

「やっぱりさっきの質問が不味かったのか」

と、反省しながら家へと帰宅するため大和は薄暗い裏道を駅まで歩き始める。

駅までの近道とはいえ、この裏道を選んだのは失敗な気がする。

「二度と近づくな……か」

拒絶の言葉が何故か悲しそうに聞こえたのが大和の耳にひっかかる。

「……………まあ、明日になれば機嫌も直るだろう」

あまり深く考えてもしょうがないと大和は薄暗い道を駅の方へと歩いて行く。

|||||

天宮は大和と別れてから、大通りの裏道から更に奥の道へ入っていった。先程まで歩いてきた薄暗い道よりも更に暗くぼつぼつと申

し訳程度に電灯からの光が差し込むような道であった。

そんな、女子高生が一人で歩くにはあまりにも不釣合いなところを天宮は黙々と進んで行く、だがその歩き方には一定の目的地がなく右に左にと、ただ同じ道をウロウロしているように見える。

パツ！ 天宮の前に突然、明かりが灯る。するとそこには大人が九人ほど乗れそうな、黒のワゴン車がおいてあり天宮にライトを照らしていた。

だが天宮は急な灯りに驚くことも無く車の助手席のドアノブに手を伸ばすと扉を開け車の中に乗り込んだ。

車の中は色々と手が加えられており座席は助手席と運転席そしてその後ろに一つ計三つだけしかなく、他の座席はすべて取り払われ、代わりにコンピュータや法律上問題になりそうな武器が飾られている。天宮は車に乗り込むと同時に少し不満げに口を開く。

「なにも作戦用の車を持つてこなくてもよかつたのでは？」

「久しぶりに会って最初の言葉が車のことだなんてショックだなあ、だいたいコレはしょうがないんだよ本部にコレしか置いてなかったんだから」

運転席に座る男は掛けていたサングラスをはずして車に乗り込んできた天宮を笑顔で迎える。

「久しぶりに会ったなんて言ってますが、おととい隊長にお会いしたばかりですよ」

「酷い！ おとといって一日あいだが空いてるってことだよ、それつてすつごい久しぶりだよ、めっちゃくちゃ久しぶりだよ、まったくこの気持ち分からないだなんておじさん傷ついちゃうなあ」

全身黒のスーツを身に纏い、無精ひげを生やした四〇代程度の男は右手と左手の人差し指をツンツンと突きながらため息を吐く。

「隊長、訳のわからないことでいちいち溜め息を吐いていると、婚期が更に遅れることになりますよ」

天宮の棘のあるツツコミが無視して男は話を続ける。

「それにしてもさあおじさん知らなかつたよ、遙ちゃんに彼氏がい

るってこと」

「　　な！」

男の突然の爆弾言葉に天宮は絶句する。

「まったく遙ちゃんおじさんには友達なんか要らないなんて言うだけど、しつかり青春してるんだね。おじさん安心したよ」

ニヤニヤと嬉しそうに遙ちゃんの青春を微笑む男。

「何か大きく勘違いなさってますね、彼は別に私の彼氏などではありません。少し頼まれごとをしたので、手伝っていただけです」

「おや、そうだったのか、だけどそれにしたって遙ちゃんが頼まれごとにオツケーするってことも珍しいねえ」

「彼が隊長と同じことを言っていたので、気になって彼の頼みごとを了解したんです」

「おじさんと同じこと？」

男は不思議そうに天宮の顔を見つめる

「隊長が、『助けたい人がいると理屈や理由抜きで体が勝手に動いてしまう』と、いつも言ってるじゃないですか。そしたら彼もまた、『体が勝手に動いてしまう』と、そう言ったんです」

天宮は嬉しそうに語る、そんな姿を見ていると彼女は容姿が綺麗なだけの普通の高校生に見える。だがそれを言うと彼女はえらく気に入って、静かにそして冷たい目になってしまふので男はあえて口には出さなかった。

「ふ〜んそうか、そんなことを言う奴が他にもいるのか……」

男は何処か遠くの景色を眺めるように呟くように話す。

「また昔のチームの人と関係があるようですね」

「！……良くわかったね」

「わかりますよ、かみなり神成さ　いや隊長が昔のチームの話をするときは、必ずその何処を眺めているのかもわからない目になりますから」
「今は任務中じゃないから神成でいいよ」

神成と名乗った男は少し口元に笑みを浮かべながら話を続ける。

「そうかおじさんそんな目をするのか……遙ちゃんに話したかどう

か覚えていないんだけれども、あの言葉はね、おじさんが言い始めたんじゃないで、昔の仲間がよく言っていたのを、おじさんが真似して言ってるだけなんだよ」

神成は懐かしそうに目を細めながら語る、そんな男の話を子供が昔話を聞くように、天宮も少し楽しそうに聞いている。

「遙ちゃんにも良く話すだろ、胸に黒き石の埋まるバカな男のことだよ」

「あの異能力がまったたく聞かないという人のことですか」

「そうだよ。そいつがね、よく言ってたんだよ。助けたい人がいるならごちゃごちゃ考える必要はない、体が勝手に動いちまうもんだってね」

車内の空気がふと止まった気がした。

神成は昔の仲間の話をすると必ず笑みがこぼれる、それを見るだけでよほど大切な仲間だったのだろうと何も知らない天宮でも容易にわかることができる。

「おっとこんな中年男の昔話を聞いてもらうためにわざわざ遙ちゃんを呼んだわけじゃない、そろそろ本題に入ろうかな」

「お願いします」

天宮の顔から表情がフツと消え一切の感情を隠した。それはまさにこの仕事にはうつつけのスキルなのだろうが、神成としては、もう少し女の子らしくなってもいいのではないかと思う。

「じゃあ話を始めるよ。まずおととい遙ちゃんに捕まえてもらった坂下真理子、こいつも違かった」

「え!？」

天宮が驚くのも無理はない、『また』違ったのだ。

「最近の切り裂き魔事件、逮捕者の数は四人だけどその四人ともつい最近までは異能力者じゃあなかった人達ばかりで、逮捕後数日^{ノーマル}でその力を失い死ぬ。その事から何者かが何らかの方法で普通^{ノーマル}の者を一時的に異能力者^{アブノーマル}にし、事件を引き起こしているのだとわかったから逮捕した者たちの身辺調査を行った、そしたら加害者すべて

が坂下真理子とつながりがあつたと分かり、遙ちゃんを逮捕に向かわせた……とこまでは良かったんだけど、その坂下もつい先程取調室で息をひきとっちゃったんだよ」

「！」
天宮は信じられないといった顔をしている、だが確かに今思えば彼女の言動の中には不可思議な箇所が多々あつた。

むしろ彼女が今回の事件の黒幕で会つたほうが不自然なところが多々あつたはずだ。

「それで隊長、私はどうすればいいのですか」

「実はね、坂下の家を探索したときにおもしろいチケットが手に入つたんだ」

そう言つと神成は右ポケットから何やら長方形の紙を取り出し天宮の前にかざす。

天宮は目の前に出されたチケットを読む

「歴史……博物館？」

「そう式本歴史博物館のチケットの半券、坂下以外にも他の四人の逮捕者のうち二人が同じようにこの半券を持つてたんだ。どう？明日にでも行つて見たいとは思わないかい」

神成はニヤリと笑い、チケットを差し出す。三枚も

「？ 隊長、行くのは構わないんですがなんでチケットが二枚じゃなくて三枚もあるんですか？」

「ああ、おじさんは明日、上から呼ばれてて本部に行かなくちゃいけないんだごめんね」

「ならそれこそ、なんで三枚もあるんですか」

「遙ちゃんでしょ、ここまで一緒に歩いてきた彼、それにちから異能力の使い方を教えてあげた男の子、ちゃんと三人だろ」

「な！」

神成の言っている意味がわからず固まる天宮の肩を叩きながら神成はなんとも楽しそうに天宮に話す。

「いやー、遙ちゃんだけだと心配だったからね、今日たまたま友達

が出来て本当に良かったよ」

神成の言葉にやっと思考が追いついた天宮は

「な……何を言ってるんですか！ 一般人を危険に晒すかもしれないところに連れて行くなんて!？」

「まあまあ、今回の事件の黒幕は相当頭のいい奴だ、それにおじさんたちのことを良く知っている。遙ちゃんは単独行動だと無茶するから、本当は結奈ちゃんで行かそうと思ったんだけど、上からストゥプされちゃってね。だから今回はあの二人と一緒に行って貰おうと思ってね、二人がいたら遙ちゃんも無茶しないでしょ」

ナイスアイデアといわんばかりの満面の笑みを放つ神成、そんな神成を見て不満しかでてこない天宮であるが一つおかしな点に気づく。

「だからって！ ……ん？ 隊長、なんで私が子供に異能力の扱い方を教えていたことを知っているんですか」

天宮はまさかと思い神成に聞いてみる。

「ん、そりゃもちろんおじさんが遙ちゃんの登下校をチェックしてたからだよ」

あっけらかんとまるで当たり前のように答える神成に天宮は啞然とする。

そんな天宮を余所^{よそ}にして神成は更に話を続ける。

「それでね遙ちゃん、能力を使うときは自分の格好に注意したほうがいいよ、遙ちゃんが彼氏を吹き飛ばしたとき思いつきりパンツ見えてたからね」

天宮から何かがブチ切れた音がした。

「へーそうですか、わざわざ、ご忠告ありがとうございます」
にっこりと笑顔の天宮。

普段ならばその容姿からでる笑みは美しく声を出すのも忘れてしまっただけなのだが、今回はそうならない、理由はいたって単純、天宮の笑顔の後ろに黒いオーラが充満しているからだ。

「え？ ちょっと待って遙ちゃんそんな怒ったらおじさん泣いちゃ

うなーなんて

ドンッ！

大きな音とともに黒いワゴンがぐらぐらと揺れた。

第五話 懇願します（おねがいします）（後書き）

拙い文がいつも以上に長くてすみませんでした。

第六話 スプーン曲げ

「ふああ、ねみーな」

大和は歩いていった。

なんだから最近こんなことばかり言ってるな、と思いつつもやはり普段の生活態度のお陰なのか、口から出る言葉はやる気の無いものばかり。

せつかくの休日に、なぜ大和が学校に行くときの駅で降り、学校までの道のりを歩いていくのかというと、ある子供とある約束をってしまったことに尽きる。

「まあ私服だから平日のときよりはいくらかマシか」

そんな事を呟きながらも、明らかに平日のときよりめんどくさそうに歩いている大和。

するとようやく遠くに公園が見えてきた、(二〇分前に着いたんださすがに誰もいないだろうし、どうやって時間を潰そうかな)なんて考えていた大和は公園で見た光景に目を見張る。

そこには少女が立っていた、そしてその隣には子供が一人立っており、隣に立つ少女から何かを教わっている。

「おいおい、あいつらどんだけやる気たっぷりなんだよ……というか何で天宮は休日まで制服なんだよ、しかも学生鞆まで持ってやがる」

公園の真ん中ほどに立つ二人。

「いいか手の先のここにだけ集中しろ、いま私が触っているここにだけだ」

少女の方は表情を変えず子供に文字通り手取り足取り何かを教えている。

「は……はい」

子供の方は少女に手を取られれば取られるほど固まり、動きが人

間っばくなくなっていく。

公園の隣の道路を歩く人たちは、公園の中で行われている謎の特訓？ をちらちらと覗いていく。尚そのすべての視線が天宮の方向にだけ向いているのは無理もない。

黒く真珠のようにつやのある髪に細くスラリと伸びた手足、そのうえ顔のパーツ一つ一つが周りを掠めてしまうほど整われており、そのパーツも絶妙に均整の取れた場所に配置されている。街行く人々にあの人は綺麗ですかと尋ねれば百人に百人が綺麗だと答えるだろう。

そんな美少女あまみやが公園の真ん中に立ち、一人の子供の手に触れ何かを教えているのだ、公園の前を通る人から見れば気にもなる光景だろう、もしくは子供が羨ましいと思う者もいるかもしれない。

そして大和は公園の入口の影から思う。

(コレ俺いなくてもいいんじゃないのか)

もう帰ろうかな、と大和が思っている。

天宮がこちらに気づき声を掛けてきた。

「きみ！ なぜ公園の入口の影からチラチラとこちらを覗いている、早くこちらに来てくれ、どうやら彼は私のことが苦手のようにだ。きみがいないとどうも緊張している」

そう真剣に語る天宮に

(あいつ……自分の身体的特徴を理解してないのか)

そんなことを思いながら大和は良太を見下ろす、良太はというと天宮が大和に気づき自分の手から天宮の手が離れたのを、良かったと思う反面、残念だと思つところもあるようで複雑な顔をしていた。そんな良太に悪戯心を刺激された大和は面白半分に良太をからかうことにしてみる。

「良太、顔すんごい赤いぞ」

「……!!!」

大和の少し意地悪な言葉を聞き、良太は更に顔を赤くした。

「本当だ、熱でもあるのか？」

(……昨日のことでなんとなく気が付いていたが天宮あいつかなりの天然だ)

そんな大和の考えはお構いなしに、天然あまみやは良太に熱があるのではないかと心配しているようで、良太のおでこに手の平をピタリとくつつける。

(そんなことやったら確実に熱が上がるだろう)

大和の思った通り、良太は更に自分の体温を上げ、手をおでこに当てていた天然あまみやがすごく熱いと心配で声を上げる。

そんな天宮に良太は大丈夫だと訴えている。

面白いのでこのまま眺めていようかとも考えた大和だが、このままでは天宮が本格的に心配し今日の特訓が中止になる恐れまで出てきたので割って入ることにした。

「天宮、そんなに心配しなくても大丈夫って言ってるんだから、大丈夫だよ」

「きみは黙っていてくれ」

一蹴された。

かなり精神ダメージを食らった大和だが何とか踏ん張り天宮と良太の間にもう一度、割って入る。

「いいから天宮、とりあえずいったん離れろ」

そう言って大和は天宮と良太の肩を持ち二人を引き離れた。

天宮は頭に？を浮かべているし、良太は小声でありがとう大和さんと言うが、その言葉がどこか残念そうなのは気のせいではないのだろう。

「良太もただ単に集中して疲れたただけだよ、とりあえずベンチに座って休んでろ、何かジュース買って来てやるから」

大和は公園に置いてある自動販売機にお金を入れ適当なジュースを三本買った。

そして、良太と天宮の座るベンチの前へと戻り、待っていた二人に一本ずつジュースを投げ込む、

「どんなのがいいか解らなかったから適当なのにしたけど、良いよ

なそれで」

大和からスポーツ飲料貰い、お礼を言いながら美味しそうに飲む良太。

天宮の方はジュース代を渡そうとしてくるので大和は別に要らな
いと断るのだが、それは出来ないと言宮が引き下がってくるので、
大和は別にの話へと切り替えることにした。

「ところで良太、特訓の方は順調に進んでいるのか？」

「うん！ 天宮さんのおかげでスプーンは二回に一回は、曲がるよ
うになってきたよ」

そういうと良太はポケットからスプーンを取り出し右手に持つと
大和の目の前に持つてきて深呼吸をし始める。

そしてある程度、深呼吸を重ねた後、

「ふっ」

小さく息を吐く。すると良太の持っていたスプーンが触れてもい
ない先の方からスライムのようにグニヤリと曲がり始めた。

「おお！ 成功する確率が上がったただじゃなく、スプーンの曲が
り具合もかなり曲がるようになったな」

「それもこれも全部天宮さんのおかげだよ」

大和の褒め言葉を聞き、なんとも嬉しそうに微笑む良太。

「まだ二回に一回できた程度でそんなに喜んではいけない、異能力
者マルが異能力ちからを使えるのは当たり前のことだ。大事なのは異能力ちからを自
分の思ったとおりに操れるかどうか、その点から言えばまだスター
トラインにも立っていない」

随分と手厳しいことを言い放つ天宮だが、その言葉には不思議と
棘がない気がする。

それは天宮自身が、内心では良太の出来具合に満足しているから
ではないだろうか。

しかし、そんなことはまだ判るはずもない小学生の男の子こは天宮
の言葉を真に受けてシユンとしてしまう。

「そうですね、まだ二回に一回できるだけだもんね。はあ」

深いため息をつく良太。

「い……いや、まだ異能力者になってから少ししか経っていないんだ、使えるだけでもすごいことだぞ。私が言ったのは……だな、あくまでこれから先、異能力者としての心得を言っただけでだな……」
自分の言葉でシュンとしてしまった良太を、元氣付けようと動揺しながらもフォローしようとする天宮、そんな光景を見ていると自然と笑みがこぼれくる大和だった。

|||||

「切り裂く？」

一人の女が不思議そうに物騒な言葉を口にする。

「そう！ 切り裂くんだよ人を！！」

男は喜びに満ち溢れた笑顔でありえないことを口にする。

「きみは人を切ったことがあるかい、あれは最高だ！！ 想像してごらん。恐ろしく震え上がり助けてと死にたくない絶望に染められた顔を、そしてその顔が頭ごとズルリと、まるで滑るように落ちる様を、そして滑り落ちた先にある最高の血飛沫フィナーレを！！」

「はい」

男の話聞き光悦の表情を浮かべながら頷く女。

「いい子だ……きみも『異能力』を手に入れたと思うかい？」

女の頬に手を当てながら男はまるで暗示を掛けるように呟く。

「『異能力』を……手に入れたいです」

「なら、今日から僕はきみの主だ。これからは主である僕の言うことをすべて聞いてくれるね」

「はい」

「くつくつく。きみは本当にいい子だ」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべる男は足元に置いてあるアタッシユケースからピンをだし、そこから謎の錠剤を二つほど取り出した。そして男は話を続ける。

「さあコレを飲みなさい、コレを飲めばきみの望む最高の『異能力』が手に入る」

「はい、ご主人様」

女の表情は依然として光悦を崩さない、まるで何かに操られているかのようである。

だがそれは違った、女は自ら望んでここに立っていた、自ら望んで男をご主人様と呼んでいた、そして自ら望んで男から渡された謎の錠剤を飲み込む。

まるでおいしいお菓子でも食べているかのように錠剤を飲み込んだ女は嬉しそうに自らの主に口を開く。

「ご主人様、飲み終わりました」

「くははは。これできみにも『異能力』が手に入った。きみは今までの不良品やっぴらと違い、とても優秀そうだ。きみには色々と働いてもらうよ」

「ありがとうございます。ご主人様」

男は目の前にいる女に満足する。

自分の自由に動かせる女に満足する。

そして自分の邪魔をする奴らを思い浮かべる。

「いいかい、この世には絶対の悪が存在する。今から僕がその悪を教えよう、もしきみがその悪を見つけたのなら真っ先に殺せ！」

「……」

「なに、僕たちは正しいことをしているんだ。生きとし生ける者が食事をするように、僕たちには切るといふことが必要なんだ！ ……

…それを邪魔する奴は殺すしかない」

「わかりました。その悪の名は何と言うのですか」

女は生きるため主の邪魔をする者を排除すると心に決めた。

「ん、その名はな」

男はありつたけの憎しみをこめてそいつが死に逝く様を想像して、言葉を放つ。

『烈風の破壊者』
プラスチック

狂った笑いが巻き起こる、異常な景色がそこにはあった。

|| || || || || || || || || || ||

「ぬううううふんごお」

大和は指先に力を込めた、先程から何度直そうと思っても直らないこいつを直す為に。

「のおおおおふあああ！」

大和は込めた、更に指先に力を

「きみ、すこし五月蠅い」

怒られた。

「いやいや天宮。これまじで硬いぞ、それにさっきからベルトコンベアの商品の如く流れ作業をやってるせいで、だんだん指に力が入らなくなってきたんだ、声でも出してやらないと本当に無理だ」

大和は右手に持つスプーンを目の前のベンチにこんこん叩きつける、そのスプーンをよく見るとスプーンの先がグリーンと真横に曲がっていた。

「たしかに大変な作業だとは思いますが、何か手伝えることをさしてくれと言ったのはきみじゃないか」

「うぐつ。たしかにそうは言っただけだな」

大和は先程までのことを思い出す。

良太は一生懸命にスプーンを曲げるように努力していた。

天宮はそんな良太に異能力者ならではの異能力の使い方のコツを懇切丁寧に教えていた。

大和はと言うと、ベンチに座っていた……ただただ座っていた。あまりにも暇だったので砂場で御山おやまを作っていたら、「遊ばないでよ」と良太に怒られた。なので良太の横で良太を応援することにした。すると静かな方が集中し易いからと天宮に注意された。

あまりにもすることがなかったので大和はベンチで寝っ転がることにした。

ベンチで寝っ転がっていたら、お昼になりお腹がすいたので適当にコンビニに寄ってパンとジュースを何個か買って良太と天宮に配って回った。すると天宮が先程のお礼だと言ってパンとジュース代を奢ってくれた（自分の分はしっかりと出したが）

それから大和は、またもすることが無くなったので、ベンチに座り良太と天宮の特訓風景をただ眺めていた。

そんなあまりのつまらなさに、気づけば大和は天宮に半泣き状態で何でもいから仕事をくれと頼んでいた。

その仕事内容は良太が曲げたスプーンを逆に曲げて元に戻すというもの、もちろん大和にはスプーンを曲げる異能力ちからなどないので単純に手の力で戻さなければならぬ。

その上、良太がうまくなるに連れ一本のスプーンを曲げる早さも上がっていき、失敗する回数も減っていった。

そうすると必然的にみんなが持ち寄った曲がっていないスプーンの数も足りなくなってくる。正直、天宮が鞆たもといっぱい持ってきたスプーンを見て、どんな家だよとか、こんなに使わないだろ、なんて思っていた自分を殴り飛ばしたい。

いま天宮の鞆の中には、たくさんスプーンが詰め込まれている……曲がった状態で。

「きみ、もうスプーンが残り少ないんだなるべく急いでくれると助かる」

簡単に言ってくれる天宮、しかし今の天和には綺麗で端正な天宮

の顔が般若にしか見えなかった。

そんな地獄の作業を続け精も根も尽き果てた大和、ふと気が付くと空が赤くなりつつあるのに気が付く。

「おれ……いつまでスプーンを治し続けなければいいんだろ」

大和はぼそり呟き手に持つスプーンに力を入れる。目の前では良太と天宮がいまだにスプーン曲げを行っている。

昼食の休み時間を入れているとはいえかれこれ五時間近くあややつてスプーンを曲げ続けている。そして大和もかれこれ三時間ぶつ通しでスプーンを逆に曲げ続けている。

「もし今、スプーン曲げ世界大会があつたら俺が絶対優勝する自信がある」

大和が疲労で訳のわからないことを言ったその時、向こうから天宮が大和の方へと歩いて来る。

また曲がつたスプーンを補充させに来るのだろう、大和は自分の心が折れる音を聞いた。

「きみ、もうスプーンを元に戻さなくていいぞ」

「は？」

何故だろう？ いま天使の言葉を聞いた気がする

「い……いま、なんとおっしゃいましたか？」

「ん？ スプーンを直さなくていいと言っただが」

（神様ありがとう、百個直しても一円にもならない内職を終わらせてくれてありがとう！ わたくしめは今日一日だけ神様を信じる事にします）

大和は下を向きガッツポーズをしながらプルプル震えている。

そんな大和を天宮の後から来た良太が奇異の目で見ている。

「大和さんどうしたの？」

「苦節三時間、我ようやく自由を手に入れたり！」

「うわ！」

急に立ち上がり、魂の叫びを放つ大和に良太は唾然とする。

「きみ、そんな大きな声を出したら近所迷惑だろう」

そんな中でも天宮は冷静でまったく顔を崩さない、まるでこういつた奇行に慣れているかのようだ。

そんな温度差の違いをまじまじと見せ付けられた大和は妙に恥ずかしくなり、突き上げた手をススッと音も立てずに体の横へと下ろす。

「えーっと……もうスプーンを直さなくていいってことは、今日はこれで終わりってことでいいの？」

とにかく恥ずかしいので話を切り替えるとにかく急いで切り替える。

「今日じゃなく、もう終わりだ」

「え……どうということだ？」

「どうゆうことも何もない、言葉通り今日で私の特訓は終わりだ」

天宮の話に驚いたのは大和だけではなく、良太も驚きかなり動揺して天宮に聞く。

「え？ まだ僕、全然なんもできてないよ!？」

「いや、もう異能力ちからを充分に使っている。そこから先、異能力の扱い方を私が教えることは出来ない」

天宮はきつぱりと切れ味のいい言葉で良太を切り離す。

「なんでだ？ 別に扱い方も教えてやればいいじゃないか」

「それは出来ない、良太かれの異能力は私とはだいぶ系統が異なる。本来、異能力者アブノーマルの異能力というのはとても繊細なもので、とてつもない集中力を使うんだ。それこそ人の手を使って針の穴に糸を通す物なのに加え異能力者によって針の穴の大きさや糸の種類まで違う。そう簡単においそれと教えられるものではないんだ」

「……そういえばおっさんも昔、そんなこと言ってたな」

大和は昔を懐かしむように遠い目で呟く。

「おっさん？」

不意に大和の言葉から出てきた人物が気になり、聞き返す天宮。

「あゝ、こつちの話だから気にすんな」

笑いながら気にするなと手を横に振った大和は、自分の言葉です

れてしまった話を軌道修正する。

「まあ、今の天宮の話しから考えて、しょうがないよな良太」

「う……うん。教えられないんだったらしょうがないよね……」

そんな場の空気ですらに天宮が少し動揺している。

「ま、まあ。二日で異能力を使えるようになっただけで上出来の方だ。………そうだきみ達！ 博物館に ……いやなんでもない」

天宮が急に話し始めたと思ったら、話の終わりを濁してしまう。
「博物館がどうした？」

「……………」

天宮はとてつもなく難しい顔をする、先程まであった動揺の表情もスッと消え、何も感じさせない、感じる事を許さない無表情へと変わる。

大和は天宮に始めて教室で話しかけたことを思い出した。

「おい急にどうしたんだ天宮？」

「さっきも言ったとおり、コレで私の役目は終わりだ。きみは昨日の私の話を覚えているか？」

天宮は無表情のまま大和へと問う。

「昨日の話？」

「そう、私の役目は終わった、だからきみ達は二度と私に近づくな」
冷たい声でピシヤリと言うと、天宮は感情を一切消した冷たい眼をしながら、地面に置いてあった学生靴を持ち、大和達に背を向けて公園の出口の方へと歩いて行ってしまふ。

「お、おい天宮」

大和が止める間もなく天宮は公園から出て行ってしまった。

あまりの急展開に大和と良太は付いていけずポカーンと馬鹿みたいに口を空けていた。

|||||

一人の少女が駅の方へと向かって歩いていく。その姿はおもわず息を呑んでしまうほど綺麗で、少女の周りだけがまるで違う世界のように輝いて見えた。

その少女を見た男達は間違いなく二度見するし、女達は目を離さず次元の違う少女に羨望の眼差しを向けているだろう。

だがそんな絵本から飛び出してきたような美少女の心中は荒れていた。

（私は大バカ者だ）

天宮は酷い自己嫌悪に陥っていた。その理由はいたって簡単、先程まで一緒に居た少年と男の子、その二人と仲良くなっていったからだ。

（神成さんにあれほど言ったのにも関わらず、彼らを博物館に一瞬とは言え、誘おうとしたなんて。本当にバカだ！　忘れたのか、私は……自分が死神だということを……）

「本当に大バカ者だ……わたしは」

彼らは私のことを怒っているのだろうか？

まあそんなの考えなくてもわかる、確かにあれ以上は同じ異能力者^{マルチ}としても教えることがないのは事実だったとはいえ、あんなに強制的に特訓を終了し、拳句には一方的に関係を切り立ち去ってきたしまったのだ。

怒っているに決まっている。

だがそれでいいのだ、自分と親しくなった人間はみんな死ぬ、家族も友人もペットさえも自分と親しくなったばかりに死んでしまっただではないか。

あれで善かったのだ。あれしか選択肢は無かったのだ。私は当然のことをしたのだ。

何を仲良くなるうとしていたのだ。何を楽しいなどと思っていたのだ。

そんなこと……私には思う資格も無いのに。
だが良かった、結果的に私は彼らを守ったのだ、救ったのだ。私
という死神から。

だが何故だろう？ 彼らを救ったはずなのに、守ったはずなの
に、私の心には暗闇しかない。彼らを危険に晒していたときはあ
んなに明るかったのに。

今はとつても暗い、真つ暗で寂しい。

「そんなことよりも任務をこなそう」

思っではいけない感情を消すため少女は任務へと頭を集中させる。
自分が殺してしまった者達へ報いるためにも。

|| || || || || || || || || || ||

良太は公園でがつくりと肩を落としていた。

そんな良太の横で大和は良太を慰めている。

「はあー。きつと僕の覚えが悪いから、天宮さんを怒らせちゃった
んだ……はあ」

深い深いため息をつく良太に大和が肩をポンツと叩いて笑顔を見
せる。

「大丈夫だつて良太。たしかに異能力の制御の仕方は似たような異
能力の人でも難しいって聞いたことあるし、お前のせいじゃないつ
て。だからあんまり気にすんなよ」

「で……でも」

「ほんとに気にすんな！ 天宮には今度の月曜に俺が話しとくから、
それに当初の目的だったスプーン曲げはほとんど完璧にできるよう
になったんだろ？」

「そうだけど……痛あー！」

下に俯いている良太のおでこにパチンとでこピンがクリーンヒッ

トする。

「じゃあいいじゃねえか、いちいちそんなに暗くなっただって何にも解決しねえよ」

大和はでこピンを放った右手をそのまま良太の頭へと持つていきグシャグシャに撫でる。

「うわ！ や……やめてよ大和さん」

言葉では拒絶しながらも何処か嬉しそうな良太、その顔には笑みが浮かぶ。

「よし！ だいぶ元気そうになってきたな。いいか良太、これで特訓は終わりだ。ならば後は何をしなくちゃいけないかわかるな？」

頭に手を置いたまま大和は語る。

大和の言いたいことは良太もわかった、だが今の実力で大丈夫だろうかと、良太の心に不安が募る。

「まーたそんな顔しやがって、大丈夫だって。もうスプーンは曲げられるようになったんだからよ」

「う……うん」

「はあ、まったく気にしすぎなんだよ良太は」

どうしたもんかと、大和が考えていると公園の入口の方へ小学生ぐらいの子供が六人ほど歩いてくるのが見えた。

その小学生たちには見覚えがある。

(コレは丁度いい！)

大和はニヤリと、ろくでも無いことを考えているのが丸出しの笑みを浮かべ、公園の入口でこちらに気づき何やら話し合っている少年に向かって声を出す。

「お前らー！ ちょっとこっちに来い！！」

ビクッ！！ 大和に声を掛けられた少年達は、かなり驚いた（びびった）状態で体がカチコチになっている。

大和が急に大声を出したので横に居た良太は驚いたがそれ以上に驚いたことは、大和が大声を出して声を掛けた相手だ。それはこの前、自分を虐めてきたクラスメイト達だった。

「大和さん！」

良太は大和の考えが読めたのだが同時に今の自分には無理だという考えしか浮かんでこなかった。そんな良太の言葉を聞き大和は一向に困ったり考えたりする様子も無く何とも楽しそうな顔をしている。

「いいから良太。自分を信じてみる、……ほら！ お前ら早くこっちに来て」

公園の入口に溜まる少年達は話し合いの結果、逃げても無駄だと悟ったのか、ある者は渋々、またある者はビクビクしながら大和達の方へと歩いてきた。

そして大和達の目の前まで歩いてきて開口一番少年達のリーダーが大和に言う。

「なんだよ、また俺達のこと叱る気かよ」

言葉は随分生意気だが、やはりこの間の叱りが聞いているのだろうが少年達のリーダーは何処か不安げだ。

「別に叱る気はねえよ、ただ今日はお前たちに頼みごとが有ってな」
「た……頼みごと？」

少年達は恐る恐る大和に聞いてみる。

「別にヤバイことさせるわけじゃないから安心しろ。実はなコイツのスプーン曲げをもう一度見て欲しいんだ」

大和が話した後、ポカンと間があり

「あーはっはははははっははっは！！」

少年達は大笑いし始めた。

良太はその光景を見て俯いてしまう。

「見もしないで笑うとは！ お前らはほんとに小物だよな。小学生なんだつたらその類たぐいのことは食いついて面白がれよ、そんなんだから虐めなんていう気色悪いことが平然と出来ちまうんだよ」

大和のその言葉を聞いても少年達は笑うのをやめない。

「まさかあんた、本気でそいつが言ったこと信じてるの！？ そいつは普通の者イモルだぜ。スプーンなんか曲げられるわけ無いだろ」

少年達のリーダーは笑いながら良太の顔を指差す。

「うそつき小僧が出たぞー!!!」

その言葉と同時に少年達は更にドツと笑い始める。

そんな笑いが充満する中、大和は大きな声で言う。

「よし！　じゃあこうしよう今から良太がスプーン曲げをする。もし出来たならお前らは良太にしっかりと謝ってもう二度といじめなんて馬鹿をしないこと。で、もし良太がスプーン曲げが出来なかったら、俺がお前らの言うことを一つだけ聞いてやる」

大和のその話に少年達だけじゃなく良太までもが驚く。

「大和さん、だめだよそんな約束しちゃ」

良太の気持ちは驚きから不安へと変わっていったが、少年達はやめた！　と驚きから喜びに変わっていく。

「その話本当だろうな」

「いじめっこリーダーお前の名前は？」

「唐沢剛だ」

不意に名前を聞いてきた大和に少年達のリーダーは自分の名前を教えた。

「俺の名前は朝倉大和、自分の名前を出したからには一言はない」

大和は楽しそうに笑いながらきっぱりと言った。

少年達は大和の言葉を聞き一箇所に集まって何やら話している。どうやら自分達の勝利を確信して、大和に何をさせるかを話し合っているようだ。

良太は天宮と練習していたときの気持ちや感情に持っていくことが出来なかった。

異能力ちからと言うものは、とても繊細で使うのが難しいものそんな天宮の言葉が良太の頭の中を駆け巡る。

そんな一人だけこの世の終わりのような顔をして立っている良太を、大和は肩をたたき笑い飛ばす。

「なにそんな終わった顔してんだよ、まだ始まってもしねえんだぞ」
「だって……できないよ」

「いいか良太大事な話だ良く聞け」

大和の顔が見たことも無いほど真剣な顔つきになる。

「う……うん」

そんな大和の真剣な顔つきを見た良太は耳を広げ大和の言葉を聞くようにする。

「いいか良太、男はな……ピンチの時には笑うもんだ」

「ピンチなんじゃないか!!」

良太は大和にツツコミを入れる。

良太は真剣に聞いた自分がバカらしくなり口元には笑みがこぼれる。

「どうだ、少しは落ち着いただろ?」

大和は良太を見ながらニヤリと笑う。

(本当だ)

良太の緊張は解け、先程までの負の感情が和らいでいく気がした。何故だろう? 大和さんは居るだけで、話すだけで、何処か人をホッとさせる。

程よく緊張が解けた良太は、先程まで絶対に出来そうに無かったスプーン曲げがなんとなく出来そうな気がした。

そんな良太の変化を感じ取った大和は話し合いをする少年にお使いを頼んだ。

自分達の持っているスプーンでは怪しいだろうからと、大和は少年達にお金を渡した、すると少年達のリーダーの剛が一人に命令してスプーンを買わせに行かした。

「さて始めるか」

スプーンを買いに行った子が帰ってきたので、大和は始めようとする。

一人がスプーンを買いに言ってる間に大和への罰ゲームは決まっています。アイス全員に買うということだ。

もしそんなことが起きれば、大和の経済状況がアイスのように冷たくなってしまふ、大和からすれば是が非でも良太には勝って欲し

いところだ。

剛を中心とした少年達は良太がズルをしないように三六〇度ぐるりと取り囲む。

「うーそつき、うーそつき、うーそつき」

小学生らしい大人げのないコールが公園に響く。

「すうーはあー」

そんなコールをたいして気にせずに、良太は深呼吸を繰り返す。

そして大和をチラリと見ると笑みを浮かべた。

（やったれ良太、天宮が隣にいた時に比べればその程度、屁でもないだろう）

第七話 式本歴史博物館

「どうしてこうなったんだろう」

結果から言えば良太は全員の前で完璧にスプーンをグニヤリと曲げ、大和のお財布冷凍大惨事は無かったものの、大和は未曾有の危機に陥っていた。

「ここは一体どこなんだ？」

大和は広い広い館内に取り残されていた。

《ファンファンファン》

場内で警報が鳴っている。

『只今館内で火災が発生しました。館内におりますお客様は速やかに非難してください、繰り返しします只今館内で火災が』

（はてさてどうしたものか）

話は数時間前に遡る。

|| || || || || || || || || || || ||

良太がスプーンを曲げたことにより虐めていた奴らは良太に平謝りで、良太も全員を許していた。剛とか言っいじめっ子達のリーダーだけがまだ認めていないと怒っていたが、昨日帰ってこなかったと言う兄から色々ちからと話を聞けば少しは丸くなるだろう。

その後、良太の異能力ちからを使って子供達が遊び始めたので大和は場の空気を読み、帰ろうとした、だが良太に呼び止められ一緒に帰ってくれと言われた。

良太の家が駅の近くにあり、帰る方向が一緒だと言うことで特に断る理由も無く大和は良太を家まで送って行くことにした。

「いいのか良太、みんなと遊んでなくて」

「大丈夫、明日遊ぶ約束したから」

良太はなんとも楽しそうな笑顔で大和に話した。

その後、何ともたわいの無い話を続けてもう少しで駅に着く所で良太が大和に質問してきた。

「大和さんこのあと暇？」

「暇っちゃ暇だけど、どうした」

「本当は天宮さんにも誘いたかったんだけど」

そう言うのと良太はチケットを取り出した。

「忒本……歴史博物館？」

「いまコマースャルなんかでかなり宣伝してるけど」

「おれ王都にきたばかりだからな、けどどっかで見ただことあるような気もしなくも無いな。それでその博物館に行こうってこと」

「うん。このチケット今日で期限切れちゃうんだって、だからお母さんが行けたら一緒に行って貰いなさいって、ダメですか」

「いや別に俺はいいけど、良太は博物館なんかに行って楽しめるのか」

「大丈夫！ 大丈夫！ 僕、博物館とか大好きなんです！！」

よほど好きなのか随分興奮している良太に大和は少し押されながらも笑って答える。

「んじゃ行つて見るか」

大和と良太は駅から一〇分ほど歩いて、この間オープンしたばかりらしい忒本歴史博物館まで来た。

この博物館なかなか広く、歴史と言っても忒本にいた生態系からある年に起きた事件まで、本当に忒本の歴史すべてを語っている博物館で色んなギミックもあり、大和が考えていた博物館とは随分異なる博物館である。

そのためかお客さんも歴史などと言う重苦しい題材のわりに家族連れが多く、子供も楽しそうにはしゃいでいる。それは大和ともに来た子供も例外ではない。

「うわー、大和さん見て！ 忒本に昔住んでいたとされる忒本才才

カミの複製だつて、すごいですねー昔の忒本にはこんなカツコイ動物がいたんですね。わあーあれも見て下さい！」

ものすごい興奮状態の良太に若干の疲れが出てきている大和。

「ちよつと待つてくれ良太、流石に今日色々有ったことや、ここに来て一時間歩きっぱなしだつてことも重なつて、体中が悲鳴を上げてる気がするんだよ」

「ごめんなさい、僕だけ面白がつて」

「いや別にいいんだけど、ちよつとあそこにベンチもあるんだし少し休んでいこう、まだ閉館までは時間あるんだし」

そう言つて大和と良太はベンチに座つた。

「なあ良太、ここは一体どの辺なんだ？」

「え？ どの辺つて忒本の『動物の歴史』フロアの肉食獣編ですよ」

「それはどの辺りなんだ、と言うかここは本当に博物館の中なのか」大和がぼそりと言いたくなるのも無理はない、かれこれ一時間歩きっぱなしなのにもかかわらず、まだ半分ちよつとしか博物館を見終わつていないのだから。

「それにしてもこの博物館はずいぶん立派だけど、駅からこの博物館までは結構簡素な町並みだつたよな」

大和は駅からこの博物館までの約一〇分ほどの道を思い出していた、このあたりは王都の田舎と言われているらしい大和達のいる西地区の中でも（王都の外からきた大和からすれば十分に発達している）更に人が少ない気がする。

「それは、たぶんこの博物館の近く「ゴーストタウン」に廃墟があるからだと思う」

「あれ、どつかでその名前聞いたな。何処でだっけ？」

「廃墟つて言うのはでっかいテロ事件の起きた中心部のことで、昔は王都でも一番栄えてた場所つて言われてるけど、今はもっぱら不良のたまり場だつてお母さんが言つてました」

「ふーん、テロの前まで栄えてた場所ね」

そう言つて大和は上を眺めてため息をついた。

|||||

そう！　ここまででは覚えている、しつかり覚えている。

だが大和の中での次の記憶は、この鳴り響く警報だ。

「どうしてこうなったんだろう」

そんなこと呟いていても仕方がないので、とりあえず頭を整理するためなるべく頭の中で音をシャットダウンして考える。

（場所はここであつてる、俺の記憶の最後は今座っているベンチに良太と腰掛けていたはずだ。つまり俺は疲労がピークに達したため寝てしまったと言うことなのだろう、ここまでは大丈夫。次は良太が俺の横にいなくなっているということだが、これは先に逃げたのか、トイレに行っているかの二択ぐらいしか思いつかない。だがこの二択どちらにせよ無理がある、良太の性格上、俺を置いて逃げると言うのは考えづらい、と言うか考えたくない。次のトイレに行っている、だがこれこそありえない、警報が鳴り火事だといっているのにも係らず、ちよつとトイレ行ってこようつて、そんな奴人間として何処か間違っている。とすれば良太は何かに巻き込まれた可能性が高い。自分としては良太を探しに今すぐにも走り始めたい、だがここでものすごい問題が浮上している）

「ここは一体どこなんだ？」

（地図は良太に持たせていたし、一時間も歩き続けていたのだ道など完全に覚えている筈が無い、良太を探しにウロウロしようにも半分くるのに一時間掛かったのだすべてのフロアを回るには走ったとしてもそうとう時間が掛かるに違いない、それにもし走った方向と別の方向に良太がいたらそれこそ大惨事だ、放送を聴く限り出口は建物の端と端の二つしかないようだし、はてさてどうしたものか）

大和が頭を捻って考えていると向こうの方から声が聞こえる。

「よかつた」

大和は安堵のため息を一つ付く。がしかし、向こうから来る者のただならぬ雰囲気を感じその安堵感を消し去る。

「大和さん!!」

こちらに向かつて走ってくる良太に笑顔を見せながらも大和の周りの空気は真剣そのものであった。

|| || || || || || || || || ||

「色々な物があるものだな」

一人の少女が博物館の中を歩き回っていた。

博物館の中は人で溢れていた。

(なかなか面白い物もあるようだし、子供の好みそうなギミックもたくさんある。新しいだけじゃなく人が溢れるのも納得の博物館だ)

何処かのマーケティング調査の人のような考え方をした少女は博物館の色々な所を物色していた。

そんな少女と通りすぎた人はもれなく二度見していく。

そんな状態に気づいている少女は考える。

(それにしてもどうして私は目立ってしまったのだろうか、やはり休日に制服はおかしかつたのだろうか？ しかしこれ以外の服となってしまうと、ドレスなどの動きにくい服しか持っていないし、まさか仕事の制服をこんなところで着るわけにもいかないし……むう)

はつきり言っておく少女が目立っているのは服装のせいでは断じてない。

少女は自分の身体的特徴を理解してない節がある。

まあ平たく言えば少女の美しい容姿が目立つ理由になっていることに、少女は気づいていなかった。

少女はかれこれ数時間館内を見回っていた、全てののフロアを隅から隅まで二回ほど見て周り、今は三回目のフロア探索となっている。

（今のところとくに怪しいところはない、まあ加害者たちがチケットの半券を持っていたとはいえ、ここは神成さんの考えすぎだったのだろうか）

少女はそんなことを考えながら式本の歴史動物フロアに入った時だった。

「アレ？ 天宮さん？」

急に名前を呼ばれ、天宮は驚きながらも呼ばれた方へと首を向けた。

天宮が首を向けた先はちょうどフロアの入口辺りでそこには長いベンチが何個か置いてある、その中の一つのベンチに見覚えのある者達が座っていた。

「きみたちはこんなところで何をしているんだ」

「な……何って、ここのチケットがあつて期限が今日までだったから来ました」

良太はベンチに腰掛けながら不意に来た美少女に対して顔を真っ赤にして質問に答える。

「そうかたまたまここのチケットを持っていたのか……で、なぜ彼はこんなところで寝ているんだ」

天宮は良太の隣に座りグースカ寝ている大和のほうへと目をやった。

「疲れてる？」

良太も半信半疑の答えを出してみる。

「わざわざ博物館にまで来て寝るだなんて彼は一体何を考えているんだ」

「僕もわからない」

「そうかじゃあ私は」

天宮は考えた、先程までの自分の考えを通すならここはそのまま

彼らを置いて歩いていってしまう方がいいのだろうと、だがしかし、周りをそわそわと見ながら行きたそうにするも、大和を起こすのも悪いとウズウズしている少年がなんとも可哀相な気がして、放っておけなかった。

「きみ。良かったら私と一緒に博物館を回らないか」

「え！？ でも大和さんを起こすのは……」

「大丈夫だ、こんなところでも寝てしまっただけの眠いのだ、ちょっとやそつとじゃあ起きないだろう、私達はその間に少し博物館を回って帰ってくればいい」

天宮がそう言うと、良太は顔をパツと明るくさせて喜んだ

「どうする、私と行くか？」

「はい！！」

とてもうれしそうな返事が館内に響いた。

そこから良太と天宮は、良太が歴史博物館のスタンプラリーを持っていたので、それを全て埋めるため博物館の中を探索することになった。

そしてだいぶ博物館の中を歩き回りとうとう行っていないフロアもあと一つとなった。

「さて次のフロアで最後だな」

天宮は良太にスタンプラリーの確認をとる。

良太は自分のスタンプラリーの台紙を手に持ち押していないスタンプの場所を確認する。

「あれ？ おかしいな、スタンプラリーの空きがあと二つある」

「ん？ どれどれ」

天宮が良太の首からヒモでぶら下げているスタンプラリーの台紙を取って見る。

首から下げたあるヒモはそこまで長くなく、天宮は必然的に良太の正面でしゃがんで見ることになる、そのため天宮の顔がとてつもないほど接近してきた良太は顔を真っ赤にし「あ……あの」としどろもどろになっている。

だが台紙を見ることに夢中になっている天宮はそんな繊細な少年の恋心になど一切気づかず、スタンプラリーの空きが確かに二つあることを確認して何故だろうと考え始める。

「なんで二つもあるのだろうか、それに空いてるスペースの一つは今私達が行こうとしている弐本の『人間の歴史』フロアであっているが、もう一つの空きスペースは何処のものか書いていない……ん？ 下に何か書いてある」

《この博物館にはもう一つ隠しフロアが存在しているよ！ 何処だか分かるかな？ 隠しフロアの入口は人に関係するフロアにあるよ！》

「隠しフロア……そんなものがあつたなんて」

天宮が全フロアの隅々まで調べたときはそんなもの一切気づかなかった。

「このヒントから考えて人間の歴史フロアに隠しフロアがあるのだろうか、どう思う？」

天宮は良太に尋ねてみた。

「あ……あの！ その」

「どうした？」

「ここでようやく良太がパニックしていると気づいた天宮だが、その理由が自分だと言うことまでは分かっているようだ。」

「大丈夫か？」

「大丈夫です！ 大丈夫です！」

首をブンブンと勢いよく縦に振る良太。

天宮はそんな良太を見て本当に大丈夫かと心配するが天宮が立ち上がった途端、平気そうになったので、大丈夫だろうと思い込んだ。一方の良太は天宮と博物館を回っていると言うだけで、心臓がバクバクでせつかくの博物館だというのに天宮と回ったところはほとんど覚えていないという有様である。

「じゃあとりあえず人間の歴史フロアに行ってみようか」

天宮の話をほとんど聞いていなかった良太は何のことかさっぱり

わからないが首を縦に振る。

人間の歴史フロアでスタンプを押した天宮と良太は隠しフロアを探し始めたがまったく見つかる様子が無い。

「全然見つからない」

「そうだな、もしかしたら隠しフロアはこのフロアには無いのかもしれないな」

良太と天宮は一息つく為にベンチに腰掛けた。

「何かお探ですか？」

不意に男が話しかけてきた。

男は三〇代後半位の長髪くせつ毛のある茶髪の見るからに優しい風貌で、ビシッと決めたスーツは男の清潔感を上げ、第一印象はかなりいい人に見える。

いきなりのことで良太と天宮が面を食らっていると、男は申し訳なさそうに言う。

「ああ、いきなり話しかけてしまって申し訳ありません。わたくしここで館長をさせて頂いています。菅原といいます」

そう言う男はニッコリと笑い胸に付けている名札を見せてきた。

そこには、式本歴史博物館館長菅原浩二と書いてあった。

「それで、お客さま何かお探でしょうか？」

天宮は答える。

「スタンプラリーを埋めるため隠しフロアと言うのを探しているのですが」

「ああ。隠しフロアですが、ですがなにぶん答えをそのままお教えする訳にはいきませんので、ヒントを差し上げましょう、ヒントは《人間にある秘密はなんでしょう》です。では、ごゆるりとお楽しみください」

そういつと菅原と名乗る男は歩いて何処かに行ってしまった。

天宮と良太は菅原から貰った、ヒントの意味を考えてみる。

「人間の秘密ってなんのことなんだろう」

「秘密……隠してあるもの」

天宮はぶつぶつと呟きながら何かを頭の中で構築してゆく。

良太はそんな天宮を見て思う、一般の人がこの行動を取れば間違
いなく何処か怖い人として避けられ、目をあわせようともしないだ
ろう。だがしかし天宮さんがしていると、何か聡明で壮大な秘め事
をしているような気がするのは何故か？。

かつて良太が生きてきた中でこんなに綺麗な人と一緒に歩いたこ
とがあっただろうか、いや無い、あるはずが無い。もし、良太を
虐めてきた奴らが今の状況を見ていれば、女子にモテたいから異能
力者だとうそをついたなんて理由は一瞬で消え去っているだろう。

天宮が頭を捻るたびに髪が揺れそこから何とも甘い香りが漂って
くる。

こんな人を知ってしまったと、小学校の女子がまったく眼中になく
なってしまうと、小学校の女子がまったく眼中になく

「そうか、答えは脳だ」

天宮がポツリと呟く。

「え、脳？」

「そう、答えは脳だ、今の時代人間の体を調べようと思えば隅々ま
でわかることができる、だが唯一わからない部位がある、それは人
の考え思想だ。これは自分が話さない限り絶対に知ることのできな
い部分だ。たしかこのフロアの人間の進化編に大きな脳のモニユメ
ントが置いてあった、隠しフロアの入口はたぶんその中にある」

良太と天宮は脳のモニユメントまで走った。

脳のモニユメントは大きさ二m台の大きさで天宮が推測したとお
り、裏に回ると真ん中に線が入っており、扉になっていた、そして
その先には地下へと続く階段があった。

「すごい！ こんなところに階段があるなんて」

良太のテンションが最高潮に上がっている。

二人は階段を降りてゆく。

第七話 式本歴史博物館（後書き）

式本歴史博物館に行ってみたい

第八話 異能力者対策部隊としても天宮 遙としても

「たしかにずいぶん凝った造りだ」

手すりに壁から掛けられているランプ、何処か中世のイメージを彷彿とさせるこの通路は、隠し部屋へ続いている、という雰囲気が出ている。

そのまま興奮している良太と、造りに感心している天宮。

二人ともそれなりに楽しそうである。

ある程度階段を降りていくと大きなフロアに行き着いた。

だがこのフロア普通ではない。

「き……気持ち悪い」

良太が言うのも無理は無い、そのフロアには人間の死体（のような人形）がいくつも展示してあったからだ。

しかも、その種類は多岐にわたり水死体や焼死体など様々な物が置いてあり、それは見ていてあまり気分の良くなる物ではない。

「あ！ スタンプが置いてあった、気持ち悪いから早く押して戻りましょう天宮さん」

「そうしようか」

フロアの真ん中辺りにスタンプが置いてあったので、良太と天宮はさっとスタンプをすぐに押して早くフロアから出て行こうとする。

「おめでとーございます」

「……」

良太と天宮が振り向くとそこには見知らぬ女が立っていた。

女は不気味な笑みを浮かべながらこちらに話しかける。

「ここに来たということはスタンプラリーを完成させたんですね、真におめでとーございます」

「あなたはどなたですか」

パツと見何処にでもいそうな女に天宮は冷静に名を尋ねた。

しかし実際天宮は極度に緊張していた、自分が一人では無いということに、女の目が生きている者の目では無いということに。

「失礼いたしました私はこのフロアの管理をしております、名前を霧崎きりさきと申します。ところで先程お聞きした通り、スタンプリーを全部お埋めになったのでしよう、でしたら私にその台紙をお渡しください」

ロボットのよう語る霧崎と名乗る女は、いやな空気しか垂れ流してこない。

それはこの場所の空気のせいなのか、はたまた彼女自身が持っているものなのか。

「はい。いま全部埋めたところです」

良太も違和感を感じ取っているものの、それはこんな場所だからと思い、フロアの管理人に自分の持っているスタンプリーの台紙を渡そうとする。

「待て!!」

天宮が急に声を張り上げ良太を制止する。

そんな天宮に驚きびっくりした良太は言う。

「ど……どうしたんですか天宮さん」

「いや、その台紙は私が渡そう」

天宮は良太から台紙を貰うと、フロアの管理人と名乗る霧崎の顔を見ながら渡す。

良太には天宮が平然と霧崎に渡しているように見えたが。

天宮は実際、もし霧崎が少しでも変な行動を起こせば瞬時に力を使い、吹き飛ばすつもりだった。

台紙を貰い受けた霧崎は一枚一枚スタンプを見て回り、最後のページまで見終えると言った。

「すべて揃っているようですね、では景品を差し上げますので着いてきて下さい」

霧崎はそう言うつと後ろを振り返り奥の方へと歩いていく。

良太と天宮はその歩みについていく。

「うわあ、これはすごいリアルだな」

良太が見たのは切り裂かれた死体で、首から上と右手が無くなっているなんとも不気味な人形だった。

「……！」

良太の言った人形を見た天宮は気づいてしまっ、その人形が人形では無いことに、もとは動いていた人だということに。

「すみません霧崎さん」

天宮が前を歩く霧崎に話しかける。

「なんですか？」

「私、急にトイレに行きたくなってしまっ、ですが見た限りここにはトイレが無いようなので、一度上に戻ってもよろしいでしょうか」

天宮は緊張を一切顔に出さず、ここから離れるための口実を話す。

「はあ、別に構いませんよ、では、あなただけで行って来て下さい、その間に私はその子に景品をプレゼント致しますので」

女は不気味な笑みを止めない、まるでその表情しか知らないように。

「えーっと、彼も私と一緒にトイレに行きたいようです。すぐに戻ってきますので」

「え？ 天宮さん僕そんなことムガッ」

良太の口の中に何かが押し込まれた、それが一体何なのかさっぱり分からないが、声だけが出せない。

「そういうことなら仕方ありませんね、どうぞ上にお戻りください」

「すみません」

天宮は異能力ちからで良太の声を封じたまま、良太の手を引っ張り出口の階段へと向かい歩いていく。

良太はというと、先程まで声が出せないのが恐ろしくて堪らなかつたが、天宮に手を握られてまんざらでもなさそうだ。

天宮と良太が出口に向かって歩いていく、背後では霧崎がこちらを見ている。

あと五mほどで階段の所までいける。

天宮は走ろうとも思ったが、この状況で走り出すのは危険きわまらないと判断し、あえてゆっくりと何事も無いかのように歩いてゆく。

あと二m、天宮がそう思ったとき、

ピュピュピュピュピュ！！

風を切る音が聞こえてきた、天宮はすぐに後ろを振り向き風を操って空気の壁を作る。

ガシャガシャバリン！！

ガラスの割れるような音が多数聞こえてくる。

「うわ！」

急にしゃべれるようになった良太が叫び声を上げる。

「はあはあはあ」

天宮は緊張していた。この前、戦った坂下は喧嘩を売れば自分だけを狙ってきた、だからこそ後ろにいた男性を守るのはたやすい事だった。

だがこの女は始めに良太を狙ってきた、まだ何もしていないときから良太だけを。

（まずい！ こいつ私が何者かを知っている）

「そのまま逃がすと思ったあ？」

目の前に立つ女は何とも楽しそうに笑みを浮かべる。

ガラガラガラ！

目の前にあった階段への通路に扉が下りてきて。出口を塞がれてしまった。

「扉が！」

とっさに良太が叫んだ。

「ざーんねん！ 逃げられませんでした。怖い？ ねえボク、私のこと怖い？」

霧崎は狂ったように笑い出す。

「な……なにこの人」

良太はわけの分からない状況が立て続けに起こりパニックに陥っていた。

そんな状態なのに周りを見れば気色の悪い死体ばかり、偽者だと思っただけでも本物に見えてしまう。

「うわ、うわ！ うわあああああああ」

良太は叫びだす。

その叫びを聞き更に嬉しそうに狂った笑いを上げる霧崎。

良太がパニックで声を上げているとガツッと肩を掴まれた。

ビクリとなりながらも自分の肩を掴む手を見てみるとその手は天宮であった。

「大丈夫、落ち着いて……きみは必ず私が守るから」

そう笑顔で答える天宮を見て良太は落ち着きを少し取り戻す。

「天宮さん……ヒック……」

安心したせいか良太は目に涙を溜める。

「落ち着いて、大丈夫だから」

天宮の言葉が温かくてその手が暖かくて、それはとても安心できた。

「さすが市民の味方、異能力者対策部隊ポーターラインかっこいいですね」

つまらなそうに霧崎は言う。

「やっぱりあなたは私が異能力者対策部隊だと言うことを知っているようですね」

天宮は掴んでいた良太の肩を離し、良太を自分の背に隠しながら言う。

「もちろん知ってますよ、あなたが『烈風の破壊者』『ブラスト』と呼ばれていることも」

「そこまで知っているなら簡単です。今から貴方を王都西地区連続斬殺事件の重要参考人として逮捕させて貰います」

「出来るかなあ貴方ごとき（……）に」

霧崎は何とも挑発的な声をだす。

天宮は良太に絶対にそこから動くなと強く言い。

少しでも良太との距離を離すため霧崎の前へと飛び出す。

「ずいぶん単直な動きをするんですね」

霧崎はそう言つと両手を振り上げた。

すると霧崎の両手に赤い何かが集まつて、両腕にまとわり付いていく。

「ハアツ！」

天宮は先手必勝とばかりに空気の鞭を生成し、霧崎に放つ。

ビュ！

風を切る鋭い音がした。しかし霧崎はその鞭を難なく避け逆に空いた天宮の懐へと入る。霧崎が両腕に集めた赤い何かは、刃の形になり。霧崎はそのまま天宮の懐を切り裂こうと腕を振り下ろす。

「くっ！」

その斬撃を体を捻つて避けた天宮は風を操り霧崎に強風を当てる。

「こんなもん効くと思つてるんですね？」

霧崎は強風を気にも留めずに天宮を切り裂くべく第二の斬撃を横に振り払う。

「！」

なんとか第二の斬撃も避けた天宮だがブレザーが綺麗に横に切れている。

だが霧崎の斬撃は止まらない次々に天宮を切り裂こうと

接近戦は不味いと判断した天宮はそのまま後ろに一旦下がら霧崎との距離を開く事にし右足で地面を蹴つて後ろへと飛んだ。

すると霧崎が楽しそうに喋る。

「良いんですね、そんなに離れて」

「！！」

霧崎の言いたいことがわかり瞬時に動き出す天宮、だがしかし

「遅いですね、この子の命、貰っちゃいます」

霧崎が良太まで迫る。

天宮も追いかれるが追いつけない。

「私の一着優勝、じゃあ死んでね……ボ・ク」

良太の目の前で霧崎は刃を振りかざす。

良太は自分の目の前で起きていることが信じられない怖くて動けない。死ぬそう思い、叫ぶ。

「うああああああああああああああああああ」

「うるさい、ばいばい」

霧崎は無常にも刃を振り落とす、顔には最高の笑みを浮かべながら。

バリン!!

ガラスの割れる音が響く。

その場に居る二人の人間は意味が分かっていたいなかった。

一人は怖がり、目の前の状況に恐怖し壁を背にしている少年。

一人は気持ち良くなるうと、子供を切るつもりが切れなかった女。

霧崎は何故、切れなかったのだろうと自分の両腕の刃を見る。

刃は折れていた、ポツキリと指の先から、綺麗に折れていた。

「は？」

霧崎は訳のわからない顔をする。

「わたしが……異能力者対策部隊のわたしが保護対象に何もしていないとでも」

天宮はまんまと自分の策にはまった霧崎にニヤリと笑みを浮かべる。

「どういうことだぁ!!」

霧崎は後ろを振り向き天宮に叫ぶ。

「彼の周囲に風の防護壁を張っていた、そうじゃなかったら、私が貴方ごときにあそこまで後れを取るはずがない」

「ふざけるなあああああ」

「ふざけてなどいない、異能力者対策部隊の仕事は貴方のような己の『異能力』を悪用する者から市民を守ることなのだから」

天宮は手の平に何かを造り、霧崎が自分の間合いに入ってきて来るのを待っていた。

「あああああああ——————!!!!!!」

予想どおり、霧崎はなりふり構わずに天宮につつこんでいく。

天宮は手に作った物を霧崎に放つ。

それは風の玉、全てのものを吹き飛ばす、暴風の弾。

ボンッ！

爆弾が爆発したような大きな音が響き渡った。

するとフロアにとつともない風が吹いた、展示してあった気色の悪いものは全てフロアの端へと吹き飛ばす。

良太は目の前で起こることがまったくわからなかった。

ただ一つだけ分かっているのは、あの見ただけでもわかるほどの強風が自分の周囲にだけまったく吹いていないと言っただけだ。

その風はあらかたの物を吹き飛ばした後ようやく止んだ。

ぽんつとだれかに肩を捕まれた。ビクリとしながらも良太はその手を見た。

そこには温かい顔があった。

「今の風で扉も開いたし上に戻ろうか」

「うん」

良太が天宮の手を掴み立ち上がるうとしたとき。

ヒュ！ またも風を切る音がした。

気づいたときにはそれは天宮の体に当たっていた。

ブツン！ 逆に気持ちの悪いぐらい何かが綺麗に切れる音がした。

その音とともに天宮のわき腹から血が流れ出る。

ドン！ 後ろの階段が切れてぐしゃぐしゃに壊れる。

「ぐっ！」

天宮がわき腹を抑えグラつく。

だれが放った！？ 天宮はすぐに先程吹き飛ばした霧崎を見るが

霧崎は完全に気絶していた。

するとフロアの奥から声が聞こえてくる。

「おやどうしたんだい。お腹が切れてずいぶんと痛そうだね」

その声と同時に現れたのは先程見た顔。

「か……館長さん」

良太が流れ出る天宮の血を見ながら恐ろしい現象を整理しようとして言葉を放った。

「そうですね、館長の菅原です。お客様には悪いのですが、死んでいただきますよ」

「そ……そうか、彼女が黒幕だとしたらずいぶん呆気なかつたと思つたら、あなたが黒幕だつたか」

「黒幕とはずいぶん酷い、まるで僕が悪役のようではないですか。僕は生き物として当然のことをしているのに過ぎないのに」

「ひ、人を殺しておいて　当然とは呆れる」

天宮は話しながらも奴を倒す方法を考える。

（どうする？　幸い傷は思ったよりも深くない、だがあの菅原と言う奴、この間、戦つた坂下と系統は似ているが切れ味も飛んでくるスピードも段違いだ）

天宮は考える。このままでは良太の命も危険だと、

天宮は考える。自分の近くに居た人間達がどうなったのか。

天宮は知っている。自分は死神だという事を。

「きみ、今から私の言う話を良く聞け」

青い顔をしながら天宮の流れ出る血をどうにかしようとお口お口している良太に、天宮は小声で話す。

「何を話しているのか知らないが、僕が壊してしまつたから出口はもう僕の後ろにしかない、逃げるにしても僕の攻撃から逃げ切れるとでも？」

菅原は不敵な笑みを浮かべる。

その間に天宮は良太に話を終える。

「できるか？」

「うん。けどそんなことしたら天宮さんが！」

「私は大丈夫だ、きみがいなければ私は本気を出せる。そうすればあんな奴に私は負けないよ」

天宮は笑う、笑わなければ苦痛で顔をゆがめてしまいそうで、糸が切れてしまいそうだから。

「くだらない話し合いは終わったかい」

菅原は少タイラついているようだ

「いくんだ！」

天宮がそう叫ぶと良太は走り出した。

「はああああ！」

天宮が大きく叫び、手の平を前へと出す、すると強い風が吹く。

「くつくつくくはははははは、この程度で目暗ましのつもりですか」

「その通り！」

天宮が菅原との距離を一気に詰めていた。

「おや？ 傷の割には動きが早いですね」

だが菅原は焦る様子も無く誰かにビンタするように手の平を軽く前で振る。

「！！！」

天宮は察知して風を足もとに叩きつけて反動で飛び上がる。

ドバン！

天宮の後ろの壁が音とともに大きく抉えぐれた。

「そんな使い方もできるのか、便利だね君の能力」

菅原は空中に飛ぶ天宮に向かってまたもや手を前で振る。

天宮はそれも、空中で風を起こし避けた。

「イラついてきますね」

菅原は目の前を飛ぶ八工（あまみや）をうまく叩き落とせないのが気に入らないようだ。

もう少し、天宮は考える。あと少しコイツの気を引ければ。

「止めた」

菅原が突然、天宮を追うのを止めた。

（しまった！ 勘付かれた！）

天宮は菅原を止めるため風の鞭を生成する。

「やっぱり、もう一人のお客様が逃げてやがる」

良太は走っていた、

(もうすぐ出口に着く大丈夫だ、天宮さんを信じていれば大丈夫だ) そう念じながら良太は走っていた。

「逃げるのは良くないですよお客様」

そう言いながら菅原は出口を壊さぬよう、ピッ！ と、走るお客様に向かつて人差し指を軽く振った。

天宮の鞭は菅原に届かない。

スバン

何かが綺麗に切れた音が鳴る。

「くくくはーはっははは、最高だ！ なぜ人を切ると、こつも楽しいのだろう！」

最高に気持ち良さそうに笑う菅原はもつと気持ちよくなるため絶望のどん底に落ちた顔をしているだろう少女を見るため振り返る。

「ガアッ！」

途端、菅原の顔に空気の鞭が襲い掛かりそのまま部屋の端の壁まで吹き飛ばされた。

「今のうちに早く逃げろ！」

今不自然な話を聞いた気がする、逃げろ？ あの女が言ったのか、だとするなら言われた人物は誰だ、あのガキか？ だがあのガキは僕が切り裂いたはず。

菅原が目を開くと小さな子供が出口に入っていくのが見えた。

「はあああああああああ！？」

菅原は声を大にして叫ぶ。

「どういうことだ、あのガキは俺がさつきぶつた切つたはずだ！」

それを聞いた天宮が力なく笑う。

「ふっふふふ、お前の切つた物をよく見ろ」

菅原は言われるがままに自分の切つた者を見る、そこには死体が落つこちていた。

リアルでよくできたまるで本物のような死体シタが。

「ありえねえ！！ この僕が人形と間違えるなんてそんなことあるはずがない！！」

「戦闘のさなか私が風で操って動かして尚且つこんなに暗い部屋だ。人間と人形を見間違えるのは当然だとは思わないか」

「くそつたれがああああああ！　絶対てめえは殺す！！　そんでもってあのガキも殺してやる！！」

「やれるものならやってみる！　異能力者対策部隊としても、わたし個人としてもお前から彼を守ってみせる」

天宮はわかつていた。

自分のこれからの運命を。

この深手で菅原を倒す事は不可能に近いと。

今は傷に風で膜を作り何とかやり過ごしているが、向こうが本気で来るとなればそんな精密な異能力ちからの使い方はできないだろう、そうすれば確実に傷が開く。

勝ち目は無に等しい。

でもだからこそやらなければならない。

彼らが少しでも遠くへ逃げられるように。

|| || || || || || || || || ||

良太は走っていた、全速力で走っていた。

なんとか長い階段を昇りきる。

すると館内には警報が鳴り響いていた。

どうやら菅原が階段を壊した際に火災が発生したらしい。だが今はそれよりもやらなくてはならないことがある。

まずは自分が何処に居るのか確認する。幸いな事に、良太が居る場所は大和と一緒に回っていた所だったので、自分の居る場所はすぐに分かった。

すると目の前に大勢の人が歩いていく。

良太は声を大にして叫んだ。

「助けてください、この博物館の地下に友達がいるんです！　そこで僕の友達が襲われてるんです。お願いです助けてください！！」

良太は助けを叫ぶ。

異能力ちからの使い方を学んだからこそ分かる、あんなに血を流して集中なんてできるはずが無い、つまり今の天宮さんはほとんど異能力ちからの使えない状態だと。

でも自分には天宮さんを助けるだけの力が無い。だからこそ助けを呼んだ。天宮さんにはそのまま走って逃げると言われのだが、そんなことは出来ない。

だから助けを呼ぶ。

だが良太の叫びを聞いても誰も止まってくれない。

「お願いです誰か助けてください！！」

「どうしたの僕？」

何回目かの叫びでようやく女の人が止まってくれた。

「この地下に僕の友達が危ない人に襲われているんです」

良太は説明する。だがしかし

「そんなウソ言っていないで早く私と逃げましょう。火事で死んじゃうわよ」

そういうと女性は良太の腕を引っ張ろうとする。

「本当です！　信じてください！！」

良太はそう言いながら自分の腕を掴もうとする女性の手を払いのけた。

「もういいわよ！　そんなに死にたいならそのまま居なさい」

そういうと女性は怒りながら出口の方へと早歩きで言ってしまった。

そのあと声を張り上げて助けを呼ぶが、ほとんどの人が素通りしていく。数少ない止まってくれる人も良太の話を聞くと馬鹿にするか、怒って出口の方へと行ってしまふ。

「な……なんで誰も僕の話を通じてくれないの？ これじゃあ僕が
異能力者アブノーマルって言ったときと同じ、誰も信じて
！」

良太は思い出した。自分が異能力者だと言ったとき友達や家族で
さえも信じてくれなかったのに、一人だけ自分のことを信じてくれ
た人がいたのを。

そしてその人がこの博物館に居るということを。

良太は走った、どれだけ苦しくても走った。

彼なら……大和さんなら何とかしてくれる。

そんな気がしたから。

|| || || || || || || || || || ||

彼を逃がしてからどれ位の時間が経ったのだろう。

一〇分か三〇分か一時間か、どれほど時間が経ったのかは解らな
いがきつと彼は遠くまで逃げたのだろう。

天宮は死体の人形の陰に隠れていた。

「どこに行ったのかな？ 早く出ておいで。八つ裂きにしてあげる
から つさあっ！」

どこかあさつての方向で爆発音がする。

菅原は天宮を完全に見失い適当に攻撃を放っている、そのせいで
地下の壁はそこらじゅう抉れていた。

「ほら早く出てきなよ、だいじょうぶだからよおおおおおおお
！！」

菅原はかなり頭にきている、このまま時間を稼げれば勝機も見え
てくるかもしれないと、天宮が思った矢先。

「ああー、もういいや出てこないんだったらそのままにいる。その

替わりあのガキを追って、殺すだけだ」

(な! !)

「ほらどうした、早く出てこないと僕、上にあがっちゃうよ」

菅原は楽しそうに数を数え始める。

天宮は考えた、出口を壊そうかとも思ったが、もし他にも出口があればまったく意味の無いことになってしまう。

かといってこれ以上隠れ続ければ菅原は確実に良太を追うのだから。

いや大丈夫だ、こんなに時間を稼いだのだ、彼ももうとっくに遠くに逃げているだろう。

だからここで隠れていればいいのだここに居ればみんな助かるかもしれないのだ。

ここにしよう、ここで隠れてしよう。

菅原は笑う。

「よーやく、でて来たか。本当に面倒くさいから止めてくださいよ」
天宮は笑う。

(できるはずが無い、彼を巻き込んだのは私だ、私さえ彼にかかわらなければ、彼はあんなに怖い思いをすることも、こんなクズに命を狙われることもなかったのだ)

天宮は覚悟を決める。

やる事はただ一つ。こいつを刺し違えてでも倒す。

「なんだその顔は、もしかして君は僕を倒せるとでも思っているのかい？」

「やってみなければわからない」

「やらなくてもわかるよ」

菅原は手を強く振る、天宮はその飛ぶ斬撃に自分の嵐の弾を投げ込む。

ブオッ!

ものすごい爆風が巻き起こる。

その風の中、天宮は前が出る。

血が溢れ出していった。

それでも天宮は前に走る。

(菅原の異能力は先ほどから観察する限り遠距離になるほど威力が上がっていることがわかる。それならば近距離で、嵐の弾を撃ち込めば)

「残念だね」

天宮の目の前に菅原が現れた、あまりに急なことで嵐の弾を精製する時間が無い。

「実は僕、近距離でも結構強いんだよ」

菅原は水平チョップをするように手を横に振るう。

すると天宮の胸に衝撃が走った。

「ッ！」

天宮はまったく予想外の衝撃を食らい吹き飛ばす。

「これは刀で言えば峰打ちってやつね、僕は切れないから嫌いなんだけどね。よく時代劇とかで峰打ちじゃ安心せいかあるけど、峰打ちってそんな安心できるものじゃなくて打ち所によっては簡単に人が殺せるんだよ」

「がはっごほっ！！」

天宮には菅原の話はまったく聞こえなかった。

「人の話はちゃんと聞けよ！」

菅原は天宮の腹に蹴りをいれる。

蹴りの衝撃で天宮の体は数メートル床に撞すられる。

「ガッ！」

天宮はあまりの痛みで声を上げる事も出来なかった。

「反応してくださいよ、まったくつまらないお客様ですね」

声も上げない天宮に興味の失せた菅原は続けて口にする。

「さあて殺すとするか」

菅原は笑みを浮かべる。

「まあ安心してくれ、逃げたあのガキもすぐそっちに送るから」
その言葉も今の天宮には届かない。

(胸が痛い、息が苦しい) 肺の奥の方から血の味がこみ上げてくる。うつすらとした視界の中で菅原が腕を振り上げて見えた。彼はちゃんと逃げただろうか？ そんな問いが、天宮の脳裏によぎる。

その恐ろしい問いを打ち消すように天宮は考えを働かせる。

大丈夫だ彼は頭のいい子だった、もうとつくに自分の家まで逃げているだろう。

そう思えば自然と心が落ち着いていく気がする。

天宮は思う。

私は死神だ、だけどそんな死神でも守れるものがあつたのだ、ちやんとしっかり守れたのだ。

大丈夫死ぬのは怖くない恐ろしくない。大丈夫だ……大丈夫。

天宮はいま嬉しくて堪らない、自分でも命を賭けてでも守れる者があつたことに、天宮は嬉しくて堪らない……はずだった。

なぜだろう涙がこぼれるのは。

なぜだろう誰かに助けを求めたくなるのは。

なぜだろう死にたくないと思うのは。

そんな天宮の泣き顔を満足気に眺めた菅原は

「じゃあ死んでくれ、僕のために！」

なんとも楽しそうに振り上げた手を振り下ろす。

ブンッ！

天宮を切り裂くため斬撃が飛んでくる。

死ぬのは怖くないはずなのに、お父様やお母様、奈緒にも由紀ちゃんにも会えるはずなのに、なんで手が震える？ 死ぬのは怖くないはずなのに……なんで……どうして……

斬撃は天宮の心情とは関係せず、容赦なく襲い掛かる。

第八話 異能力者対策部隊としても天宮 遥としても（後書き）

ようやくバトルです。

一章も終わりに近づいてきました。

第九話 友達を助ける高校生

パン！

地下に、風船が割れたような乾いた音が響く。

まだ生きてるのは何故だろう？

天宮は自分の体の感覚がまだあることに気が付いた。

どうしてだろう？

涙にぬれた顔を上げると目の前に知っている少年が立っていた。

その少年は肩を激しく上下し息を切らしながら天宮に叫ぶ。

「ぜーはー……天宮！ ぶ……無事か！？」

「なんで？」

天宮はまったく状況がわからなかった。

何故ここに大和が居るのかも、なんで自分がこんなにも安心して
いるのかも。

状況は最悪のはずなのに、守ろうと思っていた人がいまもつとも
危険な場所に立っているのに、それなのに先ほどもまでのじつとりと
した冷たい空気が、今はまるで冬の終わりを告げる春風のように何
とも暖かく天宮を包み込んでいった。

そんな天宮の考えはお構いなしに大和は息を整えてから少し怒り
気味で話す。

「なんで？ ってお前ふざげんな、ここまで来るのドンだけ大変だ
ったと思っただんだ！ もっとこうなんか、『ありがとう』とか、『
大和ステキー』とかの褒め言葉は無いのか！」

そう言いながら大和は倒れている天宮に近づき天宮の体をそつと
持ち上げようとする。

「ッ！」

天宮は大和が自分を持つとした時に触れた傷の痛みで、いま自

分の居る場所が限りなく死に近い場所である事を思い出し、そんな場所から大和を逃がすため、痛みで消えてしまいそうな声をひねり出し、自分を担ごうとする大和の手を払いのける。

「早く逃げてくれ」

「いてっ、なにすんだお前、男に触られるのは初めてで嫌かもしれないけど、俺だって女に触るのは初めてなんだからイーブンだろう、上の階だって火事で大変な事になってんだから早く逃げるぞ」

先ほどから、あまりに緊迫感のない大和の様子を見た天宮は絶句しする。その後、我に返りまたも痛みにも耐えながら声をひねりだす。「そんな馬鹿なこと君の手を払いのけたんじゃ」

天宮がそう叫び終わるか終わらないかのところで大和は天宮を持ち上げて横に飛んだ。

「な!？」

天宮が大和の突然の行動に驚いていると。

ブンッ!

ハエが飛んでいるときに醸し出す音のような、何とも不快な音。

その音とともに先ほどまで天宮と大和の居た場所が

ガガガガガ! 大きな音を出しながら抉られていく。

「あつぶねー」

大和は天宮を抱きかかえながらその様子を見ていた。

だがその言葉とは裏腹に、大和の表情には何処か余裕が感じられる。

そんな大和の様子に天宮は声を放つ。

「ばか! こんな悠長に立ってないで早く私を置いて逃げる!!」

そんな天宮の真剣な叫びに対して、動揺もせず大和は答える。

「どうした? なんでそんなに怒ってんだよ。もしかしてこのお姫様抱っこが気に食わないのか? たしかに自分をお姫様って想像するのは恥ずかしいかもしれないが、あんまり変な持ち方だと腹の傷に障るだろうし。それに、一番の問題は天宮のきょうの服装だ。

下がスカートだから他の持ち方すると思いつきり中身が見えちまぐ

「フッ!!」

大和が言い終わらないうちに抱きかかえられたままの天宮の拳が大和の鳩尾にクリーンヒットした。

突然の天宮をかかえたまま膝から崩れ落ちる大和は息も絶え絶えの小さな声で問う。

「天宮……さん。きゅ、急になにすんの？」

「自業自得だ」

天宮は少し赤い顔をしながらそっぽを向いてしまう。

大和は天宮の行動の意図が読めず、頭に？を浮かべる。

「なぜ消さなかったのかな」

「!!!」

不意に嫌な声が部屋中に響く。

嫌な声の人物はニタニタと笑いながらこちらに歩いてくる。

「新しいお客様は先ほど僕の異能力ちからを消したように思えたんだが気のせいですかねえ」

「さあね、どう思つかは人それぞれだ」

気味の悪いオーラを放つ男にもまったく動じた様子を見せず、口元に笑みを浮かべながら男の質問に軽く返す大和。

そんな大和に少しイラつきながらも菅原は話を続ける。

「まあたとえ消えたとしても二回目の攻撃は避けたようだし、新しいお客様の異能力ちからにはなんらかの難しい制約があるのかな」

「どうか、まずそもそも俺が普通の者ノーマルっていう可能性だってあるはずだぞ」

「はっはっはっはっは、おもしろい方だ。おっと失礼、挨拶が遅れてしまいました。僕はこの式本歴史博物館の館長をしています。菅原と申します。失礼ですが新しいお客様も、お客様がいまお抱えになつてるお客様共々……ブツた切る」

菅原は心底、喜んでいた。

それはそうだ、鴨がねぎを背負ってきたと思ったら、鍋までもが自分の領域に届いたのだ。喜ばないはずが無い。

そんな菅原の狂気が分かる天宮は大和を助けるために言う。

「きみ！ 私を早く下ろしてくれ。この程度の傷はどうってことないから……大丈夫だから……下ろしてくれ」

今の状態ではどう考えても大和を守ることなんて不可能だ。それが嫌過ぎるほど分かるからこそ天宮は焦っていた。

ただどうしようもなく焦っていた。

自分のことを心配してここまで来た人を

「はやく私を下ろしてくれ」

その場に居てくれただけで死の恐怖を消し去ってくれた人を、

「わたしのお腹の傷も浅い」

この春風のような暖かさをくれた人を

「わたしが菅原あいつの注意を引き付けるから」

守るために菅原アイツに壊される前にと。

でも本当はこのまま大和とともに逃げたかった。

怖くてたまらなかった。

手が勝手に震えるのを大和に気づかれまいと必死に抑えた。

一度、温かさを知った心はまたあの冷たい場所に戻りたくないと呼んでいた。

叫んでいた。

それでも天宮は口を開く。

この少年が菅原アイツに壊される前に、己の恐怖を押し殺し、一言を解

き放つ。

「きみはその間に逃げろ」

そんな天宮の覚悟の言葉に大和は即答する。

「いやだ」

「……！」

先ほどまでのおちやらかなった感じの顔とはまったく別人のように、真剣な顔で天宮の目を見ながら大和はきっぱりと言い放ち。更に話を告げる。

「だってもしここで俺がお前を置いて逃げたら、お前は俺を助けようとして菅原あいつと戦うんだろ。俺はな天宮　お前に助けてもらい

に来たんじゃねえ。……お前を助けに来たんだよ!」

天宮は絶句した。

した後、何故だか涙がこぼれた、守りたいのに守らなくちゃいけないのに、大和の表情はもう喋るなと語っていた。その表情は天宮の言葉をかき消し、天宮の心の絶望を全て吹き飛ばすのに十分な風だった。

「かつこいいねえ、お姫様を救う騎士の登場か」

菅原は笑いながら何とも楽しそうに話す。

「いやいや、それはちよつと違うな」

大和の突然の遮りに菅原は笑いを止める。

「俺は騎士なんてたいそうな者じゃない」

「じゃあ何だつていうのかな?」

大和はケロリと答える。

「友達を助ける高校生」

大和の答えに菅原は笑い出す。

「友達……くつくつく、ともだちねえ」

「だったらその友達。しっかりと守りきってみろ!」

菅原はその心に秘めた凶悪さを更に開放する。己が欲望を満たすために。

菅原は手を振るう。

工事現場のドリルのようなけたたましい音をならし地面を抉りながら、五本の狂気の刃が大和と天宮に向かっていく。

「さあ、さあ。さつきみたいに消してみろよ、高校生!」

五本の刃が大和達を襲う、あの小僧やまとは何らかの方法で自分の力を消した。しかしその力には何らかの『制約ルール』がある、そしてその制約は数秒やそこらで変わりはない。

ということは小僧がもう一度、自分の力を消す事はかなり難しい。すなわちそれは今回の攻撃で奴らの体はバラバラになると言うこと。菅原は大和達のその後の映像を想像し笑みをこぼした。

「ぎゃあああああ!」

大和は天宮を抱きかかえ悲鳴を上げた。

しかし、大和は悲鳴を上げながらも五本の刃を、ひよいひよいと軽く躲していく。

「は？」

菅原は戸惑いの声を上げる。

五本の刃はその勢いのまま奥の壁に激突しもうとうと土煙をあげた。大和は走り、あがった土煙の中へと飛び込み姿を消した。

大和の一連の言動と行動には協調性がまったたくといっていいほど無かった。

この映像は菅原にとつてまったく面白くないものであった。

「きさま、僕をなめているのか」

「……」

菅原の問いにどこからも声は聞こえない。

このことが更に菅原の頭に血が昇っていくのを加速させる。

「またかくれんぼかあ！ いい加減にしるおお！」

菅原は土煙が立ちこめる場所に向かい、いくつもの刃を手の先から放出していく、凶暴な破壊の音を立てながら土煙は更にもうもうと立ちこめる。

そんな中、大和達はというと

「はあ、あぶなかった」

もうすでに土煙の立つ場所から抜け出し、いまもなお、ベルトコンベアーの作業のように刃を出し続ける菅原の背後にあるでかい円柱の後ろに隠れていた。

「あいつあんなに腕振りまくっちゃって、すげえな。あいつの腕あした辺り腱鞘炎になるんじゃないかねえの」

やはり何処か余裕のある大和。

そんな大和に対して天宮は菅原に聞こえないように小さめの声で忠告する。

「そんなのん気なこといつてる場合じゃない、きみは状況がわかっているのか!？」

しかし言葉とは裏腹にその顔には先ほどまでの絶望は映っていない。

いや、むしろその目には希望が映っているのが見てとれた。

しかしまだ何処か固さのあるその表情を大和はもう少し色を付けて見たくなかった。

「あれ？ もう泣き止んじゃったの、泣き顔可愛かったのにグブツ！」

再び天宮の拳が大和の鳩尾に吸い込まれる。

「きみはバカか！？ そんなくだらない事を言っていないで早く逃げる方法を一緒に考えるんだ」

大和の思惑通り顔を真っ赤にしながら叫ぶ天宮。その顔に大和は満足したが、払った代償はかなり高めである。

「り、りようかいです」

「まったく本当にきみは　　！！」

もう少し文句を言ってもばちは当たらないだろうと、ここぞとばかりに大和の問題点を言おうとした。

だが、それよりも早急にやらなければいけないことに天宮は気づいてしまった。

「き、きみ。は、はやく私を下ろしてくれ」

この格好は恥ずかしすぎる。

「……下ろした途端に無茶したりしないよな」

急な下ろしてくれコールに何かあるのではと、疑って掛かる大和。

「そんなことしないから、早く下ろしてくれ」「……恥ずかしくてしょうがないんだ」

「え？　いま最後何て言った？」

「何でもないから、はやくしてくれ！」

天宮は手をブンブンと横に振りながら何とも恥ずかしそうに語る天宮を大和はゆっくりと床へ下ろした。

「ッ！」

「大丈夫か」

「だ、大丈夫。少し傷口に響いただけだから」

口では平気そうに言っているものの、天宮が苦痛に顔を歪め激痛が体を駆け巡っているのが大和にも簡単に見て取れた。

「そんな建前みたいのはいらぬから、ちゃんと正直に話してくれないと、二人とも助かるための作戦を考えようにも考えられないだろ」

なんとも真剣な口調で語る大和に、天宮は口元に少し笑みを浮かべる。

「緊張する場面なのにふざけた事を言ったり、おちゃらけていると思つたら、急にそんな顔をしたり、きみは本当にわからないな」

「わかつて、わからなくても別にいい。俺のすることはただ一つ……お前を助けることだけだからな」

大和のその言葉とともに天宮は笑い出す。

「ふふっふふふ。きみ、よく恥ずかしげもなくそんな言葉が出せるな」

「なに！ いまのはかつこいい感じになる予定だったのに！！」

天宮の予想外？ の笑顔に大和はよほどショックだったようで頭を抱えてしまった。

そんな大和の姿がおかしくて天宮は更に笑い始める。

先ほどまでの恐怖は、絶望は、苦しみは、痛みは、簡単に何処かへ飛んでってしまった。

変な感じだ、後ろでは怒りに身を任せた激しい轟音が聞こえ、あたりには死体のような人形が散乱している。

いまだ絶望的な状況のはずなのに何故だか何とかなる。いや、何とかしてしまうといったほうが正しいか。とにかくそんな気分させるには十分なほどの希望を『目の前の男』からは感じた。

そんな希望にあふれる男は天宮に提案する。

「一つ作戦を思いついたんだけど、この作戦を実行するには俺の秘密を話すことになるんだけど別にいいよな」

それだけというと大和はおもむろに着ていたシャツを脱ぎ始める。

「なっ……ななっ!!」

そんな様子の大和に、恥ずかしそうにしながらも、本日三度目になる天宮の拳が綺麗に吸い込まれていった。

|| || || || || || || || || ||

「があああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

絶叫がこだまする、その叫びの意味するが『怒り』であることは明白だった。

その叫びの主は自分が作り上げた瓦礫を見ながら吼える。

「どこ行きやがった! あのクソガキ共!!」

菅原の怒りは頂点へと到達する。

「アハアハハハハハ」

菅原は笑う、狂ったように笑う、だがその言葉とは裏腹に顔は憤怒の表情を見せる。

「アハハハハハハハハハハハ」

「さつきから、アハハ、アハハうるせえぞサイコ野郎。お前はテレビ通販のサクラか!」

気づくと菅原の後ろに少年が立っていた。

菅原はそいつに怒りを覚える。この少年が何なのかはさっぱりわからない……が、大和こいつが来てから菅原の思い描いていたシナリオは幾度と無く外れていく。

本当ならばあの少女はとうに殺していただろうし、逃げたガキも真こいつっ二つになっっているはずだった……なのに、大和こいつのせいでガキはおろか少女までも殺し損ねている。

非常に腹ただしい、いらつく、むかつく、殺したい。

だからこそ菅原は笑う、嬉しそうに笑う。

笑顔の理由は簡単、大和を殺せば全てにかたがつく大和さえ殺せれば。

「その顔、もしかしてお前、俺さえ殺せば後は全てOKだと思ってるだろ」

大和の確信をついた言葉に菅原の顔つきが変わる。

「その顔は凶星ってことでいいんだよな」

歩きながら大和は菅原との距離を一步一步詰めながら話を続ける。

「だとしたらお前は大きな勘違いをしてる。俺は『普通の者』だ。

俺には何の『異能力』もありやしねえよ」

そういうと大和は足をピタリと止め、菅原を観察するように見回す。

菅原は目の前にいる大和の行動が理解できず、少しだけ距離を取ろうと後ろに下がろうとしたその時、大和は口を開く。

「あんたいま、俺と距離を取ろうとしてるだろ」

大和が自分の行動を先読みした事に菅原は少しながらも驚きの表情を表す。

そんな菅原の表情などお構いなしに大和は話を続ける。

「さつき、俺には何の異能力も無いっていったけど、それは単に俺が『普通の者』だっていう意味であって、何も出来ないっつー意味じゃない。俺は『普通の者』であって『普通の者』じゃあないんだよ」

大和の言葉の意味がさっぱり掴めていない菅原は大和に対しての怒りをさらに強めていく。

「つまりのところ、何が言いたいんだあ！」

菅原の絶叫を気にも留めず、大和はニヤリと笑みをこぼしながら告げる。

試合開始の合図を

「つまりは、お前に勝てるってことだよ！」

話が終わった途端に菅原のに向かって駆け出す大和。

大和の行動に虚を突かれた菅原だが、その後、何とも楽しそうに笑い大和に向かって自らの刃を解き放つ。

「僕に勝つ？ 冗談にしても笑えねえぞ！」

菅原の刃は指に沿った形で綺麗に五枚作り出され、大和を切り刻もうと獰猛に襲い掛かる。

「！」

大和はなぎ払うように迫り来る五枚の刃に対して地面と頭との距離を一気に縮め、何とかやり過ぎす。パリりと自らの髪の毛が数本落ちていくのが分かる。

この状況、普通の人ならば危なかったと何とか生き延びたと思うだろう、だが大和は笑う、上出来だと自分を褒める。

いままで幾度と無く、おっさんの修行に耐えてきたが、実践は『普通の者』のそれも町の不良程度にしか相手にしたことは無かった。『異能力者』戦うのはこの前の雑魚が初めてであった。だからこそ大和は笑う、自分の力が少しでも通じることが嬉しくて堪らない、自分の生きてきた道が少しでも今の自分を生成しているのだと思えたことが、顔の笑みを止められない。

大和は菅原の体だけを見ていた、菅原の一挙手一投足に体全身の神経を集中させる。

その間も菅原は斬撃を止める事はない。しかし大和はその全てをギリギリで躲して前へと、菅原の元へと、足を出して行く。

「このクソ野郎！ ちょこまかとしやがって、とつとと死ねよおおおおお！！」

咆哮とともに菅原の周りに何十枚もの刃が生成された、形も大きさもバラバラな、それらだが切るといふことに精通している物であることは簡単に窺えた。

（な！ あの刃は手の指だけじゃなくて何処からでも何枚でも作れんのかよ！！）

大和は菅原に向かう足に急ブレーキを掛ける。

「さあ〜て、お次はいよいよ、皆さんお待ちかねの頸切りショーです！！」

地下に笑いがこだまする。狂気の笑いがこだまする。

狂気を中心に居る人物は手の平に凶器を作り出す。己が喜びを満たすため。

その人物は言う。

「痛がつてるところ悪いが、最後に何か言い残した事はあるかい」

「腕が……腕が」

大和はうずくまったまま動こうとしない、菅原の言葉もまったく届いていないようだ。

「なんだよ。気分下がるな、いまからもっと面白いことがあるのにさあー！」

菅原の調子は最高潮に達する。

「僕のために死ぬよおおおおおおおおおおお！！」

菅原は今までの経験上でもっとも頸を切りやすい形を大きさを創造する。

そいつは大和の頸へといま放たれた。

獰猛に狂暴に獰悪に。

大和の頸を狙っていく。

パン！ 風船の割れたような音が響いた。

「は？」

菅原はまるで気の抜けた声を上げる。

菅原は自分の目を信じられなかった。菅原の見る映像はそれほどまでに信じられない物であった。

信じられない者は言う。

「最後に言い残したことがあるかって？ 後方に暴風注意報発令中だよ」

いくら殺そうとした人間が生きていたからといって、いくら頸を落とそうとしたのに落ちなかったからといって。

後方。暴風。注意報。この情報だけで菅原が即座に振り返るには

十分だった。

「！！！」

だれもない。

大和の声が響く。

「あ！ すまねえ。後方じゃなくて上方だったわ」

「しまっ！」

菅原はすぐさま上方に腕を振り斬撃を飛ばす。

だれもない。

「全部ウソだボケ！」

大和の笑いながらの発現に菅原は怒りを露にする。

「てめえ　　！！！」

大和の方へ振り向いたとき、目の前に一人の少女が立っていた。

その少女の右手は何かに包まれていた。

「おかえしだ」

それが一体何なのかを知ったとき、菅原はとてつもない衝撃で吹き飛ばされた。

第十話 倒壊するとき

「どうだ天宮、俺の演技。有名俳優もびっくりの演技だったろう」
少年は自分の目の前に立つ少女に笑いながら話す。

「そうかな、相変わらずきみの演技は、深さの無い、安い印象しか受けないのだが」

「ひどい！ こちら演技に真実味を出すためにそこに落ちてる小道具以外にも、少し肩を切って血まで流したのに！！」

「切ったのではなくて、切られた。が正解では？」

「そういうと天宮は大和に右手を差し出した。」

大和はその手を右手で握り返し起き上がる。

「しかし良く小道具こんなもので菅原を騙す事ができたものだ」

天宮は近くに落ちていた腕の人形を拾った。

「人間は、プラスにしろマイナスにしろ一つの感情にだけ縛られているときは冷静な判断力を失うもんだ。くわえてこの地下は普通よりも薄暗いし、何よりも俺の名演技があいつの目を曇らせたんだな」

「名演技……ね」

天宮は何ともいえない表情で咳く。

「本当に名演技のはず……だ」

大和は自信なさ気に答えた。

「そ……それよりもだ」

天宮は大和が少し落ち込んでいることに負い目を感じずぐさま話を切り替えた。

「菅原をどうしようか。私の傷では奴を風で運ぶことは不可能だろうし、きみに運ばせるには危険すぎる。一体どうしたら……」

「どうということだあああああ！！」

突然の声に大和と天宮は同時に振り返る。

そこには菅原が立っていた。

「おいおい『風の弾』を食らったのにまだ立てんのかよ」

大和はありえない状況について笑ってしまった。

天宮は菅原の顔を見つめ臨戦態勢に入っている。

大和は菅原に話しかける。

「何か聞きたいことがあると思うんだけど、なにを聞きたいんだ」

平然と自分を殺そうとしたものに話しかける。

菅原はそんな大和の余裕が気に食わない。

「アアアアア！」

腕を強く振るい刃を放つ。

「無駄」

大和は一步前に立ち刃と天宮との間に割って入る。

パン！

音とともに菅原の作った刃は綺麗に無くなった。

「なんでだ！ このクソ野郎。何が普通の者だ。僕を騙したな！」

菅原は再度見た現象に声を張り上げた。

「別に騙してなんかねえよ、俺は本当に普通の者だ。だけど俺には

ちよつとした秘密があるのも本当だ」

「秘密だと」

大和の答えに訝しげな顔をする菅原。

「俺の胸には一風変わった物が埋まっててな、黒い石なんだが……」

『ブラックストーン』
「始まりの石」て言えば分かるか？」

その単語とともに菅原の顔つきが変わる。

「『始まりの石』……この世に異能力ちからをもたらしした隕石のことか」

「おお！ 流石に名前を出せば分かるか、まあいまだとき小学生でも

知ってる話だ。で、俺の胸にはその『始まりの石』の欠片が埋まっ

てるんだよ」

大和の発言を信じられないと言った顔で見る菅原。

だってそつだ、話によれば『始まりの石』は

『異能力者の発現と同時に消滅したという話だが』
アブノーマル

「別に信じようと信じまいと関係ない。ただ俺の言ってる事は真実

だ……そんなもってこの石にはある特殊な力が宿ってる」

ここまで来ると大和の話したいことが菅原にも見えてきた。

「その石が僕の異能力を消したとでも」

菅原は大和の話を半信半疑で聞いている。それもそのはずだ、無くなつたと囁かれている『始まりの石』が発見されたという話も無ければ、そのような『特殊な力』も聞いたことが無い。

「その顔、俺の話を信じてないだろ、だったら俺の話がウソだったとして、お前の今の状況はどう説明する気だ」

大和の言葉に菅原は反論を出せなかった。

「俺の胸に埋まっているこの『石ころ』は、この世界に住む全ての^{アブノーマル}異能力者たちの異能力を一日に五回だけ消し去る『力』なんだよ」

「ばか！　なんで使える回数まで教えてしまっんだ！」

「え！　ダメだった!？」

天宮の突然の怒号に、大和はビクリとし驚き。そんな大和の反応に天宮はため息をつく。

「五回……ずいぶんちやっちい力だなお客様！」

それを聞いた菅原は笑い出す。

「てことはその女を助けるときと、自分の頸を守るとき、そして今。つまりお前はあと二回しか僕の攻撃を防げないってことだ!!」

その言葉とともに菅原は大和達に向かっていま一度、刃を放つ。

それを見た大和は前に駆け出す。

「やめるんだ！　きみが菅原の懐に飛び込むまでには三発以上当たってしまう!!」

そんな天宮の忠告も無視して大和は前へと駆け出す。

パン！

「一発目！」

菅原は楽しそうにまた刃を生成し大和に振り下ろす。

それでも大和は避けずに菅原のもとへと更に加速する。

パン！　振り下ろされた刃は粉々に砕け散り消え去る。

「二発目！」

菅原は最後の刃を生成する。頸切りシヨ一のファイナーレを飾るために。

大和は足を前に出す、全速力で前に出す。それはとてつもない早さだ。

だがしかし、あと一步足りない。

「さあ！ これで幕切れだ！！」
ファイナーレ

「やめろ！」

天宮の声が地下に響く。

そんな声を気にもとめず、菅原は右手に刃を生成、大和の頸を刈り取るうと右腕を横に振った。

パン！

鳴るはずの無い音が鳴る。

天宮と菅原の顔が驚きが変わる。

ただ一人、この事態になることを知っていた少年だけは、力を込めた右腕で菅原の胸を打ち抜く。

ドグツ！ 低く太鼓を鳴らしたような音が響いた。

「ガツ！」

菅原は後ろに飛ばされると、その場でうずくまる。

「ガハツ！ ゲホツゲホツ！！」

痛みよりも驚きが先行する。なんで？

憎しみよりも驚きが先行する。何故？

「な、なんで」

それは天宮も同じであった。

大和は笑いながら二人の問いかけに答える。

「俺の言っていることが、すべて正しいわけが無いだろ。俺の力の使える回数が五回ってというのは真っ赤なウソだ」

「なんでそんな嘘を？」

天宮はさらに大和に対して問う。

大和はうずくまる菅原を見下ろしながら、天宮の質問に答える。

「ん？ さっき一緒に天宮と作戦会議したよな」

「ああ、きみが急に服を脱ぎ始めたときのことだな」

「その言い方はあらぬ誤解を生む気がするけど、まあいいや。俺は最初、俺の『力』に回数制限があるなんて話さなかったよな」

「そうだな、きみが回数制限があると話し始めたのは、私が菅原の異能力ちからに対してわかつていることを話し始めたときだ」

天宮は作戦会議のことを何とか思い出しながら話す。

あの作戦会議は最初のインパクトが強すぎてどうもすっかりとは思いつかない。

「そう、天宮が話してくれたこいつの異能力だ」

大和はうづくまる菅原を見ながら話す。

「菅原の異能力の中で峰打ちっていう能力があるって言ってたよな。そこで俺はピンときた。切るだけならたいした硬度も必要じゃない。まあ紙なんかでも使い方によっちゃ材木なんかも簡単に切れるんだしな、だが峰打ちとなるとそれなりの硬度が必要だ。ダイヤモンドほどの硬度ではないにしろ、少なくとも人を本気で叩いても壊れない程度の硬度がな」

大和の話を組み立てれば簡単に答えは解けた。

「つまりきみは菅原が異能力を攻撃だけでなく、その硬度をもって防御にも使えるのではと考えたのか」

「そういうこと。さすが天宮だ」

天宮はコクリと頷くが何とも納得のいかない表情をする。

「たしかに、菅原が私の攻撃を防御し立ち上がってきたとき、いや実際立ち上がってきたわけだが。その時にきみの回数制限の話はかなり有効だ。五回だと信じ込ませ、回数を減らすことだけを考えさせ、その話が真実か嘘かの考え以前にさせる。素直にすごいと思うんだけど、なんで私にまで嘘を付いたんだ！」

天宮は心「配をして損した」と膨れている。

そんな天宮に謝りつつ、ほぼ勝ちが決まった状況の大和。

だが、その真剣な表情を崩さない。

まっすぐとした目でうづくまる菅原を睨みつける。

「で……どうする。俺を倒せなかったんだし、お前の負けは決まったようなものだと思うんだけど」

「僕のまけ？ ……………くくくく、くははははははは。…………負けなどいない！」

菅原は立ち上がり、自分の周りに無数の刃を生成する。

「…………そんなに作ってどうするんだ、俺に異能力は効かないんだぞ？」

そう言いながらも大和の脳裏には、いやな予感が駆け巡る。

「たしかにお客様には僕の異能力は効かないらしい。くくくははははははははは。だからさ…………こうするんだよ！」

菅原は無数の刃を切り一面に撒き散らす。

ドガツガガツガツガガガガ！

刃のあたる先々で爆発が起きる。

その数、その大きさ、その威力。

どれをとつても、導き出される答えは一つ。

グラグラと博物館全体が揺れるのを感じる。

大和は叫ぶ。

「天宮！ まずい、とつとつこの場所から離れるぞ！！」

「わかってる！」

天宮と大和はとつさに出口である階段に向かって全速力で駆け出す。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ガラガラと音を立て天井から大小様々な破片が落ちてくる。

「くそ！ 本当にこの博物館ごと潰す気かよ！」

「そんなことを言っている間に少しでもあの階段まで走れ！」

「分かっているけど

「！」

ビュビュビュビュビュ！

大和の眼前から赤黒いものがこちらに向かってくる。

「ッ！！」

大和はギョツとしながらもそれをなんとか躲す。

「大丈夫かきみ　　！」
ギンツ！」

横から頸を狙って出てきた女にたいして、天宮は周囲に円状の風のシールドを作り、それを防ぐ。

女は天宮のシールドを破れずに、ズサササ！と靴底を地面と摺りながらそのまま天宮達と距離を取る。

「はあ、はあ、ったく急にしゃしゃり出てきやがって、誰なんだよ？」

「菅原の仲間で、霧崎という名前の菅原と同じような異能力を使う女性だ」

大和の問いに対して後ろから答えが返ってきた。

「それで、そいつが何でまたこんな場面で出て来るんだよ」

「先程、私が気絶させたんだが、この大きな揺れで目を覚ましたらしい」

「なるほどな。……それより大丈夫か？　天宮」

大和は自分の後ろに立つ少女に声を返す。

「私は大丈夫だ」

天宮は痛む傷口を見つめながらも大和に返した。

「惜しかったね、もう少しだったのに」

大和達の話をとぎりつつ、いつの間にか目の前の女の隣に菅原が立つ。

「おいおい、こんなときまで邪魔してくんのか、この地下室が落ちたら、お前らもただじゃすまねえぞ」

大和は笑っているが、内心ヒヤリとする。

自分達の立ち居地の悪さが浮き彫りになる、大和達の前方には人を切り裂くことが大好きな人間二人に、唯一の出口である階段がある。

「お前らもただでは済まない……か。たしかにこの地下室に上の博物館が落ちてくれば、僕も含めここにいる全員が死ぬだろう。お客様の言うその通りだ」

まずい。大和の正直な感想だ。

(あいつが俺たちのことをお客様と呼ぶときは、自分の置かれている状況を有利だと判断したときだけ)

大和の考えは的中する。

「だからこそ僕はここで暇させてもらうよ。お客様方を切れなかつたのは残念だけど」

それだけ言うと、菅原は大和達に背を向け階段の方へと歩いてゆく。

「あ、一つだけ言わせて貰うと僕が階段を使ったあとは、壊させてもらうので、せいぜい悔しんで死んでいけ!」

菅原は自分の言葉が終わると同時に笑い出す。

大和はそんな菅原の言葉を聞いて疑問が生まれる。

「おい! 自分が使った後は壊すって、目の前にいるお前の仲間はどうすんだよ」

大和の言葉を聞くと菅原の動きがピタリと止まった。

「仲間……くくくはははははははははは!」

菅原は笑う、大和の言葉に最高のギヤグを見出す。

「はっはっははは……仲間なんて僕にはいない。そいつはペットだ、従順な僕のペットだよ!」

菅原はこちらを一度も見ずに階段へと歩いていく。

床が岩と岩とが擦こすれる様な体全体に響く音を感じ上からは瓦礫が落ちてくる部屋に、仲間を置いて菅原は平然と歩いていく。

何も引かれるものがないように、燃えるごみを捨てて自分の家へと帰っていくように。

「させるか!」

そんな状況をただ見ているわけには行かないと天宮が菅原に向かって駆け出す。

ブオン! その駆け出しを阻止するように霧崎が天宮と菅原との間に入る。

「行け! 天宮!」

大和が更に霧崎と天宮の間に割って入り、落ちていた天井の破片を右手で掴み、霧崎に投げつける。

霧崎は大和の投げた石を右手で切り裂く。その間に天宮は霧崎を通り過ぎ、菅原を狙う。

「少しだけ、たりないな」

菅原は自分のもとへと向かってくる天宮を見ながらそう呟くと、階段の入口の天井に向けて刃を放出する。その刃は飛びながら五つに別れて、的確に階段の入口部分の天井だけが落ちるように切り裂かれる。

「はあああッ！」

天宮が風の鞭を生成するもその鞭は菅原に届く前に、多数の瓦礫によって阻まれる。

そのため天宮は風を右手に圧縮させるが。

「させない」

霧崎の斬撃を横に転がって避け体勢を整える天宮。

「邪魔をするな！ あなたもこのままでは天井に潰されて死ぬんだぞ」

天宮の問いかけに霧崎は少しも考えるそぶりを見せずに笑みをこぼす。

「死ぬ？ それの何がいけないの？ 私はご主人様のために生まれたの、だからご主人様のために死ぬのは当然でしょ」

なんのためらいも無く語る霧崎、たぶん彼女の本心からでた言葉なのだろう。

「まったく質たちの悪い！」

天宮は思いつきり侮蔑の表情を見せる。

「ああ、質が悪いのはものすごく分かった」

何時の間にか大和が天宮の横に立っている。

どうやら天宮と霧崎が会話している間にこっそりと天宮のほうへ回ってきたらしい。

「！ きみは本当に行動が早いな……」

天宮は呆れたように感心している。

「なあ天宮。さっきの防護壁みたいので、落ちてくる天井をガードできないのか？」

「分からないな、これほど大きな物を風壁ふうへきで守ったことはないし、どちらにせよ。今の状態では全力の風壁を作るためにも、集中する時間が欲しいな」

「なら、あの女は俺に任せて、天宮は全力で力を溜めといてくれ」
「きみひとりには」

「そんなこと言っている場合じゃないだろ。どっちにしるあの女を倒したとしても、落ちてくる天井を防げなかつたら俺らは死ぬんだし。わかつたらとつと力を溜めとけ」

「……………わかつた」

少し考えて、しぶしぶ了解する天宮。

すると天宮は両手を広げて何かを呟き始めた。

フワツ。やわらかい風が天宮の周りに流れる。

その風は何とも優しく、守るといふ天宮の優しさが伝わってくる気がする。

「頼むぞ天宮」

大和の言葉に頷きで返す天宮。その頷きをみて大和は振り返る。

正面には不適に笑う不気味な女、はつきり思う。最高に不快だ。

大和は目の前に立つ女に自分の不快をぶつけてみる。

「おい、あんた。たしか霧崎とか言ったっけ、あんたは何で菅原あんなやっを守る？ あいつはあんたにとつてそれほど大切なモノなのか？」

「もちろん大切に決まってるでしょう！ 私にこんなにおもしろい居場所をくれた！ 私に人を切り殺す喜びを与えてくれた！ 私にこんなにも楽しい『異能力ちから』を与えてくれた！」

霧崎の言葉には恐怖を感じない、むしろ喜びすら取れる、彼女にとつて死は特別な物ではなく、ある行動の結果でしかないらしい。

「本当に質の悪い」

そんな霧崎の言葉に怒りの表情を見せる大和、だがその表情はま

「男女平等だ！ このバカ野郎！」

大和は溜めに溜めた力を放出する。

拳からでは無く脚の先から。

ストツ！ 大和の攻撃が霧崎の腹部に吸い込まれる。

顔に拳がくると読んでいた霧崎は、予想外の場所からの攻撃に口から飛沫を撒き散らしながら吹き飛び、壁に激突する。

「まったく、何でもかんでも拳がくると思ったら大間違いだ！」

大和は伸ばしたままの脚を下げ、霧崎の顔を見ながらなんとも面倒くさそうに吐き捨てる。

「きみ！ 急いで此方に来い時間が無い、崩れるぞ！！！」

大和は天宮のほうへと、大きな荷物を引きずりながら走る。

壁が崩れる。

天井が落ちる。

博物館が……つぶれる。

第十一話 少女の涙と少年の叫び

「大和さん!! 天宮さん!!」

少年は崩れかかる博物館に入ろうとする。

「な 何をやってるんだ!」

そんな少年を見た大人たちが少年を数人で抑える。

「離して下さい! まだ……まだあの中には、ぼくの友達がいるんです!!」

少年は大人たちの手の中で暴れもがくが何分子供の力で大人達を振りほどけるわけも無く、少年の進もうとする道を通そうとはしてくれない。

「はなして! はなしてよ!!」

少年の声は空しく響き、博物館はいままで聞いたことも無いような轟音を鳴らしながら崩れてゆく。

少年はその光景を見てがっくりと膝から地面に落ちてゆく。

「や……やまとさん、あまみや……さん。ぼくの……ぼくのせいで二人が……」

少年は地面に倒れこむ。それを見た大人達は少年に同情の眼差しを向ける。言葉をかけようにもなんと言えばよいのか……それほどまでに少年からは絶望感が漂ってきた。

「く、うつうつうつうつうつ」

少年は目から涙をこぼす。

悲しくて辛くてどうしようもなくて。

そんな時、声が聞こえる。

「誰がいるぞ!!」

少年はその声を聞くや否やすぐさま立ち上がり、声のした方へと走り出す。

少年は溢れ出る涙を拭く、こんな物を目から流しているのを見られたら、あの人に笑われると思ったからだ。

少年は声のした場所へとたどり着く、その顔には笑みが宿る。

少年の目線の先には引き出されようとしている人がいた。

少年は潤み霞む瞳を服の袖で拭いた。

えっ？ 少年が最初に抱いたのは引き出される人数。

一人？ 少年が次に抱いたのは引き出されている人物。

そして少年が最後に抱いたのは喻えようも無いほどの絶望。

引き出された人物が立ち上がる、そいつは少年を見つめる。

そいつは笑う、そして口パクで少年に言う。

「み・つ・け・たあ」

|||||

「何とか平気だったみたいだな」

大和は引きずっていた霧崎の脚を手から離し、ちょうどいい高さ
と大きさのコンクリートの塊を見つけて腰掛ける。

ズキッ！ 背中に痛みが走る。

（天宮の所まで走ったとき、落ちてきた破片にやられたか）

背中からポタポタと何か水滴が落ちるのがわかる。

（血が結構な量でてるな、傷口は深そうだ）

チラリと天宮を見ると天宮の腹部からもまた出血が出ている、い
ま張っている風壁で風の異能力ちからをかなり消費しているからだろうか。

大和は自分の背中ちからの傷を天宮にばれぬようにする。

（ばれたら、自分の傷を気にしないで、俺のことばっか気にするん
だろっしな）

そして、いま一番気にすべきは菅原の動向だ。
大和は考える。

（あいつは想像以上に頭が回るし、なによりプライドが高い。にも関わらず、あれほどプライドをズタズタにされたんだ。だとすれば壊れたプライドの回復があいつにとっていま最重要の行動……狙いは良太つてところか）菅原の次の行動は簡単に読めた。

早急にやらなければならないことが決まる。

「早くここから出ないと……天宮。なんかいい考えは無いか？」

「……わからない」

「その顔は、なんかあるみたいだな」

天宮は大和の言葉に驚きを隠せない。

「やっぱりな……で、どんな作戦だ？」

これ以上隠し通せないと思ったのか天宮は徐に口を開く。

「風壁が思ったよりもダメージを受けていない……この地下室は位置的に中央フロアの真下にある。あそこは休憩所だったから、あの大きなフロアに対して思った以上に総量がないのかもしれない。つまり……上においてあるものより下にあるものの方が弱く軽い。そしてなによりも、ここで発生させている風壁のお陰でこの空間には多くの風が圧縮してある」

「えーっと、つまりはどういうことだ？」

饒舌に話す天宮の意図が読めない大和は簡単に説明してくれるように懇願する。

「つまり……簡単に言うと、この風壁を解いて、その全てを再圧縮して真上に放てば、大穴を空ける事が出来るかもしれない……ということだ」

「なに？ 天宮の異能力ちからってすごすぎないか？ というかそれが出来るなら最初からそれで大穴空ければよかっただろ」

「さきほど程度の時間では圧縮する量が全然足りないし、いつ落ちてくるかもしれない破片を気にしながらでは、集中など出来なかった」

「じゃあ今なら出来るんだろ、とつとと始めてくれ」

大和は何だか元氣のない天宮に笑いながら話す。

天宮は大和のその言葉を聞いて、俯いてしまう。

「……………いやだ」

「へ？ ごめんもう一回言ってくれ」

天宮はポツリと呟く、大和は聞こえなくてももう一度と頼んでいるのではない、天宮の放った言葉が信じられなくて、もう一度と頼んだのだ。

「いやだ」

今度ははつきりとした声で拒否する天宮。

「え？ なに言って」

「いやだと言っているんだ！」

天宮は叫ぶ。

その言葉に一瞬思考の固まりかけた大和は頭を振って正氣に戻してから天宮に返す。

「急に何言ってたんだ!？」

「嫌なものはいやだ!!」

「いやだ、いやだじゃわかんねえよ、理由を言え、理由を！」

大和の叫びに天宮は声のトーンを落としながら呟くように話す。

「私は……………死神だ……………」

天宮のただならぬ変動に大和は天宮の話しを聞くことに徹する。

「ここで博物館ごと吹き飛ばすような威力の風を起せば間違いない、この狭い空間にはとつともない衝撃が巻き起こる。……………私は自分の異能力だから平気だが、きみはそうはいかない、きみはここで諸に巨大な衝撃を浴びる。そんなことになれば……………きみは死んでしまいかもしれない」

「そんなこと、わかんないだろ」

大和は天宮を落ち着かせるために、ゆっくりと答える。

「わからなくない！ 私は死神だ！ 私の大切な者は、わたしの……………」

……………私のせいでみんな死んでしまった!」

天宮は自分の思いを叫ぶ。

「私の異能力は大切な者を守ることが出来ない！！ だからこそ私はだれとも関わらない、もう失いたくないから！ もう亡くしたくないから！」

天宮は思い出す、自分が殺してしまった人のことを。

「だから私は独りで生きてきた！ それでいいとも思った！」

己が苦しみを、己が悲しみをただただ吐き出す。

「それでも……」

天宮が必死にこらえていた思いを

「それでも……できてしまった……きみは……きみは私にとって、大切な者になってしまった。大切な……友人になってしまった」

天宮が下を向く。

「だから……私には出来ない」

色んな重荷を背負い、いろんなことを天秤に計り、生きてきた少女は目から涙を零しポツリと力なく呟いた。

静寂が空間に漂う。

「だからどうした！！」

少女の告白を静かに聞いていた大和は静寂を切り裂き突然叫ぶ。

「死神？ 私が殺した？ しらねえよそんなこと！ 何が私にはできないだ！ 甘えてんじゃねえぞ！」

大和は天宮の襟首を掴み揺さ振る、天宮の涙が一時、止まる。

大和の顔には怒りが見える。

だが不思議な事にその怒りにたいしてまったくといっていいほど恐怖を感じない。

「いいかお前は死神なんかじゃねえ、お前は命を賭けてでも良太を守ろうとしたバカだ！ 他人と関わろうとしないと心に誓っても、困ってる人がいたら助けて、机を外に放つちまう大馬鹿野郎なんだよ……！」

大和の叫びは止まらない、だがその言葉一つ一つに天宮は涙する。悲しいのではない、苦しいのではない、嬉しくて嬉しくてたまらない

「でも……でもひつく！ 私は
「俺は死なねえつつつてんだろ！！」

天宮の涙は止まらない。

大和の叫びも終わらない。

「わかつたらとつとと『異能力』を使え、大切な者を殺すためじゃなく！ 大切な者を守るために！！ その『異能力』を使い切れ！！」

少年の言葉に少女は涙を零し嗚咽を交えながらも小さく頷いた。

|||||

ドドドドドドド！ とてつもない音が博物館のあたり一面に響き渡る。

「なんだ、なんだ？」

一人の少年が爆発音と博物館前の人だかりを気にする。

「どうしたの孝？」

少年の隣を歩く赤髪の少女が少年の名を呼ぶ。

「いや今日、祭りかなんかあったっけ？」

「は？ 祭りなんかこの時期あるわけ無いでしょ何言ってるの急に」

赤髪の少女が呆れ顔で少年の顔を見る。

「なんだその言い方、心底馬鹿にしたような顔しやがって、だったらこの人だかりは何なんだよ」

「新しく出来た博物館がよっぽど人気なんじゃないの？」

赤髪の少女はまったく興味なさそうに持っていたペットボトルから、スポーツドリンクをゴクゴクと飲む。

「そんなに飲んで大丈夫なのか」

「どつという意味？」

少年の訝しげな眼差しに赤髪の少女はジロリと見つめ返す。

「だから、スポーツ飲料つてのはスポーツをしてる時に飲むから良いのであって、何もしていない時に飲んだら、ただの肥満促進ドリンクだぞ」

「ふん！ たとえ肥満促進ドリンクだろうとなんだだろうと、私にはコレが必要なの！」

赤髪の少女はそう言いながら隣を歩く少年の脛すねに蹴りをかます。

少年は脛を押さえて痛がるが、そんな少年を無視して、赤髪の少女は自分達の後ろを歩く見た目小学生の高校生に話しかける。

「つばみ……さつきから何してるの？」

つばみと呼ばれた少女は、左手に持っている細長い棒から伸び出した液晶を右手でポンポンとタッチしていく。一昨日転校してきた少年が見ればまたも興奮しそうな未来がそこにはあった。

「えつとねあかちゃん。昨日教えてもらった大和つちの携帯アドレスにメールしてるんだけど返事が返ってこないんだよ」

「朝倉君も忙しいんじゃないの、年中ヒマな孝にくらべたら」

「その年中ヒマな男と休日を過ごしてるお前らは何なんだよ」

「だから、大和つちも、誘おうとしてるんでしょ！」

「お前」

少年が見た目小学生の少女にツッコミを入れようとしたとき。

ポオオオン！

二度目の音が起こる！ 今回の音は先ほどの何かが崩れたような音とは違い、明らかな爆発音である。

「爆発したぞ！」 「逃げろ！」 「危ないぞ！」 「きゃあああ

ああ！！」

人々がざわつき始める、ここでようやく少年と少女は今の音が普通とは違う状況を指し示すのだと気づく。

「朱音、つばみ、ここはやばそうだから離れよう！」

「わかったわ、つばみ！ 何してるの早く行こう！！」

つぼみは自分の携帯の画面を見る。
「大和つち……何してるのかな？」

|||||

天宮は空を見上げる、空には月が昇っている、その月は赤く血のような色をした禍々しい満月だ。その月を天宮は見上げる、吸い込まれそうになる。

いま自分がここに立つ意味がわからなかった。

(なんで私はここに?)

「ッ！」

ふと自分の腹部を見ると血が流れている。

自分の血が流れていく、普通の人ならばこの映像を見るだけで恐れを抱くのだろうが、天宮は違った。

自分の呪われた血が流れていくのだ、嬉しさに決まっている。

笑顔でその傷を眺めていると、目の前に突然、黒い川が現れた。

天宮はその黒く、底の見えない川を躊躇無く渡っていく。天宮が底を踏むたびにズブリ、ズブリと嫌な感触が足から全身に広がる。

その川の奥に進めば進むほど水位が上がっていき、膝程度までしかなかった水位は、今や胸の高さまでにもなっていた。

ガッ！ 何かに足を引っ張られる。途端、川の底が消えてなくなる。

足を引っ張る何かは、次第に強くなり天宮を川の奥へ奥へと引きずりこもつとする。

だが、天宮は足を引っ張るそれを、振りほどこうとしない、川に引きずりこまれるのをもがこうともしない。ただこうなるのが当然

だと、当たり前だと、真つ暗な水の中へと落ちていく。

「あまみ……」

自分を呼ぶ声が聞こえた気がする。だがそんなはずないと、気のせいだと思ひ込む。

「あまみや」

どうやら自分の耳は罪の意識と罪悪感とで、おかしくなってしまうたらしい。こんな人殺しの私のことなど呼ぶ人間がいるはずが無い。天宮は黒い水の中で笑った。

「あまみや」

今度はしつかりと声が聞こえた、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「あまみや！」

まただ、しかも自分を呼ぶその声は次第に大きくなっていく。

「だれ？」

その声に耳を済ませてみる。

「おい！ 天宮！！」

その声は川の上から聞こえる、自分のことを呼んでいる。川の深いところから上を見上げてみると、上に小さな光が見える、その光はユラユラと危ないようにみえて決して消えることのない光。

天宮はその光を知っていた、その光の下へ行つて見たいと思つた。天宮は自分を奈落の底へと引つ張る何かを振り払おうとする、すると足を引つ張る何かは、とてつもない力で足を引いてきた。

「ガポツ！ 無理だ……わたしには……」

「天宮！」

その声とともに光から手がでてくる、その手は天宮に差し出される。

天宮はその手を引く。

温かく、優しいその手を。

「天宮、おい！ 天宮！！ いい加減に起きろ！！」

ハッ！ つと天宮は目を覚ます。

「きみ、どうして」

「どうして？ 寝ぼけてんのか」

目の前に大和がいる、大和に天宮は抱きかかえられていた。辺りを見回すと夜になっているが、空の色は普通だし、月も血のように真っ赤ではない。周りには瓦礫の山が積んであり、サークル状に高低差ができて自分の居る所が一番低くなっていた。

「私は一体なにを」

「なにをって、上にある瓦礫を吹っ飛ばしたら、お前が、急に気絶しちまったんだよ」

天宮が大和の話しを聞いて天宮は途端にあわてだす。

「私はどれくらい気絶してた！ きみは大丈夫なのか！？ あの少年は！ 少年ははどうなったんだ！」

「ええい！ いっぺんに色々聞くな、頭バクつちまうだろうが！」
そういって大和は抱きかかえていた天宮の上半身だけ起こし、手を離す。

「とりあえず順番に説明するぞ。天宮が気絶してから今ちょうど三分だ、それで次、俺はぴんぴんしてる。んで良太は、今から助けに行くぞ！」

「なんで私を置いて良太を助けにいかなかった！」

天宮の言葉に大和は心底呆れた顔を見せる。

「はあ。終わつちまったことグダグダ言っでないでとっとと行くぞ」
「な！！！」

何とも納得いかない表情をする天宮に大和は笑う、それを見た天宮も笑う。

「ッ！」

笑ったため筋肉の硬直により腹部に痛みが走った。しかし、痛みは走ったものの、それほど痛くない。

天宮は自分の傷を確認する。

すると自分の腹部に綺麗な包帯が巻かれていた。

「これは、きみが？」

「そうだよ、傷が深かったみたいだからな、といっても傷口にでか

いバンドエイド貼って、包帯巻いただけなんだけどな」

そういうと大和は天宮の横においてあった小さな平べったいポーチを腰のベルトにつける。良く見ると大和の右肩にも包帯が巻かれている

「きみは、いつもそんなものを持っているのか？」

「ん、まあこつちにくる前は生傷が絶えなかつたからな」

大和は天宮の顔を見て笑いながら話す。

「さて、そろそろ行くか」

大和は背筋を伸ばして立ち上がる。

「きみはあの少年の居場所がわかるのか？」

天宮は大和に重要な質問をする。

「わかるさ、この近くで切り裂き魔の事件が発生している場所があるんだろ」

大和は友人達から聞いたこと、良太から聞いたことを思い出す。

ゴーストタウン
「廃墟か」

天宮は大和の出した簡単なクイズの答えを言う。

「そのとおり、わかつたら行くぞ」

大和は手を差し出す。

その手は光に溢れる、頼りないような、いつでも消えてしまいうな光なのに、その奥は消える事のない強い光が宿っているように天宮は感じた。

そんな光に触れていいのか迷った天宮だが、その光はそんな思いも簡単に消し去ってしまう。

「じゃあとつとと、俺たちの『力』で囚われの少年を助けに行きますか！」

少年の手を取り立ち上がる少女。

心は晴れやかで軽い。

そして大和は走りだす。

天宮もそんな大和についていこうとするのだが、

「！」

天宮の動きが止まる。

「どうした？」

大和が天宮の急停止に驚いていると。

「霧崎はどこだ、彼女がまたあそこで暴れたら大変な事になる！」

「ああそれなら大丈夫、あの女も天宮と一緒に治療しといたから
それだけ言うと大和はまた走り出す。

笑いながら走る大和に並走しつつも意図が理解できず、頭の上に
？を浮かべる天宮。

|||||

霧崎はもがいていた、包帯でぐるぐる巻きにされながら、体どこ
ろか指一本動かせない、力を使おうにも、体が動かさなければ斬撃
を出す事は難しい。彼女の異能力は動かしたときに斬撃が出る制約
がある、しかし彼女自身その制約はいま始めて知った事なのだが。

だが異能力が使えないからといってあきらめたわけではない、こ
うしてもがいていれば誰か心の優しい馬鹿が包帯をほどいてくれる
に決まっている。

その瞬間を待てばいい、ゆっくりと獲物を狙うように。

しかし待てども待てども誰も包帯を外してくれる者はいない。

それは彼女の首から提げてある看板が理由なのだろう。

看板には血でこう書かれている。

『プレイ中につき、邪魔しないでください』

第十二話 「ありがとう」「どついたしまして」

良太は座り込んでいた、もう走れない、走りたくない。

これ以上は立つ事も出来ない、なんでこうなってしまったのかを考える、なんで大和さんと天宮さんが来ないのかを考える、これから自分はどうなってしまうのかを考える。これからどうすればいいんだろうと考える。

その答えのいきつく先は、どれも最悪なものばかり。

「はあ、はあ、はあ」

気が付くと手足がブルブルと震えている。

この震えは疲れからくるものかそれとも、いまもつとも感じている恐怖からくるものか。

コンコンコンコン。

足音が聞こえる、その足音はだんだんこちらに近づいてくる。

嫌な足音だ、気持ちの悪い吐き気のする足跡。

良太の心臓が跳ね上がる。

良太は必死に動きたがらない体を、無理やり起こして廃墟になったビルの一つへと飛び込んだ。

コンコンコンコン。

足音はまだ聞こえる。

良太は必死に息を殺した。

足音が近づく。

「.....」
長い、とてつもないほど長く感じる。
時間の感覚が麻痺する、一分か一時間かいや一日が終わった気さえする。

何も考えない、何も考えられない。

「……………」
ふと我に返ると足音がしない、あたりは静けさで満ちている。
「ははっははは」

良太は乾いた笑いをひねり出す。落ち着こうと、恐怖を取り除こうと頬を吊り上げ、声をひねり出し喉を動かして、笑おうとする。その時、ビルの壁が崩れる。

「やっつと見つけたよ！」
そこから現れたのは凶悪な笑み。
「ヒッ！」

良太はその笑みから逃れようとビルの外へ駆け出す。だが疲れ切った体は思うようには動かない、良太は何とかビルの外へ飛び出したものの、その場で足がもつれ、倒れてしまう。

そんな良太を何とも楽しそうな目で見る菅原は語りだす。
「まあガキのスタミナなんてこの程度の物か」

菅原としては少し消化不良なのだろうか、楽しそうな笑みの中につまらなそうな感情を映し出す。

「これ以上伸ばしても楽しみは増えそうにないし、殺させてもらおうかあああああ！」

「うわあああああああああああああああああああ！」
ズバン！ 生成した刃で切る。

良太の頭上の壁を。

壁には大きな傷跡が残り、穴が開く。

「いやだな、男の子がそんな声上げるものじゃないよ」

良太は恐怖のあまり息ができない。

「おや？ ずいぶん苦しそうだねお客さま、どうかなさいましたか？」

菅原は笑う。

「そんな怖がった顔をしないでください、僕はただね、ただ……」
菅原は笑みを止め悲しそうに手で顔を隠す。

そして良太が希望の顔を少しだけ見せたとき凶悪な顔から手を空

ける。

「お前を！！ 八つ裂きにしたいだけだからよおおおおお
お！！！」

菅原は喜ぶ、良太の顔色がみるみる終わりへと向かう。

「まだ足りない、まだ足りない！ お前らに貰った屈辱を晴らすに
は、まだ全然足りないんだよ！」

菅原は飛沫をとばしながら良太のよりかかる壁を抉り取っていく。
ガリガリと壁が抉られていく。

良太は頭を抱え体を小さく丸める、その瞳には絶望のしずくが溜
まる。

「ほら！ どうしたんだい？ 何か言ってみろ。言ってみろおお！」
菅原は良太の首を掴み、放り投げる。

投げられた良太は、アスファルトに体ごと突っ込んでいく。
痛い。体中が痛い。

怖い。何もかもが怖い。

良太はアスファルトに突っ伏したままガタガタと震える。

そんな良太に少しは満足したのか菅原は荒れた息を整える。

「……ふう。さて、大体満足したし、もういいかな」

菅原は息を吸い込む。

「ここからは、楽しい楽しい！ 切断だああ！！！」

菅原は自分のゲームのための小道具を作るため、右手を上に掲げ
る。すると良太にとっては見たくも無い小道具が簡単に生成される。

「えへ、あは！ あは、あひゃはははは！！！」

菅原の笑い声とともに小道具はその数を増やしていく。

ギヤリギヤリギヤリ！！

気持ちの悪い音が鳴り響く。

「頸だけじゃ物足りない、体中をバラバラにしてあげるからね。安
心してくれ」

どう安心しろと言うのか。菅原の言葉には道筋や意味が存在して
いない、ただただ己の欲望を満たすためだけに良太をバラバラにし

ようとしている。

小学生の良太でさえ、目の前に立つこの男の異常性が感じられる。それが恐ろしくてたまらない。怖くてたまらない。

だからこそ少年は叫ぶ。

「助けて」

涙を溜めながら

「助けて」

震える体で

「だれか……だれか！ 助けて！！」

「助けなんか、来るはずね　　！」

パパパパパパパパパリン！

菅原の周囲を浮いていた小道具が、全て砕け散る。

ブワツ！ 風が吹いた。

良太は咄嗟に目を瞑る。

体が浮いていくような感覚が全身を駆け巡る。あまりにも唐突な現象だ、いかんとも理解しがたい現象。

しかし、良太にはこの風が、全身を駆け巡るこの感覚が、そしてなにより自分の両脇を持つこの手が、自分の目を開けさせるには十分な事柄が揃っていた。

だが少年は目を開けたことを後悔する。

目を開くと眼前に広がるのは町並み。道路があつてビルがあつて、公園のような広場も見える。

それらはまるで、ジオラマのように良太の眼前いっぱい広がる。

「うわっ！」

良太は目の前に広がる光景に驚き、体をじたばたとさせる。

「ッ！ あまり動かないでくれ、風を操って空を飛ぶのは意外と神経がいるんだ」

良太の頭上から聞きなれた声がする。

「天宮さん！」

「ッ！ だからあまり動かないでくれ、傷口が傷むんだ」
「う、ごめんなさい」

良太は体の動きを小さくして天宮を見上げる。

「それでいい。どこか怪我したところはないか？」

「僕は大丈夫。それよりも天宮さんは大丈夫なの？」

「ふふつ、自分の心配より、人の心配か。彼の性格が移りつつあるぞ」

彼という言葉に良太は嬉しくなる。が同時に、その彼がいまどこにいるのかが気になる。

「大和さんはどこ！？」

良太の言葉に天宮は答える。

「彼からの伝言でな。『ちよっくら、サイコ野朗ぶつとばすから。ジューズでも飲んで待っててくれ』だそうだ」

良太から笑みがこぼれる。天宮からも笑みがこぼれる。

「彼は本当に大ばか者だ」

|| || || || || || || || || || ||

「あの女！ どこまで邪魔をする気だ！ 降りて来い八つ裂きにしてやるっつあああ！」

菅原の声がこだまする。

その絶叫をするりと躲すように、天宮は良太を持って軽く飛んで行く。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

菅原は刃を生成して空飛ぶ天宮たちに放つが、なにぶんたいぶ距離が離れてしまっている。

菅原の刃は天宮たちに届くことなく消えてしまう。

「殺して殺る。殺して殺る。絶対に殺して殺る！」
菅原はすぐさま走り出す。

(あの傷だ、どうせ遠くまでは飛べないだろ。なら疲れて落ちてきたところを八つ裂きにしてやる。ははっははははははは！)

菅原は走る。空を飛ぶ獲物に向かって。

一瞬の希望に満ちた。最高においしそうな獲物に向かって。

「！」

菅原が走っていると、脇から突然、人影が出てきた。

その人影は菅原に、脚を横から回して蹴りをかましてきた。

菅原は咄嗟に自分の刃の峰^{みね}を蹴りと自分の体との間に生成する。

ガッ！ 何とか強烈な蹴りを防いだ後、菅原は人影との距離を取る。

「きさまああああ！」

菅原は人影が誰であるかに気づき咆哮する。

人影^{やまと}は笑う。

「ここから先は、通行止めだ。通りたかったら、人生一回やり直してくるんだな」

「あああああああああああああああああああああ！」

菅原は刃を大量に生成して、大和へと放つ。

「おんなじ攻撃を何度も何度も。食らうかよ！」

大和は落ちていた鉄パイプを拾い上げる。

大和はそれを使って自分に当たる必要最低限の刃だけを打ち落とす。

パパパパリン！ 刃は簡単に碎け散った。

「石の力を使う必要も無いんだよ」

大和は持っていた鉄パイプで自分の肩をトントンと叩きながら、簡単そうに言う。

その映像を目の当たりにした菅原は笑い出す。

「くくくくくつはっはっははははははは！ ……………このクソがきが

あ！… お前ごときに邪魔されてたまるか。せっかく手に入れたん

だ。ようやく、ようやく手に入れたんだ！ この切り裂く『異能力』を！ 人を殺せる『異能力』を！ 頸を落とす『異能力』を！ それをお前のようなクソがきに、台無しにされてたまるかあああああ！！！！」

菅原は手を横に振り指先から刃を放つ。

パリンッ！ 大和は鉄パイプを縦に振り下ろし五枚とも叩き割る。

「『異能力』……だと」

大和の表情が一変する。

空間に寒気が帯びる。

「ふざけんじゃねえぞ」

大和は怒りを露にする、先ほどまで毛ほども感じさせなかった怒りを。

「自分の好きなことだけやって手に入る『異能力』なんて、本当の『異能力』じゃねえ。『異能力』ってのはな、努力して努力して、色んな奴にどんなに酷い事を言われても、どんなに酷い事をされても、けつして折れずに自分を信じて頑張った奴が手に入れられるもんなんだ！」

大和は許せなかった。異能力を使い、自分の欲望だけを叶えるためだけに人を傷つけるこんな奴が、誰かのために、自分を信じるために『異能力』を使う『異能力者』^{アフノーマル}たちを傷つけようとしたことが、大和には許せない！

「お前みたいに笑いながら人を殺す奴が、簡単に手に入れたなんて言っつていいもんじゃねえんだよ！！」

大和は菅原を睨みながら咆哮する。

その言葉、その表情、そのどれをとっても一介の高校生が出せる代物ではない。

「お前、人を切り裂くのが好きなんだよな」

大和は足を前へと進める。

菅原はその殺気にあてられて後ずさりする。

「だったらあああああああ！」

大和は走り出す。

大和が向かっていくことに恐怖を覚える菅原は、大和の迫力に負け、まったく心の制御ができず、赤黒い刃を生成するもののコントロールできない。

「う、うわあああああああああああああ！」

刃は四方発泡へと撒き散らされる。

プツッ！ 刃の一つが大和の腿に当たる。

キンツッ！ 持っていた鉄パイプがバラバラになる。

プツン！ 大和の肩に刃が掠る。

背中がズキズキと痛みを強くする。

傷口から血が流れでる。

「てめえの腹でも切ってる！」

それでも大和は走るのを止めない。

こいつは許すことができない。

いや、許せるはずが無い！

大和は右腕に『力』をためる。

いままでこのときのために鍛えてきた己の『ちからまもる』を！

「こおのサイコ野朗がああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

ゴッオ！ 大和の『力』が菅原の顔にめり込む。

決して曲がることの無い、渾身の思いを込めた右腕が炸裂した。

「ブアッ！」

菅原は空中をグルンと回りながら飛び、地面に顔から激突する。

ぐしゃりと音が聞こえてくるような菅原の飛び込み。

「はあ。はあ。その方が……他人を切るよりよっぽど簡単だ」

床に激突し気絶している菅原にそう吐き捨てると。大和はよろよろと壁に寄りかかり、そのまま座り込んでしまう。

体中から血が溢れ出る。全身に痛みが駆け巡る。

「はあ。はあ」

大和が流れ出る血を見て、なんとかしようと思えば腰のポーチに手を掛

けようとしたとき。

「大丈夫か！」

頭上から聞きなれた声がする。

「ブワツ！ 強い風が起ると、目の前に美少女が立っている。」

「天宮。良太は大丈夫か？」

「彼なら大丈夫だ。安全な場所に連れて行き、私の知り合いに連絡してある。今頃、保護されていることだろう。霧崎も同様に確保してもらっている……そんなことより！」

少女はいまこの場所で急務な出来事を思い出す。

「私はきみに、大丈夫か？ と聞いたんだ」

「ははは。大丈夫だって、たかが太腿と肩が二箇所切れて、背中から血が出てるだけだからよ」

大和は力なく笑いながら。腰のポーチから止血のための道具を取り出して、自分の体に応急処置を施す。

「その状態のどこが大丈夫なんだ。まったく、『石の力』を使わなかったのか！？」

天宮は声を大にして怒っている。

大体の応急処置を終えた大和は気まずそうに話し出す。

「『石の力』……か。なあ天宮」

「ん？ なんだ」

「実は本当に回数制限があったって言ったら信じる？」

「なに！ 何回だったんだ！？」

「ななかい」

それを聞いた途端、天宮の顔が真っ赤になる。だれがどう見ても怒っているようだ。

「なな、つてきみは馬鹿じゃないのか！ だとしたら博物館を出たときから、きみは『石の力』を使い果たしたということか！？」

「まあそんなに怒るなよ」

「これが怒らずにいられるか！ だとしたら私はきみを……無力なきみを見捨てたことになる！」

天宮の怒りはヒートアップする。

「良太がいたあの場合はしようがなかった。それに腹を大怪我していた『アブノーマル異能力者』より、『ちから異能力』をかき消すことが出来る『普通ノーマルの者』の方が菅原としても戦いづらいだろ」

背中を怪我していたことは秘密だが。

「それでも、実際はかき消すことは出来なかったのだろう！」

「そうだけど。結果、あいつは『石の力』を恐れてたんだし。天宮よりも俺のほうが嫌な相手だと思っていたのは事実だ」

それを聞いた天宮は一瞬言葉を失い。呟くように話す。

「だけど、それでも、私はきみを見捨てて安全な場所に逃げたんだ、きみが死ぬかもしれないなかったのに、私は逃げたんだ」

天宮が落ち込んだように下を向く。

「逃げてねえよ、お前はこうして俺のとこまで戻って来ただろう。」

それにな天宮」

天宮が前を向くと大和は笑っていた。

「言ったとおり、死ななかつただろ」

笑顔でそう語る大和に天宮の顔にも思わず笑みがこぼれる。

「……ふふっ、まったくきみはどうして」

「きみじゃない」

「え？」

「きみじゃない。俺の名前は大和。朝倉大和だ」

「そ、そうだな。や、大和」

「おう。よろしくな天宮」

大和は笑う。なんとも嬉しそうに、楽しそうに。

その笑顔は不快ではなく、気味の悪いものでもない、本当に幸せになる笑顔。

その笑顔につられて天宮も笑う。なんとも綺麗に、なんとも輝いて。

「さて、天宮。そろそろ帰ろうぜ」

「馬鹿なこと言うな、そんな大怪我しているくせに、ここで待って

いれば私の知り合いが来る」

「……『ポーターライン異能力者対策部隊』か」

「な、なんで!？」

「ははは、こう見えて情報通なんぞな」

「情報通って! ……いや、きみ じゃなかった大和はこんなに巻き込んでしまったんだ。説明した方がいいに決まっているな」

天宮はの顔が暗くなる。

「いやいや、説明なんていらねえよ。……説明よりも言ってほしいことがあるんだけど」

「え、なんだ?」

「大和ステキーって言って」

天宮の顔が真っ赤に染まる、怒ってはなさそうだ。

「な……ななななな」

「はあ。とうとう言ってくれないのか、その言葉を聞くために頑張ったようなものなんだけどな」

大和がそういって肩を落とす（ふりだが）と、天宮が焦って覚悟を決める。

「え、え、……えーっと。……ごほん。……や、やまと、す、す、すて」

「あーごめんごめん。俺が悪かった!」

あまりの空気にまるで虐めているような気さえ起きてきたので、大和はすぐさま謝った。

「冗談で言っただよ。どちらかといえばもう一発鳩尾に喰らう感じで良かったんだよ」

「そ、そうなのか。すまない。私はあまり人と話したりしないから、そういったことは良くわからないんだ」

天宮はばつが悪そうに謝る。

「いやいや別にそんなに気にすんな、俺が悪かったんだから」

ふざけ半分で言っただつもりが、重たい空気になってしまったことで、今度は逆に大和が焦っていた。

「いや、大和は悪くない。悪いのは私だ。だから今からもう一度、先ほどのをやり直す」

天宮は拳を握り締め力を溜める。

「え？ ちよつと待ってなにをするの？」

「先ほど大和が言った。一発鳩尾に喰らわせる感じだ」

天宮は拳を振り上げる。

「うわわわわわ！ ちよつと待て、死んじゃう。いまそのパンチを喰らったら絶対死んじゃうって、まじでやめてくれ！」

大和はじたばたと手を横に振る。

「そ……そうなのか？」

「そうなのだよ。いや、そうなんですよ。本当に死んじゃうよ、もうダラダラだよ。ダラダラのドバドバだよ」

大和はジャスチャー付きで天宮に精一杯説明する。

「ふふつ、ふふふはは」

天宮が笑い始めた。

その光景を唾然とした表情で見る大和。

「ふふふふつ、いやごめんごめん、本当にきみはおかしな人だ……

あ

名前ではなくきみと呼んでしまったことに気づきすまなそうな顔をする天宮に、大和は笑いながら話しかける。

「別に言いにくいならきみでも、おぬしでも、そなたでも何でもいいぞ」

「そ……そんなわけにはいかない。しつかり名前で呼ばしてもらおう」

天宮は顔を平然とした顔に戻す。だがその顔にはいつかのような暗さはなく何処か少し微笑んでいるように感じる。

「これだけは言わせてくれ」

「なんだあらたまつて」

月明かりに照らされた、綺麗な満月の夜、いつの間にか霧も晴れ、どこか綺麗に見える人っこ一人居ない廃墟に、ゴーストタウン月のように美しく凜とした、本当は寂しがり屋の美少女が一人。その美少女は目の前に

座る少年に言う。

「ありがとう、大和」

少女の目の前に座る、少し変わった。それでいて太陽のような暖かさ、まっすぐな真を持った少年は言う。

「どういたしまして」

エピソード 終わりの始まり

はつきり言わしてもらおう、遅刻ギリギリ……だった。

「はあ、はあ、はあ」

だったということは……そうです。走ったよ！ がんがん走りま
したよ！！

「っ、疲れた」

死にそうだ。そういえば、背中が傷口が開くかもしれないので一週間は激しい運動はしないでくださいと医者に言われていたのを思い出した。

まあ他にも、博物館脱出の際の天宮の風によって体中のいたるところに痣ができ、今でも痛むということは内緒である。

「これ、まずいよな」

背中がズキズキと痛む。肩と太腿の傷は綺麗に切れていたためすぐにくっ付き、二日ほど経つと痛みも無くなってしまった。恐るべき王都の科学力。

天宮も同様で、綺麗に治療され、傷口も残らないとのことだった。やはり恐るべき王都の科学力。

だが、背中以外の傷だけは違う、何でも大きなガラス片にザックリといかれたらしく、治るのには一週間ほどの時間を要することだった。痣のほうは放っておけば治ると言われた。

まあ、そんなことすっかり忘れて全速力で走ってきてしまったのだが。

「どうしよう」

口ではそう言うが、内心では走っちゃったものはしょうがない、などと考えている大和。

だがこのズキズキと痛む背中をどうしようかなんて考えていると。

「おっはよお、大和っち！」

バシン！ 傷口を思いつき叩かれた。

犯人はすぐに分かる、だが今はそれどころではない。

「グッ」

大和は前に倒れこむ。その状況に一番驚いたのは叩いた本人である。

「や、大和っち！ 大丈夫！？ どうしたの！？ そんなにつぼみの手が痛かったの！？」

半分泣きそうな目でこちらを覗いてくるつぼみに大和は何とか平気さを装う。

「だ……だいじょうぶ。今朝、階段から落ちて背中を打ったところで、ちよつと痛かったただけだから」

平気さは装えてそうにない。

「ごめんね。本当にごめんね大和っち！」

ついに泣き出してしまふ、つぼみ。

（俺も泣きたい）

半泣きの大和。立ち上がるには少しの時間を要した。

|| || || || || || || || || || ||

暗く薄気味悪い空間に長いテーブルが置いてある。そのテーブルの端にはイスがズラリと並んでおり、男、女、子供が、合わせて八人ほど座り、テーブルの上の豪華な食事を食べている。

「菅原がやられた？」

突然、紳士調の男が言った。

「菅原つてだあれ？」

かわいらしい子供の声が出た。

「私が可愛がってたジャックのことよ」

妖艶な響きのある声が話した。

「ああ！ あのお薬を試したジャックちゃんのことかあ」

「はん！ まあた、そこらにいる雑魚とっ捕まえて実験したのか。いい加減もう少しまともな奴を見つけてくることだな」

先程とは別の男がイラついた声で女を責め立てる。

「あら、ジャックはマシなほうだったのよ。薬の副作用にも打ち勝っていたし、何より自分の欲望のためなら、どんなことも厭わない人格だったしね。使いようによっては、とても有能な駒だったのよ。女はイラついている男を更にイラつかせる甘い声で吐く。」

「チツ！！ イラつく野郎だぜ」

「あら、私は野郎じゃないわ、女だもの」

「上等じゃねえか！ そんなに殺されてえなら、いまここで殺って殺るよ！」

男は机の上の食事の入った食器を机の下にぶちまける。この男は、少々切れやすい質のようだ。

「殺る？ 貴方程度のゴロツキが私を殺れるわけないでしょ」

女は男の怒りを気にもとめずにフォークで食事を口に運んでいく

「てめええええ！」

男の怒りは頂点に達し、今にも飛び掛かろうとする。

「喧嘩なら外でやってくれ、うるさくてかなわん」

初老の男がゆっくりとした、それでいて怒りの灯る声で話を遮る。

「うるせえぞじじい！ てめえも殺されてえのか！！」

パキン！ 初老の男が持っていたスプーンが縦に割れる。

「図に乗るなよ餓鬼、だれにでも噛み付いてると、いつか後悔することになるぞ」

初老の男はそれまでの優しげな瞳を見開き、蛇のような目で、怒りを露にする男をジロリと見つめる。その目は狩人の目のようだ。

「だめだよお、二人とも。食事は楽しくお行儀良く食べないとお」

先程の子供と瓜二つの声だが、まったく別の場所から聞こえる。

「うるせえぞ糞ガキ！ 奴隷の分際で、でしゃばってんじゃねえぞ」

男の怒りは辺り構わず撒き散らされていった。

「なあに？ そんなに死にたいの」

子供の目の色が変わる。

「ああいいぜ！ テメエらまとめてかかって来い！！ おめえらみ
たいな雑魚！ 一秒で潰してやるぜえ！！」

それぞれが臨戦態勢に入る。

「いい加減にしる」

紳士調の男が放った一声で臨戦態勢に入っていた者達や、まった
く気にも留めずに食事を取っていた者達までもがビクリと動きを止
める。

「今は食事中だ、殺し合いなら外でやれ。それになガンロツク、お
前がいま割った皿はな、我らの主が特別にお出した、歴史的価値
の高いお気に入りのお皿だ。貴様が吼えるのは勝手だがそれで主の皿
を勝手に壊して良い道理は無いはずだが」

「は、は、は、は、は、は」

ガンロツクと呼ばれた先程まで怒りを露にしていた男が、息を切
らし始める。感情の色は恐怖。その恐怖は目の前に座る紳士調の男
が怒りを見せ始めているからか、それとも主のお気に入りのお皿を割
ってしまったからか。

「す すいません尾張さん」

「私に謝ってもしょうがない、謝るのなら、我らが主に謝るのだな」
その言葉を聞きガンロツクと呼ばれた男の顔色がさらに青くなる。

「あーあ、かわいそお」

「ぼくに殺された方がマシだったかもねえ」

子供たちの嫌味も顔を青くして生気を無くしている男には聞こえ
ていないようだ。

五月蠅い男が静かになった所で、紳士調の男は、妖艶な雰囲気
のする女に話しかける。

「ところで、菅原がやられたとのことだったが、誰にやられたのか
分かっているのか？」

「もちろん、分かっているわ。『異能力者対策部隊』の『烈風の破壊者』と呼ばれているまだ高校生程度の女の子よ」

「『烈風の破壊者』？」

「そう。なんでも風を自由自在に操るそうよ」

「その『烈風の破壊者』の詳しい情報は？」

「わからないわ。私の駒じゃ、『異能力者対策部隊』の隊員たちの動きはわかってても、詳しい情報はわからないのよ」

妖艶の女の話しを聞きながら紳士調の男はゆっくりと思い出して話す。

「そうか……。しかし、私も菅原に合ったことがあるが、アイツは少々性格が歪んでいる所はあったものの、実力的には高いほうだったと思ったのだが」

「そうねえ、私もそう思ったから話に出したんだけど」

「『烈風の破壊者』か……。我々だけではなく、『異能力者対策部隊』も上々の駒を増やしているらしい」

紳士調の男は話を続ける。

「私の部下を一人ぶつけてみよう」

「貴方の部下を……。それはちよつと可哀相じゃないかしら」

「でる杭は早めに打たなければならぬ。どちらにせよ『殺す』以外の選択肢などないのだから」

そう言うのと、紳士調の男は立ち上がる。

するとイスに座っていた者達が一斉に立ち上がる。

紳士調の男は口を開く。

「全ては『創世の人類』のために！」

その言葉とともに立ち上がった者達も復唱する。

「『創世の人類』のために！」

闇は知らぬうちに侵攻していく。

「本当に大丈夫？ 大和っち」

「大丈夫だよ、少し休んだらだいぶ楽になったから」

心配そうに階段を昇る大和の後ろをついて回るつぼみ。自分の所為でこうなってしまったのだとショックを受けているようだ。

実際はつぼみの所為ではなく医者に言われた忠告を無視した大和のほうが大いに悪いので、大和としてはいたたまれない気持ちでいっぱいである

「もうすぐだよ、大和っち」

階段を昇りきった大和とつぼみは、つぼみの先導で教室へと近づいていった。

「もう本当に大丈夫だから、つぼみ。別につぼみの所為じゃないんだからさ」

「でも私が叩いたのがいけないんだよ」

そういいながら、頑として大和の先導を止めないつぼみ。大和が歩くことの障害になりそうなものがないか目を光らせてチェックしている。

はつきり言えば恥ずかしい。

「大丈夫だって、もう教室だし」

「それでも、なにがあるかわからないよ！」

学校の階段から教室までの廊下になにがあるのかは、甚だ疑問だが、面倒なので教室に入るまでの我慢と思い、つぼみの先導に付いて行く。

『なんだとこの貧相胸なし』

『うるさい、万年赤点男』

『なんだと！』

『なによ！』

なにやら教室が騒がしい。といってもチラホラと聞こえてくる会

話でなぜ教室が騒がしいのかが一発でわかってしまうのだが。

「本当に仲良いなあいつら」

「ね」。本当に毎日毎日、馬鹿みたいだよな」

つぼみさん、口から毒でてますけど。などとは口が裂けても言えない。

つぼみは教室の扉を開ける。ちらりとこちらを見つめる者達もいるがまたすぐに教室の中心で起きている騒ぎに目を戻してしまう。

つぼみと大和は教室に入り、すぐさま騒ぎの中心へと挨拶する。

「おはよう」

「おはよう、まつまつ、あかちゃん」

二人の挨拶を聞いた途端、騒ぎの中心が二人に近づいてくる。

「聞いてよ、つぼみ！ 朝倉君！」

「ちよつと聞いてくれよ、大和！ つぼみ！」

ずかずかとこちらに近づいてきながら、声のトーンを上げていく二人、面倒なおいがブンブンする。

「俺はそういうの分らないから、つぼみに聞いてくれ」

大和のいままでの経験状こういったものは誰かに押し付けるに限る。

「大和つち！？」

押し付けられたつぼみは大和の突然の裏切りに、何かを発しようとするが、そんな暇も無いほどの松岡と古林による怒涛の口撃にたんでこ舞いになってしまふ。

大和はそんなつぼみ達を見て笑いながら自分の席まで歩いていく。自分の席を見つめるとその隣に友人が座ってなにやら難しげな本を読んでいた。

大和は声を掛ける。

「よ！ おはよう天宮」

その光景を見ていた生徒達が大和をちらりと見つめる。

だが、どうせ無視されるのだから大した光景ではない。生徒達の視線はいまもなお続いている騒ぎへと戻っていく。

声を掛けられた黒髪の美少女は、大和の存在に気づき、読んでい
る本を置いてあいさつに答える。

「ん？……おはよう」

天宮はそういうと、机の上に置いた本を再び手に取り、ページを
めくる。

たったそれだけのことなのだが教室が静まり返った。

三秒ほど教室内がフラットの空間になる、喧嘩していた松岡や古
林でさえ静まり返り、じられないといった目をしている。その後、
教室内がざわつき始める。

そんな教室内の生徒達を気にもとめず。大和は挨拶から会話へと
持っていく。

「そんなに難しそうな顔してなに読んでんだ？」

天宮は本の文章を目で追いながら、大和の質問に答える。

「いま読んでいるのは、『^{スーパー}異能力者』の生活環境における、『^{ちか}異能
力』の強さと制度の比較。またそれらを取り巻く

「へー楽しそうな本だなー」

題名だけでもお腹いっぱいになりそうな本に、大和は気のない言
葉を放つ。

「そうだな、まあそこそこ楽しめる。もう読み終わるから、貸そう
か？」

大和を見ずにページをめくっていきながら話す天宮。かなりの速
読のようだ。

「いや、俺はいいや。二百文字以上見ると気持ち悪くなっちゃう体
質だから　それよりも傷の方は大丈夫なのか？」

「もう傷口は塞がっているし、痛みもない。そういうきみこそ大丈
夫なのか。医者に激しい運動は禁じられたようだか………あ」

天宮はまたも名前前で呼べなかったことに気づき、難しそうな顔を
する。

「だから、呼び辛いなら、きみで良いって」

「いや、そんなわけには………だが。うーん」

読んでいる本を置いてむむむと考えこんでしまう天宮。

少女は気づいているだろうか、自分の周りに立つ生徒達の反応に。少女は気づいているだろうか、自分が誰かと親しくしていることに。

少女は気づいているだろうか、自分の顔に様々な表情が現れていることに。

少女は気づいているだろうか、自分が楽しそうに会話をしていることに。

少し変わった少年と。変わった少年のせいで少し変わった少女。二人の物語は終わり、そして始まる。

エピローグ 終わりの始まり（後書き）

これで第一章は終わりになります。

ここまで読んでいただいた方、ありがとうございました。

第二章の方もチラホラと挙げていきますので、これからもお願いいたします。

プロローグ 一日の始まり

「お兄さん、起きて」
体を揺すられる。

眠くて眠くて起きたくないと思っていても、この揺すられる振動によって嫌でも目が開こうとする。だがしかし、この程度で起きてしまうほど生半可な眠さなどでは断じてない。

大和はここで必殺の言葉を口にする。

「あと五分だけ」

「なに言ってるの！ 絶対させないからね」

「あとぐ分だけでいいから……ずー」

「わあ！ 寝ないで、お兄さん!!」

大和は同居人のかわいい女の子によって、無理やり起こされリビングに運ばれる。

「ね……眠い」

朝ごはんのトーストをもぐもぐと口に含みながら、開きたがらない瞼を無理やり開く。

「まだ言ってるのお兄さん。おととい友達の家泊まって、家に帰ってきてからずっと寝っぱなしでしょ」

「言えない、土曜日に病院に搬送されて大手術をして大変だったなんて絶対に言えない。」

「疲れてるのはわかるけど、遅刻はだめ」

大和の目の前に座る、少女の名前は垣森美穂^{かきもり みほ}。大和がいまお世話になっている家族の一人娘である。

「本当にすいませんでした」

頭をテーパーにつけながら謝る大和。

「まったく、お弁当はどうするつもりなの!？」

「あ！ ごめん。美穂ちゃんの弁当作るのすっかり忘れてたよ」

大和が両手を合わせて謝ると美穂と呼ばれた少女はスツと何かを大和にさし出す。

「え？ なにこれ、もしかしてお弁当？」

「もしかしなくてもそうです。私がお弁当作ったの」

「ありがとう、美穂ちゃん、恩に着ます」

「そ、そんなに言わなくても……か、家族なんだから当然のことだよ」

そついうと美穂はすごく恥ずかしそうに俯いた。

だが大和は貰った弁当に夢中でそれに気づかない。

「弁当、弁当。べーんと……そついえばおじさんとおばさんは？」

「え！ ……お父さんとお母さんは今日も仕事で帰ってこないみたい」

美穂は先程までの表情とは一転。さびしそうに言った。

彼女の両親は典型的な仕事人間で、まず家には帰ってはこない。

どうやら年中仕事をしているようで、大和がこの家に来たときも『きみには、この部屋と月に十万を与えておく、これで好きなように生活すればいい。ただし、私たちの仕事に差し支えるようなら君には出て行ってもらおう』と言われた。

大和とすれば、まあこんなものだろうと思う、遠い親戚でまったくといっていいほど血のつながりのない人間に大きな部屋一つと、たいそうな額の生活費までくれるのだ。どちらかといえば、かなり優しいのではないだろうか。しかし自分だけではなく、唯一の一人娘である少女に対しても、自分となら変わらない扱いをしていることを含めると、大和は目の前に座る少女の両親をあまり快くは思っていない。

「そうかあ、大変なんだなあ……じゃあ今日もまた夕飯は俺と美穂ちゃんだけか」

「そつ……なるね、お兄さんは今日なにが食べたい？」

さびしそうにしながらも無理やり元気を出す美穂に大和は

「んー、今日は俺が夕飯を作るよ」

「え？ そんなこと」

「いいからいいから、今日は美穂ちゃんに弁当作らしちゃったんだし、夕飯は俺が作るからさ、だから何か食べたい物ある？」

「え、えーっと。じゃあ、から揚げが食べたい……たい」

「そうか、じゃあ今日はから揚げにしよう」

明るく笑う大和に美穂もつられて明るく笑う。

「やべっ！ もうこんな時間だ、急がないと！」

大和に急かされて、美穂も時間が押していることに気づく。

二人は急いで鞆を持ち、使った皿を机の脇に付いている穴に放り込み。家事ロボットによって綺麗に整列された靴を履き玄関の扉を開ける。

「私は近いからいいけど、お兄さんは大丈夫なの？」

「駅を間違えさえしなければ大丈夫だ」

誇らしげにそう語る大和に美穂は笑みをこぼす。

「いつてらっしゃい。お兄さん」

「はいはい、いつてらっしゃい。美穂ちゃん」

大和は家を出て左に曲がり、美穂は家を出て右に曲がる。

|| || || || || || || || || ||

「…………ん」

少女は黒く凜とした瞳を開く、そして少しぼやける視界の中でゆっくりとベットから起き上がる。その少女の目は美しく朝日と混ざり合い一際輝いて見える。

すると少女の前の何も無い空間にズラリと映像が浮かび上がった。

右上には今日の天気、左上には現在の時刻が、中心には箇条書きで様々なニュースの題が書いてある。

少女はその中から、『式本博物館倒壊』と題された項目を手で触れる。

ピツッという電子的な音とともに選んだニュースの細かな情報が浮かび上がる。少女はそれをざっと読み上げて呟く。

「倒壊の原因ははまだ不明……か」

それだけ読んだ後、少女は立体映像の右上にあるバツマークに手を触れる。すると目の前に浮かびあっていた映像がパツと消えてなくなった。

それから少女は学校指定の制服に着替えるためクローゼットを開ける。

中にはズラリと様々な服が入っているがしかし、そのどれもが普段着とはかけ離れた物であり、取り出しやすいように一番端に掛けている制服がとてみすぼらしく見えてしまう。

少女はみすぼらしく見える制服を手に取り眺める。

「はあ」

少女は大きなため息をついた。だがそれは決して制服がみすぼらしく見えて着るのが嫌というわけではない。

ため息の理由^{わけ}は少女の口から漏れでる。

「このスカートは短すぎる」

このため息のでてしまう制服の問題は一昨日に遡る。

一昨日の事件の所為で制服がボロボロになってしまい、新しい制服を買わなくてはいけないのだが、制服は注文してから一週間ほどしないと届かないといわれてしまったのだ。

ボロボロになったのは冬用の制服なので夏用の制服があるにはあるのだが、少女の通う高校では夏服と冬服ではデザインがかなり異なり一発で夏用だとばれてしまう。もちろん学校側に制服破損の旨を説明すれば冬服が届くまでは許してくれそうだが、少女としては学校で目立つことはどうしても避けたかったので、この件を上司に相談してみたところ。

『まっかせなさい、おじさんにかかれば制服なんて一日もしないで

用意できちゃうから』

宣言通り、頼んだその日の内に制服が自宅へと届き、そのお礼を言うため上司に電話再度かけた。

『お！ 届いたの制服。よかったよかった。え！？ お礼？ いいよ別に遥ちゃんはその制服を着てくれるなら』

などと言っており、初めのうちは上司に感謝していたものの、電話を終え、制服を袋から出してみると、さあ大変。

制服のスカート丈が異常なほどに短かったのだ。

あらためて上司に連絡してみると。

『スカート丈？ ああ。ちゃんと校則に則^{のつ}ってギリギリにしていたから。え、短すぎるって？ 遥ちゃん、きょうびスカートが膝に掛かっている女子高校生なんていないよ』

と笑いながら話してきた上司。とりあえず上司はこんど会った時に潰すことにして、少女は今日着ていく制服をどうしようか悩んでいた。

「奥にしまつてある夏服を出して着ていくべきか、糞上司の持ってきた冬服を着るべきか……………どうしたら」

午前五時三〇分、黒髪の美少女は悩みに悩む。

|||||

ガゴーン、ゴーン、ガシヤーン

重々しい機械音が聞こえる。

少年は睨みつける。

（かかってきやがれ！ 今のところの成績は一勝一敗、奴には弱点がある、その弱点をうまくつけば俺は絶対に奴に勝てる）

『どちらの駅まで行かれますか？』

「やさしそうな声を掛けてきたところで無駄だ、俺にはお前の考え

がしつかり読めている」

『どちらの駅まで行かれますか？』

「戦国高校まで」

ポーン、機械が少年の行きたい場所を検索しそれに近い駅を検索する。

『戦国高校でよろしいのですね』

「ああそうだよ」

少年は隙を見せないように慎重に答える。

『でしたら、戦国高校駅でよろしいですか？』

少年は笑う。

（甘い！ そちらは一年が使う旧校舎、俺が使うのは二三年が使う新校舎じゃボケ！）

「違います、新戦国高校駅で頼みます」

『分かりました、新戦国高校ですね』

（ふっふっふ勝った！ 勝ったぞ大和。これで二勝一敗、勝ち越した）

少年は電車に乗っていた。電車といってもそれはほとんど電車の形を保っていない。

王都の電車は個人で乗り行き先を指定しその駅まで移動する少し変わった電車である。

少年は電車と言う名のゴンドラのような乗り物の中で勝利に酔う、苦節五日、ようやく勝ち越した少年に機械から勝利の言葉が向けられる。

『ではお一人様で新戦国高校駅までですから二八〇円お支払いください』

「はいはい待っててね、金曜日買った定期をだすからね」

少年はポケットを弄る。

「！！」

無い、定期が無い。

『料金をお支払いください』

ここぞとばかりに追撃してくる少年の対戦相手。そうプログラムされているだけだなのだが。

(どこで落とした！？)

少年は考える、その間も対戦相手はプレッシャーを与えてくる。

(一体どこで?)

そのとき少年は思い出した。この制服以外で定期を使ったことがあることを。

(あの服に入れっぱなしなのか！)

そのとき少年はまたも思い出す。巻き込まれた戦いでズボンのポケットに穴が開いていたことを。

(あの戦いの最中に落としたのか！)

そして少年はまたまた思い出す。ポケットが切れた後すぐさま病院に運ばれ病院でポケットが切れていることに気づき、携帯と財布が無事でよかったと安堵したことを。

(つてことは)

定期の落ちている場所はすぐに分かった。

(やばい……)

少年は財布を取り出した。二四〇円が入っていた。

「……………」

『料金をお支払ください』

「あの……二四〇円でいける駅で新戦国高校が一番近いところは何処ですか……………」

ぴびぴび……ポーン、少年の質問を検索する赤いゴンドラ。

『戦国高校駅が一番近いと思われます』

一勝二敗、少年はゴンドラ電車に負け越してしまう。

|||||

天宮は歩いてきた。駅から学校までの道のりを歩いていた。

(結局、六時過ぎまでどちらにしようか悩んでしまった。本来なら少し朝の鍛錬をしようと思っていたのに、そんな時間は無くなってしまった)

天宮は己の意志の弱さを嘆いていた。

「はあ」

大きくため息をつく天宮。

だがしかし天宮のこのスカートの丈の長さ程度の些細なため息を、天宮の近くを歩く人々は何か壮大な秘め事に愁うれいているのだろうと思っ込んだ。

それほど天宮の立ち振る舞い、その姿には気品や美しさがあった。だが天宮自身にはまったくそのことに気づいていない。

(ため息を聞かしてしまった、いろんな人が見ている。朝からため息などを聞かされて怒っているのだろうか)

内心どうしようかと焦っている天宮だが傍から見ればやはりそうは見えない。

ピリリリリリ！ ふと天宮の携帯が鳴った。

天宮は携帯を取り出し画面を見る。

画面には 隊長 と書かれている。

ピッ！ 天宮は通話ボタンを押し携帯を耳へと押し当てる。

『あ！ 遙ちゃんもう傷は大丈夫？』

携帯のスピーカーから、なんとも声と比例していない。軽い感じのする男の声が聞こえてくる。

「うるさい」

天宮は携帯越しにゆっくりと静かに、しかし明らかに怒りを秘めた声を出す。

『もしかして怒ってる？』

「さあ隊長がそう思うなら、そうなんじゃないですか」

天宮の後ろに般若が映りこむ。

『ごめんね遙ちゃん。明日もう一度ちゃんとしたの送るから許

してお願い!』

「はあ。いいですよ別に一週間程度なら我慢できますので」

「ありがとう。許してくれてありがとう遙ちゃん」

電話の奥から何度も頭を下げている光景が天宮の脳裏に浮かび上がる。

「………いやあ許してくれて良かったよ。ところでさ遙ちゃん今日は暇かい」

「? 別に用事などはありませんが」

「それじゃあよかった。今日は一昨日の事件のちゃんとした結果報告をしてほしくてね」

「………了解しました。ところで菅原と霧崎の様子はいかがですか」
天宮は結果報告という言葉に反応したことを隠すためすぐさま話を変える。

「それがねえ、まいっちゃって、霧崎は他の加害者と同様に取調べ中に死んじゃうし、菅原は死なない代わりにわけの分からないことを口走っててね」

天宮はドキリとする。

「どのようなことですか」
が表情にも口にもださず平然と聞き返す。

「餓鬼がどうのこうのと五月蠅くてね。まあそんなことはどうでもいいんだ。だけど菅原の話の中でどうしても一つのワードがおじさん、気になっちゃってね」

男の声が明らかに緊張を持つ。天宮の鼓動が一際早くなる。

「遙ちゃん、奴が話した内容と君が病院にいたときの簡単な報告がだいぶ食い違うんだけどそんなの関係ない。おじさんが聞きたいのはね、菅原を倒したその少年が何者かということなんだよ」

男の言葉に天宮はすぐさま反応する。

「菅原を倒したのは私です、彼は関係ありません!」

男は笑い出す。

「遙ちゃん、君は本当に駆け引きに向かないね、そんなに焦ったら」

菅原が言っていたことが本当だと自分からばらしているようなものだよ』

「……………」

天宮は黙ってしまふ。そんな天宮に男は優しげな声で伝える。

『別に彼をどうこうするつもりはない、ただもし彼が菅原の言う通り『始まりの石』ブラックストーンを持っていてのだとしたらおじさんはね、話がないんだ。別に彼に危害を加えるつもりは無いんだよ』

「本当ですか？」

『本当も本当。おじさんがいままで嘘を付いたことがあったかい？』
「ありすぎて数え切れないのですが」

天宮が疑惑の声を上げる。

『だ、大丈夫だよ今回は本当だから。だから彼の都合が付いた時で良いから僕の家まで連れてきてくれるかな』

「なぜ隊長の家に？」

『その理由は今日話すから、とりあえずよろしくね』

「わかりました、彼に聞いてみます」

『宜しくね遥ちゃん』

プー　プー　天宮は向こうの電話が切れるまで待った後、電話を切った。

そんな電話をしているうちに学校の門まで付いてしまった。

天宮は一息吐いたあと門を通りすぎてゆく。

また今日も静かな学校生活が始まる。

プロローグ 一日の始まり（後書き）

第二章の始まりです。待っていた方は遅くなっています。始めての方は寛容のお心で読んで頂ければと思います。

第一話 アドレス登録件数七件

「なんだこれ」

大和の放ったなんてこと無い一言だがその一言はありとあらゆる思いが込められた、何ともの確な一言であった。

いつも通り学校に登校し、途中紆余曲折あったが、なんら普段と変わらない行動を取ってきた大和。その後天宮と少しばかり話しをして、天宮が香先生の放送で職員室に呼ばれ教室を出て行ったとき、ある問題が発生した。

大和はクラスメイト達に囲まれていた。

それも友人になった三人だけではない。

文字通り大和はクラスメイト全員に囲まれていた。

「なんだこれ」

大和は本日二度目になる言葉を口にする。

自分の周りを囲むクラスメイト達は様々な言葉を口にする。

「朝倉君、天宮さんとどうやって仲良くなったの」「朝倉てめえ天宮さんとどんな関係なんだ!」「朝倉君、私の話は役に立ったの!」「などなど、多数の人間から様々な質問が大和の耳に飛び込んでくる。

だがその質問は様々とはいえ、ある共通性を持っている。

それはただ一つ『どうしてお前は天宮と会話が出来たのか』ただただこの一点に尽きるのだろう。

だがそれはクラスメイト達から見た天宮という、無口で親しい友人を作らず、町を歩けば十人中十人が口を揃えて綺麗だと言うであろう謎に包まれた美少女。という考えからででくる一点であり。大和からすれば、天宮は初日には飛んでくる机から自分を救ってくれ、二日目には良太のことで困っているところを助けてくれた心優しき

少女なのである。

このようにクラスメイトと大和では、天宮という人物に対しての考えがだいぶ違うので、大和からすればなぜこんな質問攻めにされているのかさっぱり分からないというのが心情である。

「ええい、うつとおしい。そんなにいつぺんに聞かれたって分かるか！！ そんなに聞きたいんなら天宮が帰ってきてから聞けばいいだろうが！」

大和の叫びに、ぎゃーぎゃーと騒いでいたクラスメイト達がピタリと騒ぐのを止めた。

教室中に静寂が訪れる。

「さてさて、お前ら」

静寂のなか、声が響く。その声の主は大和を囲んでいた生徒達を割って入り大和へと近付いて行く。

彼はもう一つ声を放つ。

「ここはクラスを代表して、大和の親友である俺が皆の聞きたいことを順番に聞いていこう」

「へー俺達は親友だったのかー、始めってしつたー」

なんとも楽しそうに英雄気取りで割って入ってきた松岡に大和はチクリと言葉を刺す。

「いやいや親友だよ、お前がこの学校に来たときから俺たち親友だった。だから質問に答えてくれよ」

「だから別に答えることなんか何も無いんだけど」

大和は心の底から面倒臭そうにしながら、目の前に立つ自称親友に自らの思いを答える。

「何も無いってことはないだろ。あの天宮さんだぞ、お前わかってんのか？ どうやって仲良くなったんだ。ん？ なあ教えてくれてもいいだろ」

「どうやってって、別になんかやったつもりは無いんだけど……そうだな………しいて言うなら、背負い投げされてコンクリートに全身叩きつけられた後お腹に重いパンチを喰らえば仲良くなれるかもよ」

「は？ いったいどういう意味だ」

松岡は大和の答えの意図が読めず頭を捻る。

一方、大和のほうは何故だか今の状況に違和感を感じていた。

そりゃクラスメイトに囲まれ、あれこれ聞かれている今の状況は違和感の塊であるのだが、大和はその違和感の中に更に大きな違和感が隠れている気がしてならなかった。

その違和感は何なのか辺りを見回してみる。

すると違和感の正体がすぐにわかった。

「つぼみは何処だ？」

そう、つぼみの所在だ。このクラスメイトとは、まだ会ってから殆ど日は経っていないのだが、性格だけはかなり分かったような気がしていた。

つぼみの性格上、必ずこういった状況では真っ先に食いついてくるはずなのだが、大和はクラスメイト達が騒ぎ出してから未だにつぼみを見ていない、それどころか声すらも聞いていない、このことが大和に先ほどからとつもない違和感をもたらしていた正体であった。

そしてそんな大和の言葉に対し、一番に反応したのが赤髪の少女だ。

「つぼみ！ どこ!？」

赤髪の少女もつぼみがこの楽しそうなネタを前に、姿や声を現していないのがとつもなく心配のようだ。

赤髪の少女の言葉とともに大和を囲むクラスメイト達も、わらわらと自分の周りを確認する。つぼみがこういった状況で主としていないことは、クラスの全員がおかしいと感じているのだろう。それに加えあのミニマムサイズだ。知らず知らずの内に潰してしまってもおかしくないのではと、クラスの皆が心配して辺りを見回してしまふのは当然の流れといえる。

「グスッ」

すすり泣くような声が聞こえる。見ると、小学生にしか見えない

ような体格をした栗色の髪の少女が教室の端っこにうずくまっていた。

気味の悪い座敷わらし、なんて口に出そうかとも思ったが、つばみの異変を察した大和は口にしようとした冗談を喉の奥へと引っ込める。

「どうしたのつばみ！」

少しばかり怪しくも感じる溺愛ぶりの古林がつばみの元へと駆け寄り、そっと優しく肩に触れる。

「ずるい」

「え。な、なにがずるいの、つばみ？」

言葉は小林のものが聞かんとした意味はクラスにいる全生徒を代弁していた。

「大和つちにメールしても全然返事は返ってこないし、学校案内しあげるって言うてもすぐに帰っちゃうし、私とは全然連絡を取りたがらないのに。自分ばかり天宮さんと仲良くなってるなんてずるいよお」

目をウルウルとさせながら呟くつばみ。

ギリリ！ と教室内の数人の男子プラス自称親友の赤髪少女から殺意の眼差しを向けられる大和。

「え！？ メール？ ごめん全然気が付かなかった。携帯なんてずっと見てなかったし」

一部のマニアの眼差しに焦りながら自分の携帯を確認する大和。

「え〜っと。あ、ほんとだ六件も着てる……ごめんなつばみ、俺アドレスなんて人に教えないから、普段から携帯を見るって習慣が無くてな」

「携帯を見ない！？ そんなばかな！！ 携帯と言えば人類の必需品だぞ。携帯無くして、お前はどっやって生活してるんだ大和」

急に会話に入ってきた松岡が声を荒げる。

その様子を大和はもちろんのこと周りの生徒達もポカンとした表情で見つめる。

「それもそうね。携帯を休日にも一度も見ないなんてことは絶対にありえないはずよ。どうせ、つぼみを泣かせない様に適当な嘘を付いたつもりでしょうけど私は騙されないわよ！ 朝倉君！！」

「古林はつぼみが関わると途端に面倒くさくなるな」

大和は、親友のためという条件付けで発動する行き過ぎな溺愛行動に大和は心底理解できない顔を見せる。

「御託はいいから、さあ朝倉君。休日に携帯を見ない証拠を私たちに見せてくれる！？」

「もう意味が分からん、どんどん話がずれてる気がするんだけど。というか証拠なんてどうやって見せるんだよ。俺の部屋に隠しカメラでもセツトして一日中録画でもして無かったら不可能だぞ」

「それもそうだな。じゃあこうしよう大和。アドレスを人にほとんど教えてないってのが休日に携帯を見ない理由なら、お前の携帯に何件アドレスが入ってるのを見せる。もし言うとおり少なかつたらお前は晴れて無罪。だが万が一アドレス登録件数が多かつたその時は…………… 天宮さんに俺をいい感じで紹介しろ！！」

「お前、最初からそれが目当てで口出しし始めただろ」

大和は松岡のあまりにも欲望一直線の言葉に呆れながら答えた。

その松岡の言葉に教室中の生徒達からも声が飛ぶ。

「きたねえぞ松岡！ 俺らだって天宮さんと仲良くなりたいたんだぞ」

「そうだ、そうだ」「てめえだけ先進もうなんざ太えんだよ！！」

主に男子からの多くの罵声が飛んでいる。

「うるっさい！」

古林の一喝で教室に静寂が戻る。中には怯えている生徒もいる。

どうやら古林は二年D組の総大将のような存在らしい。

(まあ面倒見の良さそうな性格してるしな) クラスに一人はこういつた人物がいるものだ。大和は心の中で呟く。

「それで、朝倉君」

「なに？」

「松岡の条件は無しにして、携帯の登録件数だけでも見せてくれる

かな」

笑顔で語る古林だがその瞳は笑っていない。つぼみが後ろを向いて、「いいもん、いいもん。グスツ」と、ぐずっていることが気に入らないのだろうか。だが大和には背中を向けてこちらからは見えないが、いまうずくまっっているつぼみが実は笑っているような気がしてならない。

だがそんなことをこの場で口ずさめば目の前の保護者にミンチにされるのは必須。

そんな纏わりついてくる嫌な想像を振り払うように大和は頷いた。

「ありがとう、じゃあ見せてくれる？」

「え〜とちょっと待っててくれ……………」

大和は携帯を開きポチポチとボタンを押していくが、辺りに広がる、まるで何かの記録に挑戦しているかのような緊張感に無意味な汗をかいてしまう。

「……………よし。ようやくだ。ほら見てみ」

大和は古林と松岡に自分の携帯を見せつける。

「どれどれ」

携帯の画面を向けられた二人は画面の中の文字に目を通す。

『アドレス登録件数七件』

大和の携帯の情報として映し出されたものだ。

「アドレス登録件数七件!？」

二人は驚きの声をあげる。

「な、七件って、お前、下手したら家族だけで満杯じゃねえか!！」

松岡の驚きの声に大和は平然とした態度で、

「だから登録件数が少ないからって言ったたる」

当たり前のように口を開く。

「ってことはだ。俺と朱音とつぼみの三人のほかに、あと四人しかお前の携帯にアドレスは登録されてないってことか!？」

「そうだけど、なにか問題があるのか？」

「いや問題は無いけどよ…………え、なに。転校する前の奴らのメアド

とかは？」

「無い」

「何でだよ？」

松本の言葉に古林も同意する。

なぜなら二人とも大和という人間が、人間関係に苦労するタイプではないと思つたからである。いやどちらかといえば広い交友関係があつてもおかしくないように感じていた。

そんな二人の思つた謎を解くように大和は口を開く。

「そうだな、あえて言うなら日数の問題だな」

「日数？」

「そう日数。俺な、親が死んでからいろんな人の所たらい回しにさせられててさ、あんまり学校の奴らとは深く付き合えなくてよ。まあ長く付き合えてた時期もあつただけどその頃はまだ携帯持つてなかつたしな」

「え、えつと。ずいぶん重いことをサラリとカミングアウトするんだな」

想像していたものよりハードな内容で教室中に嫌な空気が伝染する。

「あれ？　もしかしてこの嫌な空気は俺の所為？」

大和が自分の話によつて葬式のような空気になつてしまったことに責任を感じていると。

「大和っち！」

つぼみが大和の目の前に立っていた。といつても、座っている大和と立っているつぼみの目線は同じ高さにあるわけなのだが。

「ど、どうした。つぼみ」

つぼみの顔は少しばかり悲しそうで辛そうで、そんな顔をしているつぼみを始めて見たので大和は少しばかりどもってしまった。

「今の話だともしかして大和っち、この学校もすぐにいなくなっちゃうの？」

どうやらつぼみは大和がこの高校もすぐに転校してしまうのでは

ないかと心配しているようだ。つぼみにそんな顔をさせているせいか、嫌な汗の出る視線が大和を刺してくるのだが、そのことには気づかない振りをして、大和は目の前で悲しそうな顔をする少女を元気づけるため精一杯明るい声で話す。

「今回の里親の人たちは経済的にも生活的にも余裕のある人たちだし、もし万が一の場合でも俺一人で王都に残るつもりでここに来たから平気だよ。だからおまえ達にメルアドも教えたんだしな。そういうことだから、俺は転校するつもりもないし予定も無い。残念だったなつぼみよ」

大和は言い終わると笑い始める。

「むう」

心配して損したと頬を膨らませるつぼみをまあまあとなだめる古林に大和と一緒に笑う松岡。教室の生徒達も明るくなる。

そんな中、つぼみが頬を膨らませるのを止めて疑問をぶつける。

「ねえ大和っち」

「どうしたつぼみ」

「私たちの他に登録されてるアドレスの残り四つってだあれ？ 里親の人の？」

「いや違うぞ。里親はあんまり家に帰ってこない人たちだし、王都に来てからまともに話したのも二回ぐらいしかないしな、里親の一人娘の子のアドレスなら四つの中の一つだけだな」

「一人娘！！ なあその人いくつ、美人なのか、なあどうなんだよ」
松岡の喰らい尽きかたが半端じゃない。

コイツのこの速さは見習うべきなのかもしれない。
「俺の二つ下で、綺麗とか美人と言うよりは可愛い系って感じなのかね、よく分からんけど」

大和の話聞いて、松岡に電撃が走る。

「可愛い系？ いいじゃねえか可愛い系！ 妹に必須のキーワードじゃねえか！！ そんな子と一緒に一つ屋根の下に暮らして、尚且つ親はあまり帰ってはこない。お前ずりいよ！！」

松岡の言葉に教室の男子達がうんうんと頷き、それを見た古林の「男子って本当に最低」という言葉に教室の女子達がうんうんと頷いた。

そんな状況の中、松岡の叫びを無視して大和が話を続ける。

「あとの三つは、王都こうちに住んでる昔からの知り合いと俺のパソコンと」

大和は携帯の画面を待ち受け画面に戻し、ポケットに入れようとする。

「天宮の携帯のアドレスだな」

「その携帯をこっちに寄越しやがれ!!」

教室にいた男子達が一斉に大和へとダイブしていく。

第二話 背中が痛いなー。あー痛い痛い。

「いやあ、悪いね。みんなに配るプリントが大量にあつてさ」

香が自分の横に並びついて来る、黒髪のおとぎ話に出てきそうなほど完成された美少女に謝る。

「別に構いません。本を読んでいただけですので」

少女は階段を昇りながら、隣を同じく登ってくる香の言葉に素っ気無く返す。

「本を読んでいただけ……か」

香としてはもう一年以上立っているのにも拘らずいまだに学校に馴染めていない彼女のことをどうにかしたくて堪らなかった。

まあ香以外の教師連中からは彼女の評価は一定して高く、親しい友人等を作らず一人で居ることに對しても、出来が良すぎるため人と関わりたくないのだろうと決め付け、虐めではなく本人が望んでいることなのだからとふざけた事を抜かす連中ばかりだ。

しかし香は本人が本当に一人を望んでいるとは思えず。また、そう望んでいたとしてもそんなことはないのだと知ってもらいたかった。

だが彼女との接点がまったく無いため、いままで歯痒い思いをしていたのだが、こうして彼女の担任として抜擢されたため大きな接点が出来た。

そのため香はこうして理由を付けては彼女と無理やり話すようにしている。

「本当に天宮は色の無い奴だな、せつかく綺麗なんだからもうちょっと自分に色を付けてみたらどうだ」

「私は自分のことを綺麗だと思ったことはありませんが、高橋先生の仰るとおり色の無い人間だということは承知しています。ですが特に変える必要も無いので変えようとは思いません」

天宮がこれまた素っ気無く返す。

二人は階段を昇りきり教室までを歩いていく。

「そうか必要ないか……まあ色があるなし関係無く、天宮が学校生活を楽しんでくれているのなら、私は大満足なんだけどね」

「学校生活は学ぶ事ばかりで楽しく生活しています」

天宮の感情の無い声。

(私は天宮が楽しそうにしているとどこを見ているんだだけどね……)

香の心配は天宮に届きそうに無い。

そここうしているうちに、天宮とその担任は教室の前へと到着した。

『見せろ!!』『止めるって』『こっちによこせ!』『だれがよこすか!』

今日も毎日の日課どおり騒がしい教室、そんな教室の状況に何とも楽しそうな担任は、ドアに手を掛けて勢いよく開き、開口一番、毎日のあいさつをする。

「おはよう皆の衆! いつもいつも良く飽きないなお前等!」

香が毎日するあいさつだ。いつもならこのあいさつによって、騒がしい教室もかなり静かになるのだが今朝はどうやら違ったらしい。「少しだけでいいから!」「ちよつとだけでいいから!」「一瞬見せてみ、一瞬!」「目の端に入るだけでもいいからさ!」

香のあいさつがまるで効いていない、それは皆が香のことに気づいていないからか、はたまたいつもの騒ぎとは違う理由だからなのか。まあどんな理由にせよ教室は静寂とは真逆の状態である。

そんな教室内に少し呆気に取り残られてしまった香だがすぐさま頭を振って、思考停止に近づいてしまった脳を働かせる。

「うるさいぞ、お前等!」

とにかくこの教室の騒がしさを抑えなければ、なにも始まらないと香は声を荒げる。

ピタリ! 香の激に生徒達は動きを石のように固める。

「ようやく静かになったな」

香はにんまりと笑いながら話を続ける。

「それで、今日はまた、なんでこんなに教室中が騒がしかったんだ」

「香ちゃん、ずずつ、大和が俺たちを裏切ったんだ」

松岡が目には涙を溜めて言う。他の男子達も松岡の言葉に賛同し続いて叫ぶ。

「何言ってるんだ！ お前らが急に襲ってきたんだろっが！」

松岡の話に大和が珍しく牙を剥いている。

「え〜つと、どういうことなんだ？ さっぱり分からないな。古林、悪いが説明してくれるか？」

香は今回めずらしく騒ぎの中心ではない古林に原因を求める。

「はあー」

古林は大きなため息をついてかったるそうに口を開く。

「朝倉君以外の男子が馬鹿なだけです」

クラスの女子のほぼ全員が頷く。

対して男子達は古林の言葉に野次を投げる。その中でも先頭に立ち古林に立ち向かう勇者が一人。

「はッ！ さすが大和さんだ、もうクラスの女子全員を手なずけた

ってわけですか」

松岡は古林に整然と立ち向かう。

「はあ。あんたねえそんなことばかり言ってるからダメなのよ」

「ダメってなんだダメって！ 一体どこがダメなのかはつきりと言ってみやがれ！！」

「言ってるいいの？」

「うっ……大丈夫だ言ってみろ！ 全部受け流してやるぜ！！」

古林の笑顔の迫力にたじろぐ松岡だが、なんとか持ちこたえ、その不安をかき消すように声を張り上げた。

「じゃあ言うわよ。まず大前提として頭の中身でしょ、学力の無さにデリカシーの無さ。あ、それとシスコンなのと変態なのと

古林のえぐい口撃が続いていく。教室中の男子がその口撃を前に

顔を伏せみるみる小さくなっていく勇者に涙を流せずにはいられなかった。

「古林、それぐらいにしとかなないと、松岡が死んじまうよ」

香が余りに惨い光景にわってはいる。

「止めないでください香先生、こうなったらとことんこの馬鹿を叩きのめさないと納得がいかないんです」

「だめに決まってるでしょ、そりゃあ私も喧嘩や騒がしいのは好きだけど、今はそれどころじゃないだろ。分かったらみんな席につけ」

ゾロゾロと皆が席に着席する。

隣にずっと立っていた天宮は持ってきたプリントを教卓の上に置いて香に一礼した後、自分の席へと戻っていく。

（まじめすぎるんだよ、天宮）

香は天宮が着席するのを心配した表情で見届けた後、出席を取るために出席簿を手に取り右手で開き生徒達の氏名が書いてある欄を見る。

（また今日もだめだったか……でもまだまだあきらめるわけには
！）

出席簿は五十音順に並んでいる。

必然と一番に呼ぶために転校してきたばかりの少年を見た香は息を止める。

その光景は高校生ならばなんら当たり前の光景。いや人間として当たり前の光景と言うべきなのだろうか、友人と楽しく会話する。

くだらないことでも真面目なことでも、どんなことであつてもいいから会話すると必然と笑みの一つもでてくる。

そう、香が見たのは当たり前の光景、だがしかしその光景は香がこの一年見たくて、見せて欲しくてたまらなかつた光景。

香はその光景を眺め笑う。そして何故だか溢れてきそうになる涙をグッと瞳の奥に封じ込める。

「香ちゃんなんでそんなに嬉しそうなんだよ」

松岡が香のちよつとした異変に気が付き声を掛ける。

「なんでもないよ。ただ今日はいい日だと思っただけ」

いつもと変わらない元気な声で楽しくてしょうがない笑顔で、香は出席を取る。

心配していた少女に色を付けてくれた、少し変わった少年の顔を見ながら。

「朝倉」

「！はい」

そんな少年と楽しそうに話す少女を見て。

「天宮」

「はい」

返事は素っ気無いものの少年と話をしているからだろっかその返事には色が付いている気がする。返事をした後も少女は少年となにやら話しをしている。

点呼中は静かにしろ。いつもならそう注意しなければいけないのだが、今日だけはもう少しだけあの会話を見ていたかった。

そして少女と会話する少年を他の男子連中は殺意の眼差しで見つめている。

女子達もその様子をじつと見つめている。

それが香にとってはなんとも面白くてしょうがない。

誰か一人が壁を越えれば、その壁を越えるのは簡単に思えて挑戦する者がどつと増えるだろう。あの少女に興味を持っていたのにも拘らず挑戦をして来なかった者達がこれから天宮という壁に挑戦していくのだろう、そのうち何人が天宮の高い壁を越えるのかそれを想像するだけで香の顔は満面の笑みへと変わっていく。

今日もいい天気。

我がクラスはいつも通り最高のクラスだ。

|||||

「誘ってくれ！ 頼むこのとおりだ！」

午前の授業も何とか乗り切り時間は昼休み。ほとんどの教室の生徒達が廊下にてで食堂へと向かっていくのだろう廊下では高校生らしい、がやがやとした声が聞こえる。

大和の教室である二年D組の生徒達も半分近くが食堂に向かってしまい、もう半分程度が教室に残ってお弁当を食べている。

そんな教室の中に立つ大和の目の前では、七件しか入っていない自分のアドレスにその名を連ねる友人の一人が土下座を行っていた。

「いや、なにしてんだお前」

「頼む！ 本当に頼む！」

頭を床に擦りつけながら何かを頼んでくる松岡に教室中の人間が引いていた。そんな松岡をどうにかするため大和はなんとなく聞きたくない松岡の頼みとやらの内容を聞いてみる。

「いや、だから何を頼むんだよ」

大和の言葉と同時に松岡が、がばつと立ち上がり大和の肩を組んでくる。

「いいか大和。俺はな青春を満喫したいんだ。せつかくの人生一度きりの高校生活。その生活は楽しく且つ、うはうはでなければいけない。どういう意味だか分かるか大和」

「まったく分からん。わかったのはお前がウザイってことだけだ」

「かあああ、それだからお前はダメなんだよ。いいか大和、高校生活を楽しむためには必須な事項がある」

「いたく真剣な瞳で語りかけてくる松岡に大和もつられて真剣になる。

「それは一体なんなんだ松岡……」

「それはな……美少女との食事だ」

大和は組んでいた肩を離し馬鹿を自分の体から突き放す。

「な……なにすんだ大和」

「なにすんだ大和……じゃねえだろ、用は天宮と昼飯を一緒に食いたいだけだろ、まどろっこしい言い方しやがって」

「答えはいかがですか大和さん」

「自分で頼め」

「そんな殺生な!!」

泣き崩れる松岡その姿には哀愁がただよう。

「いやいや、その作戦逆効果だからお前が泣き崩れたところでだれもなんとも思わないから。イラツとならするかもしれないけど」

「チツ！ お前は本当に友達思いじゃない奴だよ大和!!」

「ナニ切れだ、まったく」

大和がやれやれとため息を吐いていると。

「大和つち」

「おわッ！」

腰にニユツと手が巻きついてきた。だがその手は短いために体も巻きつけてないのが実情である。大和は自分の腰に引っ付いてくる栗色の髪をした小動物を体から引っぺがす。

「つぼみ、頼むから急に現れるなびっくりするから。それとな、背中がまだ痛いからあんまり触らないでくれ」

引っぺがされた小学生のような高校生は若干反省しているようにトーンを落しながら口を開く。

「ごめんなさい、でもでも大和つち私もまつまつの話には賛成なんだあ」

「え？ つぼみも天宮と食事したいの」

「うん！ あかちゃんもだよ。ね！ あかちゃん」

つぼみが呼んだ所に古林が立っていた。古林はどこか恥ずかしそうに頷いた。

「なんで古林はそんなに恥ずかしそうにしてんだ」

「あのね大和つち。実はあかちゃんがこのクラスの中で一番、天宮さんのこと気に掛けてたんだよ。あかちゃんは天宮さんみたいな人をすごく崇拜してるからね」

「え!？」

(つばみへの対応から見て怪しいとは思っていたがまさか本当にそ
ちの趣味の人だったとは…………… 式本は広いな)

「朝倉君、いま凄く変な想像してるでしょ」

「イヤイヤ、マサカソソナ」

「やつぱりしてる! 違うのそういうんじゃないの。私はただああ
いう綺麗な女の人というか自分とは全然違うっていうかそんな感じ
の人を尊敬しているのであって……………とにかく朝倉君が考えたような
こととは違うからね!！」

ものすごい剣幕で語ってくる古林に大和は何度も頷き返す。

「やゝい、バイ女」

「な、なんですって!」

よほどテンぱっているのだろうか、いつもなら飛び膝蹴り辺りで
済ますところが、顔を真っ赤にして松岡の言葉に言い返すだけの古
林に、もしかして本当にそうなのではと、大和は少し考えた。

「もお痴話げんかはそれぐらいでいいから。大和っちどうかな、天
宮さんを誘ってくれる?」

「んー、まあ別に全然構わないけど。というか別に今日は普通に最
初から天宮を昼食に誘うつもりだったしな」

笑いながら話す大和に一人納得のいかない男が声を荒げる。

「なっ!! ！ どういうことだ大和。俺のときは誘わないって言った
くせによ」

「いや別に誘わないなんて言ってるだけ、ただ自分で誘えって言った
だけで」

「ふざけんな、だったら朱音やつばみにも自分で誘えって言えよ!」

「お前の場合動機が不純な気がしたからなんか嫌だった」

大和はいたって真面目に松岡に言い聞かせるように語る。

そしてその言葉には古林とつばみもうんうんと頷いて賛同する。

「不純なんかじゃねえ。ただ俺は自分の学校生活を最高のものにし
ただけだ!」

「はあ」

松岡の大胆な開き直り宣言が終わったと同時に古林が自分の額に手を当て大きくため息を付く。

そしてそのため息の後に続く「本当に馬鹿ねあんた」という言葉とともにまたもや痴話げんかがスタートしてしまう。

白熱する痴話げんかを軽くスルーしているつぼみと大和は教室の空いている席を適当に拝借し、そこで話を続ける。

「じゃあ大和つちは天宮さんを誘ってくれるんだよね」

「ああ、もちろん……と言いたい所だけど、肝心の天宮は何処に行つたんだ、いつも教室で弁当を食べてるんじゃないっけ？」

「おお！ さす大和つち。天宮さんのことをよく研究してるんだね」「なんかその言い方やめてくれ犯罪の臭いがチラつく気がする。それに教室で昼飯食ってるのは本人から聞いたんだよ」

「そうなんだあ」

「なんだその残念そうな言い方……まあいいやそれよりも天宮は何処に消えたんだ？」

「あのね、天宮さんなら職員室だと思うよ」

「なんで職員室？」

「四時間目の英語の授業の先生が天宮さんのこと狙ってて、教師特権を使っていつも授業で使わないもの持ってきては、天宮さんに職員室まで運ばせてるんだよ」

「なあつぼみ。お前のほうが研究してるっばいんだけど。そして英語の棚橋からは確実に犯罪臭がするんだけど」

「あれ、大和つちは天宮さんが心配じゃないの？」

「なんで？」

つぼみは何故か大和と目を合わせないようにして、すこし躊躇いがちに聞いてくる。

「だ、だって好きなんですよ天宮さんのこと」

教室中がまるで氷河期がきたかのように凍りつく。クラスの奴らからすればこの質問は皆が聞いたかったことであり、聞けなかった

ことなのである。

「いいぞつぼみ、ナイス質問だ！」

「さすがよ、つぼみ」

痴話げんかは終了したらしい。教室中がごくりと固唾をのんで大和の答えを見守る。

「もちろん好きだけど」

「!!!!」

教室中がガタリと音を立てる。中には大和に対して今にも殴りかかるうと、ゆっくりと立ち上がる男たちも現れる。

「天宮もつぼみも古林も松岡も」

「へ？」

そこかしこから気の抜けた間抜けな声が聞こえる。

「そうじゃなかったら友達になてなれないだろ」

笑いながら自分の思いをあつけらかんと話す大和に教室中ががっくりと肩の力を抜く。

「どうしたんだお前ら」

「大和、てめえまぎらわしい言いかたすんじゃないよ！」

「なんでそんな怒ってたんだ？」

大和が松岡の急激な怒りに驚いていると。

ドンツと衝撃が走った。

「!!!!」

突然、大和の目の前が栗色の髪の毛に覆われる。その髪の毛からは甘い香りがふわりと漂い、髪の毛一本一本が鼻をくすぐるようにサラリと動く。

すると大和の目の前にある栗色の髪が喋り始める。

「えへへ、そっかぁ皆好きなんだぁ」

大和は突然の衝撃と鼻をくすぐる甘い香りの正体に問いかける。

「つぼみは何でそんなに嬉しそうなんだよ。というか重いんだけど」
なんとも楽しそうに人の膝に着陸してきたつぼみを掴んで降ろす

大和。

「チッ！」

「古林もなんで憎しみを込めた舌打ちを俺に向ける!？」

大和の何も分かっている顔に古林はため息を吐きながら口走る。

「朝倉君って孝より質悪いかもしれぬ」

「ちよつと待て古林、いくらなんでもその発言は聞き捨てならない」

「どういう意味だ大和！」

大和が古林に問いかけると、それを割って入るように松岡が大和に問いかける。

「どうどう巡りの騒動が続く。」

「そうこうしているうちにかなり時間が経っていた。」

昼食のタイムリミットが迫っているのだが今の三人はそんなこと気にも留めていない。また、普段なら真っ先に気が付くはずのつぼみも今は何故だかぼーっとしている。

このままでは確実に大和達の昼食は無くなってしまふ。

そんな時、教室の扉が開いた。

ガラガラと音を立てながら扉を開いた人物は目の前で仲良く三人でやいのやいのと騒いでいる(ように見える)中の一人に忠告する。

「きみ　　げふん。大和。もう昼休みに入ってからだいぶ時間が経っているが、早く食堂に行かないと昼食が食べれなくなってしまうのではないか？」

扉を開け教室に入ってきた人物からの忠告に大和が振り向き答える。

「おお天宮！　ちよつどいいところに来た。俺は弁当だから大丈夫だから、もし良かったらこれから……………じかん？」

大和が天宮の忠告を頭の中で整理し、その中で出てきた不穏な言葉を確認するため教室にある時計に目を向ける。

「ギャあああああああああああああああああああああああ
！」

大和の叫びが教室にこだまする。

「どうしたんだ大和そんなに大声出して」

「お……おい松岡やべえ、お前ら本格的に昼食がなくなるぞ」
大和はそういうと、差し迫った危機を伝えるため時計を指さす。
その指を追い松岡は大和の伝えたい事を汲む。

「！ まじでやばい！！ このままだとまともにメシが食ねえぞ」
「ああそつだ。とりあえず俺は天宮連れて空いてる席を確保しとくから、お前はつぼみと古林を連れて先に食堂に向かえ！」

松岡は大和の言葉にコクリと頷きすぐさま振り返る。

「おい！ つぼみ、朱音とつとと食堂に あれ？」

「先ほどの二人なら猛ダツシユで教室を出て行ったが」

「な！？ あいつらああああああああああああああああああああああああああああ！！」

松岡は天宮の言葉を聞いた瞬間に全速力で教室を後にした。
いま若干だが天宮と会話していたことにも気が付いていないよう
だ。

そんな松岡が騒々しく教室を出て行った後、大和は後ろに立つ天宮にクルリと方向転換して一声を放つ。

「よし天宮。俺らも食堂に行くか！」

「え？ な、なにを言ってるんだきみは！？」

あまりにも唐突の大和の言葉に思考が追いついていない様子の天宮。

「なんだ、俺と松岡の話聞いてなかったのか。あいつが食堂で大行列に並んでいるうちに俺と天宮で席を確保しておくんだよ」

「なんだその話は、私はそんなこと聞いてないぞ！」

「まあいいから細かいことは気にすんな」

大和は天宮の腕を掴み食堂へと歩き出す。

「ま、待て」

「はいはい、話は食堂でゆっくり聞きますよー」

ズルズルと教室の外へと引っ張っていく大和はそのまま廊下でも引っ張っていきこうとする。廊下には流石に生徒達の姿は見当たらない。

皆、教室か食堂に集まっているらしい。

「わ、わかったから手を離してくれ」

「無理。離れたら逃げるに決まってるだろうし」

「！」

どうやら凶星のようだ。

「逃げるわけ無い、だがきみは小林さんや大塚さんらと昼食を食べるのだろう。私がいたら迷惑になるはずだ。だから私は居ない方がいい」

天宮は意地でも一緒に昼食を食べたくないようでその顔からはとてつもない凄みを感じる。が大和もそこで引くわけにはいかない。

天宮が普通の少女だと信じて疑わない大和はそんなことで折れるはずも無くお節介だと分かってはいても、やはりここで折れるわけにはいかない。

「いいか天宮。俺の友達であるお前は、俺の友達であるつぼみ達と仲良くしなければいけないんだぞ」

「なんだそれは、そんなルールがまかり通るはずがないだろう」

「まあまあ、細かいことは気にしないで、昼飯を食べに行こうぜ」

「だから私はきみ等と共に昼食を食べたくないと言っているだろう。だから早くこの手をはなしてくれ」

天宮の顔が自分の思いを封じ込めるような、色の無いものへと変わってしまう。

だが大和はその程度で手を離したりはしない。

「たとえお前が迷惑だと思っても、一人でいる方がだれも傷つけなくて済むと思っていても俺はお前に友達を作ってもらいたい。だから俺はこの手を離すつもりは無い」

大和は掴む手に力を加え、グイグイと天宮を引っ張っていく。

「迷惑だと分かっているのに、一人の方が良いと分かっているのに、何故きみはそんなに頑なに私を昼食へと誘う」

顔を伏せ辛そうに答える天宮に大和は笑いながら答える。

「俺は自分の大切な人には幸せになってもらいたいんだ。もし天宮

が本当に一人で居ることに幸せを感じているのなら俺はこんなに無理やり誘ったりはしない。お前は一人で居るのが幸せなわけじゃない、一人で居ることしか出来なかったんだ。本当のお前は、面倒見が良く優しくて他人想いのお前が一人で居ることが幸せそうには見えないんだよ」

「そ、そんなことはきみの憶測ではないか、私は一人きりで過ごすのが幸せだ」

「本当か天宮」

「本当だ。だから一人にさせてくれ」

天宮が答えると大和の顔が変わる。

真剣な顔つきから、口元を緩ませ目を細くして笑顔を向ける。

「天宮つて嘘付くのが本当に下手糞だよな」

笑いながら天宮の肩をポンポンと叩く大和に天宮は驚きの表情を向ける。

「あ！ いま驚いてるだろぶつくつく。お前がいま一人にさせてくれて言ったときの表情を鏡で見せたかったよ。めちゃくちゃ寂しそうだったぞあっはっはっはははは」

大和の答えに天宮の顔がみるみる赤くなる。

「そ、そんなに顔にでるわけがないだろう」

「おお！ 恥ずかしくて。あーっはっはっはっはは、ひどいなぶはっはは」

「笑うな！！ そんなのはきみが勝手に解釈しているだけだろう」

大和の笑いは止まらない。

「あっはっはははははは。解釈も何もまるわかりだよ」

「そんなわけないだろう。きみがなんと言おうと絶対に私は食堂には行かないからな」

頑として食堂に行こうとしない天宮。

だがそれでも大和は引きたくないので遂に最終手段を用いる。

「あー、背中が痛いなー。めちゃくちゃズキズキするなー。あー痛い。たとえ自分の所為だとしてもやっぱり痛いなー。あー痛い痛い」

大和の一計は見事に天宮に命中したようで、大和の言葉を聞いた途端、天宮の顔が怒ったような困ったようななんとも言えない表情に変わる。

「卑怯だぞ」

「卑怯で結構結構まったたく問題なしだ。あとさっきから俺のとききみって呼んでるから、罰ゲームとして食堂でつぼみ達と飯食うぞ」
「本当に卑怯だ」

天宮は苦虫を噛み潰したような顔へと変わる。

第三話 友達とはかくも難しき物なり

白い壁、白いテーブル、白い蛍光灯。

「相変わらず眩し過ぎるな食堂は、^{コト}どんだけ清潔感を出してるんだよ」

キヨロキヨロと辺りを見回しながら、五人が座れるスペースを探す大和。

だがしかし、昼休みになってからかなり時間が経過しているためか、五人丸ごと座れるようなスペースは食事を受け取るカウンターからかなり離れた所にしか存在しない。

「だがこの明るさと白さのお陰か食堂の清潔さは学校の中でも郡を抜いているように思える。学校側がこのことを思慮に入れて汚れやすい食堂をこの様な内装にしたのだとしたらその考えは正しいものだ」

天宮は大和が理解を示さなかった食堂の内装に感心しながら、大和の数歩後ろに付いてくる。

と、いたって本人達は普通に食堂を物色しながらなるべくカウンターに近く空いているスペースを探しているのだが、食堂内ではその様子に生徒達がざわめいていた。

「天宮さんが食堂に来てるぞ」「それも一人じゃなく誰かと一緒にだぞ」「おい天宮さんと一緒に歩いているあいつは一体だれだ」「天宮さんの彼氏かな」「どういうことなんだよ」「私たち夢みてるんじゃないよね」

さまざまな憶測や考えが食堂を取り巻いていた。と言っても当の本人達はスペース探しと食堂の内装に夢中でまったく気が付いていない。

「うーん、ここでいいか」

場所としてはカウンターから遠い気がするが、この時間帯を考慮するとそれなりにマシな場所を取れたと大和は考え、天宮に了承を得る。

「なあ天宮。もうここでいいよな」

「ん？ 別に私は何処だろうと関係ない。き　大和がいいのなら別にどこでもかまわないよ」

「よし。じゃあココでいいか」

天宮が席に付くと大和はテーブルを回り込み向かい側の席へと座り、隣の席に持っていた鞆を置いて、後から来る友人たちの席を確保する。

ここでようやく大和は周囲に居る人間が自分達の話で湧き上がっている事に気が付く。

（教室での出来事といい、食堂食堂でのこのちよつとした騒ぎといい、天宮はよつぽど学園の有名人らしいな。まあ天宮の容姿を考えれば、学校の騒ぎになるのは十分だとは思っけども）

ちらりと天宮の顔を見てみると向こうもこちらを見ていたように目と目が合ってしまう。

「どうした天宮、俺の顔になんかついてるか？」

「別についてなんかいないが、大和こそ私の顔を見てきたじゃないか、私の顔に何かついてるのか？」

「ん？ ついてるよ。目と鼻と口がな」

「ずいぶん寒いことを言うのだな」

「まじでか、俺の生まれた国じゃ最高にうけたんだけどなあ」

「俺の生まれた国ということは、きみは忒本生まれではないのか？ いたって真面目に聞いてくる天宮に大和は笑いそうになるのをぐつと唇を結び堪える。

「天宮は本当に冗談が通じないな。まあそれが天宮の魅力っちゃあ、魅力か」

「冗談が通じないのが魅力？　もしかして私はいま馬鹿にされているのか」

「まさか、馬鹿になんかしてねえよ。ただ俺が天宮の魅力を再確認しただけだよ」

「なんだか耳元に引つかかる言い方が気になるのだが」

天宮は大和の言葉に納得のいかない様子だ。

「まあまあそんな細かいこと気にしていると顔にしわが増えるぞ」

「流そうとしてもむだだ、大和は自分の不利益な話をすぐ流そうとするからな」

「そういうことは分かるのになんで冗談は通じないんだ」

大和は大袈裟に首を振りやれやれとポーズを作る。そんな姿に天宮は未だ不満そうに見つめてくるが、その視線には気づかない振りをしておく。

こんな何とも抑揚の無い会話をたいして抑揚を付けずに話す二人。その会話は何年も苦楽を共にしてきた老夫婦のような面白みの無い会話だが、二人ともこの会話に満更でもない満足感を得ていた。

「ふふふ、楽しそうに話してるねえ。わったしも混ぜてえ」

空気が一気にブチ壊れる。

先ほどまでの安定感や満足感は消え去り、その空気は盛り上がる事が大好きななんとも高校生らしく騒がしい空気へと変貌していく。それと同時に天宮が表情を消していく。

「あれ、古林はどうしたんだ？」

「あれ、古林はどうしたんだ？……じゃないよ大和っち！ 席を確保したなら教えにきてよ。どこの席を取ったか分からなくて少し探したんだからね。これでもし私の白湯麺がのびのびでモチモチになつてたら大和っちの所為だからね！！」

むう、と怒りながら大和の隣へと白湯麺を下ろし座ってくるつばみ。

「それもそうだな、こんだけ食堂が広いんだからつばみの言う通りだ、悪かったなつばみ。お詫びと言っちゃ何だが俺の弁当のおかずを一品差し上げよう」

「ほんと！？」

目をキラキラと輝かせ大和の腕を引つ張ってくるつぼみ。その顔には先ほどまでの不機嫌さは微塵も感じない。

「やったあ、やった、やったあ」

喜び方が軽く天井突破している気がしなくてもないが、不機嫌が直り且つこんなに喜んでいいるのだから良かったのだらうと、大和は腕を引つ張ってくる高校生には見えない可愛い少女を見下ろしながら笑みを見せる。

「やった、やった、やったあ　　！　あ、天宮さん！！」

つぼみは今頃になって前に座る天宮の存在に気が付いたらしく、天宮の名前を大きく叫んだ後、おずおずと大和の腕から手を離し緊張した面持ちで天宮に言葉を投げ掛ける。

「あ、天宮さん。こうして話すのは初めてだね」

あのつぼみが緊張している！　大和にとつてその出来事はこちらに引つ越してきて一番の驚きであり自分の脳裏に雷が轟いた気さえる。

「……………」

沈黙。

「天宮さんはお弁当なんだよね」

「……………」

沈黙。

「え、えーっと。天宮さんは何か趣味みたいのはある？　私はねサイコロを集めるのが趣味で、今もおもしろいサイコロ一杯持つてるんだあ」

「……………」

沈黙。

「えーっと。えへへへごめんね私の趣味なんて興味ないよね」
つぼみの瞳にしずくが溜まる。

「……………」

やはり沈黙。

「ぐすつ。わ、わたし。あ、あかちゃんたちを呼んでくるね」

服の袖でゴシゴシと目を擦った後つぼみ早足でテーブルから離れていく。

その様子を静かに観戦していた大和が口を開く。

「お前は虐めっ子か天宮」

大和の言葉にビクリとしながらも表情を崩さない天宮に大和はゆつくりと話します。

「なあ天宮。一つだけ言わせてもらいたいんだけどいいか？」

「その沈黙は肯定の証だと受け取らせてもらっぞ」

大和と天宮の周りに緊張感が漂っていく。

「天宮。俺はお前がどうして人と関わりたがらないのか理由は知らないし、知りたいとも思わない。たぶん相当な出来事があって、お前はお前なりに今みたいなき方に決めたんだろうと思う。けど、ただな天宮、これだけは覚えていてほしいんだけど。『友達』を作るのに過去は関係ないし資格も必要ない。ましてやお前の『力』なんてのはまったく関係ないんだよ」

会話に聞き耳をたてていた者達は大和の言葉の意味がまったく理解できなかった。だがしかし天宮の表情はいま話していたことが天宮に対して大きな意味を持っているのだと語っていた。

「確かに今ここで天宮とつぼみが話しをしただけで、つぼみがお前の『友達』になるとは思わないし『友達』は作るうと思ってるものでもない。それでも、わざわざ寂しそうな目をしながらつぼみの質問に無視して、つぼみが泣きそうになるのをオロオロした表情で心配するぐらいなら『友達』になってもいいんじゃないのか」

「……」

天宮の変化に大和は笑う。

「だからさっき言っただろ。天宮はすぐ顔に出るんだよ」

「そんなことは無い！」

急に声を荒げた天宮に聞き耳をたてていた生徒達の肩が震える。中には持っていた箸を落した生徒達もいた。

「そんなに大きな声だせるのか。俺はてつきり唇に接着剤でも貼り付けてるのかと思っただよ」

「ふざけないでくれ！ きみは先程から私のことを全て分かっていくかのように話しているが全然分かっていない！！ はっきり言わせて貰えば迷惑だ！ 来たくも無い場所に連れて来られ。作りたくも無い友人を作れと強制する。きみは私の何なんだ！」

「何って……それは天宮が決めることだろ」

「だったら君も他人だ！ 私にとっては何でも無い人間の一人だ！」

天宮は床においてあつた鞆を手に取りテーブル立ち上がる。

「何でも無い人間の一人か……でも俺にとって天宮は大切な友達の一人だからな」

天宮が大和の言葉に少しだけ言葉を失う。

「も、もう知らん」

それだけ言うと天宮は食堂の出口へ向かい出て行ってしまった。

「うーん。難しいなこりゃ」

大和は天宮への問題に頭を捻る。

確かに一人が好き人間もいるし、人と関わりたくない人間もいる。だが天宮の場合は好んで独りになったのではない、好んで仏頂面で一日を過ごしているのではない。そのことは大和との会話で出てきた様々な表情や行動から簡単に分かる事だ。

だからこそ大和は放って置くわけにはいかなかった。

大和は天宮の姿に（本当にあのときの俺そっくりだ）自分の昔の姿を重ねていた。

（さてさて次はどうやって天宮をつばみ達と接触させよう）
などと悪だくみを考えていた大和に

「ん？」

いつの間にか帰って来るなり、くいくいと力なく右袖の裾を引いてくる人物が一人。

「悪かったなつばみ」

乾いた笑いしか出てこない、恐怖で顔って震えるんだなあなんて
思いながらも大和は振り下ろされ、だんだんと大きくなっていく断^か
頭台を見つめながら、こちらに引っ越してきてから今日までの思い
出を走馬灯のように思い浮かべる。

第四話 白湯麵とロリコンコックと生徒会副会長

「なんだ、そういうことなら早く言ってくればいいのに、朝倉君も人が悪いなあ」

「ほほう、人が悪い？ その言葉をこんなに膨れた頬にしてくれた張本人が言うなんて中々の度胸だと思うんだけど。俺の気のせいかな」

大和の頬は真っ赤に染まり、頬いっぱい何かを詰めているのかと思ってしまうほどに、大きく腫れていた。

なぜ頭ではなく頬を真っ赤に腫らしているのかというと、つぼみの静止により多少の迷いが生じたのだろう、古林のかかと落しは垂直ではなく斜めの軌道を描いてしまったため、本来ならば体の中では比較的に硬い部類の頭に直撃するはずのかかどが、顔の頬に抉りこんできたのである。

つぼみの静止が仇となったのは言うまでもない。

「も、もしかして怒ってる？」

「怒ってる？ まさか、そんなわけ無いだろ。何にも悪い事をしてないのに友人から本気のかかと落しを喰らって頬が腫れただけなのに、怒ってる！？ そんなわけないだろ」

「や、やっぱり怒ってる！？ ごめんなさい！ 本当にごめんなさい……！」

古林は大和に対して目一杯に頭を下げる。

「さて、冗談はさておき松岡はどうしたんだ？」

大和の突然の切り替わりに肩透かしを食らう古林とつぼみ。

「ゆ、ゆるしてくれるの朝倉君」

「許すも何も俺はそう簡単に怒ったりはしないよ。昔から怒りは大

敵だって散々教わってたし。あ、でもこの間は簡単に激怒しちゃったな、もしおっさんが生きてたら………いや、考えるの止めておこう」

想像しただけでも大和の背筋に冷たいものがヒヤリと流れる。

「大和つち、おっさんって?」

大和の独り言のような会話の中で気になった単語をつぼみがチヨイスする。

「んー、なんて説明したもんか……ようは俺の名付け親で育ての親、兼師匠だな」

「師匠ってなんの?」

つぼみだけでなく小林も大和の話しに出てきたおっさんという人物が気になるようだ。

「俺の生き方の、かな」

「大和つちの生き方ってなんなの?」

「そりゃあ、俺を見てればそのうち分かるさ」

「??」

ほとんど謎のまま進んでいく大和の話しに付いて行けず、つぼみと古林は顔を見合わせて首を捻る。

「そんなに考えることじゃないって、それよりもとつとご飯にしようぜ、じゃないとつぼみの麺がどんどんでもないことになるぞ。まあ今でも十分とんでもないことになってるけど」

つぼみと古林は同時に白湯麵へと目を向ける。

そこには黄色く、見るからにもちもちの何かがどんぶりの中に溢れんばかりに入っておりスープは底の方に気休め程度に溜まっていた。

その物体には白湯麵の面影は微塵も感じられない。

「白湯めえん……グスツ」

つぼみが泣きたくなる気持ちも十分に分かるほど、納得の白湯麵がすでに出来上がっていた。

「つぼみそんなに泣かないで。私のカツ丼あげるから」

古林の昼食はいつもながら、一般の高校生女子ならば避けようとする部類の物ばかりである。ただそんなことを口にすれば、頬が腫れる程度では済まなくなるので、大和は自分の口にチャックを施す。大和がチャックを施している間も、古林がつぼみのぐずりを何とかしようとおれこれ手を打ってはいるが、つぼみの白湯麺への悲しみは消えることはないようで

「白湯麺……ぱいたんめえん」

終始俯き加減のつぼみに対し、焦りを募らせていく古林はつぼみをどうにかして元気付けようと様々な行動を起こすものの、全て失敗に終わってしまう。

そんな光景をただ何もせず眺めていた大和だが、古林から放たれる何とかしてくれ光線が全身にビシビシと伝わり流石にどうにかせねばと、この状況を打破できる何かは無いか頭を回転させる。

だがいくら頭を回転させてもいつころに思いつきそうにない。

元気パラメータがどんどん落ちていくつぼみ。

その現象にますます焦っていく古林。

それによりますます強く放たれてくる光線。

沈む気持ち。

重くなる空気。

そんな状況を打破してくれたのは意外な人物だった。

「なにアホみたいに暗い顔してんだお前ら」

打破……してくれるのだろうか。

「松岡、ずいぶん早かったな。あの行列じゃあ昼食は無しになると思っただけだな」

「ああ。確かに危なかったぜ、だが俺には必殺技があるからな」

「必殺技？　なんだそれ？」

「それはだな」

松岡は勿体つけながら大和の取っしておいた席へと座る。

「順番交換だ」

「……………ようは割り込んで入ったってことでいいのか」

呆れたように言う大和。

「ノン、ノン、ノン！ 割り込んだなんて失礼な、俺はそれ相應の代価と引き換えに順番を譲ってもらっただけだよ」

「なんだよ代価って？」

「……………そのうち教えてやるよ」

松岡はチラリと女子二人メンバーを横目で見た後に小声で話してくる。

見るからに怪しい松岡の行動だが女子二人は一人はグズリ、一人はそれをあやすのに必死で松岡のことなど眼中に無いらしい。

「そのうちね……………それよりも松岡、お前そんなに食うのか？」

大和は松岡が昼食にトレーを二つも持ってきたことが気になり、尋ねてみる。

「ん？ ああ忘れてた」

大和に言われて何かを思い出したのか、松岡は自分が持ってきたトレーの一つをつぼみの前にスツと置く。

「??？」

大和だけでなくつぼみや古林も松岡の行動の意味が理解できていない。

「孝、なにこれ？」

松岡がつぼみの前に置いたトレーには大きめな井いづみが一つ乗っており、井の中には白いスープに白い麵、その上には緑を基調として色鮮やかな野菜たちが大盛りになっていた。

「俺もよくわかんねえんだけど、源内のじいさんがつぼみに持って行って」

「なんで？」

つぼみは理解が出来ないと頭を捻る。

「あのロリコンじじい……………グッジョブよー！」

古林はすくりと立ち上がり、厨房で忙しそうにフライパンを振るロリコックに向けて親指を上に向ける。古林のグッジョブに気が付いたコックも古林に向けて親指を上に向ける。

どうやら、つぼみを守る会の会長と副会長のようだ。

その行動を見た松岡は

「いいよな、つぼみばかりVIP待遇だよお」
などと愚痴っている。

そんな松岡を無視して古林はつぼみに話しかける。

「つぼみ、ふやけちゃった白湯麺は無視して、こっちの新しい方を食べなつて源内さんからの差し入れみたいよ」

「え！？ そんなのだめだよ。わたし二つ分もお金払ってないんだよ」

つぼみは突然の出来事に困惑しているようだ。

「いいからいいから、大丈夫だよ」

「だめだつてばあちゃん。それにいくら伸びたつて食べ物無駄にしちゃいけないし」

先程までぐずつてたとはいえ、流石に自分の所為で伸びてしまった物を捨ててまで、新しい物を貰って食べるということは、つぼみにとって気分の良い物ではないらしい。

「それに、伸びた白湯麺だつて意外と食べてみたら美味しいかもしれないね」

そう言いながらつぼみは自分の買ってきた白湯麺に手を伸ばそうとする。

「あれ、私の白湯麺は？」

「んん！ 確かにズズツ、伸びててもズツ、いけるなあズー、ぷはっ、この白湯麺」

「なんで私の白湯麺を大和っちが食べてるの！？」

「細かい事を気にしなさんなつぼみ。お前には新しい白湯麺があるだろう。ゴックン」

残り少ないスープを口に含みながら大和はつぼみの白湯麺を勢いよく食べていく。

その映像にはつぼみだけでなく松岡や古林も大和の真意を測りかねて絶句していた。

「でもこの新しいのはお金払ってないから、私のじゃないよ」

「源内さんが好意でくれたんだから。その白湯麺はつぼみのだろう」

「でもそんなこと私だけ特別なのはいけないと思うんだけど」

「いいじゃん別に、くれるっていうんだから貰っておけば」

「でも……………」

「でもでも言ったって、もう作っちゃったんだから今更だめになんてできないし、返品されたら逆に源内さんが困るだろ」

大和の話しに少しは納得の表情を見せるつぼみだが、まだどこか心の咎める部分があるようだ。

「……………じゃあこうしよう。つぼみの白湯麺を俺が食べちゃったんだから、この白湯麺を俺のにしよう。俺があとでこの白湯麺の代金を払うから、つぼみは気にしないでまた麺が伸びる前にとっと食べな」

「でもそんなの大和っちに悪いよお」

「えーいうるさい！ でもは禁止しろ！ 食事はみんなで楽しく食べるもんだ。それに悪いと思うなら今日の放課後しつかりと学校案内してもらってから、早くそれ食って体力満タンにでもしておけ」

のびのびでぐちゃぐちゃでもはや最初の形を呈していない白湯麺を頼張りながら語る大和の言葉に、つぼみは少し呆気に取られたあときらきらとした笑顔で返す。

「ありがとう大和っち」

「その言葉は松岡に言え」

「なんで俺なんだよ」

松岡は急に出てきた自分の名前に困惑する。

「俺、金無いからお前が代わりに払っておいてくれるんだろ？」

「当たり前みたいな顔しながら、なに決定事項みたいに言ってるんだ！」

「いいじゃねえか別に。明日には返すからよ、頼むよ松岡」

「そんなこと言われても俺も今月はかなり厳しいんだよ。買わなきゃいけない物もたくさんあるしな」

「どうせ妹のグッズを集めるだけなんでしょ」
「うるせえ！ とりあえず出たもんは全部買うのが、兄としての勤めなんだよ」

古林と松岡は本日何度目になるかも分からない痴話げんか始める。だがそんな空気に登校三日目にして慣れてしまった大和は気にも留めずに聞いてみる。

「じゃあ古林が貸してくれ」

「え！？」

「いや、だから松岡が貸せないんだつたら古林に頼むしかないなあ」と、流石につぼみから借りたら本末転倒だと思っし」

「え、えーっと悪いんだけどさあ、今月は色んなもの買っちゃったからかなり厳しくて全然財布に余裕がないの、ごめんね朝倉君」

「ハッ、結局お前だつて金貸せねえんじゃねえか。どうせまた使いもしねえもん買ったんだろこの通販マニアが」

「いいでしょ別に！ あんたみたいにきつしよいシスコン趣味に投資するよりよつぽど全うなお金の使い道でしょ！」

古林と松岡はテーブルを隔てながらも激しく睨み合う。二人の背中にはそれぞれの背負う物が垣間見えるほどの迫力があつた。

「やっぱり私がお金払うよ大和っち」

「うーん。その提案の答えは却下しかでてこないな」

大和はつぼみが財布の入っている鞆を取ろうと伸ばした右腕を静止してどうしようかと考える。目の前では睨み合いから相手のウィークポイントを言いあう醜い争いへと戦いの仕方が大きな変化を見せていた。

「よければ私が払いましょうか？」

腕を組み打開策を考えている大和の顔の前を横から白く綺麗な手がにゅつと飛び出してきた。

「どちらさん？」

大和は突然現れた白い手の持ち主に簡単且つ簡潔な質問を投げ掛ける。

「いきなり割って入ってしまったってごめんなさい。私の名前は実梨^{みなし}。
実梨^{みなし}真と申します」

「実梨？ つい最近聞いたことが有るような、はたまた無いような」
「大和つち、前に話したでしょ。戦国高校生徒会副会長の実梨さんだよ」

「あら私のことをご存知なんて、光栄の一言に尽きます」
実梨^{みなし}と名乗る女子はつぼみに対して綺麗なお辞儀と綺麗な笑みを
見せる。

「それで、その生徒会副会長がどうして俺に金を貸してくれようとするんだ。別に生徒会の仕事の中に高校内で銀行の役割があるってなら、よろこんでお金を貸して貰うけど」

「オイ大和。いくらなんでも失礼すぎるだろ」

急にしゃしゃり出てきた松岡は、実梨と大和の間に割って入り。

今まで見せたことも無いような笑顔を振りまく。

「いえ、別に全然構いません。急に出てきた私が悪いのですから、それに銀行に喩えた嫌味はなんともユーモアがあって面白いと思います」

サラリとした髪をなびかせながら、青く透明に澄んでいるメガネを落ちてきた鼻の先から自然な手つきで上へと置き直し、細いウエストと反比例する大きな胸の下に右腕を組みながら、きらめく笑顔を振りまく実梨に松岡の鼻の下は急激に伸び広がる。

「すいません実梨さん。こいつ人の好意を恥ずかしくて素直に受けられないシャイボーイなんです。気に障ったのならわたくし松岡孝が親友に代わって謝罪させてもらいます」

「え？ なにこいつ」

驚くほどの変化を遂げた下心まるだしの親友（松岡曰く）に、しばかりの侮蔑と嫌悪感を抱いた大和は、自分の抱いてしまった思いを誰かと分かち合うためつぼみにたずねる。

「ずっずっもぐもぐ。まつまつは昔からこんな感じだよ」

つぼみは最後に「いつものこと」という言葉を付け足して、同じ

過ちを二度と繰り返さぬ様、おいしそうに白湯麺を啜る。

だが、なんとしても自分の思いを誰かと分かち合いたかった大和は、興味なさそうなたまげみではなく、必ずや自分と同じ思いを抱いているであろう人物へと目を向ける。

「……………」

(……………背中に鬼が見える)

ちよつとした事件に発展しそうだったので古林に話を振ることを急遽中止にし、大和は実梨へと話しかける。

「結局、あんたは何で俺に金を貸してくれようとしてんだ」

実梨は大和からの問いに少し悲しそうな表情を見せて答える。

「もしかしたら知っているかもしれないけれど、天宮さんを周囲から孤立させてしまったのは私が原因なの。私があ程度の言葉で泣いたりしなければ、天宮さんはあんなふうになんて心を開いてしまつことは無かつたと思うの」

「そんなことないです！ 実梨さんはやれるだけのことをやってますよ」

「ふふつ、ありがとう松岡君」

実梨の笑顔に松岡の顔がはんぺん以上にふにやふにやになる。それと同調して古林の鬼も大きさを増していくのは見なかつたことにする。

「でも私としてはどうか天宮さんに心を開いて欲しいと思って、何度も話しかけたんだけどその度に無視されちゃってて困っていたの」

「流石です。そんなことができるのは実梨さん位しかいません！

実梨さんは僕たち戦国高校男子の天使です!!」

「天使だなんて。そんなこと言っつて私を乗せようとしても無駄だからね」

「いやいや、俺はいつも自分の思ったことしか言いませんから」

松岡は頭を掻きながら嬉しそうに笑う。

これ以上松岡に話をさせると、古林が殺人犯になつてしまひそう

なので早急に話を元に戻す大和。

「そつからどうして、俺に金を貸すに繋がるんだ」

「さっきあなた天宮さんとお話してたでしょ」

「ああ。まあ最終的には怒らせちゃったけど」

「でも天宮さんがあなたと話をしているとき、私にはとても楽しそうに見えたの。だからあなたにはもつと天宮さんとお話してほしくて、私もあなたの何かお手伝いになればって思って、自分のできることに手を挙げたの」

「それが、天宮の所為でダメになった白湯麺のお金を貸すことだったと」

「別に天宮さんの所為だとは思ってないわ、ただお金の事が原因であなたが天宮さんとお話しようとしなくなるのが嫌だっただけなの。実梨の話を聞いて感心したようにつぼみは言う。

「すごいねえ、さすが実梨さん。本当に皆のこと考えてるんだね」
「そうね。さすがだなあ実梨さん」

つぼみに続いて古林も実梨の考えに感心する。

大和としては、古林の顔がずいぶんとスッキリしていることや、いつの間にかいなくなっている松岡の所在がとてつもなく気になった。

「そんなことないよ。私はただ自分の所為で閉じてしまった天宮さんの心をどうにかして開いてあげて、学校で一人きりじゃなくしたいだけの、自分勝手な人間だから……」

「そんなことないよ。実梨さんとはとても立派よ。だから」

古林が下を向いてしまった実梨を元気付けようとしたそのとき

「本音は？」

「え??」

大和の意味の突然の言葉に意味の分からない三人は気の抜けた声をだす。

「だから、あなたの本音は？」

大和はまっすぐとした目で実梨を見つめる。

「私の本音はさつきも言った通り天宮さんの心を開いてあげたいだけ」

「まあ言いたくないならそれでいい、俺が代わりにお前の本音の答えを言つてやるよ。『天宮とは話したけどあいつは話してない』」

「どういう」

「分かったのならそれでいいし、分かってないのならそれでもいい。ただ俺から言えるのはそれだけだ。ああ、あと金は別にいらさない、源内さんに理由説明して明日にでも金を持ってくるから」

「そう。なら何か困った事があつたら呼んで、何か力になれるかもしれないから」

実梨は笑顔のまま大和たちのテーブルから離れていく。

「ちよつと朝倉君。いくらなんでも酷すぎない」

「そうだよ大和っち！ あんな言い方して、笑つてたけど絶対実梨さん傷ついてるよ！！」

大和の実梨に対する言動に女性陣から非難が飛んでくる。

だがそんな非難を特に聞き入れる様子も無く大和は呟く。

「みなしまこ実梨真……ね。ずいぶんややこしい名前だな」

第五話 向かう場所

男は本を読んでいた。

その本の内容は伝説の勇者と呼ばれる人間が人々を苦しめる悪の怪物を倒し、最後には王国のお姫様と幸せに平和の世を暮らすといったオードソックスな勇者の物語である。

男はそんな本を引き裂きたい気持ちを抑えながら一枚ずつページをめくる。

そしてようやく最後のページをめくり終え、思った感想を口にだす。

「このようなくだらない本が、何故この世には出回っているのか」
怒りを通り越して哀れむように呟く男。

「どうしてこの勇者とやらは何の力も持たず他者にすがりつくことしかない、寄生虫のような下等な生物共をわざわざ救おうとするのか……私には理解できそうにない」

そう言いながら、男は先ほどまで読んでいた本を部屋の隅に置いてあるゴミ箱へと放り投げる。

ガコンと響き渡る金属製のゴミ箱の音と共に男の携帯が鳴りひびく。

男は机の端にピツタリと置いてあった携帯を開く。

画面には『メール一件』と書かれており、男はそのままメールのボタンを押し、送られてきたメールの内容を読む。

「……………了解しました。尾張様」

メールを読み終えた男はそのままイスから立ち上がり、端にピツタリと置いてあったマッチを手に取った。男はそのマッチに火を点けてゴミ箱の中へと放り込む。

焼けた匂いと共に金属製のゴミ箱の中から紙の燃える音が聞こえてくる。

「全ては我らが『創世の人類』^{リパース}のために」

男は燃えるゴミ箱をそのままに部屋を出て行く。
他者にすがり付くことしか出来ない寄生虫を守る、勇者を葬るために。

|||||

「ここはね、普段のときは二階にあるただの空き教室なんだけど。お昼休みには遊び部屋となつて手本引きや花札、麻雀からポーカーまで、色んな遊びができる隠しお楽しみルームになるんだよ」

「どれも賭けが付きそうな嫌なゲームばかりなんだけど」

「先生たちには絶対内緒なんだよ」

「いや、だから賭け」

「その先は言わないのがお楽しみルームを知っている人のマナーだよ」

「……………」

「じゃあ次の案内に行くよ」

大和は先ほどから自分が案内されてきた場所を思い返してみた。

（不良のたまり場。有名な告白スポット。学校の七不思議の六ヶ所。実態の無い幽霊部活の部屋。挙句には賭けゲーム教室）

「つばみが情報通なのはよく分かったけどよ……………」

「もしかして楽しくなかった!？」

「いや楽しいとかそういうレベルの問題じゃ…………いや、楽しいよ。」

次は何処に案内してくれるんだ」

「うん！ 次はねえどうしよっかなあ」

楽しそうにスキップしながら大和の横を歩く小学生のような女の子^みに、ため息を吐きながらも何処か楽しく感じてしまう自分に笑い

つつ、大和はつぼみに着いて行く。

ふと大和が窓から外を眺めると、真っ赤な夕日が一日の終わりを悲しむように、ゆっくりと沈むところだ。そんな悲しげな風景を眺めていると、天宮のことを思い出してしまった。

あれから天宮はつぼみだけでなく大和までも無視し始め、大和と一切の会話をしようとはしなかった。どうやら食堂の件を気にしているらしい。

天宮が意外と根に持つタイプのようだということが分かったのは、それはそれで面白かったのだが、友達を作らないまでも学校で少しはクラスメイトと会話をしてもらおうという、今日大和が密かに経てていた計画は崩れ去ったどころか、大和までもが会話対象から外されてしまうという大失敗に終わってしまった。

沈みゆく悲しげな夕日を見ながら、天宮についてこれからどうしようかと大和が考えていると。

「大和つち、急にどうしたの？」

窓からの風景を見て考えを巡らせていた大和は、つぼみの声で現実を引き戻される。

「おつと悪い悪い。ちよつと考え事してた」

「それつてもしかして、天宮さんのこと？」

「あたりだよ。良く分かったな」

「そりゃ分かるよ……………大和つち今日はごめんね」

お昼の食堂でのことを気にしているのだろうか、つぼみはすまなそうに顔を下に向ける。

「なんでつぼみが謝るんだよ。あれは天宮を無理やり連れてきた俺の所為だろ」

「大和つちの所為なんかじゃないよ。私が天宮さんに気に入られなかったのがいけないんだよ」

「……………つぼみ。お前いい奴だな」

「なんで、どうして急にそんなこと言うの!？」

「別にただそう思ったから口にしたただだよ。だからそんないい奴

のつぼみに一っだけ頼みがあるんだけど」

大和はすこしだけ真剣な目をしてつぼみの瞳を見つめる。

「何かな？」

「天宮と友達になろうとするのを諦めないでくれないか。あいつも本当はすごくいい奴なんだ。それに自分では思っていないかもしれないけど、お前らとも仲良くしたいと思ってるはずなんだ。だけどそんな気持ちを素直に出せないほどの出来事が、あいつの背中には乗ってるんだと思うんだよ。でもだからこそ天宮には友達が必要だと思っただ、俺みたいないな馬鹿だけじゃなく。つぼみみたいな同姓の友達があいつには必要なんだ」

大和は天宮の顔を思い出す。自分は死神だと言った、寂しくて悲しみに満ちたあの顔を思い出す。

「だからつぼみ、天宮と友達になろうとするのを諦めないでくれ」

「いやだよ」

つぼみは大和に言い放つ。

「そ、そうか。悪かったな変なこと頼んで」

「悪いに決まってるよ大和っち。友達っていうのは頼んでなるものじゃないんだよ。それに私は自分が友達になりたくて天宮さんと話すの。今日だつて大和っちに頼まれたから食堂で天宮さんに話しかけたわけじゃないもん……………本当はもつと前から話したかったんだけど、天宮さんは一人で居る方が良くのかなってずっと思ってたからさ。だけど今日、大和っちが天宮さんと話しているのを見て分かったんだ。天宮さんもだれかと一緒にいると楽しいんだって、だから友達になりたいって私が思ったの。だから大和っちに頼まれたって、ダメって言われたって私は天宮さんと友達になるつもりだよ」

満面の笑みで大和に話すつぼみに大和は少し啞然とするが笑みをこぼす。

「そっか、そうだよな。……………つぼみ、俺はお前と友達になれて良かったよ」

「そっかな、えへへへ」

大和の言葉を聞いてつぼみは照れくさそうに顔を赤くして笑う。
そんなつぼみを見ているとこちらまで恥ずかしくなりそうだったので大和はつぼみを見ないで済むように、意味も無く携帯を開いて見る。

なんの意味も無く開いた携帯だったのだが、画面を見てみると最後の授業が終わってから相当な時間が経っていることを知った。

「やべ、もうこんな時間か。つぼみ、悪いんだけど俺この後やらなきゃいけないことがあるから、案内の残りはまた今度にしてもらっていいか？」

「そうだね。別に大丈夫だよ」

「ありがとな」

「大和つち。やらなきゃいけないことってなに？」

「うーん、恥ずかしくてあんまり言いたくないんだけど。定期を落としちゃってな」

「定期！ 大変だよそれは、ちゃんと確認したの？ 警察には聞いてきたの!？」

つぼみが焦った表情を見せながら大和に勢いよく顔を近づけてくる。よほど心配してくれているらしい。

「警察には聞きに行つてねえんだ。落した場所は分かってるし」

「何処なの!？」

大和はつぼみの剣幕に押されポロリと取りこぼすように答えままつ。

ゴーストタウン

「廃墟」

|| || || || || || || || || || ||

「また作戦用の車を持ち出したのですか」

天宮は助手席に腰掛けながら、運転席に座る。親子ほどの年の差のある無精ひげを生やした男を蔑んだ目で見つめる。

「そんな目をしないでくれよ。おじさんとしてはマイカーを持ち出したいところなんだけど、いま修理に出しててね」

男は着ているスーツの内ポケットからタバコを取り出す。

「一本吸っていいかな」

「いいですよ。副流煙は私の周りだけ風でシャットアウトしますから」

「じゃあ遠慮なく」

男はタバコを一本取り出すと右手で口に咥え左手で車のシガーライターを使いタバコに火をつける。

吸い込んだ息を吐き出すと白い煙が車内に充満する。

だが、天宮の周りにだけは煙が届かない、まるで膜でも張ってあるかのように天宮の周りを遠ざけながら煙は進む。

「じゃあ本題に入らせて貰ってもいいかな？」

男は車内から差し込む夕日を眩しそうにしたあと脇に置いてあったサングラスを掛ける。

「はい。私はとづくに準備できてますから」

「じゃあ始めはこの間の菅原との出来事を報告してもらおうかな、ちゃんとしつかりと本当の報告をね」

菅原の言葉で天宮に緊張が走る。

本当にしゃべっても大丈夫なのだろうか、報告したことにより大和を不幸な状況に追い込んでしまうのではないだろうか。天宮の思考がぐるぐると回転しだす。

そしてそんな天宮の考えを見通したように男は告げる。

「大丈夫だよ。天宮ちゃんが今からする報告の内容を把握できるのは、おじさんと結奈ちゃんだけだから」

「ど、どういことですか隊長」

「隊長じゃなくて神成で大丈夫だよ。今日のやりとりは本部にはも

ちろん、誰かに伝えるつもりは一切無いからね」

天宮は神成の言おうとすることが理解できない。

「まあ本部に伝えないって話の詳しい事情は、遙ちゃんから本当の報告をしてもらった後にするから」

天宮は迷いながらも神成を信じ、博物館で起きた菅原の事件内容を事細かに説明した。

この前の病院で話した内容では大和を巻き込みたくなかったため、大和のことは菅原に連れ去られた一般人として報告をしていた。

だがそんな嘘も全てさらけ出した後、天宮は大きく息を吐く。

「そうか……やっぱり本当にあつたんだね『ブラックストーン始まりの石』が……遙ちゃん、大和君だっけ？ その少年におじさんの所に来てもらえるか聞いてくれた？」

神成の言葉を聞いた途端、天宮は気まずそうに神成から目を逸らしてしまふ。理由は簡単、なぜならば

「実は……ですね、大和に酷いことをしてしまつて。とてもそんなことを話せる雰囲気では無くなつてしまつて……ですね」

「用は喧嘩してしまつたつてことかな？」

「は、はい」

「その顔から察して遙ちゃんは自分が悪いと考えているのかな」

「まあ、確かに大和が無理やり私に友達を作ろうとしてきたのも悪いとは思うのですが、やはり私も大人気なかつたのかな、と」

「ほお、遙ちゃんに友達ねえ。なかなかやるなあ大和君」

神成は大和の体当たりの行動に嬉しさを隠さずにはいられない。

やはり神成も天宮には自分や結奈だけでなく学校が同じ同年代の友人が必要だと思つていたからである。

「なぜ神成さんが喜んでるんですか」

「まあそんなに怒るものじゃないよ遙ちゃん」

笑顔で語る神成だが次の言葉を発するとき、彼の顔からは笑顔が引き、神成がいつも何か重要な話をするときにする引き締まった顔になる。

「もし本当に大和君を大切に思っているなら、そんな喧嘩は早く止めておじさんの所に連れて来ないと、彼の身に危険が迫るかもしれないよ」

神成の変化と話す内容が大和に関してであることが起因したのか、天宮の感情がガラリと変化する。

「どうして大和の身が危険に！？ 何故ですか隊長！」

「ちよ、ちよっと落ち着いて遙ちゃん」

席を乗り出し、ものすごい剣幕で言葉を砲弾のように放つ天宮に、神成は肩を掴み助手席に着席させる。

「いまから理由を話すからちゃんと聞いててね」

神成は天宮を落ち着かせたあと、ゆっくりとした口調で落ち着きを遮らぬよう話し始める。

「大和君の胸に埋まっている『始まりの石』のことだけど、あれはとても重要な物だと言うことは天宮ちゃんにも理解できるよね」

「………確かに。神成さんから聞いたときは眉唾物だと思いましたが、実際に目の当たりにした以上『始まりの石』^{あいのし}能力は全ての『異能力者』^{アブノーマル}たちの脅威となります」

「そうだろうね。脅威となる以上、おじさんたち『異能力者対策部隊』^{ポーターライ}は彼がこの世の害にならぬよう管理しなければならぬ。……おじさんの言いたいことは分かるよね」

「たしかに、大和がもし、なんらかの異常事態で私たちの敵となった場合、大和の持つ力が危険であると言うことは分かります……しかし、私には大和がそのような行動に出ることは考えられません」

「その根拠は？」

「根拠は……ありません」

自分でも何故そんなことを言ってしまったのか分からない。天宮は神成の的確な言葉に声を失ってしまう。

「根拠が無い以上、彼は『異能力者対策部隊』^{ポーターライ}に拘束、もしくは監視されるしかないよね」

「……………」

「納得のいかない顔だね、まあ今の話はおじさんが全てを本部に伝えたらという話が前提に来るんだけどね」

「え!？」

「そんなに顔を明るくして。遙ちゃんは本当に大和君を気にいつたみたいだね」

「そ、そんな話はどうでもいいですから！ はやく大和の件の続きを話してください」

「そうかい、なら話を続けるけど本来ならおじさんは大和君のためにも、この話を本部に伝えたいところなんだけれど、本部に大和君の話をするわけにはいかない事情が出来てね」

「事情、ですか？」

「そう。まあこのことについて少し前からうすうす感じてはいたんだが、どうやら『異能力者対策部隊』に裏切り者がいるらしい」

「そんなまさか!？」

天宮は驚きの表情を隠せなかった。『異能力者対策部隊』と言えば政府から特別に任命されたエリートだけが就ける特別な部隊だ。

天宮のように各部隊の幹部によって特別に抜擢されたものもいるが、殆どは知能や体力だけでなく、生まれから人となりに至るまでの全てを、十分に吟味され選出されるものであり。そう簡単に組織を裏切るような者が就ける部隊では断じてない。

だからこそ天宮の驚きはそれほどまでに大きなものであった。

「確かにおじさんも始めは気のせいだと思っただけど、この間の菅原の件でこの考えは確信に変わってきてね」

「私の事件で、ですか？」

「うん。この間の襲撃で、遙ちゃんは菅原達が自分を『異能力者対策部隊』だと知っていたと言ったよね」

「確かにそうですが、坂下真理子は菅原の手下だったわけですから、私の正体を知っていてもおかしくは無いはずですよ」

「そうだね、確かに遙ちゃんや坂下と大立ち回りをした際に、菅原やその手下がその場面を見ていれば、風を操る人間が『異能力者対
ライオン

策部隊』の『烈風の破壊者』と知つたのかもしれない。だけど坂下を捕まえたとき、遙ちゃんは『異能力者対策部隊』の制服を着ていて正体がばれないよう仮面を着用していたよね。それに遙ちゃんが風を使う前に奴等は遙ちゃんの正体を知っていた。このことから『異能力者対策部隊』の中に情報をリークしている奴がいるのは明白。まあ良かった事といえば情報をリークした奴はそれほど詳しい情報を掴んでいないってことかな」

「何故そこまで言い切れるのですか」

「菅原の性格を考えればわざわざ強敵だと分かっている遙ちゃんを、自分の働いている職場までこさせると思ukai？ もし仮に遙ちゃんを殺したとしても、遙ちゃんが帰ってこなければ自分達が真っ先に疑われるに決まっています。なら普通は遙ちゃんが歴史博物館を調査する話が出てすぐに、遙ちゃんを不慮の事故か何かに見立てる方が効率的だし、殺したあとにも楽なはずだ。それなのにそうしなかった。いや、できなかつたんだ。僕が天宮ちゃんにチケットを渡してそのことを本部に命じたのは遙ちゃんが歴史博物館を調査する一日前、そこから一日経たなければこの情報を知ることが出来ないということは、僕たちのような管理職じゃなく、遙ちゃんのような一般隊員の中に裏切り者がいると考えられるでしょ」

「なんだか、神成さん。いつもにもまして頭が良さそうに見えます」
「!!!」

神成と天宮の間を後部座席から半透明なボードがいきなり出てきた。

天宮は突然の状況に面を食らい。

神成は落ちそうになったサングラスを掛けなおす。

「来たなら早く言ってほしいな、おじさんただでさえ少ない寿命が更にすり潰されたよ」

「まっただ。本当に驚くから止めてくれ」

天宮は言葉と共に後部座席へと目をやる。

後部座席にはさまざまな武器が壁から掛けられ、武器と一緒に大

小さまざまなディスプレイがかけられており、その中心には一つだけイスが取り付けられ、パソコンと連動したディスプレイを座って見られるようになっていた。

そしてそのイスに、一人の少女が腰掛けていた。

少女の首には先ほどでてきた下敷きほどの大きさと薄さのボードが紐でぶら下がっており、少女はその半透明のボードを手に取り、ボードの端に取り付けてあるタッチペンで何かを書いてこちらに向ける。

『お二人ともとても真剣な顔で話をしていたので、邪魔をしたら悪いと思つて。驚かしてしまつて本当にごめんなさい』

ボードを向けると同時にペこりと頭を下げる少女。

「真剣な顔してたつて……結奈ちゃん何時からそこに座つてたの？」

神成の言葉に結奈と呼ばれた少女はまたもやタッチペンを使い、半透明のボードに文字を書く。

『神成さんがタバコを吸い始めた辺りからです』

「それつてほとんど最初から居たつてことだよね」

『そうなんですか？』

少女はキョトンとした表情でペンを走らせた。

「結奈。君は人に遠慮しすぎだ。もう少しどんと構えても罰は当たらないと思うのだが」

「でもそれつて遙ちゃんには言われたくないよね」

「どういう意味ですか神成さん」

天宮の顔が明らかに不機嫌に染まつていく。

「ま、まあそんなことよりも。二人とも集まつてくれたし、結奈ちゃんもおじさんの話を聞いてたわけだから大丈夫だよね」

神成の問いに少女はコクリと頷く。

「よし。なら話を続けるけど。裏切り者がいる状態で大和君を本部に運べば、いい状況にはならないことが馬鹿にでも分かる。だからこそ彼とは一回会つて話しておきたい、しかも早急に、そのために遙ちゃんには大和君を本部ではなくおじさんの家に連れてきてつて

話したわけだ。あと菅原はおじさんと黒柿とで、精神に異常をきたしているってことで、まとも【ユーストタウン】に取調べを行わずにそのまま監獄に入れることになったから。だから菅原から大和君のことが裏切り者にばれる心配はないから。安心して大丈夫だよ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「うんうん。分かったらなるべく早く大和君と仲直りして、おじさんのところまで連れてきてよ。遙ちゃん」

「ぜ、善処します」

天宮は痛いところを突かれたと苦しそ【ユーストタウン】うに言葉を吐き出す。

「よしよし。じゃあとりあえず二人に話す内緒話はこれでおしまい。つぎは今日ある任務についてだ」

『このあいだ天宮さんと一緒に出来なかった分、今日は頑張ります』
「気合たっぷりだね結奈ちゃん」

結奈は頷き笑顔を放つ。

「それじゃあ二人には任務として別々に行ってもらう場所があるから」

「何処ですか？」

「結奈ちゃんには式本博物館に行ってもらって瓦礫の中から何か手がかりになりそうな物を直つつ探して貰うからね……あと遙ちゃんは三度目になるんだけど」

三度目……一度目も二度目も一歩間違えれば危険だったあの場所に、今一度向かわなければなら【ユーストタウン】ないらしい。

「もしかして」

「そう。廃墟」

「了解しました」

天宮はそう言う【ユーストタウン】と車を降りるためドアに手を掛ける。

「あとね遙ちゃん、一つだけ言いたいんだけど」

「なんです【ユーストタウン】か隊長」

天宮は任務をこなすため冷たく、そして表情の無い仮面を取り付ける。

第六話 向かう場所2

「本当に手伝わなくても大丈夫だぞ」

隣をトコトコと小さな歩幅で歩く少女に、大和は歩くスピードを合わせる。

「うっん。今日は暇だからね。それに友達を助けるのは当然のことだよ」

任せてとばかりに胸を張り何処か自慢げに語るつぼみだが、言葉や行動とは裏腹に、その小学生のような立ち姿からは、任せられそうな気がまったくと言っているほど伝わってこない。

「まあそう言ってくれるのは嬉しいんだけど、俺としては明日の古林に会うのがものすごく怖いんだけど」

「なんであかちゃんに会うのが怖いのか？ ちゃんと説明してきたじゃん」

「それはそうだが……………」

大和は無くしてしまった定期券を探しに、新戦国高校駅から歩いて一〇分ほどの場所にある廃墟ゴーストタウンと呼ばれる無人の町へと向かっている。

途中、つぼみが定期券を探すのを手伝ってくれと言っているので、普段つぼみと一緒に帰っている古林に話をつけに体育館に寄ることになった。

話を聞くと笑顔でつぼみの話を了解してくれた小林なのだが、最後に大和の耳元で「つぼみに何かしたらわかっているよね」と恐ろしい脅し文句が大和だけに付け足されていた。

もちろん何かをする気は大和もさらさら無いのだが、明日が恐ろしい事には変わり無い。

「それにしても大和っち。廃墟ゴーストタウンで定期券を落したって言ってたけど、一体廃墟で何してたの」

痛いところをつかれた。まさかつぼみに一昨日の事件を語るわけにはいかないのです、大和は懸命にそれらしい理由を組み立てる。

「何してたって………！ 実はこの間、食堂のテレビでやってた『連続切り裂き魔シル・ザ・リップ』に興味があつてさ！！」

我ながら中々の口達者スキルであると、大和が自画自賛で喜んでいふ。

「大和っち！」

つぼみが真剣な目で大和のこゝろを見つめてくる。その表情には少しだが怒りの感情も見える気がする。

「どうしたんだつぼみ。そんな怖い顔して」

「当たり前だよ！ 連続切り裂き魔って言えばもう六人も人を殺してる最低最悪な殺人鬼だよ！ そんな人を見にいこうだなんて……」

……そんなこと絶対にしちゃダメに決まってるでしょ！」

つぼみは怒っている。目を吊り上げ鼻息を荒くし、顔を真っ赤にしながら危険な真似をした大和を本気で怒っていた。そんなものを見せられたら大和も嘘とはいえ、いや、嘘だからこそつぼみに対して罪悪感が生まれでる。

「ごめんつぼみ。今度からは二度と見に行ったりしないから。本当にごめん」

大和は頭を下げる。内心少しドキドキしながら地面を見つめる大和だったが。

「まったく、本当に危ないんだから。次から絶対にそんなことしちゃだめだよ大和っち」

頭を上げるとまだ少し怒っているようなそぶりを見せるつぼみだが、その瞳はどこか優しいげだ。

「今度からは絶対にいかない。約束する」

大和もつぼみに対して真剣に返す。

「本当に本当にダメだよ大和っち」

「分かってるって。この間はたまたま魔が差しただけだからもう行かないよ。興味もなくなっちゃったしな」

大和の言葉を聞いたつぼみはホッと胸を撫で下ろしている。よほど大和のことを心配しているらしい。

大和はそんな心優しいつぼみに、わざわざ定期券探しを手伝って貰うことが何か悪いことをしている気がしてしまふ。

「やっぱり危ないから、つぼみは帰ったほうがいいぞ」

「ダメ。大和うち一人だともっと危ない気がするから」

「けど実際、『連続切り裂き魔』がでたら、つぼみの方が危ない気がするんだけど」

「そんなことないよ。こう見えても『^{アブノーマル}異能力者』だからね」
胸を張り誇らしげに語るつぼみ。

「自慢げに語ってる所悪いんだが。つぼみの『^{ちから}異能力』って、戦いにはまったく使えないよな」

「確かにそうだけど……それでも大和うち一人で行かせるよりは頼りになる度が全然違うもん」

「頼りになる度って……まあいいか」

「いま面倒だからって話を流したでしょ」

「気のせい気のせい」

心を読まれた大和は顔には出さないが内心セーフと両手を広げていた。

「なあつぼみ一つだけ聞いていいか？」

話を変えるため、大和は前々から気になっていことを、聞いてみることにした。

「なあ。つぼみと古林って、色違いで形は同じリボンをいつも髪に付けてるけど、なんか意味でもあるのか？」

「……………」

大和の言葉を聞いたつぼみは、下を向き何か考えこんでしまふ。

「その……なんだ。言いたくないことなら別に話さなくても全然いいぞ」

大和は少し話を変える程度で聞いた質問で、とんでもない地雷を踏んでしまったことに気が付き、慌てて言葉を付け足す。

「別に話したくないわけじゃないの………このリボンはね。私とあかちゃんの友情の証なんだ」

少し考えた後、何かを決心したようにつぼみは語りだす。

「友情の証？」

「そう。友情の証」

つぼみは頭の上に大きく結んである赤いリボンを触りながら笑う。「私とあかちゃんはね、中学の時に始めてあっただけど、初めの頃はあかちゃんとは違うクラスだったし全然話したことも無かったんだけどね」

つぼみの顔に少しの曇りが見える。

「あかちゃんと友達になったのは中学二年の時。そのころ私ね、ひどい虐めにあつて学校に行けなくなっちゃったの………」

「虐め？」

「そう。無視されたり私の物が無くなったりするのはしょっちゅうだったし、トイレに入ってたら上から水をかけられたりもしたかなあ」

「ずいぶん典型的ないじめだな」

「あははは。大和うちもそう思うでしょ。でもね、当時の私にはその典型的な虐めがすごく効いちゃってさ。簡単に不登校になって家ですつとつとまってきたの、それで私ったら毎日毎日、信じたことも無かった神様をお願いしちゃうくらい弱っちゃってさ。でも、そんな私を助けてくれたのが」

「古林だったと」

「うん！ たまたま家が近いからって学校のプリントを届けてくれたのがあかちゃんだったの。あかちゃんは毎日毎日、根気強く私を学校に連れ出してくれた。学校の虐めも無くなりはしなかったけど、そのたびにあかちゃんが助けてくれて、すごく嬉しかったんだ。でもそれでもやっぱり、辛くて苦しくて痛いのは変わらなくて

私どうしようもなくなつて、死んじやおうなんて馬鹿なこと考えちゃつてさ、学校の屋上から飛び降りようとしたんだ。でもそのときもあかちゃんか命懸けで助けてくれて……このリボンはそのときあかちゃんと約束したことを絶対に破らないように、私とあかちゃんとの絆が解けないようにつて、あかちゃんがくれたものなの」

つぼみはリボンを触つて何とも優しい笑みを浮かべる、その笑みは話の内容とそぐわないほど優しい笑顔。つぼみにとっての最高の思い出、最高の気持ちとそのリボンには込められているのが、ありありと溢れ出ていた。

「約束ねえ。まあつぼみと古林にでかくて太つとい絆があるのは見ただけですぐに分かるけどな。残念ながら傍から見ると仲の良い姉妹に見えるのが玉に瑕^{たま}だけだ」

「最後の一言は余計だよ、大和つち！」

「おお怖い怖い。そんなに怒るなよ。人間、どんなに綺麗な魂^{たま}でも少し傷^{きず}があるぐらいのほうがちょうど良いんだよ」

「むう、何だか納得がいかないんだけど」

その言葉とは裏腹につぼみの顔は何処か嬉しそうだ。

「でも大和つちは本当に変わつてるよね」

「何言つてんだつぼみ、俺は平々凡々なただの一般高校生だぞ」

「そうかなあ？ 普通の人がこの話を聞くとね、大抵同情してくるんだけど、大和つちは全然してないよね」

「なんだその言い方。それじゃあまるで俺が心の無い人間みたいじゃねえか。断じてない、絶対にありえない。そりゃ俺だつて少しは可哀相だなあとかは思つけど………大事^{じま}なのは『現在』^{いま}だろ。過去がどんなに楽しかろうとどんなに辛かろうと『現在』が楽しくなかつたらしょうがねえんだよ。そんでつぼみは『現在』が楽しそうなんだからそれでいいんだよ」

「やつぱり大和つちは変わつてるよ、凄く変わつてる」

満面の笑みで答えるつぼみだが、代わつて大和の方は何処か納得のいっていかない表情を見せる。

「そんなこと無いと思うんだけどなあ」

大和の言葉を聞くとつぼみは笑みで返す。ふてくされたような顔を見せていた大和も、そんなつぼみを見てみると自然と笑みが出てくる。

二人で笑いながら少し歩くとつぼみが大和に向かって聞く。

「ねえ大和っち。天宮さんは『現在』楽しいのかな」

なんとも真剣に聞いてくるつぼみに、大和は少し考えてから話し出す。

「そうだなあ、俺の口からは何とも言えないな。ただ唯一言えることは、つぼみが天宮と友達になれば天宮の人生は『現在』^{いま}よりも楽しくなるってこと位だな」

「そうだったら良いんだけどなあ……………でもどうしたら天宮さんと友達になれるかな？」

「うーん」

大和は考える素振りを見せる。

「よし！ じゃあいつそのこと俺が変装して天宮を襲うから、つぼみがそこを救うってのはどうだ！」

「どうだ！ じゃないよ。いまだきそんな古典的なことする人居ないよ！ それにばれたときのリスクが大きすぎるよ」

「確かに恥ずかしいかもしれないな」

「かもしれないじゃなくて、恥ずかしくて顔も合わせられないよ！（確かにつぼみの言う通り恥ずかしいかもしれないけど、顔を合わせられないほどじゃあ無いな）と何処かずれた感覚を持つ大和。

「どうしたらいいかなあ」

「そうだな、とりあえず今の俺の当面の目的は」

「目的は？」

「定期券の確保だな」

夕日を浴びながら大通りから一本外れた簡素な町並みを歩く大和は、遠くに見えるポロポロのビルが立ち並ぶ廃墟^{ゴーストタウン}を眺め、あらためて見るその敷地の広さに自分の定期券を落したであろう場所にたど

り着けるのかと少し心配になる。

|| || || || || || || || || ||

「なぜ貴様がいる」

男は目的地に向かう途中にあるファストフード店から、大きな紙袋を抱えて出てきた女に向かって言い放つ。

「なんでもお前がおもしろい敵と戦うって姉様に聞いてね。最近暴れてないから丁度いいストレス解消になると思ってきたわけ」

女は大きな紙袋からジュースを取り出しストローを啜えると一気に飲み干し、氷しか残っていない紙コップをその辺に放り投げ、今度は紙袋からハンバーガーを取り出す。

「あんたも食べる？」

「私はそのような偏食代表のような食べ物はいらない主義だ。それよりも今回の任務は尾張様から私に頂いた重要な任務。貴様が出るような幕ではない」

男は女から差し出されたハンバーガーに目もくれず、ピシヤリと言い放つ。

「なに生意気なこと言ってるのあんた、私が行くって言うてるんだからあんたは黙ってエスコートしてればいいの。だいたいあんただけじゃなく私も行った方が、尾張様も安心に決まってるでしょ」

男に拒否されたハンバーガーをまたもや一口で平らげた女は、包み紙を地面に投げつけ明らかに不機嫌そうな態度をとる。

「フツ。尾張様は私を選んだのだ、貴様がどんなに喚こうともその事実は決して変わることはない」

勝ち誇った顔を女に見せ付ける男。

「おい口には気をつけるよ。何ならテメエを潰してパティにしてもいいんだぞ」

女は紙袋からまたハンバーガーを取り出すと、ガチガチと音を立てながらまるで噛み砕くように食い尽くす。

「貴様ごときの攻撃で私の殻が破れるとでも？」

「上等だあ！ もともと尾張様の手下は私一人だけでなんの問題もねえんだ。今ココで望み通り殺して殺るよ！」

両者は道の真ん中でにらみ合い互いに一步も引こうとはしない。

そんな両者に道行く人はあまりの威圧感から離れて通る。

道行く犬ですら両者の間に漂う、一般の間からは決して出ることの無い殺気に恐れをなして裏道へと逃げていく。

ピリリリリリリ！

緊張感走る両者を割って入るように携帯の着信が鳴る。

「どうした。携帯が鳴っているようだが出なくていいのか？」

「いま出ようとした所だよボケ！」

女は喚きながらズボンの右ポケットへと無造作に手を突っ込み、ブルブルと震える携帯を取り出す。

「ったく、誰からだよふざけやがって　　！！」

携帯を開き画面を見た途端、女は悪態を止め怒りの感情でフルスロットルになっていた顔を瞬時に変える。

「もしも尾張様一体どうしたんですか……………はい。ごめんなさい。私どうしても尾張様の役に立ちたくて……………はい、この処分は謹

んで　　！　　本当ですか尾張様！？　　わかりました……………はい！！

私、尾張様のために絶対にそいつを殺してきますから……………はい！！　　楽しみにしてて下さい！！」

女は何とも嬉しそうに携帯をしまつと、先ほど殺すとまで喚いていた相手に至福の表情を見せる。

「尾張様が私の任務参加を認めてくれたわ」

先ほどまでの怒りをまったく感じさせない声色に男は呆れ口調で話し出す。

「はあ。大方『エンプレス』様が貴様に私の任務を話したことを聞いた尾張様が、貴様の行動を読んで釘を刺したということだろう」

「何とでも言えばいい………尾張様あ」

「………貴様は人によって性格を変えすぎだ。一喜一憂も大きく、戦闘においてはその感情コントロールは邪魔にしかないぞ」

「うるっさいわね。いま尾張様の御声を何度も脳内でリピートしてるんだから邪魔しないでくれる」

女は紙袋の中からハンバーガーを無理やり手で掴み三個も取り出すと、三つとも片手で起用に包み紙を取り外し一気にかぶりつく。

身体つきからでは想像もできないような喰らい様でハンバーガーが飲み込まれていく。

「よくそれほどまで喰えるな」

「だまれ糞野郎。私にとつて食べることはストレス解消の一つなの。女は飲み込んだハンバーガーの包み紙を路上にまたもや捨てていく。」

「なら文句は言わないが………もう一つのストレス解消はターゲットまでに取っておけ」

「お前に言われなくてもわかってるよ。尾張様にも目立つ行動は避けなさいって言われたし」

女は三つも食べて喉が渴いたのか、ジュースを先ほどと同様に一気に飲み干す。

「分かっているのならいい」

「チツ、うぜえなほんとに、てめえは私の母親かつっの」

持っている紙コップを握りつぶしその手を離す女、重力に従って落ちていった紙コップが地面に衝突すると中に残っていた氷が当たり一面に散らばっていく。

「君たちいい加減にしないか！」

突然。男と女の間、サラリーマン丸出しのスーツをビシッと決め、黒く光るビジネスバックを持った中年男性が割って入ってきた。「まったく、道の往来のと真ん中で話し込むとは何事だ！ 特に君

！先ほどからゴミをポイポイ、ポイポイ。町はゴミ箱じゃないんだぞー！！」

サラリーマン風の男は強い口調で怒っている。

「うるさいなあ、おっさんには関係ないだろ、じゃまだから消えてくんない」

注意を受けた女は面倒くさそうに手をシッシツと振る。

「なにが関係ないだ！いいかこの道路はお前だけのものじゃないんだ。この道路はな国が作った国民全員の物なんだぞ。貴様らのような若造がいるからこの国はドンドン駄目になっていくんだ」

「あーウゼーウゼー」

女の機嫌が明らかに悪くなる。

「ウゼーとは何だウゼーとはー！」

女のあまりの聞く気のない態度にサラリーマン風の男は声を荒げる。

「だからウゼーっていつてんだよ。糞虫が！」

女は突然サラリーマン風の男を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた男は歩道のガードレールに頭をぶつける。

「ッー！」

蹴られた男のガードレールにぶつけた箇所から血が流れ出る。

「もう一回言ってみろよおっさん。早く言えよ。その状態からもう一度説教垂れてみるよおっさん」

女はなんとも楽しそうに笑う。

そんな女のあまりの凄みに頭から血を流す男に恐怖が走る。

「ヒッー！」

「ひ、じゃねえだろ……面白いくらい言えよ。なあー！！」

女の手が光が集まっていく。収束された光は形を成していき女はそれを恐怖から動けずにいる男に降りかかる。

「止めておけ『ストライク』。尾張様の言葉を忘れたのか」

途端に女とサラリーマン風の男とのやり取りを観戦していた男が割ってはいる。

『ストライク』と呼ばれた女の顔は笑顔から楽しみを邪魔された憎しみへと変わっていくが、女は振りかざしていた手を下に降ろす。

「わかつてるよ。ちよっと遊んだだけでしょ」

「その顔は遊びで済む顔ではないな」

女は全てを知っているような男の言葉に舌打ちする。

「舌打ちするのも結構だが急いでこの場所から離れるぞ、貴様が暴れたおかげで無用な見物人が増えてきた」

「チッ！」

女は忌々しげに建物のある裏道へと歩いていく。そんな女に付いて行くように、男も歩いていく。

「な、なんなんだあいつらは」

サラリーマン風の男は助かったという安堵感と先ほどまで恐怖感との狭間で、二人が向かって行った場所を呟く。

「ゴーストタウン 廃墟に何の用なんだ。あいつら」

第七話 見失った友人と現れた友達

「おーい、つぼみー」

大和は友人の名を呼んでいた。

「おーい。つぼみー、いるなら返事しろー」

読んだ後、耳を澄ましてみるが、猫の声一つ聞こえてこない。

「まずいな、家から揚げの材料は有るとはいえ、から揚げだけじゃ物足りないから冷蔵庫とにらめっこして他に何を作るか決めようと思ったのに」

簡潔に言えば、大和はつぼみとはぐれていた。

詳しく言えば、ゴーストタウン廃墟にたむろする不良ハカに出くわし、絡まれたので先につぼみを逃がし、その後不良共を肅清あほしていたらつぼみを見失ってしまった。

「たかが不良五人倒すのに三分も掛かつちゃったからなあ、最近引越しやらなんやらでかまけて修行してなかったからな。三分は無いな、二分だつたらつぼみとはぐれてなかつたな」

五人もの男と一戦を交えたのにも拘らず息一つ切らしていない大和は、なんともお気楽に独り言を呟く。

そんなお気楽男は辺りを見回しながら一歩、また一歩と足を踏み鳴らしていく。

夏に近づいたためか辺りは時間の割には明るいはずなのだが。大和が歩く廃墟の中でも裏道にあたる場所は薄暗く、なんとも気味の悪い空間に仕上がっていた。

だがやはり、いま歩いているお気楽男にはその空間もたいした意味をもっていないようで、

(携帯も通じないし、つぼみ一人のときに不良に絡まれたらやばいし、はあまったく情けない。明日からちゃんと修行再開しよう)

と至つて冷静に自らの力の無さを再確認しながら歩いていく。

「とにかくつぼみを見つけないとな。だけど、でかすぎなんだよこの廃墟、なんでこんな場所とつと潰さないで綺麗に残してんだか……わけ分からん」

つまらない八つ当たりをしたところで大和はもう一度つぼみの名を呼ぼうとした。

「おーいつぼ　！」

つぼみの名前を呼ぼうとした時、大和の視線の中に人影があることに気が付いた。

その人影はビルの間にある細い道の端で、しゃがみ込んでいる。普通の人間が見れば、確実に怪しむであろう行動をしているその人物を、大和は知っていた。

だがその人物の服装は明らかに一般の人間とはかけ離れていた。（見なかったことにするべきか……でもつぼみを探すのを少しだけ手伝ってもらえればとも思うし……よし！ 手伝ってもらえるよう頼んでみるか）

そんな思考を脳内で繰り広げた大和は覚悟を決めて少々変わった格好をしている少女に話しかけてみる

「天宮。こんなところでしゃがんで何してんだ？」

大和に声を掛けられた背中は一瞬と動いたあと、少しの沈黙を守る。

「おい天宮。無視しないでくれ」

大和の言葉に、しゃがみ込んでいた背中は一瞬と回転する。

「天宮とは誰のことだ？ この辺は危ないからすぐに帰りなさい」

「いやお前、天宮だろ」

「天宮などという人物では断じてない」

天宮は顔に仮面を付けていた。白を基調として蒼い線の入っている随分とシャープな仮面であり、その仮面から視線を下げると黒を基調としたシャツに短パン、そしてレーザージャケットのような少し変わった材質感のあるマントを翻している。

いま大和の目に映る天宮の

「なあ天宮、実はつぼみとはぐれちゃってさ」

「だから私は天宮ではないと言ったはずだ」

「それでな、できれば一緒に探して欲しいなーっと」

「話を進めるな！ 私は天宮ではない！」

天宮は声を荒げて、拒絶する。

「まあたしかに、変わったお面と服装で格好付けて遊んでたのがばれて、恥ずかしいとは思うがそんなに声を荒げなくても」

「だ、だれが好き好んでこのような格好を付けるか！！ これは『ポーターライン異能力者対策部隊』の制服で正体がばれないよう仕方なく付けているのであって、決して私の趣味で付けている訳じゃない」

「今の話で結構重要な事が、ただ漏れになったんだが大丈夫か？」

「そんなこと。だ、だいじょうぶ……じゃあない」

天宮は自分がムザムザ組織についての情報を公開してしまったことに、責任を感じているのか、大人しくなってしまう。

「そ、そんなに落ち込むな。元々天宮が『ポーターライン異能力者対策部隊』だったことは俺にはばれてた訳だし」

「な、なんで……私だとわかった……」

天宮は少々意気消沈としながら大和に聞いてくる。

「ん〜。勘だな」

「そ、そんなことでは騙されないぞ！ 君は私が『アフノーマル異能力者』だと分かったときもそう言ったが、そんなに何でも勘で分かる筈がないだろう。私をバカにするな」

「まあまあ、あんまり気にするなって。と言うか天宮、お前が『ポーターライン異能力者対策部隊』としてココに居るってことは、またこの間の菅原みたいな奴が現れたってことか？」

大和は内心ドキドキしながら聞いていた。

天宮から返ってくる答えによつてはつぼみの身が本当に危険に晒されてしまうかも知れないからだ。

「別に今回の任務は『アフノーマル異能力者』の逮捕ではない。今回はこの間の

事件での手がかりが落ちていないか探すだけの任務だ。まあその任務も大した成果も上げられそうに無く、いまから引き上げる所だ」「この間の事件って菅原は捕まえたたる、手がかりってなんだ？」「それは話すことは出来ない、あくまでもきみは一般人なのだからな」

天宮は冷たい声で言い放つ。

が大和はその程度の声色、気にもとめない。

「じゃあ天宮は今から帰りってことでいいんだよな」

「そ、そうだが」

普段ならばこの声色でピシヤリと言い放つと、大抵の人間は自分の元から離れていくはずなのだが、目の前に立つ少年は気にも留めていない様子なので、逆に自分の方が驚いてしまう天宮。

「ならちようどいいや、ここから帰る途中につぼみか俺の定期券を見つけたら、拾って俺の携帯に連絡入れてくれないか？」

「定期券？ 大塚さん？ 拾う？」

天宮の混乱はもっともなので大和はこれまでの経緯を天宮に説明する事にした。

大和の長話をジツと真剣な表情で聞く天宮。だがその顔にはシャープな仮面が付けられたままである。

少し笑いたくなるのを我慢しながら大和は天宮に説明を続けた。

説明を終えた後、天宮は大和の話した事柄を軽くまとめて復唱し大和の置かれた状況を把握した上で話し始める。

「定期券の方は見つけたら拾っておくが、大塚さんは発見したらきみに連絡するから、きみが来てくれないか」

「なんでそんなに回りくどいことしなきゃいけないんだよ」

「だからお昼に言ったと思うが、私は人と関わるつもりは無いんだよ。大塚さんしかり学校の先生しかり、もちろんきみもしかりだ」

天宮の言葉に大和は大きいため息を付きながら天宮の仮面を剥ぎ取る。

「ッー！」

不意に来た攻撃に反応する事ができず仮面を無理やり剥がされた
天宮は大和のことを睨みつける。

「なあ天宮。お前が本当に一人で居たいって言うならそれでいいんだ。だったらその代わりそんなに寂しそうな顔するなよ」

「!」

天宮は驚く。大和の見透かしたような目がまるで自分が本当に寂しそうな顔をしていたような気がしたからだ。

「だったらあんなにつまらなそうにするなよ。だったら自分に嘘付くなよ。……もし本当に一人がいいんだったら笑ってるよ。もっと楽しそうにしてろよ。そんな辛そうな顔を俺に見せん」

大和の言葉の一つ一つが天宮の心に突き刺さるような気がした。

大和の真剣な顔が天宮の心を深く突き刺していく。

だがこんなところで弱さを見せるわけにはいかないと、自分を叱咤しながら天宮は大和に負けぬよう、自らの出す声に力を込める。

「そんなのはきみの勝手な憶測だ！ きみはいつもいつも分かったような事を言う！ まるで自分が全て正しいと決め付けたように、

きみは声を放つ はつきり言わせて貰えば迷惑だ!!」

大きく勇気を振り絞った天宮の叫び。

だがそんな叫びを、やはり気にも留めていないのか、大和の口は一向に閉じようとはしない。

「憶測でもいい、迷惑でもいい、俺はお前に笑ってもらいたいしお前にもっともっと楽しく過ごしてほしいんだよ」

天宮は静かな大和の気迫に押されて体を一步下げてしまう。

「ど、どうしてきみは私にそこまで手を焼く、なぜこんな私に構う。きみには友達が居るだろう、私なんかよりもずっと面白くて私よりもずっと話しやすい友達が居るだろう。なぜきみは私なんかに……私なんかにずっと構っていてくれるんだ」

大和は天宮の言葉を聞いて笑う。

「そりあお前。俺らが友達だからだろ」

「!」

「おお、驚いてる驚いてる。やっぱり天宮は顔に出やすいな」
満面の笑みを放ちながら満足そうに大和は語る。

「そう……なのかもしれないな」

そんな大和の言葉に驚きと共に同意してしまった天宮は、小さく
呟きながら、小さく笑う。

そんな天宮に仮面を返すと大和は笑いながら話しかける。

「じゃあそういうことだから、頼んだぞ天宮」

「え!？」

大和は天宮に背中を向けて歩き出す。

「え? じゃ無くて俺はこっち探すから、天宮はあっち探してくれ」

大和は天宮に自分が歩き出そうとした反対を指さし、文字通り指
示する。

「ま、まだ私は協力するとは言つてないぞ」

「ふむふむ 天宮……おれが昔、世界で一番尊敬する人から教
わった言葉を教えてやろう」

あちらこちらに飛んでいく会話に、まったくと言っていいほど付
いていけない天宮を放って置いたまま、大和は構わず話を続け
る。

「大切なモノは弱さではない、大切なモノは守るだけでもない、大
切なモノは守り守つてくれるものである だ!」

「守り守つてくれる?」

「そう。大切なモノは守るもんだと思いがちだ、そしてそれが弱さ
になるとも思われがちだ。けどどな本当は違うんだよ。大切なモノ
は強さになる、そして時に自分を守つてくれるものにもなるんだっ
てな」

「きみの言おうとしていることが、よく分からないのだが」

「分からないならそれでいい、だけどいつかきつと天宮にも分かる。
大切なモノがどれだけ大切かを解っている、天宮にならな」

一聞では理解しがたい言葉を天宮に聞かせた大和はくるりと回れ

右をして、そのまま歩き出す。

「じゃあ天宮、定期券はどうでもいいから、つぼみだけはもし見つけたら頼むな。この辺りは、道徳的に頭の悪い奴らが多そうだから」
「え！？ ちよつと待ってくれ大和」

天宮の呼び止める声も空しく、大和は天宮に背を向けながら悠々と歩いていってしまう。

そんな大和を力ずくで呼び止めようと思った天宮だが、それよりも先に考えてしまうことがあった。

「大切なモノは守り守ってくれ……」

大和の言葉の意味を、深く深く考えこんでしまう天宮であった。

第八話 爆発の魔の手

「見つからねえ。まったく何処にいたつばみの奴」

大和は歩いていて、足を止めたら負けてしまう気がしたからだ。

あたり一面には人家の無い不気味な欠陥住宅が立ち並び、酷いものでは完全に斜めになり隣にもたれ掛かっているビルや、二階から上が吹き飛んでいるマンションまである。

「あんまりここにはいい思い出ないしな」

大和が気味の悪くなるぐらい静かな風景を堪能していると。

「まったく、尾張様から言われたことを一分もしないで忘れるとは、貴様には驚きで言葉をかけることも躊躇われる」

「しょうがないでしょ、蛆虫どもに食って掛かられたんだから、きたねえ唾まで飛ばされてさあ、我慢できた方が奇跡だっつーの」

男女が向こう側から歩いてきた。

男の方はメガネを掛け青い短髪で高身長、たぶん一九〇は超えているのではないだろうか。顔も端正で整っており、誠実なスポーツマンと言ったところだろうか。男の着ている黒のスーツも男の誠実に磨きを掛けているように見えた。

女の方は見るからに女子大生といった格好でカールをかけた茶髪の巻き髪に短いショートパンツ（いや定義で言えばホットパンツだろうか）、そして胸の谷間が見えるほど空きの大きなＴシャツを難なく着こなしていた。

これから行くところは何処ですか。そうですねえ大学とコンパです。と言いきりさほどラフさのある女の格好と。何処かの面接に行くようなビシッと決まりシワ一つ無い男の格好。

そんな正反対の格好をした男女がなにやらい争いをしながら大和の方へと歩いてくる。

大和はそんな二人をチラリと見つめた後、道の端を歩き二人から離れて通ろうとする。

「少し聞いても宜しいかな」

すれ違い様に男のほうが大和に声を掛けてきた。その声は優しく普通の人間ならば好意をもつ温かみのある声に聞こえる。

「えーっと、なんですかね」

大和は自分の心をまったく表に出さずに、男に聞き返す。

「突然聞いて悪いんだが『烈風の破壊者』って知っているかい？」

（！！）

大和はそれでも心の動揺を表には出さない。

「ブラスト？ 玩具か何かですか？ ちょっと分からないんですけど」

（こいつらやばい）

大和は心の中で確信する。パツと見、普通の男女に見えるがその姿勢はどう見ても普通の人間の姿勢ではない。

そして何よりもおかしいのが、男女二人の目だ。その目は濁りに濁っており、少なくとも普通に暮らし、人並みの生活を送っている者の目ではない。

その目は紛れも無く大和が昔から見せられ続けた人殺しの目であった。

「そうか、知らないならいいんだ。邪魔して悪かったね」

男は大和から顔を逸らすとそのまま自分達が歩いていく方向へ歩みを進める。

「ねえちよつと待って」

女が歩いていこうとする男を制止する。

（大和の心臓を打つスピードが多少だが上がる）

「こいつは知らないの？」

「ああ。もし本当に『烈風の破壊者』か、或いは烈風の破壊者を知

っているのであれば、もう少し何らかのアクションがあってもいいはずだ」

「そつか。じゃあ殺していいでしょ」
「は？」

大和が意味の分からない言動の女に対して、声をあげる。
女の真意が分からないのは男のほうも同じようで

「何を言っているんだ貴様は、私たちの目的は『烈風の破壊者』の殺害。または居場所を知る者を拘束、もしくは殺害だ。この時間に^{ゴーストタウン}廃墟を歩いている人間を皆殺しにするわけではないのだぞ」

男は女に言い聞かせるように呆れながらも話しかける。

「そんなこと言っただって、さっきのおっさん殺し損ねて、私の虫の居所が悪くしょうがないの。それにここなら人を殺しても目立つたりしないじゃん。だから菅原もこの場所を選んでたんだし」

「……………確かに、ちようどよいかも　　！！」

突風が吹いた、その突風と共に大きな破裂音のようなものが聞こえる。

「風を操る異能力。^{ちから}『烈風の破壊者』……………いたぞストライク！」

男は笑いながら女に向かって叫びだす。その顔は喜びに満ち溢れていた。

「わかつてるわよ。良かったわねあんた、命拾いしたみ　　！！」
言葉を言い終える前に女の胸につま先がめり込む。

「なっ！」

女は驚きと痛みの伴う声と共に後ろに飛ばされ、瓦礫の山に衝突する。

「どついつつもりだ貴様」

メガネを掛けた男は、大和の突然の行動に驚きを見せる。

「お前らみたいいな人殺し、関わるつもりは無かったんだが、つい関わっちまった」

大和は口元から歯を見せながら満足気に言った。

「つまりはお前も『烈風の破壊者』の関係者というわけか？」

「お前らの言う『ブラスト』ってのはわからねえが、今の風は俺の友達のだ、絶対に手出しはさせねえよ」

「ふむそうか。ならば殺すしかないな」

男の周囲を嫌な空気が包み込む。冷たく戦慄の走る気持ちの悪い空気。

その場に一時間も居れば吐き気を伴うようなそんな空気が辺りに散らばる。

「ガード！ テメエはとつとターゲットを追い！ これで逃がしたら尾張様に報告ができなくなる。代わりにその餓鬼は私が殺しといてやるからよ！」

瓦礫の山から飛び出してきた女は先程までの言葉使いとは一変、大和に明確な殺意持つ眼差しを向ける。

「貴様にしてはマシな話だ」

「殺されてえのかガード、何ならお前もその餓鬼と一緒に潰すぞ」
「了解した。『烈風の破壊者』の方は任しておけ」

女の咆哮に男は風の吹いた場所へ向かう。

「手は出させねえって言ってるだろ！」

男が後ろを向いた瞬間、大和は男に向かって走り出す。

だがそんな大和の足に急ブレーキが掛かる。

「餓鬼。お前の相手は私だって言ってるだろ」

「チッ！ どきやがれ」

大和は女の横を通り過ぎ、天宮の下へと向かう男に拳を入れようとするが。

（殺気！？）

感じた殺気は大和は頭を急激に下げた。

ブワッ！ 頭の上を大きな塊が通った音がする。

大和はそのまま前に前転すると、すぐさま方向転換し頭の上を何が通ったのか確認する。

「よく避けたねえ。ほらどうした早く後ろを向いて行けよ。そのかわり次後ろを向いたら確実にテメエの頭はぐしゃぐしゃだけだな」

女は凶悪な笑みをこぼす。

そんな女の右手にはよほど筋肉質な男でなければ、持つ事も敵わ

ないであろう、女の体となんら変わらない大きさの金棒が握られていた。

大和は金棒を確認すると、チラリと後ろを横目で見るが男の姿はもう確認できない。

男を逃がしたため天宮とつばみの事を心配する大和だが、目の前に立つ金棒を片手で振り上げる女はそんなことを気にして勝てるほど、生易しい相手でないのはすぐに分かる。

何より菅原よりも強い殺気を放つこの女一人にも、勝てるかどうか分からないというのが、いま大和が感じている正直な感想である。大和は自分の心を静めるよう努力する。菅原のときのように無様にも怒りをむき出しにし、当ても無く突撃したあの無謀は、絶対に繰り返してはならない。

なによりも今回の相手は、そんな無謀を許してくれるような相手では絶対に無い。

「大切なモノは守り守ってくれるモノ」
最高に尊敬する人間がくれた言葉とともに、大和は天宮とつばみを思い浮かべる。

どちらも守るに値する最高の友達。

だが、どちらも簡単にやられるような人間でないことも大和は知っている。

そう思うと、大和の心に幾分かの余裕が生まれた気がした。

「ははははは」

「何が可笑しいんだ餓鬼」

大和の突然の笑いに少々の怒りをぶつけてくる女。

「いや、別に何でもないさ」

大和は笑う。大丈夫だと信じながら、大丈夫だと願いながら。

まずは目の前の敵を倒す。ただそれだけ。

「それにしても随分とえげつないの持つてるな、それがアンタの『
異能力』^{ちから}か」

えげつないと言う言葉が、女にとっては褒め言葉だったようで、

女は大和の質問に嬉しそうに答える。

「その通り、私の二つ名は『凶撃の金棒』^{ストライク}。世界最強の金棒を作り出す『異能力者』^{アブノーマル}」

「『凶撃の金棒』^{ストライク}ね。一昔前は二つ名と言えば『異能力者』の強さを表すものだったけど、いまの『異能力者』は自分を大きく見せるために、誰も呼んじやいねえのにも関わらず、名乗る事もあるぐらだから、そんなにあてにはならねえな」

「いうじゃないか餓鬼。その生意気な頭をぐしゃぐしゃのパーティに
してやる　よ！」

『凶撃の金棒』^{ストライク}と名乗った女は自分の身の丈ほどある金棒をまるで新聞紙で作った棒のように軽々と振り回す。だがその金棒から伝わる風圧は紙とは程遠い。

大和は真横に振られ自分の頭を潰しにきた金棒を躲すため後ろに飛ぶ。

ブオン！ 金棒は大和の鼻先を通過する。

「あら、よく避けたな。口だけの奴は大抵この一撃で死ぬんだけど」

「ハッ。あんな大振りな攻撃に当たるのはナメケモノ位だろうよ」

大和は余裕の笑みをかます。

「だったらワントンポ上げるから………しっかり付いて来いよ餓鬼！！」

『凶撃の金棒』は大和の体を潰すため金棒をなぎ払う。

「ッ！」

大和は先程よりもスピードを増した金棒に頭を屈めてスレスレで避けるが『凶撃の金棒』は攻撃の手を休めずに金棒を振り回し一撃必殺を繰り返し続ける。

四撃目になる攻撃を避けると大和は距離を取るため、足に力を入れて後ろに大きく飛ぶ。

地面と靴との大きな摩擦の後、ピタリと止まった大和はニヤリと笑みを浮かべる。

「はあ、はあ、はあ。そんなもんじゃ俺を潰すのはまだまだ掛かり

『凶撃の金棒』は不気味に笑い出す。

当たる対象のいなくなつた金棒は勢いそのまま地面と激突する。

金棒が地面と激突したその瞬間。大和の体は重力に反して浮き上がった。

「ッ！！」

地面から浮き上がった大和の体はそのまま後ろへと吹き飛ばされる。

「ゴハッ！」

（爆発！？）

後ろに吹き飛ばされた大和は突然襲つてきた激痛に体を抱える。

口の中には鉄くさい汁が充滿する。

「あれ？ 口から血がでてるけど、喋りすぎて舌でも噛んじゃつたの？」

なんとも楽しそうに笑いながら女は満足気に大和の姿を見下す。

「そういうえ言つてなかつたけど、私の金棒は物体と接触したときその衝撃が大きければ大きいほど強い爆発を起こす面白い金棒なの」

「そ、そいつはすげえな……鉱山にでも行けば引く手あまたで、職には困らなそうだな」

震える足に全力の力を込めて大和は立ち上がると、体とは正反対に軽口を叩く。だがそんな言葉と共に口の中に溜まる赤く鉄臭い物が流れ出た。

「ああーなんか面倒くさくなってきた。というか早くしないとガードに尾張様の命令とられちゃうしなあ。お前とつとと死ねよ」

『凶撃の金棒』は飽きてきたようで何とモかつたるそうに金棒を横になぎ払う。

「ッ！！」

軽くなぎ払われた金棒は『凶撃の金棒』^{ストライク}の横に建つ壁に激突すると、とても軽くは無い爆発が起こりその衝撃が大和を襲う。

「がっ！！」

大和の体が再び宙に浮かびそのまま後ろへと吹き飛ばされる。

「ツーストライク」

全身に痛みが駆け巡り背中から温かい物が流れる。どうやら背中の傷口が開いてしまったようだ。

全身が悲鳴を上げている一撃目よりも遠くからの爆発に威力は弱かったものの、それは紛れも無く人の動きを静止させるに値する爆発であった。

背中中の痛みなど、わからなくなってしまうほどの全身からの悲鳴。指を少し動かそうとするだけで体がミシミシと音をたてている気がする。

口から流れ出る血を吐き出すことさえ億劫になるほどの痛み。

「がはっごほっ……！」

（こりやまずいな………『ブラックストーン 始まりの石』は『異能力』を消すことはできるが『異能力』^{ちから}によって巻き起こった二次的な衝撃を消すことはできない………）

だがこの程度の事で倒れるわけにはいかない。まだ、たかが背中から血が流れ、全身に痛みが駆け巡り、口中が鉄臭い赤い水に覆われただけの話。

大和はゆっくりと立ち上がる、体中から壮絶な痛みが湧き上がるが、大和はその全てを無視する。

「まったく、これじゃあ今日の晩御飯を作るのは、無理そうだな」

大和は痛みを度外視して口元を緩ませる。

「いい加減にしるよ餓鬼」

明らかに怒りを秘めた目で大和を見つめる『凶撃の金棒』。

「私は忙しいんだ、いい加減にしねえとぐちゃぐちゃにすんぞ！」
右手に再び金棒が生成される。

「最初からそのつもりだったくせに、よく言っせ」

「クソ餓鬼が……！」

『凶撃の金棒』は大和に金棒を振り下ろす。

（体にガタしか残ってねえ。だが解りそうなこともあるし、ここは踏ん張るしかねえ）

大和は自分の考えを組み立てる。

「潰れちまえ！」

大和は極限まで集中力を引き上げる。

全ての感覚をフル回転させて、『凶撃の金棒』による怒涛の連激をぎりぎりですくし続ける。

「チツ！」

大和の先程までとの動きの違いに、『凶撃の金棒』の表情が先程までの余裕から一変する。

そんな『凶撃の金棒』の様子や行動から、大和は少しずつではあるが、あることを読み取っていく。

（少しだが分かってきた。あとは決定的なものがあれば予想は確実へと変わる）

ならばと、大和はあえて自分の力を使い込む。

パン！ 突然、乾いた風船の割れたような音が当たりに響き渡る。

「は？」

『凶撃の金棒』が気の抜けた声をだす。それもそのはず、先ほどまで自分で軽々と振り回していた金棒が跡形も無く消え去ってしまったのだから。

「はああああああああああつ！」

大和は『凶撃の金棒』の顔目掛けて自分の拳を振り切る。

「ぐあツ！」

突き刺さった拳は顔を捉え、『凶撃の金棒』の体は壁へと激突する。だがその拳は大和自身の体中の痛みや『凶撃の金棒』の咄嗟の動きにより完璧に捉えたわけではなかったようで、『凶撃の金棒』はまだ戦う意思を見せ続ける。

「ど、どうやって私の金棒を消しやがった」

手に持つ金棒を杖にして、『凶撃の金棒』は無理やり立ち上がる。

「それは企業秘密だ」

大和は余裕の笑みを放つと、『凶撃の金棒』に言葉を続ける。

「それよりも『凶撃の金棒』^{ストライク}とやら、鼻から血が垂れてるけど、急

第九話 最悪は突然に

「止めてよ！」

「だまれ糞ガキ、うつせえんだよ」

つぼみは不良たちに囲まれていた。

「だいたいこんな所にガキが来てるのがいけねえんだっつーの！」

不良はつぼみから学生鞆を取り上げる。

「返して！」

つぼみは声を挙げて不良達に反抗するものの、不良達はまるで子供と遊んでいるかのように対して力も入れずにつぼみを突き飛ばす。突き飛ばされたつぼみは痛みで顔を歪めるが、不良達はまったく気にも留めず鞆の中を漁る。

「おいおい見てみるよお前ら！ 中学生でも珍しいと思ったのによ

おコイツ高校でしかも二年だつてよ」

「マジかよ、コイツ俺よりも年上なの！」

「え！？ おまえ一年なのだったらけえご使えよけえ」

「けえごつて急に誰のこと言ってるんすか？」

「ケエゴとか……あつはつはつは、お前ばかだろ」

不良達は笑いながらけえごの分からない仲間を叩いている。

つぼみはそんな状況を見ながら怯えていた。

「おいおい高校二年生が怖がってるじゃねえか、可哀相だろ」

「え？ なになにお前ロリコンなの、やばくね」

「ロリコンどうのより、こいつ可愛いだろ」

「うわあやべーよこいつ、もうヤル気満々だよ。よかったねえ、その体じゃまだやったことなんか無いでしょ」

不良達はニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべる。

「嫌だ……止めて……助けて大和っち」

「大和っち？ 誰だそりゃ？」

「もしかしてコイツの彼氏じゃね」

「おいおいマジかよ！ 彼氏いんの。その彼氏ロリコンじゃん、やつばいでしょそいつ、俺らと変わんないじゃん」

不良達は一斉に笑い始める。

「や……大和っちをお前らなんかと一緒にしないで！！」

「あん？」

つぼみからの突然の叫びに、不良達は誰が見ても分かる位に機嫌を悪くする。

「今なんていったのかなチビ女」

「何度でも言っておける！ 大和っちは私の大切な友達なの！ お前らみたいな人を傷つけたり人を苦しめたりする最低の馬鹿共と一緒にしないで！！」

つぼみの突然の目の光に、不良達は怒りを大きくする。

「てめえ、どういう意味だ！」

とうとう不良の一人が、自らの拳を大きく振りかざす。

「！！！」

突然、突風が吹いた。

その風は、つぼみを襲っていた不良を軽々と吹き飛ばす。

「がはっ」

風に飛ばされた不良は一〇メートルほど飛んだ後、壁に叩きつけられる。

「な、なんだよこれ ……！！」

ありえない状況に恐れ慄いていた不良たちも皆揃って吹き飛ばされる。

「ぐはっ！」「ぎゃ！」

「おい！やべーよなんだよこれ！」

周りに居た仲間達が次々と吹き飛んでいく恐怖の空間に、未だ吹き飛ばされていない不良達は痛みで立ち上がれない仲間を担ぎ上げ

すぐさま翻し逃げていく。

一人残らず自分達の仲間を担ぎ上げて逃げていく不良たち。妙なところで仲間意識のある者たちの様だ。

そんな嵐の後のような静けさが蔓延る空間に、つぼみだけがポツリと置き去りにされる。そんな到底理解しかねる状況につぼみが絶句してると。

「大丈夫か大塚さん」

「!!!」

自分の名前を呼んできた方へと首を向けると

「怪我は無いか？」

「あ、天宮さん!？」

突然現れた天宮につぼみは驚きの声をあげた。

「えーっと驚かせてしまっただらすまない。先ほど大和に大塚さんを一緒に探して欲しいと頼まれたのでな」

「大和つちに頼まれたから来てくれたの!? ありがとう天宮さん」

「たまたまこの付近に居たのでな、お礼を言われるほどじゃない」

「それでも本当にありがとうだよ天宮さん!!!」

つぼみは天宮に満面の笑みを放つ。

「そ、そうか」

そんな満面の笑みに天宮の方が困ってしまう。

「うん! そうだ天宮さん、さっきの風は天宮さんの『異能力』なの?」

「.....」

「えっと.....言いたくないなら別に言わなくていいよ。それに誰にも話したりはしないからね」

「そうしてくれると、助かる」

「うん!」

つぼみはやはり嬉しそうな笑顔を天宮に向ける。

「天宮さんちよつと話していいかな?」

つぼみは笑顔のまま天宮の正面にちよこんと立つ。

「別にかまわない」

天宮はそんなつぼみの笑顔をあまり見ないようにした。

どうせこの後、目の前に立つ少女の笑顔を傷つけてしまうのは目に見えているので、あまり自分が傷つけてしまう笑顔を見たくなくなつたからだ。

「あのね天宮さん……天宮さんがどう思ってるかは分からないけど。私はね、天宮さんと友達に為りたいんだ」

目の前の小さな少女の放つ言葉に天宮は絶句する。それもそのはず、天宮からしてみれば自分はずぼみに対し酷いことをしたと考えていた。嫌われるのは当然の行動だと考えていた。だから天宮は目の前の少女から放たれる言葉は決して良い言葉ではないと考えていた。恨み言の一つも言われるのが当然だと思っていた。

だが実際につぼみから飛び出た言葉は天宮には到底理解できない言葉。

友達……やはり天宮には理解できなかった。

そんな天宮の驚きをわかっていないつぼみは話を続ける。

「これは私の我侷だから天宮さんにとっては迷惑かもしれないけど、それでも私は天宮さんと友達になりたいんだ」

なんとも真つ直ぐな瞳を天宮にぶつけてくるつぼみ。その瞳は嘘を付いてなどいない純粹に自分に正直な瞳であった。

だからこそ天宮は困惑する。自分の様な性格の少女と友達になるメリットなどつぼみには無いはずだ。ならばつぼみの言葉は何かしら裏のある言葉と取れるはずだった、だがつぼみの瞳はそうは語っていないだからこそ天宮は困惑する。それに加えてメリットの無い自分と友達になると言った馬鹿な男の前歴が天宮の困惑を更に酷くしていた。

「な、何故大塚さんは私なんかと友達になろうとする、私でさえも自分自身をあまり善良な人間だとは、大塚さんの様な人の友達にはなれないと思っっているのだが」

気付けば天宮は自分の思いを少しだけ漏らしていた。

「何言ってるの天宮さん！」

つぼみが急に声を大きくしたことに天宮は驚く。

「さつきも言った通り、天宮さんと友達になりたいのは私の我侷なんだよ。私が友達になりたいの！ 天宮さんと私じゃダメなんて理由も理屈もないよ。だからもし、もし天宮さんが私のことを嫌いじゃなかったら、私と友達になってほしいって、ただそれだけなんだよ」

つぼみは天宮の顔を見て笑いながら話を続ける。

「それにね天宮さん。もし天宮さんが私のこと嫌いだったとしても、私は天宮さんのこと好きだから、だから絶対に友達になってくれるまで諦めないからね」

まっすぐな言葉、まっすぐな眼差し、そして強引な理屈。

「ふふっ、大塚さんは少しだが大和に似ているな」

天宮は笑ってしまう。

そんな天宮を何とも驚いた表情で見ているつぼみ。

「ど、どうしたんだ大塚さん？」

そんなつぼみに天宮は先ほどの言葉が不味かったのかと少々焦ってしてしまう。

「え！？ ご、ごめんなさい天宮さん」

急に謝られてしまい天宮のほうもどう対処してよいのか分からない。

「えっとね、天宮さんが笑ってるのを始めて見たからそれで……えっと」

「ああすまない、気持ち悪い物を見せてしまったな」

「そんなことないよ！ すっごく綺麗だったよ！！ 今の笑顔見てもやっぱり天宮さんと友達になりたいって思ったんだよ」

「き、きれい！？」

普段、言われる事のない言葉に天宮の顔は真っ赤になる。

「お、お世辞だとしても、ありがとう」

照れくさそうにしながらもじもじと語る天宮につぼみは何とも嬉

しそうな表情をする。

「天宮さん可愛すぎ!!!」

途端につぼみが天宮に飛びつく。

「!!!」

天宮は自分に飛びついてきたつぼみをどう対処すれば良いのか分からずオドオドしてしまう。

「天宮さんかわいー!!!」

つぼみは天宮から少し離れると今日見た中で最高の笑みを放つ。

その笑みからは光が放たれているのではないかと思うほど輝いて見えた。

「……………」

天宮がこれ以上つぼみの顔を見られずそっぽを向く。

「わああああ。怒らないでごめんなさいごめんなさいごめんなさい。怒らないでえ天宮さん!」

天宮の行動が怒りから来るものと勘違いしたつぼみは焦りながら声を上げる。

「別に怒ってなどいない」

天宮はなんとか体裁を保ち感情のブレを悟られぬよう表情を消し、できるだけ冷たい声色で話す。

だが本人がそう思っているだけで実際は表情は隠しきれず冷たい声色でもなくなってしまうのだが。

「本当にごめんなさい天宮さん」

「だから怒ってないといっているだろう」

「本当?」

「本当だからそんなに落ち込まないでくれ、何故か私が悪い事をしたような気がしてしまう」

「うん。ごめんね」

「だから……………」

「うん! もう言わない! 絶対に言わないよ!!! 天宮さん」

なんとも楽しそうなつぼみに天宮はホッと胸を撫で下ろす。

「とりあえず大塚さん。大和が心配していたようだから、携帯で連絡してくれないか」

「えーっと、実は携帯の充電が切れちゃって」

「そうか、だから大和と連絡が取れなかったのか」

「うん。不良の人たちに囲まれたときはもうダメかと思ったよ」

つぼみは先ほどの状況を思い出し、少し身震いする。

「あいつらはもう襲ってこないだろうからそんなに心配しなくても大丈夫だ。とりあえず私の携帯で大和に連絡するでしょう」

そう言いながら天宮はポケットにしまっただけある携帯を取り出し、電帳の中から大和の名前を見つけ出し通話ボタンを押そうとしたその時。

ボンツ！！ とてつもない爆発音が聞こえると同時に地面が揺れる。

「な、なに今の！」

つぼみは突拍子も無い出来事に驚きを隠せない。

だが天宮はかなり冷静にことを推理する。

（今の地震は自然のものではない、地震の原因は先ほど起こった爆発音が関係していると考えた方がいい。だとするならば……嫌な予感がする）

天宮はすぐさま自分の置かれた状況を考え、この場に留まることの危険性を把握する。

「大塚さん、今の地震で壊れかかったビルが立ち並ぶ廃墟ユースタウンに居るのは危険だから、今すぐここから出て大通りに向かおうか」

「え！？ わ、わかった。けど大和っちは！？」

「大和には歩きながら電話しよう。それに彼は頭がいい、先程の地震でこの辺一帯が危険な事もすぐに分かるはずだ」

そう言いながら天宮はつぼみの手を引き、今居る場所を出るのに一番近い道のりを携帯で調べ、そのまま真っ直ぐに歩き出す。

「大和っち、大丈夫かなあ」

つぼみは大和の心配をしている。

「大丈夫だ、いまから電話してみる」

天宮は大和の携帯に連絡を入れる。

『プルルルル、プルルルルル』

しかし大和に連絡しても何時までも着信音のまま一向に出る気配が無い。

(くそつ、なぜ電話にでないんだ大和)

天宮は最悪な想像をする。

だがその考えを振り払う。

(大丈夫だ。彼なら大丈夫)

「天宮さん。大和つち出ないの?」

つぼみが心配そうな顔でこちらを見つめる。

「……………ああ大和か」

天宮は大和に携帯が?がった振りをする。

「大和つち!」

「ああ……………大塚さんなら私が見つけたから心配するな……………ああ。それよりも君は大丈夫なのか……………そうか、なら良かった。私達は一旦^{ゴーストタウン}廃墟から出ることにした。だからきみもなるべく近いところから出たほうがいい……………ああそうだ。気をつけてくれ」

天宮は未だ着信音のなる電話を切った。

大和は心配だが、ここで大和に電話が?がらないと分かれば、大塚さんはすぐにも大和を探しに戻ろうとするだろう。それは大和にとつても望むことではないはずだ。

いま自分がやらなければならぬことはすぐさま大塚さんを外まで連れて行き、その後すぐさま自分だけが^{ゴーストタウン}廃墟に戻り大和を探し出すのが一番だろう。

天宮は焦りたい気持ちを抑えながらつぼみの手を引き出口へと向かう。

そんな天宮の気持ちを知らずに、大和も無事だと思っ込んでいるつぼみは上機嫌に天宮に話しかける。

「ところで天宮さん。天宮さんのその格好は……………」

天宮はつばみに言われて始めて気が付く、つばみを不良たちに襲われていたため、慌てて仮面は外したものの。黒を基調とし、ポーチに様々なギミックが詰め込まれ、ベルトについている警棒や、肩から下がっている防弾用のマントが付いた『ポーターライン異能力者対策部隊』の制服は、どう甘く見ても一般人の服装からはかけ離れていた。

「こ……これはだな」

天宮は何かこの状況を打破できるいいアイディアは無いものかと頭をフル回転する。

「その服……」

つばみの眼差しに言葉を詰まらせ、いくら考えても大したアイディアが浮かばず、背中から冷や汗を流していると。

「その服……すっごくカッコイイ!!」

「これはだな、えーっと。って、え!?!」

様々な言い訳を考えた天宮だったがつばみの予想外の一言に肩透かしの声をだしてしまう。

「すっごく格好いい!! どこで買ったの? その服を買ったお店に今度連れて行ってもらえないかな!」

「えーっと」

つばみからの予想外の食い付きに、これまたどう返せばいいのかと天宮は考えている。

「それは『ポーターライン異能力者対策部隊』の制服だ、それを着たければ強き『ちから異能力』を持ち、腐った魂が無ければ着ることはできない」

「え!?!」

前の曲がり道から長身の男が現れた。

「!?!」

天宮はすぐさまつばみと男との間に割って入り、臨戦態勢に突入する。

そんな天宮の緊張状態を長身の男は答える。

「ポーターラインふむ。いい反応だ。さすがは寄生虫どもの味方である『ポーター異能力者対策部隊』だ」

「何を言っているのか分からないのだが、とりあえず道を譲ってくれると助かる」

つぼみは天宮と長身の男との会話がさっぱり分からなかった、だが少しだけ理解できたのは、天宮が恐ろしいほど緊張しているということだった。

「道を譲る……それは無理な話だ」

「なぜ無理なんだ、少し端に寄ってくれば話はおしまいだろう」

「無理してジョークを飛ばそうとしてくれなくて結構だ、貴様の緊張は簡単に私に伝わってくる。後ろにいる子はよっぽど大切な子なのだろう。ではまず簡単な質問からしていこう。貴様は『烈風の破壊者』か？」

長身の男はなんとも淡々と話を進めていく。

「ブラスト？」

つぼみがわけも分からず口ずさむと。

「はっ！」

天宮が突然声を挙げ、長身の男に向けて手を振るう。

天宮の行動が理解できなかったつぼみだが、目を凝らしてよく見ると、天宮の振った手に何か透明なのだが、注意するとぼんやりと見える何か握られており、それは長く鞭のような動きをしながら、長身の男めがけて飛んでいく。

バシンっ、ととつもない音とともに天宮の放った鞭のような物は長身の男に直撃する。

「きゃあ！」

つぼみは音と共に流れてきた突風に声を挙げ、目をつぶる。

天宮が目の前の方に攻撃した。この事実をつぼみを混乱させた。

そんなつぼみの手を握りながら天宮は自分の放った風の鞭の効果を
を見る。

「『烈風の破壊者』のようだな」

長身の男が先ほどと変わらぬ場所に無傷で立っていた。男は話を続ける。

「とりあえず名乗らせてもらう。私の名前は『自己防衛』。最強の盾を作り出す『異能力者』だ」

「『自己防衛』……貴様は菅原の仲間か」

天宮の言葉に『自己防衛』と名乗った長身の男は少しだが嫌悪感を示しながら答える。

「確かに仲間といえは仲間だが、我々をあのようなただの人殺しと同じ扱いにされるのは納得のいかない話だ。我々はある崇高な目的のために動いている。菅原のような下っ端には到底理解のできないレベルでの話だ。故にあいつは唯の下っ端、我々の仲間であっても我々の志とは相容れぬ存在である」

「だとしたら、貴様らの目的はなんだ。私を狙うのが菅原を目的としないのなら、なぜ私を狙う」

天宮は目の前の男に対してどう対応するかを考えていた。

（『自己防衛』と名乗るこの男、明らかに菅原よりも格上の相手。

後ろに一般人のいる状況で私が勝てるかどうか）

ふと、この間の菅原の事件を思い出し、助けてくれた少年を思い浮かべる天宮だが。

助けを待つようではダメだとすぐさま思いをかき消す。

そんな天宮の行動を見ながら『自己防衛』は特に動きを見せに問いに答える。

「菅原を目的としないのは本当だ。だがしかし、我がマスターである御方が貴様の死を望んでいる。だからこそ私はここで『烈風の破壊者』貴様を殺さなければならぬ」

「マスター？」

「それ以上は知る必要は無い、貴様はココで死ぬのだからな」

声を挙げた『自己防衛』が全身に力を込め始める。

すると『自己防衛』の周囲に茶色の膜が現れた。

「え？ え？ え？」

つぼみはまったく理解できず、状況を判断できない。

そんなつぼみに天宮が呟く。

「大塚さんしつかり！ 大丈夫だから。絶対に私から離れないでくれ」

天宮の言葉につぼみは大きく頷く。

天宮はそんなつぼみの頷きを確認し大きく一歩前に出ると先程よりも一回りは大きな風の鞭を生成し『自己防衛』に向かって振るう。

「意味の無い事だ」

だがしかし、風の鞭は膜に当たると簡単に砕けてしまった。

「チツ！」

予想以上に頑丈そうな『自己防衛』の『異能力』に天宮は歯噛みする。

「ならばこれならどうだ！」

天宮は右手に風を圧縮させる。天宮の周りで突風が巻き起こる。

だが不思議とつぼみの周囲では風がまったく吹いていない無風であった。

天宮の周りで発生した突風は全て右手の中へと押し込まれるように入っていた。

とんでもないほどの暴風の音を奏でる嵐の弾が天宮の右手の中に生成されていく。

突然、辺りに吹いていた突風が止んだ。

つぼみが天宮の右手を見ると、そこには白く綺麗な球体が浮かんでいた。

天宮は地面を大きく蹴飛ばし『自己防衛』に向かって一直線に向かっている。

「おもしろい……その弾が私の盾を破れるかどうか試してみるがい」

『自己防衛』が何とも楽しそうに語りかける。

「はああ！」

天宮は突撃しながら空いている左手で風の鞭を練成し『自己防衛』に向けて叩きつける。

男の顔は酷く歪み、先ほどまでの端正な顔立ちとはまったく異なっている。

「降参しても死ぬのでは話にならない」

天宮は痛みで震える右手を無理やり押さえつけ、震えを消そうとする。

「そうか、ならば苦しんで死んでもらうしかないな」

『自己防衛』の周囲を覆っていた殻がスライムのようにドロドロになり、『自己防衛』に鎧のように纏わり付いていく。

「……」

天宮の驚きを見て、『自己防衛』は満足気な笑みを見せる。

「私の『異能力』は自分の体を防衛する物体を作り出せるのだが、その物体の硬度は貴様の攻撃に傷一つ付かずに耐えうるほどの硬度を持っている。じゃあここで一つの問題だ、もしその硬度を防衛ではなく攻撃に転換したらどうなるか？」

「チツ!!」

『自己防衛』の言葉の意味をすぐさま理解した天宮は足に力を入れる。

「はあっ!!」

『自己防衛』は己に茶色い物体を纏わせながら天宮に拳を叩きつける。

だが『自己防衛』の攻撃は行動を読んだ天宮が一步早く左手から風を放出し右へとスライドするように飛んだため、空を切るとそのまま壁へと衝突する

ポオン!! まるで重工業機材が間近で作業しているのかと思わせるほどの爆音が辺りに響き渡る。

(壁が抉れた!?)

天宮は『自己防衛』の拳の威力をまざまざと見せ付けられた。

その威力は人間一人を殺すには余るほどの破壊力があつた。

「大塚さん!!」

天宮はその破壊力を見るとすぐさま行動を起こし、つばみの方へ

と自分の体を飛ばすと、衝撃的な出来事が連続して起こり驚きと恐怖とで立ちすくんでいるつぼみを抱え、すぐさま風を操り空へと高くジャンプする。

「逃げるか……確かにこの状況でその行動は最善の策と言える。その考えを瞬時に導き出し行動するところは流石と言わざるを得ない……だがな『烈風の破壊者^{ブラスト}』。貴様は何か勘違いをしている」

『自己防衛』は不敵な笑みを浮かべて話を続ける。

「その行動が最善であるのは敵が私一人の場合においてである……だが残念ながら敵は私一人ではないのだよ」

『自己防衛』がそう語ると、飛んでいるはずの天宮の頭上から声が聞こえた。

「テメエ勝手にばらしてんじゃねえよ！！背中からぐしゃぐしゃにするつもりだったのによお！」

天宮はすぐさま自分の頭上を確認する。

すると天宮の飛んでいる高度よりもさらに高い所から、女が落ちてくる。女は何とも気味の悪い笑みを浮かべながらつぼみを抱える天宮の下へと真っ直ぐに落ちてくる」

（間に合わない！！）

女がこちらを攻撃してくることをすぐに悟った天宮は、飛ぶために放出していた風を止め自分とつぼみの周囲に風の防護壁を張る。

「そんな薄い風の壁で守れるほど私の金棒は弱くねえんだよ！！」

女がそう叫ぶと、女の右手から大きくゴツイ形をした金棒が生成される。

そして女は生成されたその金棒を天宮とつぼみを包み込む防護壁に打ち下ろす。

（持ちこたえられる）

天宮が金棒の重さや硬度をある程度予測しそう思ったのも束の間、金棒からとてつもない衝撃が走る。

「！！！！」

防護壁は簡単に砕けると、なお弱まることを知らない衝撃が天宮

とつぼみを襲う。

(なんとか……大塚さんだけでも！)

文字通り空中から打ち落とされた天宮は、自分の腕の中で気絶するつぼみを守るため地面とつぼみとの接触地点に自分の体を挟みこむ。

「ぐあつ！」

撃墜された……そう表現するのが正しいほどの凄まじい音をたてながら地面と激突し勢いそのまま天宮の体はバウンドし、何度も地面に叩きつけられる。

だがその間も天宮は決してつぼみを離さず、全ての衝撃を肩代わりした。

「あああああ」

肺を強く打ったためだろうか息がうまくできない、地面との接触の瞬間に風を送り、スピードを和らげたとはいえ、二階ほどの高さから硬いコンクリートへと叩きつけられたのだ、その痛みは想像を凌駕する。

だが天宮にはそんな自分の痛みよりも優先すべきことがあった。

「大塚、さん……」

つぼみを見てみると壁へと叩きつけられたショックで意識を失ってはいるが、息はしっかりとしており、ダメージは窺えなかった。

そんなつぼみを見て天宮は安堵の息を漏らす。

霞む目で辺りを見ると強固な殻を作り出す男も、自分を打ち落としてきた女もいない。

どうやら吹き飛ばしすぎて自分たちを見失ってしまったようだ。

天宮はこの状況を一筋の光だと考えた。いま天宮がしなければならぬことは一つ、つぼみをこの場所から逃がすことに他ならない。天宮はつぼみを逃がすため立ち上がるかと試みる。がしかし心に反して天宮の体はまったくうごかない。

痛みの増す体をなんとか動かそうとはするものの、指一本動かすだけで全身を駆け巡る激痛は天宮を容赦なく蝕んだ。

天宮の今の状態ではつぼみを助けるどころか、自分の体を動かすことさえままならなかった。

「く……………くそっ」

唯一動く口で情けない自らに悪態を付くものの、肝心の体はまったく動こうとはしない。

だんだんと消えかかる意識。

そんなとき、天宮の腕の中がもぞもぞと動き出す。

第十話 約束のリボン

「あれ？ 私は一体」

つぼみはズキズキと痛む頭を抱えながらも、いま自分が何をしようとしているのかを確認する。

自分の周りにあるビルの壁が大きく抉れ、地面には小さなクレ―ター状の穴が開いていた。

そんな到底普通では考えられないような状況も、痛みぼんやりとする頭には情報として深く入ってこない。

つぼみはぼんやりとする頭でもう少しだけ辺りを見回す。

だんだんと意識がはつきりとしてくるなか、自分の目線よりも低いところで人が倒れていることに気が付いた。

そしてその人物が自分の知る人物である事に気が付く。

「天宮さん！ 大丈夫!？」

つぼみは隣に倒れる天宮に叫ぶ。そしてその叫びと共に自分が先ほど体験した恐怖を思い出す。

「大塚……さん」

天宮の口元からは血が流れ、目は生気を失いかけていた。

「……!」

つぼみはすぐさま自分のポケットに手を入れて青く折りたたまれた携帯を取り出し開く。

だが充電切れの携帯は画面を真っ暗にしたまま、ボタンを押してもまったく反応する素振りを見せない。

それならばと、つぼみはすぐさま天宮の胸の内ポケットに手を入れて探り始める。

（たしか天宮さん、さっきここに携帯をいれてたはず）

「……!」

内ポケットの奥に入れた指先に何か硬い物が当たる。

つぼみは今もなお、だんだんと生気を失っていく天宮を気にしながら、内ポケットの奥に眠っていた物を引きずり出す。

引きずり出されたそれは天宮が先程使っていた携帯電話であった。自分の思った通りの物があつたことにつぼみの顔に笑顔が咲いていく。

「待つててね天宮さん。すぐに救急車を呼ぶから!!」

つぼみは天宮の携帯を使い、緊急用通報用電話番号である一一九のボタンを押そうとする。

だがそんなつぼみの腕を天宮が強い力でがっしりと掴む。

天宮の突然の行動に驚いているつぼみを差し置き、天宮は今にも消えてしまいそうな声で呟く。

「逃げ……て」

「え？」

天宮の小さな言葉につぼみが疑問符を頭に挙げていると。

「あれ？ 一人ピンピンしてるんだけど」

背中からなんとも楽しそうな、女の声が聞こえた。

その声に反応したつぼみがすぐさま後ろを振り向くと、そこには先ほどまで天宮と戦っていた男が立っており、その横には先ほどまではいなかった二十代前半と思われる露出度の高い服を着た化粧綺麗な女が並んでいる。

だがその女もまた、男と同様に自分と天宮に不吉を届けようとしている人物であると言うことは、女の表情に浮かんでいる邪悪な笑みから一目瞭然であった。

「確かに元氣そうだ」

先ほど自らを『自己防衛』と名乗った長身の男はつぼみと天宮の顔を交互に見ながら話を続ける。

「どうやら『烈風の破壊者』が身を挺して守ったようだな」

「すごいじゃん、格好いい！ まあそんな守る価値も無いような人間のために、自分の命を捨てるのかは意味わからないけど」

つぼみの手が自然と震えてくる。視線の先に立つ二人の人間はつぼみが今まで生きてきた中でまったく出会ったことの無い人間。

そんな人間に始めてあってしまったつぼみの全身は震えを止められない。

そんな全身から恐怖の感情を垂れ流しているつぼみを見た『自己防衛』の横に立つ女は心底嬉しそうに笑い出す。

「そうそう、その顔が見たかったんだよ。さっきの奴はまったくそんな顔見せなかったしさ」

「おい『凶撃の金棒』^{ストライク} 貴様の趣味などどうでもいい。早く二人を始末して、任務を終了させるぞ」

「待てよ『自己防衛』^{ガード}、さっきから私のイライラゲージが天辺越えちゃっててさあ」

軽快に話しながら『凶撃の金棒』^{ストライク} と呼ばれた女の右手に黄色い光が集まっていく。

集まっていく光は形を成し凶悪な姿をした金棒へと変貌していく。「わかった、貴様の好きなようにすればいい」

『自己防衛』は自分の周囲に強固な膜を張り巡らせる。

「それでいいんだよ『自己防衛』^{ガード}、あとは私の好きにさせてもらおうッー!!」

『凶撃の金棒』が右手に作った金棒を地面へと叩きつける。

その瞬間。とてつもないほどの轟音と共に金棒と地面の接触点から爆発が巻き起こった。

凶悪な音に恐怖したつぼみは声を張りあげるが、その声も獰猛な音により簡単にかき消されてしまう。

音と共にやってきた、爆発はつぼみの全身を包みあたり一面を紙の様に吹き飛ばす。

そんな地獄にも似た風景がようやく終わりを告げたとき、地獄を作り出した人物はつぼみと天宮の死を疑わなかった。

だが不思議と目の前で起きた爆発でつぼみに届いたものはその獰猛な音だけだった。

他の人間を簡単に吹き飛ばせそうな爆風や弾丸の様な速度で飛んできた石ころや見るからに全てを焼き尽くそうとした炎はつぼみに一切届かない。

声をあげたつぼみ自身もどうして自分がいま無事にいるのかを理解できないでいた。

もうもうと爆発と共に舞い上がった砂埃が辺りをはっきりとさせ始めたとき、イラついた女の声ゴーストタウンが廃墟に響く。

「てめえ、まだ『異能力』ちからが使えたのか」

『凶撃の金棒』から放たれたその言葉はつぼみに向けられた物ではなかった。

では一体誰に？

そんなこと考えるまでも無かった。

つぼみはすぐさま天宮の方へと向き直る。

するとつぼみの見た先で痛みを堪えながら辛そうに顔を歪める少女は口を開く。

「お……大塚……さん。早くゴホツ……逃げて」

天宮が蚊の鳴くような声でつぼみに告げる。

その言葉を聞いたつぼみはまったく考える素振りも見せずに一言告げる。

「絶対に嫌だ」

つぼみの口から出た言葉に天宮は驚きの表情を見せる。

「逃げるんだったら天宮さんも一緒にだよ」

震える手を無理やり押さえつけ、心の全てを持っていかれそうなどうしようもない恐怖を無視して、つぼみは天宮に向けて笑顔を放つ。

だが天宮はそんなつぼみの考えが理解できない。

「な……なんで」

つぼみは天宮の質問に胸を叩きながら自信ありげに答える。

「だって私は天宮さんの友達に成りたいんだもん」

カチカチと鳴ってしまいそうな歯を堪えながらつぼみは天宮に笑

顔をぶつける。

「良い話だねえ、本当に良い話。ぶっ壊したいぐらい善い話」
後ろを振り返る。

「本当にいい話。片方は友人を守るために自分を見捨てて、もう片方は絶対に見捨てさせないときたもんで、本当に偽善な話……本当に
に 反吐が出る!!」

『凶撃の金棒』はつぼみ達との距離をすぐさま縮めて右手に作った金棒を力任せに振り下ろす。

金属的な音が辺りに響き渡ったあとに、爆風が辺りを包み込む。

つぼみは気が付くとボロボロに崩れかけたマンションを背にして座り込んでいた。

何故か体に痛みが無い。

あれほどの爆発が起こったのにも関わらず、まったく痛みを感じない。

つぼみは辺りを確認する。

なぜ自分の体が五体満足のままであるのかを確認する。

その答えは、すぐに分かってしまう。

つぼみの眼前に広がっているのは何事もないように立ちながら本を広げて読んでいる長身で青い髪をした端正な顔立ちのメガネ男と、女子大生といった感じのする露出度の高い服を着た右手に凶悪な金棒を作り出せる女
そしてその女の前に倒れているピクリとも動かないボロ雑巾のようになった自分の友達。

「え……なんで……どうして」

口ではそう言うものの自分がどうして無事でいるのかなどすぐに分かる。

目線の先には動く気配すら見せない友達。その友達の目の前に座っていた自分。友達は動けなくなり変わりに自分は瞬間移動したように爆発を避けぴんぴんしている。

自分の『異能力』にそんな現象は無い。あつたら最初から使って友達と一緒に逃げているはずだ。

ならばそういうことなのだろう、自分は……いま動かなくなっている友人に救われたのだろう。

「本当にすごい偽善者だよねお前」

『凶撃の金棒』ストライク は天宮に向かって笑い出す。

「私の攻撃一回避けた程度であそこにいるチビを助けられるとも思ってたの？ 逆にもっと苦しい思いするのが分かんないの」

『凶撃の金棒』ストライク の笑い声の混じった言葉に天宮は何の反応も見せない。

いやもうすでに小さな反応すら出来ないのかもしれない。

「あーおもしろい！ 本当に最高の馬鹿だよお前、あんな何もできないチビ守るためにそんなに汚いゴミみたいになっちゃってさ！

馬鹿以外のなんでもないよ」

『凶撃の金棒』ストライク は笑う。

ただただポロポロになり動けなくなつた天宮を見て笑い続ける。

「ははっ、ははははっ………なんか言えよてめえ！！」

天宮の体に『凶撃の金棒』の右足がめり込む。だがそんなことをされても天宮の体はまったく動かない。

「チツ！！」

天宮がまったく動かなければ声もあげないことが気に入らないのか、『凶撃の金棒』は更に天宮に攻撃を続ける。

それでもなお、天宮の体は蹴りに合わせて動くだけで、他の動きを見せようとはしない。

だがしかし、まったく反応しない天宮だが、『凶撃の金棒』の攻撃によって確かに天宮の命が削られていつているのはつばみにさえ分かった。

そんな光景が目の前で繰り広げられ、つばみの体は動いた。

天宮は自分を助けるためにあんなになつてしまったのだから、彼女の事を思えばじぶんは逃げるのが正解である。

つばみの頭はそう理解していた。

他にもあの二人は、自分よりも彼女の命を初めから狙っていたの

だから、今ここで逃げれば見逃してもらえるかもしれないとつぼみは考えた。

それに仮に自分がこの場に居ても彼女を助ける事など絶対に出来ないとつぼみは分かっていた。

むしろ自分が居た方が邪魔になると

実際、自分が居たせいで彼女はあんなにもボロボロになっているのだと

絶対に逃げるのが正しいと。そう思っていたはずだった。

つぼみの体はいつの間にか『凶撃の金棒』と天宮の間に割って入っていた。

「天宮さん!!」

つぼみは天宮を『凶撃の金棒』の攻撃から守るように覆い被さった。

「なんだてめえ!!」

そんなつぼみの行動を見た『凶撃の金棒』は更に怒りを秘めた声をあげ、つぼみもろとも天宮を蹴り上げる。

痛い！ 怖い！ それがいまつぼみを感じている心の正直な思いだがその思いとは裏腹につぼみは天宮の上から退こうとはしない。

「邪魔なんだよ、とつと除けよクソチビ！」

『凶撃の金棒』の蹴りは更に威力を増していく。

体が一回の攻撃のたびに悲鳴をあげる。いままで生きてきた人生の中で感じたことの無いほどの激痛がつぼみの体に襲い掛かる。

それでもつぼみは退こうとはしない。

そんな『攻撃される方』と『攻撃する方』

先に音をあげたのは『攻撃する方』であった。

「なんなんだよてめえらは!!」

『凶撃の金棒』はつぼみの髪を掴み、勢いそのままにつぼみを放り投げる

「あっ!!」

つぼみは地面に叩きつけられ、まるで小さなボールのように擦られ転がっていく。

「まったくふざけやがって、友達だかなんだか知らねえが本当にうざりたい!!」

『凶撃の金棒』は怒りを露にしながら声を張り上げ、手に付いたつぼみの髪の毛をつざつたそくに振り払う。

「はあ……はあはあっごほっ
「な!」

つぼみは震える足で立ち上がる。

今にも折れてしまいそうな手足を、今にも壊れてしまいそうな体を、無理やり叩き起こす。

「はあ……はあ……はあ」

よたよたと不安定な歩きを見せながらつぼみは天宮に覆いかぶせる。

「それって何の冗談？」

『凶撃の金棒』からの怒りの混じった質問に、つぼみは声を発しようとするだけで痛む肺を無視して答える。

「わ……私は……ごほっ……天宮さんの……友達だから
力なく、あまりにも弱弱しく語るつぼみの声。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

突如、『凶撃の金棒』がつぼみの首を掴みビルの側面へと叩きつける。

「がっ!!」

不意に叩き付けられら全身が痛みを引き裂かれそうになるが、それよりも叩き付けられても尚、首にある『凶撃の金棒』の右手が力を増しつぼみの首を容赦なく締め付ける。

「あ、ああ……あ」

つぼみは悶え苦しみながらも必死に自分の首を絞める手を離そうと試みる。

「苦しいか？　なあ苦しいだろ」

つぼみの必死な行動を見た『凶撃の金棒』は「満悦な表情を見せないがらつぼみに言葉を投げかける。

「なあ、お前の命。助けてやろうか？」

降って湧いた救いの言葉につぼみの顔は驚きに染まる。

「はーっははは、嘘はつかねえよ」

なんとも気味の悪い笑顔を作ったまま『凶撃の金棒』はつぼみの首から手を離す。

首からの支えが無くなったつぼみの体はそのまま自由落下していき地面へと崩れ落ちる。

「ゴホっ……ゴホっおほッ」

自分の首を押さえながら先ほどまで吸えなかった息をたっぷりと吸い込もうとするつぼみだが、さきほどまでのシヨックと恐怖の所為か息を上手くすることができない。

「それでお前の命を救ってやるって話なんだけど」

そんなつぼみをお構い無しに『凶撃の金棒』は楽しそうに話を続ける。

「お前の命を助けてやる代わりに一つだけ条件がある」

「じよ……条件？」

つぼみが話を聞いていることに偉く上機嫌な『凶撃の金棒』は更に声をあげて話を続ける。

「そう、お前を助ける条件はただ一つ。そこに倒れてるボ口雑巾を置いてとつとこの場所から消えな！」

これだけ痛めつけ恐怖を味合わせたのだ。目の前で力なく座り込むこのチビは絶対にこの条件に喰らいつく。『凶撃の金棒』はそう考えていた。

だがその考えは脆くも崩れ去る。

「なめないで！」

「！……」

つぼみは立ち上がる。

「そんなふざけた条件、だれが呑むもんか！ 友達を置き去りにして自分だけが助かって生きる……そんなことするくらいなら死んだほうがマシに決まってる！！」

体は小さく、見るからに弱そうな少女。

だがその眼には強さがあり、今にも倒れそうな青ざめた顔には、はつきりとした意思があった。

「何言ってるのお前、馬鹿じゃないの？………なあ、何言ってるんだよお前！！」

つぼみの言葉を聞いた途端、狂ったように声を張り上げながら、座り込むつぼみを蹴り始めた『凶撃の金棒』。

「ッ。ッッ！！」

痛みを耐えながら必死に体を丸め込むつぼみに振り下ろされる蹴りは止むことは無い。

「どうだクソチビ。私の、さっきの、条件、呑む気に、なつたか」
そんな要求につぼみがすぐさま首を横に振ると、『凶撃の金棒』はつぼみへの攻撃を更に加速させていく。

蹴られ続けてどのぐらいの時間が経つただろうか、つぼみの体は限界にきていた。蹴られ続けた体は真っ赤に充血し、痛みを通り越し何も感じなくなりつつある四肢はおかしな方向に曲がっている。力を入れようにも入れられない体はまるで自分の体では無いような気さえする。

そんなつぼみをまたもや首を掴んでぶらりと吊り上げる『凶撃の金棒』は息を切らせながら最終通告へと入る。

「はああああ、これで………最後だチビ。ボロ雑巾を置いてとつとと消えろ」

つぼみ宛の最後通告の答えは

「いやだ」

つぼみは、もはや聞こえるどうかも分からないような声で、小さく呟いた。

「そうか………ならしょうがない」

つぼみを天宮の近くへと投げつける。

「いまからお前の目の前でそのボロ雑巾をジューシーにして殺るよ」

そう言いながら『凶撃の金棒』の右手に黄色い光が集まっていく。「さー、おいしそうに焼けるかなあ、あんたらのせいで私おなか減っちゃったよ」

右手に金棒を生成し終えた『凶撃の金棒』は金棒を右肩に担ぐと、一歩そしてまた一歩と天宮の下に近づいていく。

「これでおしまい」

『凶撃の金棒』は金棒をおもいきり振り下ろすため高く上げようとする。

だがその行動を取ろうとした瞬間、『凶撃の金棒』の腰にしがみつ き、必死に金棒を振り下ろさせまいとする存在が居た。

「邪魔なんだよ！」

腰にしがみつ き金棒を動かさせまいと必死に抵抗する小さな少女を『凶撃の金棒』は空いている左手で自分からつぼみを引き剥がそうとする。

もはや体に力を入れられないつぼみは簡単に引き剥がされ簡単に倒されてしまう。

「……………」

それでもつぼみは無言で立ち上がり、『凶撃の金棒』の腰へとしがみつ く。

「チツ！ うぜえんだよ！！」

やはり簡単に引き剥がされてしまうつぼみだが、また立ち上がりしがみつこうとする。

「なんなんだよてめえは！！」

つぼみのしつこさに『凶撃の金棒』は怒りを剥き出しにしてつぼみを蹴り飛ばす。

「ッ！」

声にならないほどの痛み、最早自分の体がどうなっているのかも

分からないつぼみ。

どこかでもう諦めようと言う声が聞こえる。自分は精一杯頑張ったじゃないかと言う声が聞こえる。ここで立ち上がってもしょうがないじゃないかと言う声が聞こえる。

その声に従おう。

つぼみは思う。

(声の言う通り、もう散々頑張ったのだから、立ってもしょうがない。なら立たないで気絶でもした方が楽じゃないか)とだがそれでも、つぼみは立ち上がる。

「とも……だちになるって……決めたんだ………」

その言葉だけがつぼみのすべて。

そしてまたヨタヨタとした足取りで友達を殺そうとする人間に近づいていく。

『凶撃の金棒』はそんなつぼみの行動に怒りを増幅させていく。

「もういい、先にお前から殺そう」

金棒を持つ腕を上げる。

自分の力を最大限に引き出すため、そして確実につぼみを殺すため。

つぼみはそんな『凶撃の金棒』の行動を見て覚悟を決める。

そんなとき、つぼみの頭についていた赤いリボンがヒラリと落ちていく。

つぼみは落ちていくリボンをゆっくりと見つめ、思う。

(あかちゃん約束は守ったよ)

栗色の髪の少女は赤い髪の少女との約束を思い出す。

それは唯一つの簡単な約束。

『私はこれから先もずっと、つぼみの事を助け続ける。だからつぼみも、私や私以外の友達ができたら助けてあげて。そうしたら、私はこんないい子を助けた事があるんだよって、いっぱいいっぱい自慢出来るから』

死にそうな自分を助けてくれた友達。

死のうとして学校から飛び降りた自分を信じられない速度で走って、その手を掴んでくれた友達。

そして約束のリボンを交換し合った友達。

彼女がいまのつぼみを見たら怒るだろうか、それともよく頑張ったと褒めてくれるだろうか。約束の通り、皆に自慢してくれるだろうか。いやたぶん彼女のことだから自分をこんなにした相手を怒るだろう。

そして願う。

少し前にいつもいつもお願いしていた。

だがいつもいつも聞き届けられなかった者に。

（神様、私は頑張りました。本当に頑張りました。あの頃は貴方にくらお願いをしても聴いて貰えませんでした。ただあの頃と違って私は頑張りました。これ以上ないくらい頑張りました。だけどわたしはもう頑張ることが出来ません。だからお願いです。私のことはいいいですから、天宮さんを助けてください。私は「現在いま」とつても幸せです。だけど彼女の「現在いま」はまだ幸せではありません。お願いです。幸せを知らないまま死なせないであげてください。お願いします）

つぼみの願いは聞き届けられたのだろうか、だがそれをつぼみが知るすべは、いまは無い。

第十一話 覚醒するは嵐の如く

眼が霞む、辺りがどうなっているのかが分からない。

私は死んだのだろうか、体の感覚は無い体を動かすことも出来ない。

何も考えれない何も分からない。

ぼやけた世界、まるで自分には関係の無い空間を覗いているようなそんな感覚の中、目の端に誰かが写りこむ。

一体だれなのだろう、私をどうかするつもりなのか、やはり私はまだ殺してしまった者達から恨まれているのだろう、憎まれているのだろう、だからこんなにも苦しくて、こんなにも辛いのだろう。

そんな風に考えていた天宮の頬に何かが触れる。

なにが頬に触れているのかと天宮は霞む眼で見つめる。

それは赤いリボン。

真っ赤で綺麗でかわいいリボン。自分には到底似合いそうにない代物だ。だがそのリボンをつけていた人物を天宮は知っている。

自分とは到底違う可愛らしい小さな少女。自分と友達になりたいと言っていた、変わった少女がつけていたリボンだ。

天宮は、はつきりと思い出す。

いま自分はどうして地面に倒れているのか、どうしてこんなにも眼が霞むのか、どうして体中がボロボロなのか。

そして天宮は眼を開く。天宮にはまだ確認しなければいけないことがあった。

まだやらなければいけないことがあった。

眼を開いた先で一人の少女が倒れていた。そしてその倒れている少女に金棒を振り下ろそうとする女が立っていた。

女は怒りを露にしながら頬を吊り上げて笑っていた。

天宮の意識がはつきりとする、いまここでしなければならぬことがはつきりとする。

さきほどまでつぼみが自分を守ってくれていたことを思い出す。このままここで倒れていてはいけないと、自分を奮い立たせる。だがそんな思いとは逆に体はまったく動く気配を見せない。

救いたいのに、救わなければいけないの体はまったく動かない。天宮は焦る、心ではすばやく動き、心では自分のことを友達だと言い自分のことを守ってくれた人を守りたいのに。

動かない、体が動かない。

そんなとき、天宮はある人の言葉を思い出す。

|||||

「あとね遙ちゃん、一つだけ言いたいんだけど」

「なんですか隊長」

天宮は車の中へと体を戻す

「遙ちゃんさ、なんでこの間の事件で怪我をしたの？」

「隊長のおっしゃってる意味が分かりません」

「だからさ、なんで菅原如きに死にそうになったの？」

神成は天宮の顔を見ながらなんとまあつけらんかと答える。

「？ 隊長の言いたいことが分かりかねます」

「あのね遙ちゃん。おじさんは遙ちゃんのことをすごく知ってる。出会ってからかれこれ十年近く一緒に居るからね」

神成は天宮の目を見て微笑みながら話を続ける。

「だからおじさんは遙ちゃんの実力も知ってる。だからこそ遙ちゃんほどの実力があれば菅原にやられそうになるなんてことは絶対に無いと思うんだけど」

「それは隊長の思い違いです。私にはそんな実力はありません」

「それこそ天宮ちゃんの思い違いだね。確かに菅原は『異能力者』アフノーマルの中では戦闘能力においては強い方だと思うよ。だけどそれでもおじさんから言わせれば遥ちゃんの本当の実力の半分にも満たないと思うよ」

「そんなはず不是吗、隊長は私の事を買いかぶり過ぎです」

天宮の言葉に菅原は更に笑い出す。

「そうだな遥ちゃん。たぶん遥ちゃんは自分の『異能力』ちからにセーブを掛けているんだと思うよ」

「セーブ？」

天宮がどこか納得のいかない表情で神成の言葉の一部分を復唱する。

「そうセーブ、天宮ちゃんの『異能力者』アフノーマルとしての『異能力』ちからは実際とんでもない威力と精密さを兼ね備えてるはずだよ、ただ過去に家族や友達を殺してしまったことが、遥ちゃんの無意識の内にだるうけど『異能力』ちからにセーブを掛けてるんだと思うよ」

「なら私には無理そうですね、私は過去を捨てることは出来ないですから」

その言葉を聞いた神成は、先程までのおちゃらけた表情とは一変。恐ろしいほど真剣に天宮へと告げる。

「いいかい遥ちゃん、過去は乗り越えることしか出来ない。忘れてたり捨てたりなんてのは無いんだ。これから遅かれ速かれ遥ちゃんにも、絶対に守りたいと思う人がでてくるだろう。でもそのとき、過去に囚われて先に進めないような人間には、人を守ることもなんて出来ない。……少しばかりきつい事を言うようだけど、遥ちゃんなら過去を乗り越えられるっっておじさんは信じてるからね」

|||||

天宮は神成の言葉を思い出す、そして自分の『異能力』ちからを思い浮かべる。

本当に自分は『異能力』をセーブしているのだろうか、そんなことは分からない。

だが過去に囚われているのは本当だ、それはこれから先も続いていくのだろうかもしれない。

だがそれでも、自分の目の前で殺されそうになっている少女を、自分のことを救おうとしてくれた少女を、このまま見殺しになんて絶対にしたくない！！

天宮は全神経を集中させる。友人や家族を殺してしまったことなど、いまは関係ない。

いまはただ目の前の少女を守りたい。天宮の頭にはその感情しか存在しない。

風が集まっていくのを肌で感じる。

それは今までの風とは量も質もまったく異なって思えた。

(大切なモノは守り守ってくれる)

天宮は大和の言葉を思い出す。

(少しだけ分かった気がするよ大和……………私の事を守ってくれた大切なモノ』を今度は私が守り抜く!!)

天宮は過去をまた一步乗り越える。

|| || || || || || || || || || ||

「さあ死んじまえ」

『凶撃の金棒』ストライクはつばみに向けて金棒を振り下ろす。

金棒が無慈悲にも倒れているつばみを襲う。

金属音が辺りに響き渡る。その音は肉体を破壊した音とは程遠く、その音はまるで金属バットを硬い物にぶつけたような音。

その音に続いて爆発が巻き起こる。

隣に立っていた四階建て程度の廃ビルが消えてなくなるほどの大爆発だ。

「礼は言わねえぞ」

「別に礼が欲しくて貴様を守ったのではない、貴様は尾張様のお気に入りでだから、私が見殺しにしたとあつては尾張様に顔向けが出来ぬ」

『自己防衛』は『凶撃の金棒』の真横に立ち自分の殻の中に『凶撃の金棒』を入れながら話す。

「それにしても貴様の金棒の能力はある程度知っていたはずだが」

「その通りだここで爆発したってことは……………」

『凶撃の金棒』と『自己防衛』は辺りを探る。

「やはりな」

『自己防衛』は爆発の攻撃をまったく受けずに倒れているつぼみを見て呟く。

その隣には天宮が立っていた。

「何また立ってんの？」

『凶撃の金棒』は怒りと驚きをミックスしたような、変わった声をあげる。

「……………」

天宮は何も言わずただつぼみを守るように二人の『異能力者』とつぼみの間に割って入る。

「なんか言ってみろ！」

怒りを撒き散らしながら『凶撃の金棒』は金棒を生成しようとする。

「待て『凶撃の金棒』！！」

天宮と『凶撃の金棒』の間に突如割って入ると『自己防衛』はすぐさま自分の殻を周囲に展開する。

ガガガガガガガガガガガガガガ！！

轟音が響き渡る。

「な!?!」

急激な展開に『凶撃の金棒』は辺りを確認する。すると殻を張ってある周囲の全方位からドリルのような形をした半透明の風が攻撃をしていた。その攻撃は轟音を撒き散らしながら二人を襲う。

それは風というより嵐に近いかもしれない。

そんな巨大な嵐によって『自己防衛』の殻に小さくだがヒビが入る。

「!?!」

『自己防衛』は攻撃と自分の殻の強度を比較する。

それによつて導き出された答えは一つ、……もたない。

奢っていたわけではないが自分の『異能力』^{ちから}はそう簡単に破れるものではないと考えていた。自分の『異能力』^{ちから}を破れる人間は自分達より上の存在である選ばれた人間しかいないと考えていた。

だが自分の『異能力』はもうすぐ破られる。それも選ばれた人間ではなく、寄生虫を助けるようなふざけた人間に自分の『異能力』が破られる。その事実は『自己防衛』にとって到底信じられるものではなかった。

「あああああああああああああ!?!」

途端に殻の中で叫びだした人物が居た、その人物は殻を内側から思いつきり金棒をぶつける。

殻の中で爆発が起きる、大きな爆発だ。

その爆発は殻だけではなく殻を破ろうとしていた嵐をも消し去り、辺りに土煙が立ち込める。

「『自己防衛』^{ガード}!!! ぼーっとしてんじゃねえこのクソメガネ野郎! 爆発を巻き起こした『凶撃の金棒』は『自己防衛』の襟を掴んで怒鳴り散らす。

「すまない。少し冷静さを欠いた」

掛けているメガネのずれを直すと一つ深呼吸を放った『自己防衛』^{ガード}は崩れた顔を元に戻すと『凶撃の金棒』に呟く。

「なぜこれほどまでの『異能力』を奴が隠していたのかは分からないが。だが同時にその事実はいくつか以上、奴には『異能力』の上限が無いということを示している。奴は先程の攻撃では貴様がいるため失敗したと悟り、私とお前を引き離そうとしてくるはずだ。そこで我々は防戦一方であると奴に思い込ませ、奴の考えどおりに引き離される振りをする。すると奴は先程の失敗の原因である貴様を先に攻撃してくるはずだ、そこでお前は奴に突撃しろ」

「は？ なに言ってるのあんた。私に死ねって言ってるのか？」
『自己防衛』の作戦を聞き、明らかに怒りの籠った声で詳細を聞いてくる『凶撃の金棒』。

「そうではない。貴様が突撃した後、すかさず私が貴様に殻をかぶせる。私の殻は持つて三十秒、だが三十秒もあれば貴様なら優に奴の懐に入り致命傷を与える事が可能はず」

「ははははっ、いい作戦だ。……だがしかし、お前の殻は人の周囲にも張ることが出来たのか、二つ名と少し違う気がするな」

「私の二つ名は性格的な意味を用いている。本来ならば自分以外の人間に私の大事な殻を張るなど私のプライドが許さないのだが、いまはそうも言ってもらえない」

「そーですか、攻撃の方はまかせな『烈風の破壊者』だかなんだかしらないけど、二度と立てないようにしてやるよ」

爆発で舞った土煙がようやく晴れてきた。見ると先程までの位置に天宮は動かず立っていたが、つぼみは天宮の後ろのビルに寄り掛けられていた。

「よし、殺るぞ『自己防衛』」

「貴様に言われなくても分かっている」

「すべては『創世の人類』のために」

二人同時に言葉を叫ぶと天宮に向かって突撃する。

天宮は言葉を一切発せずドリルのような形をした風を生成する。生成された物はまるで本物のドリルのように見え。唯一違うのは一つ一つが大人程度もある大きさだろうか。

『自己防衛』はすぐさま自分の周りに殻を張り巡らせる。だがしかし
「も、もたない！！ 先程とは威力がまったく違う!?」
膜が十秒も持たずに砕け散る

「ガアッ!!!」

風が『自己防衛』を飲み込む。

体が九の字に折り曲がり、いままで受けたこともないような衝撃
が『自己防衛』の体を襲う。嵐に巻き込まれた体はそのまま後ろに
飛び、背後にあった廃ビルの壁を突き抜ける。

「『自己防衛』!」

返事は無い。

それにあれほどの嵐をまともに食らい生きているのかも分からな
い。

「チッ!」

『凶撃の金棒』は後ろを振り返りもせず天宮へと突き走る。

「!!!」

天宮が驚いた顔を見せる。

仲間がやられても『凶撃の金棒』は心を乱すどころか笑っていた。
「こっちはお前を殺せばあのクソがどうなるうがしっ たっ こっち
やないんだよ」

まったく足色は衰えることなく『凶撃の金棒』は天宮を自分の攻
撃範囲へと入れ込む。

「死ねエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!」

『凶撃の金棒』が左手に持った金棒を握り締める。

天宮はすぐさま自分の周囲に風で作った防護壁を張る。

金棒が天宮に襲い掛かろうとしたとき、『凶撃の金棒』は笑って
告げる。

「お前もあの餓鬼と一緒に私が金棒を一つしか生成できないと思っ
てるクチだろ」

楽しそうに笑らう『凶撃の金棒』の金棒を持たない右手から二つ
目の金棒が生成される。

「！！！」

天宮の顔が曇る。

「さつきは一本じゃ耐えられたからね、二本ならどうだかな」

二本の金棒は振り下ろされる、それはとてつもないスピードでとてつもない威力を生み出した。

天宮は吹き飛ばされ地面をバウンドしながらつばみの近くへと叩きつけられる。

「友達を思ったがためにお前は友達を失うの、もし友達を思っていないかったら私の金棒に風で真つ向勝負したくせに、後ろに友達なんて、いらぬ屑みたいな存在がいるから、爆発を高めるようなことはしたくなかつたんでしょ。本当に馬鹿だよな」

『凶撃の金棒』は声を高くして笑う。

「本当に馬鹿、友達の所為で自分は死ぬし、自分が友達を守ろうとした所為で友達は死ぬし、いいことないだねえ」
『フラスト烈風の破壊者』さん

一歩ずつ近づきながら『凶撃の金棒』は語る。

「さて『フラスト烈風の破壊者』さん、今から貴方の前で友達を殺してあげるからちゃんとよく見て、自分の無力さをよく噛み締めててね」
天宮は歯を食いしばろうとする、どんなになっても立ち上がるうとする、だが立ち上がれない。ならば風を使おうとする、だが風を動かす事ができない。

体が頭が一切の動きが利かなかった。

まったくの反応を示さない、気を抜けばそのまま死んでしまうような状態の中無理やり体と脳をフル活用したのだ。常人ならば優に活動の限界を超えている。

限界がきた。天宮の体も脳も限界が来てしまった。だがそれでも守らなければならない。

彼女を守らなければならない！！

そんな思いが体を駆け巡っているのに何も出来ない、いくら力をいれても何も起きない。

自分への怒りと『凶撃の金棒』への怒りがいくらかみ上げたとしても、何も起ころうとはしない。

そんな天宮を他所に『凶撃の金棒』は高く跳躍する。より強く金棒に力を込めるため、よりぐしゃぐしゃにするために。高く、それでいて全体重を掛けるように金棒を振り下ろす。

「ストライクー!!」

世界は無常にも回り続ける。

だがそんな中で、天宮は笑う。

つい笑って涙が出そうになる。

また忘れていた。

『大切なモノは守り守られる』

第十二話 『大切なモノ』

『ストライク凶撃の金棒』の腹部に強烈な衝撃が走る。

「がハッ！」

潰そうとしていたチビに金棒は当たらず、代わりに自分がダメー
ジを受けている。

通常では考え辛いその状況に、己の身に一体何が起きたのかと、
痛む箇所を右手で押さえながら『凶撃の金棒』は立ち上がり壁に寄
りかかる。

壁に寄りかかりながらも、目線はすぐさま状況を把握しようと思
き回る。

そんな風に視線を辺りに彷徨わせっていると、一人の人間が立つて
いた。

その人物を目にした瞬間、『凶撃の金棒』の顔が驚愕に染まる。

その人物は絶対に立っているはずの無い人物であったから。

いや、立ってはいけな人物であったのだから。

自らの最高のタイミングと最大の威力によって跡形も無くジュー
シーにした人物。

(そんなはずがない)思考が目まぐるしく動き始める。全ての可能
性を考える、奴が生きている理由を考える。

だが生来、考える事の苦手な『凶撃の金棒』にとって、思考とは
あまり得意な物ではない。それでもいくら馬鹿な人間に聞いたとこ
ろで、物があるかないか、物が死んだかどうか、死んだものが生き
返るかどうかが。

その程度のことならば簡単に答えが導き出せるだろう。

ならば尚の事、目の前の現象が信じられない。

(なぜ奴は生きている!?)

そんな『凶撃の金棒』の悩みなどお構い無しに、奴は信じられないほど軽い口調で話す。

「いくらなんでもストライクばつかじゃあな、たまにはボールも投げないと一流のビッチャーにはなれねえぞ」

「な……なんでお前が……死んだはずなのに」

そんな『凶撃の金棒』の言葉を軽くスルーしながら大和はつぼみの方へと駆け寄る。

「よかった。大丈夫みたいだな」

つぼみが息をしてただ気絶していることを確認した大和は、すぐさまつぼみの近くに倒れている天宮へと移る。

「大丈夫か天宮………結構やばそうだな」

見るからにつぼみとの怪我の違いが多々ある。

「……………」

天宮は必死に大丈夫だと言おうとするが、声が出ない、口が動かない。

「喋らなくていい、それにしてもあの女しか居ないところを見るともう一人の男は倒したのか」

天宮はそれも答えようと試みるがやはり上手くいかない。

「そうか倒したのか、さすが天宮だ」

大和は笑みを作りながら天宮をつぼみの隣まで運んでいく。

「ならば俺の番だな、遅れた分しっかりと働くから安心して休んでろ」

大和は笑顔を絶やさぬまま、天宮にしっかりとした口調で告げると、体を反転させて様々なマイナスの感情を垂れ流している女に向かう。

「さあとつとと始めようぜ『ストライク凶撃の金棒』。俺は速く帰ってから揚げを作らなきゃならないんだよ」

『凶撃の金棒』は驚きの表情からすぐさま戦闘へと表情を切り替える。

「お前はなんで生きてる」

この行動に驚いたのは『凶撃の金棒』の方だ。

大和はそのまま前へと飛び出し地面と金棒の間に体を入れると金棒が振り下ろされるよりも早く『凶撃の金棒』の懐に入り、自分の頭に金棒が当たることも厭わずに正拳突きを放つ。

「ガッ！」

「ゴフッ！」

両者の衝撃を表す声が聞こえる。

『凶撃の金棒』は口から血を垂れ流しながら倒れ込む。

大和は頭から大量の血を流しながらも倒れない。

「はあはあ、お前の負けだ」『ストライク凶撃の金棒』お前の『ちから異能力』は全て分かった」

大和の言葉に『凶撃の金棒』は嘘だと言い放つ事が出来なかった。先程の大和の行動が自分の『ちから異能力』の制約を見抜かれたと言わざるを得なかったである。

大和は頭から流れる血をボロボロになったワイシャツの袖で拭う。「お前の制約は大まかに三つある。一つ目はあなたの金棒が爆発するのは無機物と接触したときだけに起こるということ、まあこれはあなたの動きを見てれば簡単に分かった。あなたは俺を攻撃するとき、当てるのではなく致命傷を負わせる勢いで金棒を振り回していた。接触するだけで爆発するのなら俺にちよんと金棒を当てるだけで良いはずなのにな。つまり狙いは俺ではなく、俺が避けた先にある無機物だったってことだ」

大和はスラスラと囁むことなく語り続ける。

「そんで二つ目は金棒の消費。あなたの金棒は爆発の能力を使うと消滅してしまうってことだ。あなたは俺にばれない様に自然に生成してたが、生憎俺は、毎回金棒を生成しなおしていることを見過ごしちゃあいないんでな」

大和の挙げる、事柄は全て正解であり、完璧であった。だからこそ『凶撃の金棒』は何も言えずにただ黙って大和の話を聞いていた。「それから最後の三つ目だが、これが一番重要なことで。あなたに

は金棒を生成する限度があるってことだ。これが分かったのは、あんたが金棒を出し渋りしていたから。爆発をさせれば金棒は消えてしまつとはいえどその都度生成しなおせば済む話だ。あんたの生成速度なら消滅してから再生するまでの間が大した隙にもならないのにな。それなのにも関わらず、あんたは金棒が消滅していることを隠そうとしていた。まるで消滅することが、自分にとってマイナスになるみたいにな」

大和は余裕の笑みをかます。なんとも楽しげな笑みだ。

だが『凶撃の金棒』は驚愕する。

「まさか、あの程度の戦闘で私の制約を全て知るなんて……」

大和は更に追い討ちをかけるように、話を続ける。

「あ、ついでに言つとくと、俺がこうして生きている理由は、一つ目に題した、無機物と接触した際のみ爆発するっていう、あんたの制約を利用してもらったからだ」

大和は、勝ちの決まった戦いを決着させるように言葉を畳み掛ける。

「簡単に言つとな、あんたが起こした爆発は俺の目の前という至近距離で起きたんじゃない、あんたの横で爆発したんだよ」

大和の言っていることが理解できていない『凶撃の金棒』は額にシワを寄せ、驚愕と怒りを混ぜた困惑の表情をみせる。

それこそが大和の狙いとも知れずに……

「つまりだ、あのとき爆発したのは、あんたが二本目に生成し、俺の目の前に振り下ろした金棒じゃなく、俺が始めに避けた一本目の金棒だ。そいつに隠し持ってた石ころを当てて無理やり爆発を起こしたんだよ。あんたは自分の爆発の際にダメージを受けないから、自分の金棒が何処で爆発したかなんてわかんなかっただろ」

大和はニヤリと意地の悪い心底楽しそうな笑みを放つ。

「まあだけど、一本目が爆発するとその場に出現してる二本目の金棒も消滅するのは賭けだったし、石ころ当てた程度で金棒が爆発を起こすかどうかは分からなかったけどな。何にせよあんたの金棒

が敏感で助かったってだけの話だ」

全てをスラスラと流すように答える大和だが、金棒を目の前でなく『凶撃の金棒』の横で爆発させたからといって、あの爆発の規模の大きさは本物であり、飄々としてはいるものの大和の体に甚大なダメージを与えていた。

だが大和はその事実をおくびにも出さずに表情から余裕を消し去らない。

「難にせよ。俺が生きているという結果を招いたのは、俺の死体を確認もせずに行っちまったあんた自身の甘さのせいだけだな」

大和は余裕の笑みを垂れ流しながら、流れ出る血をなお拭う。

「さてこれで俺の勝ちが決まった。あんたにはおれの『友達』たいせつなものを傷つけたこと、たっぷりと後悔してもらっせ」

そんな大和の言葉を聞いた途端『凶撃の金棒』ストライクは笑い出す。

「友達？ あはあははははあはははは。あんた本気で言ってるの？」

『凶撃の金棒』は立ち上がると小さく笑いながら大和の顔を見る。

「昔昔、大層友達想いの少女がいました。その少女には命を掛けてもいいと思えるほど仲の良い友達がいました。少女とその友達は幼い頃からの知り合いで一生の親友でいようと誓い合ったほどの仲でした。そしてその誓い通り、少女とその友達は高校まで同じ学校に通い、日々を楽しく過ごしていました」

『凶撃の金棒』は怒りを溜め込むように語りを続ける。

「そんなある日、少女は親友でいようと誓い合った友達が虐められていることを知りました。少女は誓いを守るため友達を虐めっ子達から守り続けました。気が付くと、今度は少女が虐められるようになっていました。それでも少女は悲しくはありませんでした、上履きを隠されようが、トイレで水浸しにされようが、教科書や鞆がズタバ口にされようが、学校のゴミ置き場に閉じ込められようが！」

一つ一つ、憎しみの欠片を思い出すように『凶撃の金棒』の顔が歪んでいく。

「少女は平気だった！ なにをされても平気だった！ 友達が一番の友達がいたから！！ だけどそんな少女の想いは簡単に砕け散った。ある日、いつも通りに虐めを受けたその帰り。少女はいつも通り、友達と一緒に帰るために友達を誘った。そうしたら友達は言ったの『もう一緒に帰るのは止めよう』って、少女は驚いて友達にどうしてって何回も聞いた。そうしたら友達は少女を殴りつけてこう言った『お前と一緒に帰ると私まで虐められるから、もう二度と近寄るな』って……どう、おもしろいでしょ………友達なんてそんなもん偽善なんだよ！ 友達なんて助けたってなんの意味もねえんだよ！」

突如、『凶撃の金棒』の声に同調するように、近くの廃ビルが倒壊する。

倒壊自体は爆発により蓄積されたダメージによるたまたまの倒壊で、誰もが予想だにしてはいなかった。だが、その現象が二人の人間の優劣を逆転させる。

本来なら、もし『凶撃の金棒』が何らかの行動を起こせば、その瞬間に大和が『凶撃の金棒』との距離を詰めればよいだけであった。無機物との接触でしか爆発のしない金棒ならば大和が金棒と無機物との間に入ればよい。

ダメージは有るかもしれないが、爆発に比べればその差は一目瞭然であった。

それに、大和には別の力も残されている。

そう、『異能力者』の『異能力』を消せる、不可思議な『始まりの石』である。

だがそれら全てに共通することは、大和と『凶撃の金棒』の距離が接触寸前まで近づいていなければならぬことであった。

そして、廃ビルの倒壊は大和が『凶撃の金棒』との距離を縮めることに間を与えてしまう。

そのチャンスを戦闘狂の女は見過ごさない。

右手に白い光が集まるとすぐさま生成されたそれを『凶撃の金棒』

は怒りに任せて地面へと叩き付ける。

「しまっ！！」

大和が反応した時にはもう遅い。

爆発が辺りを包み込み、強烈な爆風が周囲をまとめて吹き飛ばす。

「あはっ、あははははははははは」

歓喜の笑いは狂気の爆発に飲み込まれる。

第十三話 『大切なモノ2』

凶悪な笑みを浮かべながら『凶撃の金棒』ストライクは楽しそうに語る。

「何が『友達』たいせつなものだ。何が傷つけたらゆるさねえだ。んなもの、全部ぶつ壊しちゃえば一緒なんだよ！」

『凶撃の金棒』は自分が叩きつけて出来たクレータを気持ちよく眺めながら、死んだであろう大和と、少し離れていたとは言えただでは済まないであろう、つぼみと天宮がいた場所を目を凝らしてみる。うつすらとだが爆発で舞い上がった砂埃が風で飛んでいく。

更に目を凝らすとようやく見えてくる。

「え!？」

理解できない。

自分の目を疑う。

考えが追いつかない。

その映像は『凶撃の金棒』の脳を急速に停滞させる。

なぜ『凶撃の金棒』はこうも焦っているのか。

なぜ『凶撃の金棒』はこうも驚いた眼をしているのか。

理由は簡単。

『凶撃の金棒』の先には大和が立っていた。

ただそれだけ。だが普通ではまったく考えられないそれだけ。

両手を広げ、体を大きくし、爆発の威力を諸に受けながらも、大和は立っていた。

大和の体からは血が流れ、その呼吸は大きく乱れ、まず間違いなく立っているはずが無いほどの重傷を負っていた。

だが大和は立っていた。

痛みで足が震える、歩くどころか立っているだけで全身が拒否反応を起す。

頭から流れ出る血で左目を開けることもできない、菅原との戦いで受けた背中への傷は、完全に開いてしまったようで、水よりも粘り

気のある液体が不快感を一層際立てる。

もう一発でもあの爆発を食らえば自分は死ぬかもしれない。

だがそれでも大和はいまこの場所を動かうとはしない。

ましてや逃げるなどという選択肢は絶対に存在しない。

「な……なんでまだ立ってんの。なんで後ろの偽善者供を……庇ってんの？」

大和の行動を『凶撃の金棒』は理解できない、いや理解しようとしていない。

そんな『凶撃の金棒』を見透かしたように大和は口を開く。

「なんで？ そんなもん簡単だ……俺の後ろにいる奴らが、俺の『友達』だからだ」

「そ……そんな……う、嘘だ。そんなこと……ありえない!？」

大和の言葉によほどのショックを受けたのか、『凶撃の金棒』は苦痛の表情を見せる。

「ありえない……」

何かを思い出すように、自分の過去での出来事と今の大和の行動を確認するように、弱弱しく声を発する『凶撃の金棒』に肉体的に弱っている大和は喉の奥から言葉をひねり出す。

「さっきお前が言ってただろ。命を掛けてもいいと思えるほどの友達だって。俺にとってその友達は……紛れも無く後ろにいる二人なんだよ」

大和の力無く、しかしはつきりと放った言葉を聞いた『凶撃の金棒』は苦痛の表情から一転、笑い出す。

「あはっ、私が言った……か。いいねえ最ッ高」

瞳の奥に狂気を宿しながら、自らの迷いを断ち切るように笑いを止めず、負の感情を一心に込めたように笑う。

「だったら分かるだろ、てめえも其の内そいつらに裏切られるんだ。そんなにボロボロになって守っても……結局最後は見捨てられるんだよ!！」

悲しみながら、笑いながら、怒りながら、『凶撃の金棒』の言葉

ゴーストタウン
は廃墟に響き渡る。

そんな言葉が辺りを包み込み、訪れた静寂の中、大和はポツリとつぶやく。

「そうかもしれない……………確かにお前の言う通り、俺は最後には見捨てられるのかもしれない」

頭から流れ出た血は、鼻先を伝い、水よりも粘性のあるそれは、地面に多数の花形を作り出す。

血に侵食された左目は開くことは決してない。

「ははっ！　そうでしょ、だったら」

それでも大和の目には光が灯る。

「だけど俺は、それでも構わない」

強く、はつきりと。

『ストライク凶撃の金棒』の表情から笑みが消える。

「こつから先、もしあいつらが俺を裏切るとしても、俺を見捨てるとしても、俺には関係無い。あいつらは俺の友達なんだよ……………俺の『大切なモノ』なんだよ！！」

声をあげるたびに血が流れ出る、声をあげるたびに体がミシミシと嫌な音をたてながら神経に痛みを伝えてくる。だが声をあげるたびに大和の眼は鋭く、それでいて光を強くする。

「だから俺はあいつらを守る。これから先のことなんか関係ない！！」

本当に大和は全身から血を流しているのか、本当に死にかけているのか、体の痛みを感じているのか。それら全てを疑ってしまうほど、大和の言葉には覇気が溢れ出ていた。

そんな大和の覇気に当てられた『ストライク凶撃の金棒』は自身を屈さぬよう声を張り上げる。

「なめんじゃねえクソ餓鬼！　そんな子供の絵空事はこの現実じゃ通用しねえ！！」

自分の過去を思い出す。

親友に裏切られた後、『ちから異能力』に目覚め、自分を絶望へと陥れ

た奴らをジューシーに変貌させたあの日、最後まで命乞いをしてきた汚らしい肉塊しにくめつを思い出しながら。

狂気の感情を曝け出し、『凶撃の金棒』は両手に金棒を生成する。

その狂気を大和は引くことをせず、真つ向から見つめる。

「子供の絵空事で十分だ、お前みたいなたかが人に裏切られた程度で人を殺そうとする奴より、子供の絵空事を本気で信じてる俺の方がよっぽどマシだ」

つぼみの言葉を思い出す。天宮の覚悟を思い出す。

自分が守りたい『大切なモノ』を思い出しながら。大和は握る拳に力を込める。

「たかがだと！」

怒りを表し、猛獣のような顔で『凶撃の金棒』は大和を睨みつける。

だがそんな『凶撃の金棒』を見て、ボロボロで今にも倒れそうな大和は笑う。

「たかがだよ。たかが虐められただけ、たかが友達に裏切られただけ、たかが心に傷を負っただけだ」

「てめえ　それ以上言ったら殺すぞ！」

「いいや言わせて貰う、お前は道を誤った。どんなに絶望の淵に立つたとしても、お前は戦わなきゃいけなかった」

「うるさい……………うるさいうるさいうるさいうるさい」

「お前は逃げたんだよ、戦う事もせずなたかが一つの絶望でお前は逃げたんだ」

「うるさい！」

『凶撃の金棒』は今すぐに、自らの怒りをぶち壊す大和の口を塞ぐため、金棒を振り下ろせる最短距離を走る。

「いまさらその金棒でどうする、たかが友達に裏切られた程度で逃げた臆病者が…………俺に勝てるわけねえだろ！」

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！」
両者は激突する。

片方は、自らが鍛えた拳を握り締め。
片方は、自らが得た『異能力』を握り締め。
両者は激突する。

|||||

激突の中、声を発するは男の方。

「悪いな、お前をわざと怒らせて貰った」

大和は不穏な言葉を投げ掛けるが、『凶撃の金棒』ストライクは怒りに吞まれ、
まったく聞こえていない。

それでも構わず、大和は話を続ける。

「一つだけ教えてやるよ……………戦いはな、怒りに吞まれたら終わりだ」

パンツ！

乾いた音が辺りに響き渡る。

大和の『始まりの石』が『凶撃の金棒』の『金棒』ちからを粉々にする。
二本の金棒はいとも簡単に砕け散る。

そんな中、残ったのは武器も持たず突撃してくる怒りに吞まれた
女が一人。

「俺はお前の『異能力』ちからを理解してるのに、お前は俺の『異能力』ちからを忘れてる」

大和は怒りに飲まれ、金棒を無くしてもまだ、人間を殺そうと突
撃してくる女を真っ直ぐなに見つめながら、痛む体に全ての力を込
める。

「絶望がどんなに辛いものかは俺も知っている、だからあんたの気
持ちも痛いほどよく分かる。でもな、俺はこの拳を振り上げること
を止めたりしない。お前がどんな絶望を抱えてようとな、俺は俺の
『大切なモノ』を……………！！！」

体を躍進し、前に出した右足を軸にして。

全身の力を一点へと集中し、後ろに回転し遠心力を大いに付ける。そして全てをこめた左足のかかとを

「守り抜くだけだああ!!」

ねじり込む!!

「ああああああああああああああああああ!!」

ゴツ!! 大和の放ったかかとは『凶撃の金棒』自身の突撃の勢いも合わさり、とてつもない威力を生みだす!

「がああああああああああつ!!」

大きな衝撃をもたらした大和の最大の回し蹴りにより『凶撃の金棒』は肺に溜まっていた息を全て吐き出しながら後方に吹き飛び地面と激突し動かない。

「またまた悪いな……拳じゃなくて……かかとだったよ」

限界に近い体。座ったらそのまま立ち上がれなくなってしまっほどの体。

そんな体を大和は無理やり動かして、自分のポケットから携帯を取り出し、すぐさま――九へと連絡をしようとする。

すると携帯のヒビが入った液晶に現在の時刻が表示されていた。

「がはつごほつ!!……から揚げは無理そうだな」

力なく呟きながら目的のボタンを押し、携帯を耳に押し当てながら、倒れる『凶撃の金棒』を見た後、視線を自らの背中を向けていた二人へと移す。

唯一開く右目のぼやける視線のその先には、大和の『大切なモノ』が二人で寄り添い合っていた。

「絶望から……少しは這い上がれてるよな」

エピローグ 病院内ではお静かに

薬臭い。

異様なほど清潔感をアピールするように、無駄なアルコール臭がたれ流れるこの廊下で、大和は目的の部屋に向かって歩いていった。

大和達がとてつもない大怪我を負い、この病院に運ばれてから五日が経過していた。

やはりと言えばいいのか、それとも思ったよりもと言えばいいのか、それは分からないが、大和の体にはいたる箇所にも包帯が巻かれており、パツと見ミイラ男状態になっていた。

医者話によると、大和はかなり危険な状態であつたらしく一歩間違えれば命の危険さえあつたらしい。

病院に運ばれ手術をしてから二日間は面会謝絶になつていたことは、それほどまでに大和の体が危険な状態にあつたことを分からせる。

といつてもその五日後にはこうして歩き回れるのだから、大したことは無いのだろう。というのは大和の考えである。

だが実際、医者からは絶対安静だと言われているのだが。

カラカラと起用に点滴を引きながらエレベーター横に設置してある病院内の地図を眺めて、自分の目的地への最短ルートを把握する。地図と睨み合いをしていると、何やら病院内が慌ただしい。

どうやら、大和が勝手に病室を抜け出したことがばれてしまったようで、看護師達があちらこちらへと目を向け何者かを探し回っている。探し回っているのが大和ということはずぐに分かる事である。

ならばと、大和は目的地への最短ルートをすぐさま頭に叩き込み、自分を探し回る看護師達に心の中で謝りを入れて開いたドアのエレベーターにすぐさま体を押し込む。

目的の階層のボタンを押し、廊下の先からこちらを見つけたのが青筋を立てながら激走してくるナース長に頭を下げる。

だが『看護師』達には顔を覚えられている。早く目的地に着かなければまた病室へと強制送還されてしまうだろう。

なぜ看護師達に一介の高校生が顔を覚えられているのか。

その理由は至って簡単。

重傷を負いすぎたろ……………ただただそれに尽きる。

流石にこれほど速いスパンで大怪我をして病院に運ばれた少年は数少ないらしく、看護師達の間で噂になっているのだ。噂の内容は『自分だけでなく周りをも巻き込む呪われた高校生』というもの。

たしかにと、大和は噂を納得してしまいそうになる。

自分でも呪われているのでは？ と、心配していたところであった。

ただそんなネガティブの中で一つだけ、天宮の上司と名乗ってきた男がボロボロになった制服を新品に換えてくれたのはなんとも嬉しかった。

が、それも地獄で仏というか、砂漠のど真ん中で一口だけの水、程度の物で根本的な解決には至っていない気もするのだが。

そんなことを考えている間に大和は目的の部屋にたどり着いたので、対して臆する事もなくその部屋をノックする。

普通のドアと違い、少し重みのあるドアを横へとスライドさせると入ると。

その部屋の中にはベットが二つ置いてあり、その中のベットの一つに栗色の髪をした小さな少女が一人眠るように静かに横たわっていた。その少女はぴくりとも動かず、まったく息をしているようには見えない。そしてその少女の顔には白い布が掛かっていた。

「おはよう」

大和はその白い布の上から、右手で少女の顔を押さえつける。

「うぎゃ」

なんとも可愛らしい声が病室に響き渡る。

「酷いよ大和っち」

「何が酷いだ馬鹿たれ。わざわざ痛む体を無理やり動かして来たのにも関わらず、洒落にも何にもならんことをやっている馬鹿がいたら頭の一つも潰したくなるもんだ」

「痛たたたたたたたた。ごめんなさい大和っち。ごめんなさいいいいい」

つぼみは目に涙を浮かべながら、アイアンクローに力を込める大和にひたすら謝る。

「だから私は止めたほうが良いと言ったのに」

その横から隠れていたように出てきた天宮は、つぼみに対して哀れみの目を向ける。

「いたたたたたたた、本当にそうだね。天宮さんの言う通り止めておけばよかった」

「はあ……頭が痛い」

大和はつぼみの頭の拘束手カウチンを取ると、大きなため息を付きながら、ベツトの下に置いてあるパイプ椅子を取り出しその上に腰を掛ける。

「頭が痛いのは私のほうだよ大和っち」

「俺が言っているのは、精神的な意味でだ」

「ここは病院なのだから薬を貰えばいい」

「さすが天宮、クールなお一言で」

疲れたように今一度ため息を吐きながら、大和は傷む頭を右手で摩る。

そんな大和を気にも止めていないつぼみは五日ぶりに大和という友達に会ったからだろうか、楽しそうにしているつぼみの口は止まろうとはしない。

「それにしても天宮さんがゴシップネタでしかないと思ってた、ポーターライン異能力者対策部隊』の隊員だったなんてびっくりしたよ」

「なんだ、つぼみにもあの胡散臭いおっさんから、説明があったのか」

大和には今回の件で隠し通すことが不可能と思ったのだろうか、面

会謝絶が終わってすぐに天宮の上司を名乗る男から、病室に来て直接説明があった。

「うん！ 神成っていうおじさんから色々説明を受けたよ。そのときに大和っちにも教えたって話も聞いたんだ」

なんとも嬉しそうに語るつぼみ、元々ゴシップネタが好きそうな雰囲気は醸し出していたし、そんな中でもまことしやかに語り継がれ続けていた、『異能力者対策部隊』の存在が確認できただけでなく、その存在の一員が目の前に座る少女だということも興奮の材料なのだろう。

「大塚さん、その話はあんまり大きな声では喋らないで貰いたい」

そんな興奮状態のつぼみに天宮が冷静な口調で話す。

「そうだったね。ごめんね天宮さん」

ついでに言っておけば、大和もつぼみも、このことを自分以外の人間には教えてはならないと一筆書かされていた。それによりもし第三者にこのことをばらすと、大和とつぼみの手首に手錠が掛けられてしまうらしい。なかなかの怖い話に脅し文句としては十分であると大和は確信する。

だがそんな恐怖話よりも今の大和には少し気になることがあった。

「なんだか二人とも、随分と仲良くなつたみたいだな」

「えっ!？」

「そうなんだよ大和っち!」

二人の反応が大いに食い違っているのが、大和の顔に笑みを誘う。「まあ仲良くなるのに越したことは無いな……………それよりも古林と松岡は随分遅くないか、実際俺がここに来たときには、もうあの二人がいるもんだと思ってたんだが」

大和がわざわざ絶対安静とされているのにも関わらず、病室を抜け出してまで天宮とつぼみの病室に来たのは、今日これから松岡と古林がお見舞いに来ると、つぼみにメールで知らせを受けたからであつた。

「色々大変なんだよあかちゃんは」

名前を呼ぶ一部分だけ奇妙な強調が入る。

「つぼみってさ、松岡にだけ当たりが強い気がするんだけど」

「そんなことないよ。大和っちの考えすぎだよ」

可愛い声で笑うつぼみの顔が少しブラック寄りになっている気がするのは大和の考えすぎだろうか。

そんなときには話を変えるに尽きると大和は話の流れを別の方向へと持っていく。

「だいたいあの二人には、俺らがどんな理由で入院してることになつてんだ？」

「えーつとね、あかちゃんが言うには、ゴーストタウン廃墟で遊んでたら、近くにあったビルが崩れてその下敷きになつたつてことになつてるみたいだよ。あとついでに言うつと、廃墟に誘つたのは大和っちつてことになつてるみたいだから、あかちゃんが大和っちに宜しく伝えといてくれつて」

つぼみの言葉で思い出すのは、とんでもないスピードと威力を兼ね備えた断頭台かかとだろう。大和は今回の怪我の具合と治り加減、その他ももろの状況をかんがみる。

結果、出てきた言葉はゲームオーバーのみ。

何よりも不味いと思われるのが、大和の視線の先にいる古林の『お気に入り（つぼみ）』の状態だろう。つぼみの怪我は天宮や自分と比較すると軽いものだが、それでも左手は骨折しており、いまま首から下げた包帯に手を通しギプスをはめている状態だ。

そんなつぼみを見れば古林の断頭台が発動することは明白だ。

「ややややつやつヴあいぞ、それは」

「大丈夫だよ大和っち。あかちゃんも冗談で言っただけに決まってるから」

つぼみはそう言つて笑うが、その冗談が冗談で無いことは、まだ付き合ひの短い大和にも十分過ぎるほどに分かる。

恐ろしい想像をしてしまい、背中を襲つた寒気に大和が震えていると。

「突然話を切ってしまったって悪いのだが」

先程までクールに大和とつぼみの会話を眺めていた天宮が突然話し始めた。

「どうした天宮？」

嫌な想像を速く消し去りたい大和は、話を変えてくれそうな天宮にすぐ乗っかることにする。

「なぜ大塚さんが人を呼ぶ際、その人の呼称が少し変わっているのかを聞きたいのだが」

天宮は疑問に聞いてきたことは、当然のことと言えるだろう、大和や松岡やその他の友達も古林のことをあかちゃんとは呼んではいないのだから。これは大和つちという言葉にも同様のことが言える。そんな状況をチャンスとばかりに大和が悪魔の笑みを見せる。

「つぼみ。丁度いいから天宮にもなんかあだ名をつけてやれ」

「あだ名？」

天宮が大和の言葉を不思議に思っていると

「本当！！ 本当に良いの天宮さん!？」

「な、なにが？」

つぼみの瞬間的な爆発力のある突撃に天宮が頭に？を浮かべながら困惑している。

「つぼみはな、友達になった奴に無理やりあだ名をつけて呼ぶという、それはそれは面倒な」

「大和つち、どういう意味かな」

にこやかな笑顔で大和を覗いてくるつぼみなのだが、つぼみの背負うオーラは完全にブラックに染まっていることを大和はすぐさま察知する。

「えー、それはそれは、有り難い行為を行なうんだ」

冷や汗をダラダラと垂らしながら、大和は天宮への説明を続けた。「行為を行う？ まあいい。つまりはあだ名を付けてくれるということか」

「まあそういうことだ。どうする天宮。あだ名を受けるってことは

完璧にお前はつぼみの友達になるってことだけだ」

先程まで冷や汗を掻いていた大和がニタニタとなんと不快な笑みを放つ。その笑みには天宮がYESを答えることしか出来ないということを、見据えているような笑みだ。

その笑みが意味していることを察知した天宮なのだが、ベットから乗り出して幼子のようににはしゃいでくるクラスメイトを見ると、流れに乗るしかないような気がしてくる。

大和の笑みを見ている天宮からすれば、甚だ遺憾な気がするのだが。

「ねえ天宮さん本当にいいの!？」

「……………別にあだ名程度なら問題ない」

大和が腹を抱えて笑い始める。

天宮はそんな大和を睨みつけるが、大和はまったく怯む様子もなく腹を抱えている。

「えーつとねえ、えーつとねえ……………天宮さんだから……………天宮……………あま……………天……………そうだ! テンちゃん。天宮さんのあだ名はテンちゃんに決まり!!」

「て、てんちゃん!？」

つぼみの予想の斜め上に行くあだ名に天宮は戸惑いを隠せなかった。

「あっはっはっはははははテ、テンちゃんだってぶぶっあっはあはっはっはっは」

つぼみの斜め上に向かうセンスに、きよとんとしている天宮を見て、大和の爆笑は更に大きさを増す。

「おもしろすぎる、あっハッハッハッはぶはっはっはっはひーっひっひっはっは」

大和は腹を抱えて大笑いしていると。

突如、大和の体に衝撃が走る。

「ごぶっ」

突然の痛みに大和が無言で床に這い蹲り悶えていると。

「いい加減に怒るぞ大和」

「も、もう怒っているのでは？」

「なんならもう一発、喰らってみるか？」

「ははははは。いえいえ、もう十分に分かりましたんで」

大和と天宮がそんなやり取りをしていると。

「気に入らなかつたよね。別のに変えようか」

つぼみがしょんぼりとしながら天宮に告げる。

「そ……そんなことはないぞ大塚さん、テ……テンちゃんだなんて素敵なあだ名を付けてくれて、嬉しかったただけだから」

「本当！！」

天宮の引きつった笑顔とは裏腹に満面の笑みで喜ぶつぼみ。

そんな状態を見ている大和にまた笑がこみ上げる。

「ごはっ」

今度は強めの衝撃が大和の前身を駆け巡る。

怪我人相手にする突っ込みの枠をはるかに超えたそれは、大和を黙らすのに十分の威力を誇った。

笑顔の二人（一人は引きつった）

床に這い蹲り悶える一人。

そんな力オスな空間に見舞いに来た二名も加わり、病室は更に力オスなことになる。

結局、看護師さんに注意されるまで続いた小さなそれでいて騒がしい楽しい集まり。

それが大和のいまある『大切なモノ』

そしてそれが天宮にとっても『大切なモノ』になるのか、それはまだ分からない。

ブローグ 早朝のアラーム

「はあ……はあはあ……ごほっ」

荒れに荒れた息を何とか整えるため、大和は膝に手を付きながら腰を曲げた状態で深呼吸をする。

体中から汗が噴出してくるのを感じる。運動するのに適したジャージは、絞る事が出来るほどに濡れ、頬を伝い鼻の先から流れ落ちる汗は地面に小さな水溜りを作っていた。

「すーはー、すーはー」

何回か深呼吸をするうちに、曲がっていた腰は真っ直ぐと伸びていき、咳き込むほどに荒れていた呼吸もゆったりと本来の呼吸に近づいていく。

やはり、最近サボリ気味であったからといって、普段は一時間程度で終わるところを、更に三十分伸ばしたのがいけなかったようだ。肺が痛み、膝が笑い、筋肉の疲労によりまともに立っていることから厳しい身体状況である。

「あー……」

大和は立つ事を止め、自分の住んでいる家から対して離れてもいない大きな公園の芝生に寝転がってしまう。

もう少して家に着くところだったのにと、大和は惜しむ気持ちを残しながら、まったく動こうとしない体から力を抜いていく。

そうして力を抜き、広げた両腕の左手に巻きついている時計をちらり眺めると、時刻はすでに朝の六時半を回っていた。最初に公園を通った時刻からすでに一時間半も経っているためか、先程通り過ぎた時より人通りは多くなり、散歩だけでなく会社に出勤するのであるう、スーツを着た人々もチラホラと目に映る。

大和は唯一動く気力の残る首を動かしながら、いま一度自分の状況を確認する。

この公園は広くそれでいて死角の多い場所で中心には芝生の広場があり、大和はその芝生の広場に鬱蒼と生えている木々の下に、まるで人目を避けるように寝転んでいる。

この公園から大和の下宿先までは約五分、時間とすれば人の動きがかなり活発になる時間帯に、五分掛かる公園から家までの距離を大和は誰にも見られずに帰らなければならぬ。

どうしようかと考えこむ大和の瞳に天の恵みが移りこんだ。

大和はその天の恵みを注視する。

乗客は四人、それも住宅街の方へと向かうバスのため朝帰りなのであろう。四人中、三人がぐっすりと眠っていた。

「これは行くしかないな」

大和はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべながら立ち上がり、すぐさま行動に移る。

天の恵みまでの距離は約五〇メートル、その距離の間にいる人間はたった一人だけ、辺りには人が結構歩いてはいるものの、みな眠そうに目を擦ったり一緒に歩く犬に気を惹かれていたり、対して周りに気を張っていない。

大和はすぐさま天の恵みまでの距離を縮める。

その距離を半分程度まで縮めた大和はピタリと足を止め、木の幹に体を預けて後、首だけをそっと気付かれぬように出す。

大和の数メートル先に毎日の健康のためだろうか、人の良さそうなお老人が一生懸命に腕を振りながら散歩を楽しんでいた。

「ちよつと気は退けるけど」

大和はぼそりと呟くと、自分の足元に落ちていた手にしつかりと馴染む丁度良いサイズの石を拾い上げるとそれを思いっきり投げつける。

ごっつ！ 低く籠った音が辺りに響く、その音は人の良さそうなお老人の右側にある木から鳴り響いたため、お老人はギョツとしながらもその木を訝しげな瞳でジッと見つめる。

大和はお老人が音の鳴る木に目を奪われている隙に、お老人の後

る側を走りぬける。

結果としては大成功。ご老人は今も尚、不思議そうな顔で音の鳴る木に感心を寄せ続けていた。

あまりにも自分の策が綺麗に決まったため、心の中で自分の功績を称え上機嫌な面持ちをしながら、大和は天の恵みへと視線を戻す。視線を戻したその先では、天の恵みがエンジンを掛け、いままさに走り出そうとしていた。

「!!!」

大和は天の恵みへと一目散に駆け出す。

だが一目散に走り出すとは言うものの、大和は同時に周囲の警戒を怠らない。

辺りの状況を見回し、自分の走る位置、これから走ろうとしている位置、それら全てを見据えながら辺りに警戒を張り全速力で駆け出す。

そんなとき、おもちゃのような間の抜けた音が響き渡る。

それは天の恵みが醸し出した、終わりの合図。

機械が圧を緩め空気を抜いたようなため息にも聞こえる音と共に、天の恵みのドアが閉まる。

『終わった』

大和の考えや行動の意味は分からないにしろ、バスに乗らなければならぬのに乗れなかったのだ、普通の人間ならば『終わった』と考えるのが当然だろう。

だがしかし、バスを天の恵みと考える大和は違った。

大和は走る速度をまったく緩めようとはしなかった。それどころか大和はバスが走り出した事よりもバスの車内へと視線を凝らす。

車内の乗客四人のうち唯一起きている一人も眠気を必死に我慢していたのだろう、今や船を漕ぎ出している。

「よし！」

車内の人間の注意力が散漫になっていることを確認した大和は、喜びの声を挙げると走り出したバスを全速力で追いかける。

バスは、停留所の前にある信号で停車する。

その間に大和はみるみるバスと自分との距離を縮めていく。

そして誰にも見られることなくバスの近くまで付くと、スピードを落すことなく大和は自らの足に力を込め、大きく高く跳んだ。そのままバスの車体の高さ半分ほどの場所に右足を付けると、大和はその右足に力を込め更に上へと蹴り上がる。そしてバスの屋根に体が上半身ほどまで上がった大和は、空いていた両手をバスの屋根に付き、残りの下半身をバスの屋根上へと押し上げゴロリと転がる。

とんでもなく高い技術と体力を要する行為であったが大和は簡単に難なくこなしてしまった。

いまの大和の行動を要約すると、大和は自分の身長よりも高所にあるバスの屋根へと、まるで子供が遊んで自分の股下にある段差を飛び越えているかのように、軽く飛び乗ったのである。

それも乗客や辺りにチラホラと歩いている他者へとまったく気付かれずにである。

「上々だな」

大和は辺りから自分に気が付いている目が無い事を確認すると、バスの上で寝転がり右手の袖からごそごそと何かを取り出す。

（あつた、あつた）

大和が取り出したのは、何の変哲も無いただの吸盤であった。

その吸盤を大和はバスの屋根へと取り付けるとその吸盤の上から垂れているワイヤーを腰に巻き付けて長さを調節する。

「快適、快適」

なんとも楽しげな声を出しながらバスの屋根に寝転んで伸びをする大和。

左手に巻いてある時計を見ると六時四七分。

お弁当を作り、朝のご飯を作るには少しばかり厳しくなる時間だ。それに加え、今日は王都に着てから始めてのトレーニングであった、それも普段の時間よりもかなり延長をしていた。

心身の疲労度は、朝の六時台なものにも関わらず、自分のベットに

入り「明日の朝までおやすみ」と当たり前のように言えるレベルの疲労度だ。

「今日、学校休みたいなあ」

など同居人が決して許してはくれないであろう行動を口にしつつ、早朝から酷使し続けてしまった全身をくまなくマッサージしている。

いつの間にかバスは大和が降りようとする目的の停留所近くまで来ていた。

「よつと」

ビンから栓を抜いたような気持ちのいい音に合わせて、先程までいくら体重を掛けても決して外れる事のなかった吸盤がバスの屋根から簡単に取れる。

そしてそれと同時に、バスは停留所で停車する。

大和は辺りを見回して人の気配が無い事を確認すると、バスからスルリと飛び降りポケットから二枚の硬貨を取り出し、先程飛び乗った時よりも少なくなった乗客達に見られぬようにしながらバスの昇降口へと近づいていき、持っていた二枚の効果を指で弾く。

弾かれた二枚の硬貨は丸い放物線を描きながら、昇降口からバスの車内へと飛んでいきくと、なんとも綺麗な音色をたてて大きく開いた料金口へと吸い込まれていく。

乗客も、途端に巻き起こった金属音に体を一瞬強張らせるものの、誰かが小銭を落したのだらうと自分の中で完結し、眠たい瞼を再び閉じていく。

そうこうしていると、バスが大和が飛び乗った時と同様に間の抜けた音を出し昇降口の扉を閉め。そのまま次の停留所に向けて走り去る。

大和はそのバスを少しばかり目で追うと、停留所がある大きな道から、住宅と住宅の間にある細く狭い道を歩いていく。

人と出くわさぬように注意深く歩いていくと、一つの大きな住宅街が眼前に広がった。

この辺りは西都の中でも、比較的金銭に余裕のある者たちが住む住宅地となっている。

そのため、この住宅地では無駄に豪華な一軒家が立ち並び、その一軒一軒には人が悠々とキャッチボールやテニスが出来るほどの庭があるなど、そのどれもが一族では余りある敷地を有していた。

大和はその中から特に見覚えのある家の門に辺りを見回しながら近づいていくと、右のポケットからカードキーを取り出し、門の鍵穴に差し込む。

カードを差し込むと機械的な読み取り音が鳴り、ガチャリという金属音と共に門が開いていく。

大和は開いた門を通りすぎていく。すると開いていたはずの門は独りでに閉じていくと、またもやガチャリという金属音と共に施錠される。

大和はそんなオートロックの門を気にも留めずに、門から玄関のドアへと続く人が二人歩くのが精一杯の道を歩きながら、その道に沿って綺麗に生え揃えている芝を眺め玄関前へと近づいていく。

途端、玄関のドアが音を立てて開いた。

「あ」

大和が啞然とした声を出すと、その先から一緒に暮らし始めて早三週間（病院に入院していた期間を抜くと一週間と半分程度）にもなる人物が現れる。

「え!？」

その人物は大和を見ると驚きの声を挙げる。

「お……お兄さん!？ そんな格好で何処に行ってたんですか？」
ピンクを基調とした、なんとも可愛らしいパジャマを着て出てきたその少女は、大和に投げかけた質問の答えを待っているようだ。

その人物の名は垣森美穂。

大和が今お世話になっている家の一人娘である。

「あー、これはその……新聞を取りに来たんだよ新聞を」

はははと乾いた笑いを放ちながら右手で頭を掻きつつ、大和は遠

くを見つめるように言った。

「お兄さん……なら新聞は何処？」

バレバレの三文芝居を打つ大和に対し、あからさまに怪しんだ目を大和に向けながら、美穂は大和に、決して笑ってはいない笑顔をぶつける。

「えーっと、あれ？ 新聞を持ってくるのを忘れちゃった。あーい
かんいかん。最近、持病のボケが進行してきたみたいで」

大和はすぐさま後ろに振り向き、門の横に付いているポストまで歩もうとしたのだが、

「！！」

大和の左手が、ロックされる。

先程まで大量に流していたものとは少しばかり異なる種類の汗が、大和の体をヒヤリとさせる。

長い時間を感じながら、大和は恐る恐る、ホールドされている自らの左手に視線を向ける。

「お兄さん……怒らないから、正直に話しなさい」

平淡に、それでいて奥にとつもない殺気を放つ普段はとっても優しい少女、そんな少女を大和は見つめ、考える。

自らの生き残るすべを。

「ジャージが汗でもものすごく濡れてるようだけど、ま・さ・か！
運動してたわけじゃないよね」

「まっさかー、うんどう？ なにそれ？ そんなことするわけ無い
じゃないか、やだなーまったく……ははは」

震えそうになる体を押さえつけながら、何とかこの場を生き残ろうと必死に頑張ってみる大和だが。傍から見れば大和が嘘を付いている事はバレバレである。

もちろん、目の前に立つ少女にも。

「そうですねえ、運動なんて……全治一ヶ月で、傷が開くといけないから絶対に安静にしているようにって、お医者様に言われたもんね。運動なんて……スルハズナイヨネエ、オ・ニ・イ・サ・

ン」

「もつうしわあけありませんでした!!」

大和はすぐさま、平謝りモードへと移行する。

「フフフやだなあお兄さん、私は別に怒ってなんかいないよ」

優しい声が聞こえた、それはもう天使のように優しげな声であった。だがしかし、その美声の主の顔は般若のようになっていのは言つまでもない。

「怒ってなんか……怒ってなんか……オコッテナンカイナイヨ」

「んギャああああああああああああああああああああああああああああああああ」

時刻は七時を過ぎようとしている。

住宅街に住む学生たちもゴソゴソと眠たい瞼を擦りながら起き始めてくる時間、起きれぬ者は目覚ましをセットしているだろう。

セットしたとしても止めた後、すぐに二度寝をしてしまう者もいるだろう。

だが今朝はその心配は必要ないらしい。

目覚ましよりも大きく耳に通る絶叫が辺りに響き渡る。

この時間に起きない者達にとっては、とてつもなく迷惑な話だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8513r/>

『普通の者』と『異能力者』の境界線

2011年9月25日03時27分発行